

# 平城京出土陶硯集成 I

— 平 城 宮 跡 —

奈良文化財研究所



平城宮跡出土の陶硯

# 平城京出土陶硯集成 I

— 平 城 宮 跡 —

奈良文化財研究所

# 序

律令国家を支えた文書行政の普及を物語る陶硯の出土は、木簡や墨書き上器とともに全国各地の古代遺跡から確認され、官衙・寺院遺跡の実態解明にとって重要な手懸りとなっている。

本書は奈良文化財研究所が行なった発掘調査によって、平城京から出土した陶硯資料を集める資料集の第一分冊として平城宮跡出土資料を収録したものである。当研究所の約50年に及ぶ平城宮跡・京跡・寺院跡における発掘調査によって、1000点を超える陶硯資料が蓄積されている。

平城宮跡からの出土資料がその半分をしめ、あとの半分は平城京、南都諸寺院からの出土である。それらは古代の遺跡として群を抜いているばかりでなく、伴出遺物や出土遺構から時期を限定しうる資料の多さからも、わが国における古代の陶硯の様相を知るうえで、第一級の考古資料である。

ここに収録した資料のなかには、報告書の刊行に先立つて報告したものも含まれるが、これは古代史研究における陶硯のもつ資料的価値をかんがみた結果である。本書に続き刊行する『陶硯集成II - 平城京・寺院 -』とともに、古代史の総合的研究に大いに御活用いただければ幸いである。

2006年3月

独立行政法人 文化財研究所  
奈良文化財研究所長

出辺 征夫

## 例　　言

### 1. 掲載資料の範囲

- (1) 本書には、2004年度までに、奈良文化財研究所がおこなった発掘調査で出土した陶硯のうち、平城宮跡出土資料を収載した。平城宮と平城京との区分は、便宜的に、隣接する道路の側溝までを宮城に含めて取り扱うことを原則としたが、調査区が両者にまたがる場合に、出土地点によって厳密に両者をわけることはしていない。平城京および寺院出土の陶硯については、「陶硯集成Ⅱ」として公刊の予定である。
- (2) 本書に収載した資料は、出土資料533点である。同一個体の可能性が高いが、接合しないものは原則として別個体として扱い、写真図版にはその全点を示したが、実測図では合成したものがある。
- (3) 原則として蹄脚円面硯や團足円面硯などの定形硯を対象とし、転用硯、「猿面硯」は除外した。また、石製硯も除外した。

### 2. 陶硯の分類、名称

- (1) 陶硯の分類については、基本的に以下の分類の大別に従い、付図に示す分類、名称を適用した。既刊の報告や先行研究で使用されている細分、名称を括弧内に記したものもある。
- 山中敏史 1983『埋蔵文化財ニュース41 陶硯関係文献目録』  
奈良国立文化財研究所 1976「陶硯」『平城宮発掘調査報告VII』  
神野恵・川越俊一 2003「平城京出土の陶硯」『古代の陶硯をめぐる諸問題』 奈良文化財研究所

### 3. 資料の掲載順

- (1) 資料は平城宮跡発掘調査部が行なっている調査次数順に掲載した。次数内では原則として蹄脚円面硯、團足円面硯、その他の順に配したが例外がある。異なる次数間で接合する個体については、後の調査に含めることを原則としたが、例外がある。

### 4. 図版の体裁

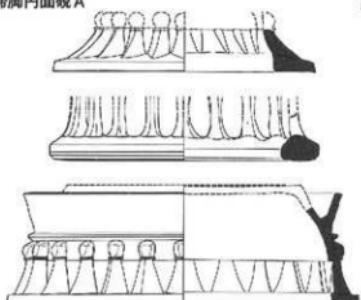
- (1) 写真的縮尺は、約2分の1を原則とし、ほかの縮尺を用いる場合は、写真の左下に示した。  
(2) 実測図の縮尺は3分の1である。

### 5. 本書の作成

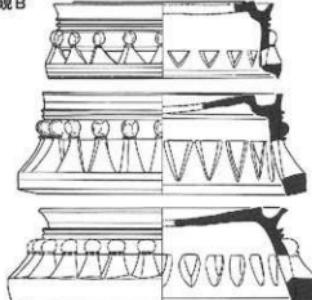
- (1) 資料の整理は都城発掘調査部長 川越俊一の指導のもと、考古第二研究室が担当し、西口壽生、玉田芳英、高橋克壽、森川実、小田裕樹がことにあたった。資料整理および図版の作成には今津朱美、岡本真実、岡本由佳子、橋爪朝子、福田清美、丸山美和が協力した。
- (2) 掲載した写真は奈良文化財研究所の牛嶋茂、中村一郎、鎌倉綾の撮影による。
- (3) 第I・II・III章の執筆および第IV章の作成は、川越、森川、小田の協力のもと西口が担当し、福集は川越俊一の指導のもと、西口が担当した。

付図. 陶硯の種類

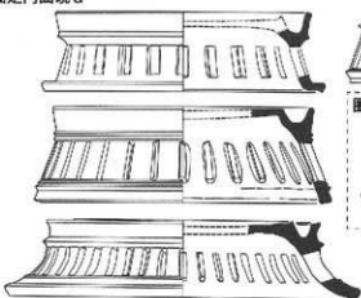
蹄脚円面硯 A



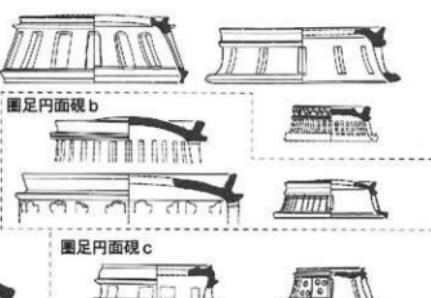
蹄脚円面硯 B



圓足円面硯 a



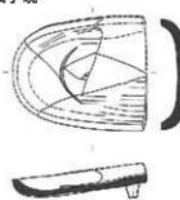
圓足円面硯 b



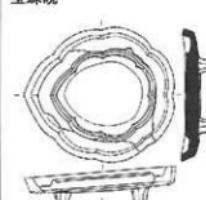
圓足円面硯 c



風字硯



宝珠硯



無脚円面硯



円形硯



中空円面硯

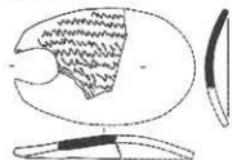


形象硯

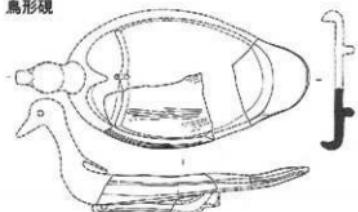
龜形硯蓋



鳥形硯蓋



鳥形硯



0 10cm

## 目 次

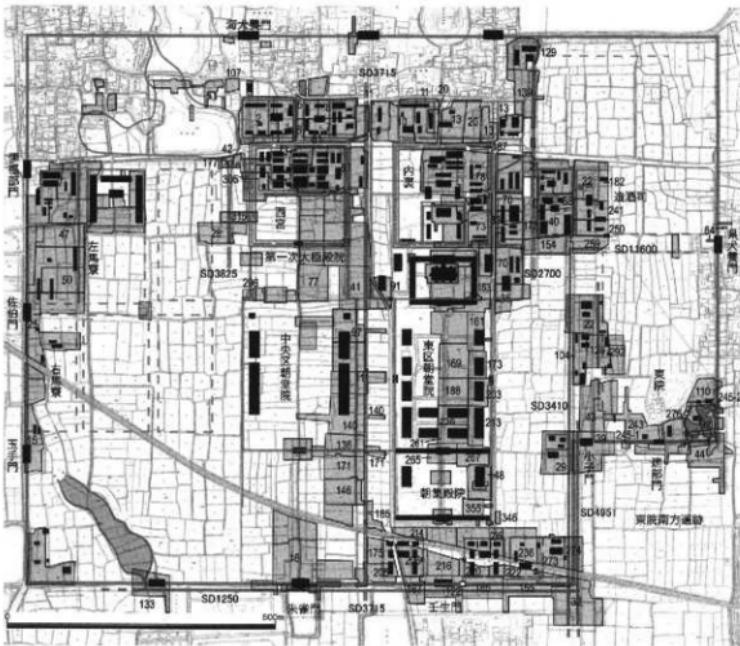
I はじめに .....	1
II 主要遺構概説 .....	2
第1節 地区区分 .....	2
第2節 地区別主要遺構 .....	3
III 平城宮出土陶硯について .....	15
第1節 陶硯の種類 .....	15
第2節 陶硯の出土傾向 .....	19
1. 円面硯の出土傾向 .....	19
2. 地区を越えた接合関係 .....	23
第3節 検討課題 .....	23
IV 陶硯一覧表 .....	25
V 実測図版 .....	
VI 写真図版 .....	

# I はじめに

本書は、奈良文化財研究所（前身の奈良国立文化財研究所も含めて、以下、奈文研）がおこなった2004年度までの発掘調査のうち、平城宮跡から出土した陶硯の全点を集録するものである。

奈文研の約50年にわたる平城宮跡の発掘調査は、2004年度までに発掘面積約39万m<sup>2</sup>、遺跡総面積の約3割を越え、2つの大極殿院・朝堂院、内裏等の中枢施設、その周りの諸官衙施設について、配置や変遷の大要を把握できるようになってきた。この間、出土した陶硯は、転用硯を除き533点を数え、平城京・寺院出土資料を含めると1100点を越えている。陶硯は木簡や墨書き器とともに文字の使用を明確に物語る考古資料であり、出土遺構、伴出遺物、生産地、年代観、使用形態など様々な検討を加えれば、遺跡・遺構に対する知見を深め、官衙の性格や実態の考究に役立つ資料となるであろう。

陶硯研究は主に型式分類と変遷について行なわれてきたが、格段に増加した遺跡出土資料の多くが未報告である現状が、古代陶硯をめぐる諸問題を検討し、古代史の総合的研究の史料とすることへの障害の一つとなっている。最大の消費地、平城京出土陶硯は、生産地を含めた全国の陶硯出土遺跡の研究にとっても重要な資料であり、「墨書き器集成」にならい本資料集を計画した所以である。



## II 主要遺構概説

平城宮跡内で、陶硯が出土する遺構は主に、溝、土坑などであるが、遺物包含層からの出土も多い。平城宮は70余年にわたって存続し、その間に大規模な改造が繰りかえされて、溝も浚渫、改修、付替えを経て維持され続けている場合が多い。陶硯に限らず遺物は出土地周辺の様相・性格を推定する重要な手掛りであるが、複数の地区、遺構にまたがって接合する個体や同一個体と思われるものもあって、年代観や性格の把握には、出土遺構や地区に関する様々な検討が必要である。以下では、陶硯が出土した遺構のうち、主なもの概要を記しておく。

### 第1節 地区区分

平城宮は、朱雀門の北の第一次大極殿院・中央区朝堂院・南面東門（壬生門）の北の内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院・朝集殿院の2つの中枢施設があり、東張出部南半には東院があって、その周間に諸官衙施設が配置されている。2つの中枢施設の間のSD3715、内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院の東、東院との間のSD2700、第一次大極殿院西方のSD3825などの基幹水路によって、宮跡内は大きく4つに区分される。中枢部において陶硯が出土した調査には以下のようなものがある。第一次大極殿院地区（第27次、第41次、第77次、第87次、第296次、第305次）、中央区朝堂院地区（第111次、第136次、第140次、第146次、第171次、第16次）、第二次大極殿院地区（第153次）、東区朝堂院地区（第161次、第169次、第173次、第188次、第203次、第213次、第238次、第261次、第265次、第267次）、朝集殿院地区（第48次、第346次、第355次）、内裏地区（第73次、第78次）。

中枢施設の北方は官衙区画であり、第一次大極殿院北方官衙地区の南半は大膳職と推定されている。内裏北方官衙地区の南半部は内裏北外郭地区にあたり、西・東外郭地区とともに内裏と密接に関わる官衙と考えられ、北外郭地区には内膳司、東外郭には宮内省との推定がなされている。陶硯出土の調査は、第一次大極殿院北方官衙地区（第2次、第5次、第6次、第7次、第8次、第11次、第81中次）、内裏北方官衙地区（第129次、第139次）、内裏北外郭地区（第10次、第11次、第13次、第20次）、内裏東外郭地区（第21西次、第33次、第35次、第70次）、内裏西外郭地区（第91次）である。

内裏東外郭地区の東、SD2700を挟んで内裏東方官衙地区があり、東張出部の北半に及ぶ。この地区的南は、県大義門前へ至る東西方向の宮内道路によって区分される。内裏東方官衙地区内では内裏に近接する西南部の調査が進み、「磚積官衙」「造酒司」の2つの官衙区画が確認されている。陶硯出土の調査は、内裏東方官衙（磚積官衙）地区（第21東次、第38次、第40次、第154次）、内裏東方官衙（造酒司）地区（第22北次、第182次、第241次、第250次、第259次）である。

東張出部の南半は東院地区で、調査は東南隅の庭園地区、その西側の南面大垣と建部門を検出した南辺地区および東院西辺地区で進められており、東院西辺地区的調査で検出しているSD3410については東方官衙地区に含めた。陶硯出土の調査は、東院庭園地区（第44次、第99次、第110次、第245-2次）、東院南辺地区（第243次、第245-1次）、東院西辺地区（第22南次、第104次、第128次、第292次、第43次、第39次）である。

第二次大極殿院・東区朝堂院・朝集殿院の東側、東院西辺地区との間は、東方官衙地区であり、真中

にSD2700、東側にSD3410の2本の基幹排水路が通る。朝堂院とそれら2条の溝で挟まれた南北に細長い空間に官衛施設が配置される。東院西辺地区の第22南次西端で検出したSD3410の西側と第29次を除いて未発掘で官衛名や配置は不明（あるいは未詳）ではあるものの、文書行政の中枢を担う官衛であることは疑いない。

東区朝堂院・朝集殿院地区および東方官衛地区の南は、南面大垣に沿って東南隅まで官衛区画が並ぶ南辺官衛地区である。奈良時代の前半と後半とで区画の配置が替るが、兵部省、式部省、式部省東宮衛（官衛名未詳）と推定されている。また、南面大垣の南、二条大路地区は排水体系からも宮城に含める。陶硯が出土した調査は、南辺官衛（兵部省）・壬生門西方地区（第175次、第205次、第206次、第214次、第122次、第216次）、南辺官衛（式部省）地区（第220次、第235次）、南辺官衛（式部省東宮衛）地区（第222次、第236次、第274次）、宮城東南隅・南面大垣・二条大路地区（第32次、第167次、第165次、第155次）がある。

第一次大極殿院・中央区朝堂院の西方は未発掘地が多く不明な点が多いが、伊福部門～佐伯門間の西寄りが馬寮地区と確認されているほか、伊福部門以北に現佐紀池と重なる庭園施設、玉手門以南の西南隅部にも庭園施設のあることが推定され、一部確認されている。陶硯出土調査は、西方官衛（馬寮）地区（第47次、第50次）、玉手門地区（第15次）、佐伯門地区（第25次）、佐紀池東辺地区（第107次）、佐紀池南方地区（第177次）および南面西門の若人戸門地区（第133次）がある。

## 第2節 地区別主要遺構

以下では、陶硯が出土する遺構について、まず、宮跡内を大きく区分する位置にある基幹排水路を、次いで、その他の遺構を前述の地区区別に概観しておく。

**SD2700** 現水上池の南西から内裏東外郭地区と内裏東方官衛地区の間を通り、南流する大規模な南北溝である。宮内の基幹排水路の一つであり、水田畔に残る痕跡から、南は朝集殿院付近まで延びると思われるが、宮南辺官衛地区では確認されず、その間で東折して後述のSD3410あるいはSD4951につながるものと考えられる。昭和初年に通称一条通りの北で奈良県技師岸熊吉氏によって確認され、平城宮跡の遺物として他の大量の遺物と共に報告された2点の陶硯は、この溝から出土した踏脚円面硯Bの硯部である。奈文研では第21次、第129次、第139次、第154次、第172次で調査をし、その構造規模を明らかにしてきた。北端の第129次の所見では、奈良時代当初は幅約2m、深さ0.5mの素掘りの南北溝で、天平12年ごろに、周辺の官衛施設の整備に伴って、東に移して緩やかに弧を描く南北溝SD2700Bとして付け替えられている。SD2700Bは幅2.2m、深さ1.7mほどの素掘りで3層に分けられる堆積層の下層から天平年間後半の紀年木簡が出土し、「天平十八年」「小廣川原藏人凡」「舍人安雲麻呂」などの墨書きをもつ須恵器蓋が出土している。墨書きされた人名からこの官衛は天平宝字年間から奈良時代末の「皇后宮職」に関わるとみられている。陶硯には中型の圓足円面硯aと大型の硯種不明円面硯がある。

下流の第139次調査では溝は両岸を玉石で護岸した石組溝となり、各所に壠や石組が設けられ、充分な保守管理の下にあったことが推定される。5層に分かれる堆積層の最下層から養老7年の紀年木簡が、最上層からは「天応」の墨書き器蓋が出土し、この溝が奈良時代を通じて機能していたことが知れる。なお、各層は伴出木簡からそれぞれ第2層は726～737年、第3層は737～760年、第4層は760～762年の年代観が得られている。内裏および内裏東方官衛（磚積官衛）地区的前面にあたる第21・172次では、溝

の東側の石積護岸がみられるが、磚積官衙を抜けた第154次では溝幅6m前後、深さ2.2mと広がり、石積護岸もみられない。SD2700を集中的に調査した第172次で確認した層序は、下から①暗青灰色粗砂層、②灰白色バラス層・木屑層、③瓦層、④灰色砂層、⑤黒灰色粘土層であり（本書IV章の一覧表ではそれぞれ①最下層、②下層、③中層、④上層、⑤最上層と表記した）、その堆積状況を手懸りに変遷を整理すると、まず当初は幅5mほどの素掘り溝で、天平年間に東岸を内側に寄せて石積みとする。西岸は当初から杭としがらみによる護岸であったものが早くに崩壊し、浚渫をしている。天平宝字年間には溝西岸について瓦を含む層で埋め立て、幅3m、深さ1mの溝となり、ほとんど埋まってしまった奈良時代末に東に細溝として掘り直している。第154次で検出した区間は、東面大垣に開く県犬養門から内裏へ至る宮内道路上にあり、道路の南寄り、大極殿東外郭東門の中軸線上に橋が架けられている。また、溝へは西側の内裏東外郭地区や東側の磚積官衙、東方官衙地区から木桶や溝を通じて排水されており、溝への投棄も両側の官衙からなされたのであろう。陶器は第172次の②下層と④上層、⑤最上層に相当する土層のものが多く、奈良時代の後半～末の遺物が主体を占める。

**SD3715** 第一次大極殿院・中央区朝堂院と第二次大極殿院・東区朝堂院・朝集殿院との間を南流する基幹水路である。第27次、第41次、第97次、第102次、第111次、第136次、第140次、第146次、第157次、第170次、第171次として調査しているが、その総てで陶器が出土しているわけではなく、第一次大極殿院の南半（第27次、第41次）および中央区朝堂院の南半（第136次、第140次、第171次）に集中している。なお、内裏北外郭地区（第11次）のSD572はSD3715の上流部である。

溝は幅2～3m、深さ1mの素掘り溝で、堆積は上、中、下3層に分かれ奈良時代全般を通じて機能存続している。上流の第170次では、上層に中世の土器が含まれることから、廃都後も開口していた可能性がある。溝は寛永年間と推定される中央区朝堂院区画の造営に際して、区画内にあった南北溝SD3765を埋め立て、区画東限辺の東に掘られたものである（A期）。朝堂院東第二堂南～東南隅に面した第136・140次の所見では、その後、東限溝とSD3715との間に掘立柱建物・塀が建てられ、溝には西への迂回水路SD10705～10707やSD10325、堰状施設SX10703などが設けられ、SD3715の両側の整備に合わせた改造がなされる。奈良時代中頃にはやや西に寄せたB期溝が作られ、さらに奈良時代末にB期溝を埋めてC期溝が作られて平安時代初めまで存続するとされる。

朝堂院の南隣にあたる第171次では、溝と朝堂院南限施設と溝東の建物群の複雑な重複・変遷過程が明らかにされた。SD3715の掘削当初のA期には朝堂院南限辺と北側溝がSD3715と交差し東にのびている（SA12550とSD12540）。それらは東区朝堂院南限と接続され、2つの朝堂院の間も朝堂院南限と同じ位置で閉塞される。中央区朝堂院の区画施設が築地塀に替えられる奈良時代後半には、SD3715A溝は埋め立てられ、西側に寄せた迂回溝SD10325が設けられる。東西塀SA12550も築地塀に替えられ、北雨落溝SD12540も改作され、雨落溝の北、溝の東（東区朝堂院との間、中央区朝堂院東外郭もしくは東区朝堂院西外郭）に建物が建てられる。奈良時代末に迂回溝SD10325が斜めに掘りなおされるなどの改作を経て、平安時代にはSD3715C溝が掘られるのである。SD3715の出土遺物には、中央区朝堂院地区のほかに、溝の東に存在した施設からの遺物が含まれていると考えられ、SD3715出土の木簡の記載内容からも、この場所は官衙区画相当の空間であると推定されている。

朝堂院区画の南ではSD3715は南面人垣をくぐり、二条大路北側溝SD1250に流れ込む。下流にゆくにしたがい溝幅は拡大し、遺物は奈良時代後半～末の小片が主体となる。

**SD3625** 佐紀池の東南隅部に発して、第一次大極殿院の西方を南に流れる宮内の基幹排水路の一つ。第一次大極殿院の東外郭を画するSD3715に対応し、西外郭を画する溝である。幅2.6~3m、深さ1.1mの素掘溝。北から第92次、第316次、第315次、第28次の4ヶ所で検出されたが、陶硯は第315次の圓足円面硯2点のみである。溝は奈良時代前半おそらくは宮の造営とともに開削され、神亀年間と天平17年の平城遷都後の2度の改修を経て奈良時代末まで存続する。第315次の所見では溝堆積層は6層に区分され、陶硯は比較的の上層から出土している。

**SD3410** 平城宮東部の基幹水路である。東院地区の北を限る東西溝SD11600が東張出部との境で南折してSD3410となり、宮城入隅部の小子門の西脇、東面大垣の内側を南流し、宮城東南隅で南面大垣をくぐり、南面外堀にあたる二条大路北側溝SD1250に流れ込み、約20m東流して東一坊大路西側溝SD4951につながる。上流から第154次、第229次、第29次、第274次、第155次、第32次で検出し、いずれの調査でも陶硯が出土している。

溝は北端上流部の第154次では溝幅4~5mで、当初は素掘りとみられ、奈良時代後半に西岸を玉石積に、東岸を木杭で護岸する。溝埋土は上下2層に分けられ下層から神功開宝までの錢貨とともに天平16年の紀年木簡が出土しているが、下層には奈良時代後半、上層は平安時代以降の遺物が含まれる。東方官衙地区に面した第229次では一段高い西岸だけを玉石積で護岸するが、中流部の第29次では何ら護岸施設はなく素掘りのままである。南端に近い宮城内の第274次では式部省東官衙の東門前に橋状施設を設け、その南は石積護岸によって幅3.4mに狭めるなどの管理が行なわれている。南面大垣をくぐりSD1250に流れ込む合流点付近（第155・32次）では水流によって壁と底がえぐられて溝幅が9mに広がり、深さ1.8mと深くなる。ここでは、出土した紀年木簡は奈良時代末期の宝亀年間のものが中心で、以後、改修は行なわれず、SD1250との合流点の上層には隆平永室、富壽神室など9世紀初めにおよぶ錢貨が出土していることから、溝は順次堆積して、平安時代前期まで存続していたことがわかる。陶硯は、第154次で5点、第229次で7点、第29次で17点、第274次で3点、第32次で15点出土するが、大型の跨脚円面硯B・圓足円面硯aと小型の圓足円面硯a・cのほか、黒色土器A類の風字硯・宝珠硯・形象硯（鳥形便蓋）など多様である。木簡や土器が奈良時代中頃のものを含みながら、奈良時代末から平安時代前期に主体がある点ではSD4951、SD11600と同じである。

#### 〈第一次大極殿院地区〉 第27・41・77・87・296・305次

**SB7802** 第77次で検出した大極殿院南面築地回廊SC5600に設けられた東棟である。建物は回廊に増築する形で、東西25.5m、南北8mの範囲について基壇を北に拡張してつくられた、桁行5間、梁行3間の純柱建物である。3.5m×3.0m、深さ3mの柱掘形に、径75cmの柱を建て、大型の柱抜取穴を伴う。巨大な柱抜取穴からは、平城宮土器IVに属す多量の土器や跨脚円面硯B（209）、曲物、形代などの木製品とともに、総数240余点の木簡が出土した。木簡の多くは衛門府に勤番する衛士に関するもので、「大殿」、「御輿人」など、この区域の性格を窺いうるものがある。年紀のあるものは天平勝宝5年正月の記録類が中心で、建物の柱抜取が753年に近い時点、すなわち平城遷都後の人改造に伴い、南面回廊を撤去した時期の工事によるものであることが知れる。跨脚円面硯B（209）は脚部を外屈し折り返して脚台とするタイプ（細分②）で、この型式が753年以前に成立していることを示す。

#### 〈中央区朝堂院地区〉 第111・136・140・146・171次

**SD3765** 第97次、第111次などで検出した造営当初（朝堂院施設の造営前）の南北溝。朝堂院地区の建

物造営に際して埋め立てられ、東にSD3715が作られる。陶硯が出土した第146次（朝堂院南方の広場）の所見では、溝は幅約2m、深さ約1mの素掘りで、平城宮上器I～IIの土器や瓦編年第1期の軒瓦が出土している。第146次でこの溝から出土した圓足円面硯（325）と同じ文様の陶硯（362）が上流の第171次から出土しており、これらが奈良時代前半に属することを示す。

**SB8960** 第111次で確認したSD3715の東に近接する南北棟建物。桁行8間以上、梁行4間で2面庇付き。建物規模のわりに小さな掘形と黒木の柱が特徴的で、朝堂院廐絶に関わる仮設的建物とされる。建物の柱抜取穴、柱痕跡から出土した大型の踏脚円面硯B（251・252）は、建物の東にある不整形上坑SK8948から平城宮土器Vと伴出した踏脚円面硯B（260）と類似し、両遺構の同時性を示す。

**SD10400** 朝堂院朝庭内を南北に貫く溝。朝堂の内側約20m、大極殿南面回廊に設けられた東櫻SB7802の東側に掘う位置にあり、平城宮IV～Vの土器が出土する。南端で朝堂院南面築地に並行する東西溝SD9171につながり、SD9171は東辺の築地下をくぐってSD3715に排水することから、奈良時代後半の上層朝堂院朝庭内の排水施設とみられる。踏脚円面硯B（290）1点が出土。

**SD10705・SD10706・SD10707** 第136・140次で検出した中央区朝堂院の東南部外方、第二堂の南約30mの位置に設けられたSD3715の迂回水路で、西、南、西のクランク状に連接したのち、朝堂院東櫻SA5550のすぐ東で南北溝SD10325となる。溝の北にはSD3715とSD5550の間に掘立柱建物や塀が建てられる。SD10705は溝幅2m、深さ0.5mで、平城宮IIIの土器の段階に掘りなおされて南北溝SD10325Bにつながり、溝の北の建物配置も変更される。SD10706はSD10705が南折した溝で、幅1.2～2.2m、南に広がりながら溝幅1.8m、深さ0.5mのSD10707につながる。ともに平城宮IIIの土器を下限とし、東櫻が築地に替わる奈良時代後半には埋め立てられている。SD10706出土木簡に「彈正台」の官人名がみられる。陶硯はSD10705から踏脚円面硯A（309・310）、踏脚円面硯B（317）、圓足円面硯a（323）が出土し、SD10707出土の踏脚円面硯B（282）はSD10325およびSD3715出土破片と接合している。

**SD10325** 朝堂院の東南部外方、第136・140次で検出したSD3715の迂回水路。第二堂の南で西方へ分岐したSD10705以下の溝をうけて、朝堂院の東堀沿いを約50m南下し、朝堂院東南隅で南面塀内側のSD9171を経由して東へ戻り、SD3715の中層に流れ込む。幅2.5m、深さ0.8mの素掘溝。中央区朝堂院と東区朝堂院との間の整備に伴ってSD3715を西へ迂回させた溝であるが、溝自体も付け替え、掘り直しをもつなど、複雑な変遷をたどる。溝に平城宮土器IV・Vが含まれることと、平安時代初めに埋没するSD3715の上層がこの溝を横切っていることから、溝は奈良時代末に埋没していることが知れる。「三川門」「供養」「彈正」「刑省」の墨書き土器があり、この周辺の官衛が「刑部省」「彈正台」と推定される。上流部のSD3715出土の踏脚円面硯B（282）の破片がSD10707およびこの溝から出土し、一連の水系にあることを示している。なお、須恵器杯蓋内面を使用した朱墨転用硯が伴出している。

**SK10713** 第140次で検出した江回水路SD10706やSD3715に重なる南北約10mの大土坑で、粘土採取のための土坑とされる。SD3715中層より新しく、SD3715上層より古い重複関係があり、奈良時代末には埋まる。埴土には下層に平城宮IV、上層に平城宮Vの土器が含まれる。踏脚円面硯B（306）が出土。

**SD12540** 第171次で検出した中央区朝堂院南面区画塀SA9201の東延長部にあたるSA12550の北雨落溝。SA12550は奈良時代初めの東区朝堂院の南面区画塀に接続して2つの朝堂院に挟まれた地区の南を閉塞する。幅約2.8m、深さ0.6m。3層に分かれる埴土出土土器から、平城宮IIの奈良時代前半には削削され、区画塀が築地に改作された奈良時代後半にも存続し、奈良時代末に廐絶するとされる。出土した脚

部径31cm余りの大型の圓足円面硯（364・365）は、前半期の官衙の陶硯である可能性が高い。

**SK12530** 造営当初、朝堂院間の南面を埋塞する塙のすぐ南に掘られた不整形な土坑。平城宮Ⅰの土器や200点余りの木簡が伴出した。木簡には和銅元年に從五位下になり、養老4年に蝦夷地で殺害された上毛野朝臣廣人の名が見える。出土した陶硯（363）は複合口縁状の外堤をもつ圓足円面硯aと推定され、この型式が奈良時代初めには存在したこと示す。

（内裏地区） 第73・78次

**SK7659** 内裏東南隅、南面築地回廊の内側の土坑。小型の圓足円面硯（208）が出土した。208は『平城報告X III』には不掲載で本書編集時に直線距離約650m離れた第220次の425（『平城報告X VI』PL.132-444）との接合が判明した。なお、425は『報告X VI』本文では第175次の包含層出土とする。

**SC640雨落溝** 内裏南面築地回廊の雨落溝で、第73次の蹄脚円面硯B（207）が出土した。207は『平城報告X III』PL.108-800の蹄脚円面硯B脚部片（報告本文ではPL.7-323とする）にあたる。

**SD7863** 内裏地区東北部の第78両次で検出した斜行溝。内裏が掘立柱塙で区画される奈良時代前半の段階に建物間を繋ぐように配された溝で、埋土の様子から凝灰岩切石による暗渠の抜取溝とみられる。平城宮Ⅱまでの土器が出土する。溝出土の蹄脚円面硯A（211）は第10次開査で検出した内裏地区と北外郭地区との間の東西溝SD487出土の破片と接合した。SD487は『平城報告VII』によれば、内裏北外郭官衙の南面築地の南を並行する溝で、北外郭中区の西面築地塙の西を南流する溝と合流してなお西流し、重複関係から平安時代初頭のIII期に属するとされるが、硯の年代観とは齟齬がある。なお、211は『平城報告X III』のPL.108-801であるが、報告本文での801は蹄脚円面硯Bとしており、いずれかに誤りが生じている。

**SD7872** 内裏を潤む掘立柱塙を築地回廊とする段階（神龟末年一天平初め）に、SD7863を西へ4m移動して掘られた斜行溝。SD7863と同様に凝灰岩切石による暗渠の抜取溝とみられ、内裏北東部3分の1を区分する塙に沿って西行し、内裏内郭の西際を南流する。上層から八花形硯（212）のはか奈良時代後半～末の土器が出土した。

**SK7915** 内裏東面築地回廊に内接する大井戸SE7900の廃絶後にその西側に重なるように掘られた溝状土坑。土坑西端部には11世紀末の白磁や瓦器が大量に投棄されている。蹄脚円面硯B（210）出土。

**SC156** 内裏東面築地回廊SC156は前期の掘立柱塙SA6905を廻し、その直上に設けた築地の両側に凝灰岩製の礎石を配する構造をもつ。側柱の多くはその抜取穴として検出されたが、その一つから中空円面硯の把手（214）が出土している。

（東区朝堂院地区） 第161・169・173・188・203・213・238・261・265・267次

**SB12300** 第169次調査で検出した東西5間、南北2間の東西棟建物で、東区朝堂院内庭で検出した奈良時代前半の大嘗宮悠紀院造拂の膳屋にあたる。同じ建物の西南隅の柱穴から平城宮土器Ⅱの須恵器杯B蓋が出土しており、奈良時代前半に行なわれた大嘗祭、すなわち神龜元年の聖武天皇即位にかかるものと推定されている。建物の柱掘形から出土した円面硯（353）は脚部を欠く破片で、それ自身では、圓足、蹄脚の区別ができないが、凹縁で突帯を作り出し、硯部外側をカキメで調整する点で内裏東外郭の蹄脚円面硯B（199）と類似しており、奈良時代前半の蹄脚円面硯である可能性がある。

**SB12920** 第173次で検出した凝灰岩で外装した礎石建物として造られた東区朝堂院東第三堂である。基壇盛土には奈良時代中頃までの土器が含まれ、伴出した蹄脚円面硯B（398）の成立がその頃

までのことと限定できる。

**SD13664** 第203次で検出した東区朝堂院上層東門（SB13650）の雨落溝。奈良時代後半～末の土器と共に蹄脚円面鏡Bの405・406が出土している。両者は脚部掘を屈曲させて脚台を作るものであり、同一個体。なお、朝堂院東門とその雨落溝は奈良時代前半の下層朝堂院にも設けられており、下層朝堂院東門雨落溝からは大型の圓足円面鏡（407）が出土している。

**SB15040** 第213次で検出した上層の東第四室である。桁行15間、梁行4間の南北棟の四面庇付き礎石建物で、凝灰岩切石による外装がなされる。東西に各5、南北に各1の階段を設け、周囲には粒をえいた疊敷を2重に巡らせる。南北60.7m、東西17.8mの規模の基壇は、下層建物の柱を抜き取っただけで掘込地栄をせずに築成されている。基壇土から奈良時代中頃の土器と共に大型の圓足円面鏡a（419）が出土した。なお、周辺の包含層からは奈良時代後半～末の蹄脚円面鏡Bが多く出土している。

**SB16800・SB16850** 第261次で検出した下層・上層の東第六室である。上下層の関係や構造は第四室などと同様で、下層朝堂の柱を上層の基壇築成に際して抜き取っている。下層朝堂建物の柱抜取穴から蹄脚円面鏡の可能性がある円面鏡（475）と脚端に突帯をもつ多脚で大型の圓足円面鏡a（481）が出土し、上層朝堂SB16850基壇土からも大型多脚の圓足円面鏡が出土している。周辺の包含層にも同一個体の破片がみられることからも、下層朝堂に伴う遺物が、上層建物の解体と上層基壇の造成過程で埋没したものと考えられる。

**SD17011** 後半の朝堂院の南面築地SA17010の北雨落溝にあたる幅1.8m、深さ15cmの素掘溝。標上上には廃絶後に投棄された大量の瓦が堆積し、圓足円面鏡1点（488）、蹄脚円面鏡B3点（490・492・494）が出土した。

**SD17351・SD17352** 朝堂院南面築地～朝集殿内庭で検出した素掘溝。SD17351は幅1m、深さ0.6m。朝堂院南面築地の北2mにはじまり南流。南面築地の南19mを併走する東西溝SD17350と合流、東折してSD17352となる。周辺の遺構との重複関係から、朝堂院下層南門・掘立柱塀を経て取り壊し、上層の南門・築地などを造営している時期に、一帯に生じた水を区画の東に排水するために掘られた溝で、上層の区画施設が完成した段階には絶対埋められている。溝からは造営時の木片に混じって養老6年、神亀元年の紀年木簡などが出土し、南限区画施設の建て替え時期については、平城遷都後の朝堂建て替えて先行した可能性が指摘される。出土陶器には細棒状の脚柱が特徴的な蹄脚円面鏡A（497）と薄手の蹄脚円面鏡B（498）、複合口縁状の外堤が特徴的な圓足円面鏡a（499・503）があり、それらが奈良時代前半に存在したことがわかり、蹄脚円面鏡Bの出現時期にも関わる貴重な資料である。

〈朝集殿院地区〉 第48・346・355次

**SD11990** 第346次で朝集殿院の東辺で検出した南北溝で、奈良時代前半の朝集殿院を埋む南北掘立柱塀の東を並行する溝。南北掘立柱塀とともに、後半期の式部省の遣情の下層を通って南面大垣までのびている。塀の西側、壬生門前は、前半期には官衙建物などが無い広場であり、塀と溝はその広場の東を区切る施設である。溝からは、平城宮IIの土器とともに、蹄脚円面鏡A③脚部（531）が出土。肉厚で丸みのある脚台に細棒状の脚柱をつけた、この型式が前半代に属すことを示す。同一個体と思われる破片（436）が式部省東官衛地区の第236次で出土している。

〈第一次大極殿院北方官街地区〉 第2・5・6・7・8・11・81中次

**SK238** 第一次大極殿院北方の中央部に掘られた南北44mの不整形土坑。近在の不整形溝状土坑SK234、

掘立柱南北棟建物SB236・246出土の土器と互いに接合することから、同時期に廃棄されたものと考えられている。その時期は、同地区内のSE311B・SE272Bなどと同様に、平安時代初頭の平城上皇の平城遷都に関すると推定されている。土坑からは高級品の縁軸陶器などと共に、尾張猿投窓とみられる小型の圓足円面鏡 c (3) が出土した。

〈内裏北方官衙地区〉 第129・139次

SK9880 第129次で確認した方形大土坑。SD2700を東に付け替えて作られた官衙区画の西北隅に建物と柱筋を描いて掘られる。建物柱穴出土土器から天平宝字年間から奈良時代末までの時期と推定され、隣接するSD2700B出土の須恵器蓋の墨書「天平十八年」「小橘川原藏人凡」「舍人安達麻呂」などから、天平宝字年間～奈良時代末の「皇后宮職」に関わる遺構と考えられている。大型円面鏡の鏡面部 (277) が出土した。

SX10560 SD2700の第3層堆積後に溝内に敷設された木檻暗渠で、SD2700出土の紀年木簡から737～760年の間に、埋設されたと推定されている。蹄脚円面鏡 B (300) が出土した。

〈内裏北外郭地区〉 第10・11・13・20次

SD487 内裏北外郭地区の遺構はⅠ・Ⅱ・Ⅲの3期に大別され、最も充実した配置をもつⅡ期は、内裏の東西軸に合わせた範囲を築地塀で囲んだ中区とその両側の幅狭い区画（西区と東区）とに分けられる。中区は建物が建ち並ぶ西半部と井戸を中心とする東半部とが一体で、一つの官衙をなし、墨書き土器「内裏盛所」などから内膳司と推定される。東区については墨書き土器から「左兵衛府」にかかわると考えられている。Ⅱ期の遺構は、神亀元年の聖武天皇即位を目指して造営され、奈良時代末まで続くもので、Ⅰ期は遷都から養老年間まで、Ⅲ期は内裏が機能を失った時期で平城上皇の大同4年から天長元年の時期（平安時代初め）に対応する。溝SD487は北外郭中区の南面築地の南を並行する素掘りの東西溝で、西流して北外郭西区へ至り、北外郭中区の西南隅では後述の溝SD536が合流する。「平城報告Ⅶ」では溝はⅢ期の遺構で平安時代初期に属するとする。出土した陶鏡には圓足円面鏡の脚柱 (10) と蹄脚円面鏡 A があり、後者は内裏地区第78番次のSD7863出土の蹄脚円面鏡 A (211) に接合する。

SD536 内裏北外郭の西区の北端近くを西北から東南へ向かって斜行し、中区の西面築地塀に沿って南折し、築地南端の位置で東西溝SD487に合流する。溝幅1.2m、深さ0.2mの素掘り溝。溝の接続状況からも平安時代初めのⅢ期に属する。中型の蹄脚円面鏡 B (8) が出土した。

SD557 内裏北外郭地区の西区にあるⅢ期の東西棟建物SD520の西壁を流れる南北溝。所属時期は不詳。中型の圓足円面鏡 b (11・12) が出土した。

〈内裏東外郭地区〉 第21西・33・35・70次

SK6800 内裏内郭の東南、内裏東外郭の南部に2棟並列して整然と建てられた南北棟建物に重複する廬芥處理土坑。番付の入った磚、二彩三彩陶器などを含めて遺物の大半は土坑出土であるが、SK6800は陶鏡の出土が目立つ。陶鏡の種類構成では、7割が外堤径25cm前後の蹄脚円面鏡 B (196・198・201・202) で、残る3割が20cm余りの圓足円面鏡 (203・204) で占められている。土坑出土遺物には奈良時代後半に整備されたB期の廃絶時の姿が反映している可能性が高く、この土坑での陶鏡構成は、奈良時代末の行政の中枢に最も近い官衙施設における陶鏡構成の特徴と理解される。

SB2420 第21西次で検出した東西棟建物。柱穴から脚部径約26cmの蹄脚円面鏡 A (43) が出土。

SD2350 第21西・172次で検出した内裏東外郭の北3分の1を区切る東西築地の北側溝。東流して内裏

東外郭の東面築地を暗渠でくぐりSD2700へ注ぐ。奈良時代末～平安時代初めの遺物と共に、外堤径9cmの小型圓足円面硯 a (44) が出土した。

**SD4240** 第33次で検出した内裏東外郭の南3分の1を区切る東西築地の北側溝。東外郭の東面南門の北の位置で東面築地を暗渠でくぐり、SD2700へ排水する。小型の円頭風字硯 (148) が出土。

〈内裏西外郭地区〉 第91次

**SB8160** 内裏西外郭地区的南面築地に設けられた桁行3間、梁行2間の礎石建ちの門である。礎石抜取穴から外堤径約21cmの圓足円面硯 (223) が出土した。築地壇の基壇土から平城宮土器Ⅱに属す土器が出土しており、築地・門の成立は天平年間と推定されるが、その廃絶は後半以後のことであり、陶硯の年代を示さない。門以北の内裏西外郭は、以南の朝堂院西外郭よりも一段高く造成されている。

〈内裏東方官衙・磚積官衙地区〉 第21東・38・40・154次

**SK5406** 内裏東方官衙地区的東南隅に南北125m、東西64mの築地壇による長方形区画があり、その南3分の2に設けた築地壇で仕切られた北には掘立柱建物、南には磚積基壇を持つ建物が立ち並ぶ。南北区画中央北寄りに東西棟の正殿、東西の築地際に南北棟の脇殿、北西部にも東西棟以下の建物を配置し、建物基壇とその周りを広く縁敷詰装している。正殿前面の内庭には縁敷きの南北通路が3条配される。土坑は縁敷詰装を壊して掘られた廐棄物土坑であり、その廃絶に関わる。奈良時代末の土器と共に風字硯 (176)、外堤径13～15cmの小型の圓足円面硯 a (173・175) が出土した。

**SD4850** 磚積官衙を囲む築地壇の内側に設けられた溝の一つで、東面塀に並行して南流する南北溝。南面塀を溝って宮内東西道路側溝へ至る。円形硯（輪状高台）(177) が出土した。

**SD5480** 磚積官衙区画内部の東西溝。外堤側面に波状文を施した圓足円面硯 a (174) が出土した。

〈内裏東方官衙・造酒司地区〉 第22北・182・241・250・259次

**SD3035・SD3031** 造酒司地区の西端部を流れる南北溝。西北部に設けられた2基の大井戸のうちの一つ、第22北次で検出したSE3046からの水を受けて南流し、南面の築地の手前で東西溝SD16731に合流する。溝は幅1m、深さ0.3mで両壁に木杭と枠板による護岸を施し、一部に底石が残る。また、途中に幅4m、長さ6mの水槽状に広がる箇所があり、土器、木簡などが集中する。堆積土出土木簡の記載内容や墨書き土器から、この地区が宮内省造酒司と推定された。溝堆積土は3層に分かれ、最下層に龜甲・養老、中層に天平、上層に宝亀の紀年銘木簡があり、最下層の土器は平城宮Ⅱの土器の良好な資料である。踏脚圓面硯B (70) が出土した層序は中層に相当する。

**SK13245** 造酒司の北隣施設は余良時代後半に、磚積官衙の北隣に掘て築地壇として作られ、開口2間の門が開く。区画内部に建ち並ぶ建物には約1.2m間隔に亘り30～40cmの摺鉢型の小穴を3列並べたものがあり、造酒の甕を据えたものと推定されている。土坑は北門の内側に掘られた浅く大きな不整形土坑で、炭化物などとともに平城宮Ⅳ～Vの土器が出土した。後期の後半になって機能の中心が南に移った段階の廐棄物処理土坑とみられる。外堤径約12cmの圓足円面硯 (401・402) が出土した。

**SD11600** 内裏東方官衙地区と東院地区の間にある宮内東西道路SF11580の南側溝である。道路は内裏地区の東と宮城東面大垣に開く県犬養門とを結ぶ。第259次で検出。溝幅約5m、深さ約1m。埴土は大きく2層に分かれるが、下層から延暦年間の木簡と平城宮Vの土器が大量に出土し、上層には平城宮Ⅶの平安時代初めの土器が含まれる。出土した陶硯は上下層共に、外堤径10～15cmの小型の圓足円面硯が主体で、鳥形の形象硯 (469) が含まれる。溝は東院地区の西北方で南折しSD3410となる。第154次

のSD3410出土の圓足円面硯 a (334) にSD11600出土の破片が接合し、同一個体とみられる96は約360m下流のSD3410から出土している。

〈東院西辺地区〉 第22南・104・128・292・43・39次

**SD3236** 東院地区西瀬を流れる素掘りの南北溝で、第22南次、第104次で検出した。東院西辺地区では、造営当時の溝土坑などを廃して、天平初年頃に東院地区の西限にある南北溝の東に南北棟を主体とする建物を配置した官衙区画を造成するが、天平末年頃には全面的に造り替えて東西棟建物を南北に整然と並べ、さらに、奈良時代後半には、東一坊大路西側溝の北延長線上にこの南北溝を掘り、そこへ流入する数本の東西溝によって区切った官衙区画に改作し、奈良時代末に廃絶を迎える変遷が確認されている。溝は3層に分かれ、下・中層は幅約2m、深さ0.6mで一部に木杭による護岸がある。出土木簡、土器からみて各層の年代に大きな隔たりはなく、中・下層から天平勝宝から宝亀6年までの紀年木簡をはじめとした多量の木簡や、奈良時代末に位置付けられる平城宮土器V、瓦幅年Ⅲ期の軒瓦などが出土し、上層の土器も平城宮土器Vに属す。この時期の官衙区画の廃絶は奈良時代の終末期である。陶硯は各層から出土し、中小型の踏脚円面硯B (50)、圓足円面硯 (238など) のほかに形象硯（鳥形硯蓋：69）がある。なお、同じ第22南次測量区では西方約60mのSD3410から鳥形硯蓋 (68) や多角形硯 (67) が出土し、宝珠硯 (66)、蓋や体部外面に唐草文を刻んだ須恵器杯など特異な意匠の器物が集中している。

**SD4951** 平城宮東張出部の西端を南流する大溝で、宮城入隅部の小子門 (SB5000) を迂回した宮城外では東面外堀と東一坊大路西側溝を兼ねている。溝は第32次、第43次、第39次、第274次で検出し、それぞれ陶硯が出土する。小子門を迂回するまでの上流部と、迂回後の下流部とで様相が異なっている。上流部では、溝は杭と側板で護岸した幅1m、深さ0.5mの斜行溝で、張出部西端のSD3236延長線上で南北方向に向きを変え、上層に重複する斜行溝SD5775もSD4951と同様に向きを変えている。小子門の北で西側に迂回水路SD5100が掘削され、迂回区間の南北約40mは埋められる。斜行する下層溝および埋められた部分からは平城宮I・IIの土器と養老年間の木簡、「神亀」の墨書き土器などが出土する。下流部の第274次では溝幅6~7.6m、深さ0.8~1.4mに広がる。上下2層に大別される堆積層の下層に含まれる紀年木簡から、溝は天平宝字年間を最後とする数度の改修を経たのちに堆積し、上層の遺物から平安時代前期まで開口していたとみられる。陶硯は大型の踏脚円面硯A (2点)、踏脚円面硯B (11点)、圓足円面硯 a (6点) に加えて、小型の圓足円面硯 (11点)、風字硯 (3点)、形象硯 (3点) があり、水滴に使用した横瓶形のミニチュア須恵器がある。宮城東南隅部の外では、二条大路北側溝SD1250に合流したSD3410が流れ込み、二条大路を横断して南流する。なお、274次で風字硯 (514) と伴出した土飾器皿に「莫取研口盤／口風」の墨書きがあり、硯の蓋として使用したことが知られる。皿の口径は約22cmで中型の踏脚円面硯、圓足円面硯の外堤径に近似することは興味深い。

**SD5100** SD4951の項参照。宮城入隅部の小子門SB5000の造営にあたり、SD4951の水流を西方へ迂回するために掘られた溝で、分岐点から南約40mでふたたびSD4951に合流する。溝は後に玉石敷きの溝SD5050に付け替えられる。上層から大型の圓足円面硯 a① (165) が出土した。

**SD5645・5050** SD5645は第43次西端で検出した南北溝で第104次で検出した斜行溝SD8600が張り出し部西端で南北方向に流れを変えたものと接続するとみられる。上層に、南北溝SD4951の水流を門の西方に迂回するための溝SD5100と玉石敷きの溝SD5050が重複する。SD5050には天平・天平勝宝・天平宝字の紀年木簡があり、神亀年間に掘削されたと推定される。また、その上流は第22南次・第104次で検

出した南北溝SD3236に連なるものとみられている。SD5645出土の蹄脚円面鏡A(182)は下層溝SD4951出土の163・164と同じ個体の破片であり、造営当初、神龜年間には存在した可能性が高い。

**SD3109** 第128次検出した奈良時代後半の築地塀SA5760の東を並行する南北溝。幅0.8m。半蔵した丸太を杭として打ちその外側に板材を落込んで側壁とし、底には玉石を敷く。築地塀の雨落溝であるとともに東院門区画の西腹に設けられた基幹排水路として機能した。築地塀と溝の完成以後、区画内部では著しい造替が繰り返される。溝には井戸SE9600からの排水路SD9602やSD9649が流れ込むとともに、後に築地塀の西外方へ排水するための木樋・石組溝(SD9627・8820)が敷設されるものの、井戸SE9600Bなどの東院付属官衙施設が廃絶する奈良時代末には溝の半分が埋まって機能不全となり、砂層が堆積している。小型の圓足円面鏡b(264)は奈良時代末の大量の土器類とともに砂層から出土した。土器類には食器が目立ち、「大膳」「盛所」などの墨書きがあり、この東院付属官衙施設は台所相当の官衙と推定される。

**SD9604** 第128次で検出した井戸SE9600の南に設けられた東西溝で、溝の両岸を玉石で護岸する。奈良時代後半に整備された井戸SE9600を中心とした官衙区画の内部を南と北とに区分する。溝廃絶後は溝と重複する位置に東西掘立柱塀SA9605が作られる。圓足円面鏡(273)は溝の上部から出土した。

〈東院南辺地区〉 第243・245-1次

**SK16275** 東院地区の南西部で検出した土坑で、前半期の東院地区南辺を区画する回廊状施設SC16250の柱穴を壊す位置に掘られている。多量の奈良時代末に属する土器や瓦、東院地区に特徴的な綠釉瓦が出土した。小子門の東に設けた東院地区西隣の南北掘立柱塀が築地塀に変わった後に建てられた小規模な建物SB16277の柱筋に描う位置と規模を持つ点から、東院地区後半期でも末に近い頃の遺構と推定される。外堤径約15cmの小型の圓足円面鏡b(449)が出土した。

〈東院庭園・東面大垣地区〉 第44・64・99・110・245-2次

**SG5800B** 東院地区東南隅にある圓池で、第44・99・110・245-2次調査で検出した。東西50m、南北55mの範囲に複雑に入り組んだ汀線を形成する。池は造り替えがあり、当初の池SG5800Aは、汀線沿いに径30cm大の石を帶状に敷き詰め、中央には玉石を敷く。改作後のSG5800Bは当初の池の石組・敷石を取り去り、粘土で埋めた後に、約10cmの厚さに小石を敷き詰め、汀線まで正方形敷きとする。池の形はほぼ下層の池を踏襲するが、入り口の大きい曲線的になる。東北部では導水路の変更にともなって東方へ拡張している。下層池の時期には西岸際に礎石建物を配する程度であったが、池の改修後には東南隅に八角形の櫓状建物がつくれられ、池にせり出るように礎石建物を建て、また、木橋を設けたりする。SG5800Bの西岸、礎石建物付近からは、平安時代初期の綠釉陶器・灰釉陶器、平城宮土器Ⅶに属する土器器・須恵器および黒色土器が出土し、黒色土器B類の風字鏡(228・230・231)が含まれている。それらには脚の形に格狭間形と円柱形の2種があるが、内外面を密に磨く作り方は同じである。

**SE8454** 後半期のSG5800Bへの改作に際して、導水路の付け替えに伴い、池の東北部については汀を東面大垣近くまで拡張している。SE8454はその拡張部の池底に曲物を埋め込み、湧水を集めるための施設で、埋土から外堤径18cmの圓足円面鏡b(226)が出土した。

**SX16305** 東院庭園の後期の池SG5800Bへの導水路であるSD8455につながる溜り状の遺構。池北の第245-2次で検出した。西方の丘陵側から石組溝を通じてもたらされた水をいったん溜めて濁りを取る装置と考えられる。埋土から9世紀中頃の須恵器片が出土し、その頃まで池・導水路が開口していたとみ

られる。硯面徑23cmの大型円面硯の硯面部（451）が出土。蹄脚円面硯Bの可能性がある。

**SD5785** 東院地区の南を通る二条糸間大路の南側溝にあたり、左京二条二坊六坪（東院南方遺跡）の北面築地SA5945の北雨落溝を兼ねる。第44次の所見では、二条糸間大路南側溝は2度の造替がみとめられ、この溝が最も古く、埋土から脚部径約27cmの蹄脚円面硯A（188）が出土。脚柱外面を範型からはずしたまととする点は珍しい。

〈南辺官衙・兵部省・壬生門地区〉 第175・205・206・214・216・122次

**SD13796** 第206次で検出した。奈良時代中頃以降に、東区朝集殿院の南、壬生門の西方に配置された兵部省の東面築地に関わる遺構である。造営当初の兵部省を囲む施設は築地だけであったが、後に、築地の内側に礎石を置き片底脚としている。溝はその段階の西雨落溝である。調査では兵部省の遺構の下層には建物等はまったく検出されず、東区朝堂院・朝集殿院が掘立柱辦と掘立柱建物で構成されていた奈良時代前半期には、この壬生門前は迷宮等の無い広場であったことが判明している。兵部省地区出土の遺物は人半が奈良時代後半～末のもので、陶硯も遺構に伴うものはこの溝から出土した圓足円面硯b（412）だけで、包含層出土のものを含めて小片7点があるにすぎない。

**SK14445** 壬生門前は奈良時代中頃以降兵部省と式部省官衙に挟まれた空間に、朝集殿院へ至る南北道路や式部省西門・兵部省東門からの通路が伸びている。正面をさえぎる日隠し辦とその奥の東西棟の仮設建物群など儀式にかかわる施設のほかに建物などは無い。『平城報告XVI』によれば、土坑は壬生門前広場の東南隅、式部省区画に接した地域に掘られた大土坑で、須恵器杯の底部外面に「西」と小書きした墨書き器や転用硯や奈良時代末の土器が伴出する。陶硯は圓足円面硯（423・424）で第220次のSK12050出土の圓足円面硯b（428）と酷似した脚部径約30cmの中型品である。また、土坑上の包含層からは蹄脚円面硯A（421）が出土している。

〈南辺官衙・式部省・式部省東官衙地区〉 第220・222・229・235・236・256・273・274次

**SD11620** 奈良時代後半の式部省と式部省東官衙の間にある南北道路SF11960の東側溝である。溝幅1.5~3mで埋土は3層に分かれ。最下層出土の圓足円面硯（431）が第165次の東西溝SD4100A出土の破片と接合する。溝の東は後半の式部省東官衙の築地に重なる位置に前半の掘立柱辦があり、SD4100Aは前半期の南面大垣と式部省東官衙との間の東西道路の側溝にあたることから、溝には前半の溝が重なっている可能性がある。431は透孔の下に小さな突窓をめぐらせる圓足円面硯a①の脚部で、前半代に存在する型式である。

**SK15427** 第236次、式部省東官衙の区画北で検出した鍛冶鋳造関係廃棄物を捨てた11基の土坑の一つ。深さ30cmの土坑内に焼土と炭などが交互に堆積し、平城宮主器Ⅱの主器とともに輪羽口・鉢漆が多量に含まれている。遷都後の造営に伴う金属加工に関わる遺構とみられ、出土した大型で肉厚な圓足円面硯a（440）が奈良時代前半に属することを示す。

**SD17515** 第273・274次で検出した後半期の式部省東官衙を囲む北面築地SA17530の北雨落溝である。幅1.2m、深さ0.3mの素掘り溝で、官衙北の宮内道路の南側溝を兼ねると見られる。溝は石積みで護岸された段階のSD3410に流れ込む。無脚円面硯（505）と圓足円面硯a（512）が出土している。505は外堤径17.8cmの硯部で獸脚が付く余地があり、512は重厚な低い外堤と十字形透孔が特徴的である。

**SD4100** 第32・155次で検出した南面大垣内側の溝である。宮東南隅の第32次調査ではSD3410につながる幅広い東西溝として検出し、南面大垣の北雨落溝とみた。第155次では溝は南面大垣と式部省南面

築地との間を通る宮内道路の南側溝にあたるA期溝と、南面大垣北雨落溝にあたるB・C期の溝がほぼ同じ位置で重なっていて、第32次のSD4100はB・C期にあたることが判明した。壬生門東の第122次ではSD4100AについてはSD9481の番号を与えている。SD4100Aは幅1.4m、深さ0.6mで、埋土から平城宮IIの土器と郷里制施行期（715～740年）の木筒が出土した。SD4100Bは幅1.4～1.8mで中心をAの南1mに移して掘られ、埋土からは多量の瓦類や蹄脚円面鏡B（343）が出土している。SD4100Cは幅1～2mで東に行くにしたがって南へ広がり、奈良時代後半の土器が出土した。第32次でSD4100出土の陶鏡は蹄脚円面鏡A（120）と圓足円面鏡の脚部（132）があり、伴出遺物からそれぞれ、奈良時代中期、奈良時代末の年代観が想定されている。また、蹄脚円面鏡A（120）は第155次に北接する第222次の瓦堆積出土の破片と接合する。

〈宮城東南隅・南面大垣・二条大路地区〉 第32・167・165・155次

**SD1250** 平城宮の南面外堀であるとともに二条大路北側溝を兼ねる溝である。第32次・第155次、第165次、第122次（壬生門前）、第167次、第133次（若犬菱門前）などで検出されている。溝幅3～4m、深さ0.9～1.2mであるが、平城宮内の基幹水路が合流する箇所では著しく幅が広がり、かつ深くなり、札としがらみによる護岸が隨所にみられる。東区朝堂院へ通じる壬生門前では外観を重視して石積護岸としたり、奈良時代後半に溝の堆積土を除去することなく埋め立てて通路としたことも判明している。第122次の蹄脚円面鏡A（262）は通路とした際に除去されなかった堆積土から、平城宮I～IIIの土器とともに出土したもので、奈良時代前半期の陶鏡である。第133次の圓足円面鏡（281）は脚部径15.2cmの小型品。第165次の圓足円面鏡b（348）は外堤径21.6cmの大型で受け口状の突帯と四弁花形の透孔が特徴的で、前半期の可能性があり、中央区朝堂院地区と南辺官衙地区に多い傾向にある。

**SD4006** 第32次調査で検出した二条大路南側溝で、左京三条一坊の北面築地SA4005に北接して東流し、二条大路を横切る東一坊大路西側溝に接続する。幅1mの素掘り。出土した蹄脚円面鏡B片2点のうち、1点は東一坊大路西側溝SD4951出土例と同一個体であり、今一つは東面大垣入隅部付近のSD3410出土の蹄脚円面鏡B（91）に接合する。彼我の距離約260m。

**SD3905B** 第32次調査で検出した左京三条二坊一坪の北面築地に面する二条大路南側溝。出土した圓足円面鏡脚部（131）は脚部径約32cmの大型で圓足円面鏡a③にあたる。

〈西方官衙地区・佐紀池・西面諸門〉 第15・25・47・50・107次

**SK1623** 第15次調査、西面南門（玉手門）の東方約20mで検出した長方形土坑。東西5.1m、南北4.6m、深さ1m。官廐砲と平城上皇遷都の後、平安時代の9世紀後半～10世紀初めに、付近に営まれた小規模な掘立柱建物等で使用されたものを投棄した塵埃処理用の土坑である。出土土器には大量の土師器、少量の須恵器・黒色土器があり、ほかに灰釉陶器、綠釉陶器、青磁、白磁などの高級品が含まれ、黒色土器B類の風字鏡（23）の使用階層をものがたる。出土土器は当該時期の基準資料である。

**SD8850** 第107次、現佐紀池の東、第一次大極殿院西北方で検出した幅約3mの東西溝。北方官衙地区南半部に推定される大膳職の北を限る溝の西延長線上にある。2点の蹄脚円面鏡B（240・241）や平城宮瓦幅年弟III期（737～756）の軒瓦等が出土した。

### III 平城宮出土陶硯について

#### 第1節 陶硯の種類

本集成では陶硯の分類と呼称については、破片資料が主体を占める性格上、例言に掲げた文献を参考にして、1. 円面硯、2. 円形硯、3. 風字硯、4. 形象硯、5. その他に大別した。ここで、平城宮出土の陶硯に限定して、それぞれの特徴と細分について触れておく（例言付図参照）。

##### 1. 円面硯

円面硯は、墨をする硯面（硯部）が円形の中央にあり、周りに墨を溜める海部を持つもので、脚の形態によって蹄脚円面硯、圈足円面硯、獸脚円面硯、無脚円面硯に分かれる。平城宮出土陶硯の大半を占める型式であるが、前2者が圧倒的で、後2者はそれぞれ数点あるに過ぎない。

**蹄脚円面硯** 蹄脚円面硯は硯部とその下に付された多数の獸脚様の脚柱と脚柱を繋ぎ支える輪状の脚台とかなる型式で、製作方法の違いによって、蹄脚円面硯Aと蹄脚円面硯Bとに分けられる。

**蹄脚円面硯A**は硯部と脚台部とを別々に作り、両者を別途型作りした多数の獸脚様の脚柱部で結合したものである。脚台部は多くは偏平な輪であるが、棒状肉厚のものもある。脚柱部はやや報長の球形を呈する脚頭と水平な円板状の脚部と三角形の脚柱とを一体で型作りし、脚頭を硯部外側面にめぐらせた突帯の下に貼り付け、脚柱を脚台部に埋め込む。脚頭上面・脚部下面に残る木目痕と、脚頭剥離面・脚柱内面の綫方向へラケズリ痕は脚柱部の型作り成形時の痕跡で、脚柱外表面は綫方向のヘラケズリなどで貼付時に生じた指痕痕や変形を調整する。

脚台と脚柱の形状によって①薄板・三角形、②薄板・砲弾形、③肉厚・細棒などに細分される。それぞれ胎土色調が独特で生産地を異にするとみられる。①は幅広く薄手の脚台と幅広く薄い三角形脚柱が特徴で、脚柱を脚台の中央外よりに貼り付ける（42など）。②は幅広い薄板の脚台に内厚砲弾形の脚柱を脚台内端に貼り付ける（153など）。③は丸みを持った肉厚の脚台と細棒状の脚柱が特徴的で、脚柱は綫方向のナデ調整（262、497、531など）。奈良時代前半のSD11990から出土した脚部531から、前半代には存在したことが知れる。①②③の別を越えて、法量は外堤径24~30cm、脚台径28~36cmの大型が主体を占める。

**蹄脚円面硯B**は硯部と脚台部を一連で成形したのち、側面に別途型作りした脚頭・脚柱飾りを貼り付け、下底部の台を補充し、脚柱飾りの間を削り取って透孔とするもの。蹄脚円面硯Aの製作方法上の簡略形であり、產地の違いを反映すると見られる脚部の作り方によって、以下の細分が可能である。

細分①は薄く直立した一連成形の脚部の下端に厚い脚台と脚柱飾りを貼付けるもので、一連成形時の先端が脚台部下面の内端に突出する。硯部下半～脚柱部の内面を横方向にヘラケズリ、脚台部内・外面もヘラケズリの後、ナデ調整によって仕上げる。脚柱外表面は綫ケズリで整形するが貼付時の指痕が残る。硯部は均厚薄手で、内面は硯面・海部の形状に合わせて段をもち、ロクロナデで仕上げる。直立気味の外堤下部に2~3条の突帯をめぐらせる。中央区朝堂院地区をはじめ多数出土し、平城宮出土の蹄脚円面硯Bの大半を占める。

細分②は成形時の脚部を外方へ段をもって屈曲し、脚端の先端をさらに下方に折り返して脚部の概

形を作った後に、反転し、張り出した脚端部の上に粘土を補いつつ、側面に脚柱飾りを貼り付け、脚柱飾りの間を三角形に切取って透孔とする。成形時の脚先端が脚台下面の外端として突出する。礎部下半～脚柱部内面は横ヶズリだが、脚台部外面はロクロナデ。脚柱が短く低い傾向にあり、第一次大極殿院東棲樓の209、東区朝堂院の406などが典型例。東区朝堂院地区に集中する傾向があるが第一次大極殿院南端や北方官衙地に散見する。第一次大極殿院東棲樓SB7802柱抜取穴からは天平勝宝年間の紀年木簡と平城宮IVの土器が出土しており、この蹲脚円面鏡の年代の一点が判明する。

細分③は成形時の脚裾を外反させてつくった凹面に細身の脚柱を貼り付けるもの。礎部は高い外堤に2条一組の凹線を巡らせる(329・330)。細分④は幅狭い脚台と扁平な脚柱を貼付け、脚台内端が突出する。脚柱内面はロクロナデのままである(312など)。細分⑤は礎部内面に段を持たないもので、鏡面部が肉厚で、外傾する外堤と外堤下の2条の突帯が細い特徴がある(282など)。細分③以下は出土点数も少なく、その当否についてはなお検討が必要である。

圓足円面鏡 圓足円面鏡は輪状の台脚を有する一群で、鏡面形態により、圓足円面鏡a：鏡面が明確な段を持って隆起するもの、圓足円面鏡b：鏡面が弧を描いて隆起するもの、圓足円面鏡c：鏡面が水平なものに分けられる。それぞれに、鏡面と海部との境に突帯などを巡らせるものとそれらがないものとがあるが、一覧表など本書では特に区別をしなかった。

圓足円面鏡aは鏡面形態が判明する圓足円面鏡の約7割を占める。外堤径27～28cm前後の大型から、外堤径10cm前後まで満遍なくあり、12～17cm大のものが最も多く、最小6cmのものまである。

脚部を含めた形状で①下半部が広がった円筒形で、透孔の上下に小さな三角形突帯をめぐらせるもの、②円筒形だが脚部が外反気味で端部を肥厚させるもの、③脚部が外側へ屈曲するものがあり、④脚部が礎部の内寄りに付き、外堤が複合口縁状になるものがある。透孔は人半が長方形であるが、細長方形、幅広長方形の別があり、ほかに十字形、四弁花形、小円形などが少量あり、継沈線を刻むだけのものもある。透孔数(脚数)は4～44で粗密がある。外堤に波状文、脚柱部に継沈線、竹管文、草木文などの文様を施すものが少量ある。①②③の形状による細分は、それぞれに脚の長短、外堤・面徑の違いなどが加わって多様であるが、そのなかには、外堤・突帯・脚部の形状、透孔の粗密、文様などの共通するいくつかのまとまりが抽出でき、法量の異なる相似形として認識できるものもある。産地や系譜の違いを反映した系統的細分は今後の課題である。

特徴的なものを例示すると、①には長方形透孔の上に突帯を各2条めぐらせた大型扁平のもの(319)や各1条めぐらせ、外傾度が大きいもの(323)、各1条めぐらせ背の高いもの(279)などの別があり、それらは、透孔内面を面取り処理する特徴をもち、外堤径28～22cmの大・中型が主体を占める。中央区朝堂院東南部や南辺官衙式部省地区の前半期官衙関連遺構および東区朝堂院下層朝堂などから平城宮Ⅲまでの上器と併出するものがあり、圓足円面鏡aのなかでより古い一群である可能性が高い。細別②③にも大小の別があるが概して①よりも小さく、小径のものは奈良時代後半でも新しく平安時代初めに至る遺構から出土する。④は厚手の脚部が礎部下面の内寄りから延びるために、外堤の突帯がなく複合口縁状を呈し、脚部は外反して面をもつ。この型式は藤原宮内裏外郭地区に類似があり、7世紀末以来の古い型式と考えられる。平城宮内では第29次(100)、第35次(151)、第44次(189)、東区朝堂院の第267次(499)などがあり、藤原宮出土例を含めて胎土色調共に類似した倒置焼成であって、同じ産地の製品と推定される。

圓足円面硯 b には、法量で外堤徑21~24cm前後の大型（193・296・348など）、外堤徑16~18cm前後の中型（204・449など）、外堤徑12~14cm前後の小型（45・224など）と外堤徑10cm前後の超小型（36・195など）がある。形状では大型のものに①脚部が肉厚で受け口状の細長い突帯をもち、透孔が四弁花形を呈するもの（296・348など）や、②全体に薄手で外堤、突帯が角形を呈し、外反する脚部に長方形透孔をもつものがあり、①の脚端は外反して凹線状に肥厚させる（403）。中型は突帯、外堤の特徴が①②に類似するものが主体で、小型、超小型は脚の高低など多様である。大型①は南迎官衙式部省地区、中央区朝堂院東南部に、大型②は東区朝堂院、南迎官衙地区にそれぞれ目立ち、地図ごとの詳細な検討が今後の課題である。

圓足円面硯 c は a や b との区別が難しいものが含まれる。明確なものでは、外堤徑14~15cmの小型（191）や外堤徑7cm前後の超小型（3）がある。小さな外堤の下に突帯をめぐらせ、脚端部は外反肥厚させる点で圓足円面硯 b と共通し、法量も圓足円面硯 b の小型と重なる。

獸脚円面硯 硯部に3脚以上の獸脚をつけるが、脚下端を脚台で繋がないもの。8世紀初めには消失する型式で、平城宮では宮南面中門の包含層出土の獸脚円面硯 A（24）の脚柱部が脚節を持たない脚頭である点で可能性があるにとどまる。

無脚円面硯 円面硯の硯部だけで製品としたもので、明確な突帯をめぐらさない。外堤下が分厚く短い圓足のようにみえる86・146と、外堤と海部と硯面とで構成される505がある。なお、505は硯部の破片資料で、欠失部に数個の脚が付く余地がある。独立した獸脚が付けば、獸脚円面硯となる。

## 2. 円形硯

円形硯は硯部が円形を呈するが、海部が一方に偏るか、区別されない点で円面硯に含めないものである。ただ、破片資料の場合、硯面の傾斜が確認できることや、楕円形や円頭風字硯との区別が難しいことがあります、曖昧さが残る。

①双脚で硯面が傾斜するもの（4・20・148）、②3脚以上で硯面が水平のもの（41）、③皿形の硯部に高い輪状の高台がつくもの（145・515）、④杯B蓋形の硯部に輪状高台をつけたもの（109・177・383～387）、⑤円盤状の硯部外縁に沿って浅い溝状の海部を半周し、裏面に高い輪状高台を付けるもの（276・280）がある。

①は皿形に作った素地の口縁部を加工して外堤とし、一方に片寄せて2個の杏形の脚を付す。裏面を削り調整して硯面に特に海部を設けないものと、成形時のヘラ切り痕をとどめ、硯面の一方に楕円形の凹みを作りて海部とするものがあり、いずれも風字硯との交流によって生み出されたものである。第一次大極殿院北方官衙地区、内裏北外郭地区および内裏東外郭地区SD4240からの出土例がある。

②は7角に面取りした円柱を裏面に付ける。脚に掛る降灰と配置から3脚の可能性があり、硯面が水平をなすと考えた。裏面周縁部を中心にヘラケズリで調整する点も含めて円形硯①や風字硯との類似点が多い。内裏東外郭から出土した。

③と④は輪状高台円形硯とされるもので、硯部が皿形の③と蓋形の④とに分けられる。③には口径約19cmの小（145）と約21cmの大（515）とがあり、小は内外面全面を密にヘラミガキする。④には口径約19cmの小（109・385～387）と、約21cmの中（384）、約23cmの大（177）がある。③は宮城東南隅近くのSD3410から、④はSD3410、SD2700を含む内裏東方～東院西辺地区からの出土で、両者の出土傾向は重なり、時期も奈良時代後半～末を中心とする。

### 3. 風字観

外形が漢字の「風」冠に類似することからこの名がある。硯尻側に2個の脚をつけて、硯面を硯頭側に傾斜させる。平面形では硯頭が丸いもの（円頭）、直線のもの（平頭）があり、円形硯との区別が難しいものもある。硯面形状では硯面を縱方向の突帯で左右に区分するもの（二面）、硯面内の海部と陸部の境を突帯で区分するものとそれを欠くものがある。脚柱の形状には円柱形、角柱形、格狭間形、方形板形などがある。材質では、他の陶硯と同じ須恵器のほかに、黒色土器A類、黒色土器B類がある。平城宮からは黒色土器A類3点、黒色土器B類5点、二面風字硯2点、平頭1点を含めた18点が出土しており、基幹水路のSD2700、SD3410、SD4961のほか磚積官衙地区、東院庭園地区、玉手門地区など平安時代初めの遺構遺物が頗るな地区に集中する。

### 4. 形象観

諸円形の硯部には海部と硯面部を設け、鳥・亀・羊などの頸頭部・胸部・尾部を立体的に造形する。

鳥形硯の脚部には折疊んだ写実的表現のもの（250・469）と、4本の円柱や獸脚で表現するもの（22・187）がある。硯部内面には頭側に円弧形の堤によって海部をつくる。516・517は載頭・円弧の平面形をもつ扁平な硯部の外周に幅広い突帯状の外堤をめぐらせ、載頭形の硯部の内側に双円弧形の突帯による海部をつくる。宝珠硯に類似するが、硯頭部外堤上の方形剥離痕から小動物の形象硯と考えられる。

硯面部の形状にあわせた甲羅状の蓋は、頭部側を弧状に抉り、上面にヘラガキで亀甲、羽毛を描く。平城宮出土の形象硯には鳥形硯6点、鳥形硯蓋1点、亀形硯蓋1点があり、内裏北外郭地区、内裏西外郭地区、造酒司地区、東院西辺地区SD4961など東辺部に集中する。

### 5. その他

宝珠硯と中空円面硯、平面形が多角形、八花形を呈するものがある。

宝珠硯は外形を2側以上偶数の円弧と1個の尖形とで宝珠形に造形し、裏面に2脚あるいは4脚を付したものの、平城宮からは内裏北外郭（21）、東院西辺（66）、宮城東南隅（144）から各1点出土した。それらは、外形と同じ宝珠形の硯面が中央にあり、周りの外堤までの間が海部となる円面硯系のもので、外堤までを型作りする。尖形側に弧状の突帯で海部を作る風字硯系のものは平城宮からは出土していない。硯面に残る木目痕（范傷）から21と66とは同范で、144は異范である。144はSD3410から奈良時代後半～末の遺物とともに出土し、黒径7号窯の産品と類似する。平城京をはじめとする諸遺跡出土例との比較検討が期待される。

中空円面硯は杯皿類の杯部上面を塞いだり、壺や瓶の側面を平坦に加工することで硯面とするもの。棒状あるいは動物頸部状の把手が付く。内裏地区東面築地回廊側柱穴出土の把手片（214）と内裏東大溝SD2700出土の体部片（339）がある。214の上面には方形の小孔が開き、先端部外面をヘラケズリ。その先には鳥か亀かの頭部が作られた可能性がある。

多角形硯は直径28cmの円板の外周を12角形に削りだしたもので、稜の部分の下面を面取りする。ナデ調整した硯面側に磨耗痕があり、裏面に著しい降灰がある。東院西辺・東方官衙地区のSD3410から出土した1点（67）のみで出遺物は奈良時代後半～末に属す。

八花形硯も内裏地区出土の1点（212）のみである。平板な硯面部の外周を内側に折り曲げ、側面を花弁状にあしらう型式で、弁数および脚の有無については不明。硯面に重焼痕があるが海部の有無は不明。内裏地区内の奈良時代後半に作られた暗渠の抜取り溝から出土した。

## 第2節 陶硯の出土傾向

平城宮跡からの陶硯の出土傾向については、2002年度までの資料を対象とした報告（例言2：神野恵・川越俊一2003、以下「神野・川越報告」）がある。その後の出土はわずか2点であり、ここでは、「神野・川越報告」に基づいて記述し、若干の検討を補記することにする。ただし、「神野・川越報告」は同一個体と思えるものをまとめた「個体数」による検討である。また、今回除外した転用硯は、地区に偏りをもちらながら厖大な点数が出土しており、定形硯の代用品として、陶硯の出土傾向の検討に不可欠ではあるが、全体像の把握が充分でない現状から今後の課題とする。

### 1. 円面硯の出土傾向

「神野・川越報告」によれば平城宮出土陶硯の数は461個体を数え、その約半数が包含層からの出土で、遺構から出土した半数の内の9割が溝、残り1割が土坑や柱穴からの出土である。

平城宮跡の調査では陶硯が出土する頻度は高いが、西方官衙（馬寮）地区など広範囲に調査されながらも、ほとんど陶硯の出土しない地域もあって、陶硯の出土に偏りがあることが指摘できる。

宮域内でもまとまって陶硯が出土するのは、溝のなかでも基幹排水路である。内裏東外郭地区と内裏東方官衙地区の間を流れる東大溝SD2700、平城宮の中央、中央区朝堂院地区と東区朝堂院地区の間を流れるSD3715、東院西辺地区を南流し、平城宮外で東一坊大路西側溝と東面外堀を兼ねる南北大溝SD4951、および東院地区の北を画す宮内道路の南側溝SD11600が南折して東院地区と朝堂院東方官衙地区との間を区分するSD3410などがある。いずれの溝も奈良時代以降も開口していたとみられ、上層の埋土には一部平安時代から中世の遺物を含むところもあるが、おおむね奈良時代に属する土器や他の遺物が圧倒的に多い。出土した硯の大半も奈良時代に宮跡内で使用され廃棄されたものと考えられ、その出土分布は宮跡内の官衙配置を考える上で重要な手振りになる。

地区別に出土分布をみてみると、内裏東外郭地区、内裏東方官衙地区、東院地区、東区朝堂院地区東南部、中央区朝堂院地区東南部、宮東南隅部に陶硯の出土頻度が高い。第一次大極殿院地区や第二次大極殿院地区的儀式空間および天皇以下の生活空間である内裏地区には少なく、同じ官衙地区でも第一次大極殿院北方官衙地区、内裏北方官衙地区、南辺官衙地区は、比較的少ない傾向にあり、前述した西方官衙馬寮地区のようにほとんど出土しない地区もある。陶硯の出土頻度の高い地区には、古代の文書行政の中枢を担う官衙の存在が想定されるいっぽう、区画や官衙の性格の違いを反映した傾向も見られるようである。また、種類の上では、圓足円面硯が比較的地域を問わずに出土するのに対し、蹄脚円面硯は中央区朝堂院東南部地区と内裏東外郭地区、宮東南隅地区に目立ち、内裏東方官衙地区やそこからの流入を反映するSD2700、東院地区、南辺官衙地区では圓足円面硯のほうが蹄脚円面硯を凌駕しているようである。以下では、陶硯の出土頻度の高い地区を中心に、その出土傾向を概観し、それぞれの特色を検討しておきたい。

#### 東大溝SD2700・内裏東外郭地区・内裏東方官衙地区

内裏東大溝SD2700は内裏東外郭地区と内裏東方官衙地区の間を流れ、大極殿院・東区朝堂院の東に展開する東方官衙地区へ延びる基幹水路で、出土した遺物の量、質ともに他の基幹水路を圧倒するが、溝の東西に官衙が集中し、溝の両側からの排水路もあって、どちらから捨てられたものかは即断できない。SD2700出土の陶硯は、北限の第129次から内裏東方官衙地区的第154次までで総数40点を数える。

種類別の内訳は踏脚円面鏡12点（A 2点、B 10点）、圓足円面鏡21点（a 6点、b 3点、不明12点）、風字鏡1点、円形鏡（輪状高台）6点であって、SD2700からは踏脚円面鏡A、Bも多数出土するが、圓足円面鏡の出土が圧倒的であることがわかる。

SD2700埋上中の遺物には平城宮Ⅱ・Ⅲの土器が含まれるもの、内裏東外郭・内裏東方官衙が最も充実した時期、奈良時代中頃以降のものが主体を占めている。それは、溝の護岸改修過程が示す嚴重な保守管理によって、前半代の遺物の大半は浚渫され、周辺の官衙を含めた奈良時代中頃の大改作以降の遺物が順次堆積した結果と推定され、奈良時代後半に圓足円面鏡が陶鏡の主体となることを反映している可能性がある。

周辺の官衙内部の様相と比較してみよう。SD2700の西、内裏東外郭地区は、直近のSD2700出土木簡や馬鹿土器にその名が数多く見られる、宮内省やその被管官司と推定されている。内裏東外郭地区から出土した総数21点の陶鏡の内訳は踏脚円面鏡13、圓足円面鏡8であるが、踏脚円面鏡Bは東外郭の南部（第35次と第70次のSK6800）に集中し、そのほかでは、大型、中型の踏脚円面鏡A・圓足円面鏡aと小型の圓足円面鏡とが混在する。SD2700出土陶鏡の特色と大略一致する。しかも、小型の圓足円面鏡は、内裏東外郭内に仕切る築地の北側溝SD2350から奈良時代末～平安時代初の土器とともに出土したもので、SD2350は東面築地を暗渠でくぐりSD2700へ流れ込む構造にあり、SD2700出土陶鏡の多数を占める小型の圓足円面鏡の淵源の一つが奈良時代末～平安時代初めの内裏東外郭地区にあることを推測させる。

SD2700の東、内裏東方官衙地区の磚積官衙、造酒司地区内の様相はより明確である。磚積官衙地区では总数18点のうち11点が圓足円面鏡であり、その大半が外堤径16cmと比較的小型のものが占めている。造酒司地区でも总数13点のうち踏脚円面鏡Bは4点で、鳥形鏡や外堤径22cm前後の圓足円面鏡aが数点みられるほかは、半量を外堤径10～16cm前後の圓足円面鏡が占めている。出土する小型の圓足円面鏡は磚積官衙の敷磚を壊す廃棄物処理土坑SK5406など奈良時代末の官衙で使われ、廃棄されたものと考えられる。

では、踏脚円面鏡Bが集中する土坑SK6800および東外郭南部の様相はどうであろうか。上坑SK6800が奈良時代後半の官衙の廃絶に関わる廃棄物処理土坑であることから、奈良時代後半の内裏東外郭内の一官衙での陶鏡構成をしめしている可能性が高いと考えられる。大極殿院の真東にあることを考慮すれば、内裏に隣接する官衙や磚積官衙などとは異なる性格を反映しているとみることができる。また、SD2700が一部中世まで開いていた形跡があることを考慮すれば、土坑出土陶鏡とSD2350やSD2700出土陶鏡の違いは、その埋没時期の違いを反映しているとも考えられ、今後、伴出土器をふくめたより詳細な検討が必要である。

なお、内裏北外郭（内膳司）地区では总数21点中、13点が圓足円面鏡で4点の踏脚円面鏡Bを凌駕する。しかも、踏脚円面鏡は硯山径18cm前後の中小型であり、圓足円面鏡も中小型に混じって脚部径8cmの超小型が含まれている。これは、この地区の遺構が後半期を中心とし、平安時代初めまで認められるごとと関わるのであろう。

#### 中央区朝堂院地区東南部

中央区朝堂院地区東南部からは踏脚円面鏡Bの大型破片が多数出土する。いっぽう、圓足円面鏡は非常に少ないうえに、SD3715の上流の第27次と接合する個体もある。この地区での最大の特徴は、それら踏脚円面鏡の約3分の1が基幹排水路のSD3715からの出土であるが、その他の資料もそのほとんど

總てが、中央区朝堂院の東を画す堀SA5550の東、朝堂院区画の外から出土している点にある。中央区朝堂院区画の東外側とは東区朝堂院区画との間であり、そこには、墨書き器から推定される「刑部省」「彈正台」に関連する官衙が置かれたと考えられる。儀礼の場である中央区朝堂院内からはSD10400の1点(290)を除くと陶瓦が出土せず、出土した大量の踏脚円面鏡Bは「刑部省」「彈正台」関連官衙において、奈良時代中頃以降に使われた陶瓦である可能性が高いのである。

いっぽう、少量の出土ではあるが、第171次の奈良時代初めの土坑SK12530から平城宮Iの上器と共に出土した圓足円面鏡(363)や、平城宮土器Ⅲの時期に下限のあるSD10705から出土した踏脚円面鏡A(309・310)、圓足円面鏡a①(323)などは、この地区には造営当初からの官衙も存在したことを探測させるものであり、そこでは、踏脚円面鏡Aと大型の圓足円面鏡a①が併用される構成であったことを示している可能性が高い。

#### 第一次大極殿跡東南部

中央区朝堂院地区的北方、SD3715の上流部にあたるこの地区的様相は、中央区朝堂院地区と対照的である。第27次調査では総数13点のうちの8点がSD3715出土であるが、踏脚円面鏡が同一個体の2点であるのに対して圓足円面鏡は10点あり、しかも、外径17cm前後のものが多い。遺構出土のものはSD3715からの8点である。その南の第41次調査でも4点すべてが圓足円面鏡で内2点がSD3715出土である。この地区的特徴は、比較的小型の圓足円面鏡が圧倒するなかに、わずかに踏脚円面鏡Bが混じる様相とみることができる。中央区朝堂院地区東南部でみられた踏脚円面鏡Bを主体とする構成との違いを両地区的性格の違いに求めることも可能ではある。しかし、SD3715を挟んだ対岸の内裏西外郭地区(第91次)では踏脚円面鏡と圓足円面鏡とが相半ばであることを考慮すると、この地区が、奈良時代後半～末の「西宮」に推定される方形区画に隣接していて、SD3715にはそこから投棄された奈良時代末に近い時期のものが多く含まれていることによると理解される。

#### 東区側堂院地区東南部

東区朝堂院地区では朝庭内からの出土がほとんどである。しかも東第一～三堂については踏脚円面鏡A、踏脚円面鏡B、圓足円面鏡b、圓足円面鏡c等がそれぞれ1～2点ずつであるのに対して、第四～六堂以下南門、南面築地では45点が出土し、南に偏っているのである。その種類別の内訳は、踏脚円面鏡Bが25点(55%)、踏脚円面鏡Aが2点(4%)、圓足円面鏡aが7点(15%)、圓足円面鏡bが1点(2%)、鏡面形態が不明な圓足円面鏡が10点(22%)であり、踏脚円面鏡と圓足円面鏡は6:4の比率である。さらに、下層建物柱抜取穴と上層基壇上出土陶瓦を前半期の朝堂院にかかる陶瓦とすると、大型多脚、複合口縁形外堤の違いを含みながらも外径22cm前後、脚部径29cm前後の大型の圓足円面鏡aが目立ち、踏脚円面鏡Aが伴うのである。これに対して、踏脚円面鏡Bや小型の圓足円面鏡は上層建物の雨落溝など後半期朝堂院の廃絶にかかる遺構および包含層から出土している。すなわち、東区朝堂院では前半期、後半期ともに朝堂院内部での陶瓦使用が想定され、そこでは、多くの踏脚円面鏡とそれに次ぐ圓足円面鏡とで構成されることが特徴として読み取れる。

陶瓦の出土傾向にみる東区朝堂院と中央区朝堂院との違いは明確である。域内からほとんど出土しない中央区朝堂院と、前・後半を問わず一定量の大型陶瓦が出土する東区朝堂院との違いは、中央区朝堂院の役割が平安宮の農楽院に似てより儀式的であるのに対して、東区朝堂院がより実務的な空間であることの反映と理解される。

### 東区朝堂院東外郭・東方官衙地区

朝堂院区画の外側はほとんど調査されていないために、文書行政実務を行なう「曹司」における陶硯の様子は明らかでない。しかし、前述の、中央区朝堂院地区東南部の出土陶硯が、2つの朝堂院区画の間に置かれた、推定「刑部省」「彈正台」などの官衙で使用された陶硯とみてよければ、東区朝堂院の東、東院地区との間に想定される東区朝堂院東外郭地区および東方官衙地区の様相こそが、それら「曹司」における陶硯の様相を示すものといえる。すなわち、平安宮の朝堂院では弾正台、刑部省はそれぞれ西第二堂、第三堂が割り当てられており、平城宮中央区朝堂院東南部とは東区朝堂院西外郭として、それら西の朝堂に配置された官衙の曹司にあたるとみられるのである。わずかな資料であるが、第29次などで確認した東方官衙地区の東を観るSD3410の陶硯構成が、中央区朝堂院東南部の様相と類似する点の多いことが注目される。大型の蹄脚円面硯Bと圓足円面硯a①に小型の圓足円面硯aなどが混じる構成である。しかも、小型の圓足円面硯aは小型の圓足円面硯b・cとともに宮の廐絶近くに埋没したもののが含まれている可能性があり、それらを除外すると、中央区朝堂院地区東南部に推定された官衙地区使用的陶硯構成と一致してくる。さらに、蹄脚円面硯Bは中央区朝堂院東南部の資料と酷似した割合①であり、圓足円面硯a①も類似しているのである。東区朝堂院地区では、前半期と後半期を通じて、朝堂の達つ区画内部で一定量の陶硯が使用されるとともに、その外側に配置された官衙においては、東西とも同様の陶硯を用いて文書行政の実務が執り行われた可能性が高いことが指摘できる。その意味では中央区朝堂院地区東南部とは東区朝堂院西外郭に相当し、東外郭および東方官衙地区と対比して考えるべき空間である。東区朝堂院東外郭・東方官衙地区における陶硯構成の解明が待たれる。

### 南辺官衙（兵部省・式部省・式部省東官衙）地区

ほぼ全城が調査された奈良時代後半の式部省・兵部省はその業務内容から硯の使用頻度の高いことが予想されるが、調査区域内の遺物の出土自体が少なく、陶硯の出土点数も多くない。陶硯は小口で包含層からの出土が多い。とりわけ生門以西・兵部省地区での陶硯の少なさ（10点）が目立つ。これには、実務的官衙地区における転用硯の使用を考慮する必要がある。硯の種類は蹄脚円面硯Bと小型の圓足円面硯である。これに対して、下層に前半期の官衙区画が発見されている式部省・式部省東官衙地区では、兵部省と同様に出土量は少ない（約20点）ながらも、前半期の陶硯が含まれていることが注目される。第236次の436と第346次の533、第273次の504などの蹄脚円面硯Aや第222次の431、第220次の429などの大型の圓足円面硯aなどがそれで、いずれも中央区朝堂院地区東南部、東区朝堂院地区出土の前半代と推定される陶硯と同じ種類である。

### 宮東南隅・二条大路地区

宮城南の南面外堀・二条大路北側溝SD1250には多くの基幹排水路が合流し、宮内の遺物が流入する。また、東南隅ではその多くが東面外堀・東一坊大路西側溝SD4951からの出土であり、奈良時代後半～末を主体とし、平安時代初めまでのものが含まれている。圓足円面硯とともに出土する蹄脚円面硯が、中央区朝堂院東南部で多く出土するものと同じ形態、構成であり、また、小型の圓足円面硯や風字硯、形象硯などが一定量含まれる点からも、それらには、東方官衙地区、内裏東方官衙地区、東院地区からの流出分が多く含まれているとみるとみることができ、それらの集積の地としての出土傾向とみることができよう。

## 2. 地区を越えた接合関係

地区ごとの出土傾向を補完する意味で、地区を越えて接合する例をみておきたい。遺構、地区を越えた移動の意義は様々であろうが、同じ水系にある場合は、上流で投棄された個体が下流へ流れ出す過程で、より下流まで流れだした結果であるとの推測は容易である。基幹水路SD2700、SD3715、SD3410やSD4951の出土・接合状況はそうした例である。SD2700出土の踏脚円面鏡（301）の場合は、上流部第139次から約250m下流の内裏東方官衙（磧積官衙）地区西方の第172次まで、破片の一部が流れ出したことが確認できる。また、第一次大極殿院地区（第27次）のSD3715出土の圓足円面鏡a（85）は、約320m下流の中央区朝堂院地区（140次）の包含層へ破片が及んでいる。東院地区の北を西に走るSD11600は、東張出部西端で南折してSD3410となり、SD3410は南面大垣を潜った宮外で、二条大路北側溝SD1250を介して、東一坊大路西側溝SD4951に合流する。第259次のSD11600出土の圓足円面鏡a（334）は約30m離れた第154次のSD3410出土の破片と接合する個体であるが、第29次のSD3410出土の96と酷似しており、同一個体である可能性が極めて高い。この間約360m。同じく第29次のSD3410から出土した踏脚円面鏡B（91）は、約260m下った第32次で宮城外二条大路南側溝SD4006出土の破片と接合している。2点を併せて連続する一本の水系をたどることができ、当然のこと、遺物は上流部で投棄されたものである。宮東南隅や二条大路側溝など宮跡内の水が集まる地区の遺物には、沿線での活動が累積しており、基幹水路出土資料の分析はなお慎重な手続きが必要である。

いっぽう、第73次の圓足円面鏡208と、第220次の425との接合関係のように容易に理解しがたいものもある。第220次は南辺官衙・式部省地区にあり、第73次の208は内裏地区東南隅の土坑SK7659からの出土である。彼我の距離650m、同じ水系に属しない2つの地点を結ぶものは人の移動であろうが、破片自体の持ち歩きは考えがたい。平城宮内で繰り返された大小さまざまな造成・改作にともない、盛土、埋め立てなどの整地資材の一部として移動した場合も想定できよう。

## 第3節 検討課題

前節までの検討から、平城宮内における陶鏡構成の変遷は概略的には、奈良時代初めから前半の官衙地区では大型の踏脚円面鏡Aと圓足円面鏡aを主体として中小型の圓足円面鏡aが加わる構成であり、中頃～後半には大中型の踏脚円面鏡Bと圓足円面鏡aが主体で、中小型の圓足円面鏡aが加わり、奈良時代末～平安時代初めに踏脚円面鏡Bは姿を消し、中小型の圓足円面鏡aに、圓足円面鏡b、圓足円面鏡cや風字鏡、宝珠鏡、形象鏡が加わるものとみられる。

年代限定資料について 陶鏡は長期にわたる使用が想定され、溝出土資料は累積的に混在しており、伴出木簡など年代推定可能資料に恵まれた平城宮出土資料といえども、陶鏡の年代観の把握は容易ではなく、上記の概略的な変遷も踏脚円面鏡Bの成立や多様な圓足円面鏡aの変遷など課題も多い。ここでは、奈良時代前半期に存在したことを示す資料を中心に、年代の根拠が明確な数少ない資料を再確認して、今後の陶鏡の編年研究に備えることにする。

①踏脚円面鏡A（182）：高い外堤で凹線二条。東張出部SD5645出土。溝は小子門造営時に埋没する溝で神龜年間の木簡伴出。愛知高藏寺2号窯に類似。下層溝SD4951から脚部（164）出土。

②踏脚円面鏡A（497）：板状脚台に細棒状脚柱、脚部径32.2cm。⑥と共にSD17351出土。

③踏脚円面鏡B（498）：薄手の有段ロクロナデ。外堤径23.7、硯面径18.6。⑥と共にSD17351出土。

④円面鏡（353）：凹線による突帯とカキメ調整が踏脚円面鏡B（199）と類似する。東区朝堂院朝庭での聖武天皇大嘗祭関連建物SB12300柱掘形出土。平城宮IIの土器伴出。

⑤圓足円面鏡a（481）：重厚な硯部外堤と脚台とに突帯2条。細長方形透孔多数。東区朝堂院東第六堂SB16800の柱抜取穴出土で、上層朝堂院造成以前に存在したとみられる。硯面径21.3cm、脚部径29.6cmで、第267次の493と接合し、中央区朝堂院地区東南部の319は同型式の全形がわかる（外堤径26.7cm、硯面部径20.6cm、脚部径30.6cm、器高9.7cm）。

⑥圓足円面鏡a（499）：外堤が複合口縁状を呈する。東区朝堂院上層南面築地築造時の排水路SD17351出土で養老6年、神亀元年の紀年木簡が伴出。同一個体の脚部（503）がSD17352から出土。脚部（477等）は①の上層朝堂SB16850基壇土山。同型式は藤原宮内裏東外苑にあり、第171次SK12530の363は平城宮土器Iと伴出。ほかに第29次（100）、第35次（151）、第44次（189）等に類例。

⑦圓足円面鏡a（325）：脚部径27.8cm、透孔下に突帯1条、幅広脚柱にヘラガキ「小」。中央区朝堂院区画が建設以前の南北溝SD3765。平城宮I・IIの土器伴出。同様のヘラガキをもつ破片（362）。

⑧圓足円面鏡a（440）：肉厚な外堤下に突帯1条。式部省東北方のSK15427。平城宮IIの土器伴出。  
陶鏡の種類と法量 「神野・川越報告」は陶鏡（円面鏡）の種類と法量との間の傾向について硯面径をもとにした検討を加え、中央区朝堂院東南部出土陶鏡を例にとれば、踏脚円面鏡には硯面径17cm、20cmの大型品と14cmの小型品があり、圓足円面鏡には踏脚円面鏡にかさなる大きさのもののかばに、より小型の硯面径5cm前後、9cm前後、13cm前後にまとまりが認められるとする。これに対して、奈良時代後半の資料が主体を占める内裏東方官衙地区のSD2700出土陶鏡は硯面径6cmから12cmの小型の圓足円面鏡が中心であり、奈良時代前半には大型品の踏脚円面鏡と圓足円面鏡が主体を占め、奈良時代後半には小型の圓足円面鏡が主体となると結論付けている。

大型品と小型品が存在することや奈良時代後半に小型品が主体を占めることをめぐっては、踏脚円面鏡が大型品に限られるのは、それらが個人用ではなく、公の場での公用鏡（備品）であることにより、奈良時代末に向かって個人用が増えることで小型化するとの理解がある。しかし、大型品と共用品（備品）を結び付けた根拠は「大量に累を必要とする＝大型品」にあり、合理的な説明とはみなしがたい。むしろ必要なのは、ほぼ同じ大きさの踏脚円面鏡と圓足円面鏡が併存することの説明であり、踏脚円面鏡・圓足円面鏡を問わず、大小、中小の相似関係にあるものが存在することの説明である。多様な形態の陶鏡の存在と法量の異なるものの併存は既に、7世紀代の資料にうかがうことができ、圓足円面鏡の法量が転用鏡の法量分布と重なることからも、陶鏡の階層性を示す可能性が高いのである。すなわち、奈良時代後半以降に大型品を含む多様な器種構成が整理されてゆくことで小型器種が主体を占めるようになるのであり、この傾向は、須恵器・上層器の器種・法量分化とその変遷と期を一にしたものである。7世紀後半～8世紀前半の時期、大型品を含む多様な器種に分化する供膳形態の土器は、8世紀後半以降、法量が縮小するとともに器種が減少し、黒色土器、施釉陶器など新たな器種が出現する。大型の踏脚円面鏡・圓足円面鏡が減少して、小型の圓足円面鏡に風字鏡等が加わる時期と符号するのは、陶鏡が土器生産の場で作られ、都城を中心に使われた同様の性格の焼物であることと無関係ではない。土器研究と同じ視点に立って、平城宮出土の陶鏡について、硯種の細別と消長、法量の分化と消長、製作技法とその変遷を検討するとともに、他遺跡・生産地出土資料との比較検討による、生産と流通と消費の総合的な検討が今後の課題である。

## IV. 陶硯一覽表

## 凡　例

①次數 平城宮跡発掘調査部が行なった発掘調査の次数である。

異なる次數間で接合した場合は、原則として新しい次數を優先し、用いて併記した。

②出土地点 平城宮内の地域区分、出土地区、出土日の順に記す。地域区分は推定される官衙名や地区名、遺構名を示した場合がある。異なる場所から出土した破片が接合した場合は、を用いて併記したが、改行併記したものがある。

③遺構・層序 出土時の遺構名および層序名と、報告・概報・年報などで付した遺構番号を併記した。

遺構以外の場合は包含層とした。

④陶器の種類 分類と名称は例言付図を参照。

⑤法量 円面視の場合、復原的に計測した外堀径、視面径、脚部径、器高（残高）を記し、その他の場合、器長（残存長）、器幅（残存幅）、器高（残高）を記した。いずれも単位はcmである。

⑥焼成（窯痕跡） 視面を上に向けた陶瓦を使用する状態で焼成されたものを正置、視面を下向きにいたした状態で焼成されたものを倒置とし、括弧内にその模様となる陥落などの窯痕跡を記した。

⑦概報・報告 既刊の発掘調査報告があるものはそれを優先し、未刊行のものは概報、年報、紀要を記した。これら以外に遺構や調査の詳細な記述がある参考文献を記したものがある。当研究所刊行物の略記は、以下の通り。

『昭和51年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』

→『昭和51年度平城概報』

『1968年度 奈良國立文化財研究所年報』→『1968年度年報』

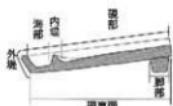
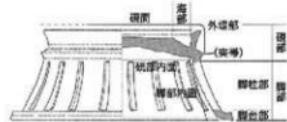
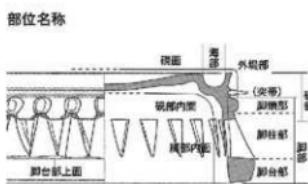
『奈良國立文化財研究所年報1997-Ⅲ』→『年報1997-Ⅲ』

『奈良文化財研究所紀要2004』→『紀要2004』

『平城宮発掘調査報告Ⅳ』→『平城報告Ⅳ』

⑧PL, Ph. 本書第V章実測図版番号(PL)と第VI章写真図版番号(Ph.)を記す。

⑨備考 透孔の形状、復原される脚・透孔数、形態、調整手法、文様などを記し、その他、同一個体の可能性、胎土・形状の類似などを記した。



番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 鎔成(窓痕跡)	
	⑦ 概要・報告			⑧ PL, Ph
	⑨ 備 考			
1	① 2次	② 第一次大堀殿院北方官衙地区 6ABO NZ 590910	③	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径6.0 視面径4.5 残高1.2	⑥ 倒置(視部内面降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1962「平城報告II」(学報15) PL. 54-8			⑧ PL. 1 Ph. 1
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数20。脚部内外面ロクロナデ。視面率減、墨痕著しい。猿投窓産。			
2	① 5次	② 第一次大堀殿院北方官衙地区 6ABO IE84 601227	③	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径14.0 残高3.8	⑥ 正置(脚台部上面に降灰)	
	⑦ 奈文研1962「平城報告II」(学報15)			⑧ PL. 1 Ph. 1
	⑨ 長方形透孔。復原脚数7。脚柱部上端に沈線1条。			
3	① 5次	② 第一次大堀殿院北方官衙地区 6ABO I 区 630725	③ SK238	SK238
	④ 圓足円面鏡 c	⑤ 外径6.9 視面径5.8 脚部径10.1 器高3.9	⑥ 倒置(視部内面降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1967「平城報告IV」(学報17) fig. 9-1 PL. 40-272			⑧ PL. 1 Ph. 1
	⑨ 長方形透孔。復原脚数8。透孔間に縦沈線と竹管文。脚下端外反。猿投窓産。			
4	① 6次	② 第一次大堀殿院北方官衙地区 6ABO JN88 610526	③ 床土	包含層
	④ 円形鏡(双脚)	⑤ 復原長14.4 復原幅16.0 残高3.2	⑥ 正置(視面降灰、円形重焼痕)	
	⑦ 奈文研1967「平城報告IV」(学報17) fig. 9-2 PL. 40-271、奈文研1962「1962年度年報」p. 2~8			⑧ PL. 1 Ph. 1
	⑨ 長方形板状脚2個。外縁・裏面へラケズリ。裏面に径6.9cmの円形重焼痕。裏面にも重焼痕。			
5	① 7次	② 第一次大堀殿院北方官衙地区 6ABO DQ53 610907	③ 床土下部	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径16.4 視面径10.2 脚部径19.7 残高5.2	⑥ 倒置?	
	⑦ 奈文研1967「平城報告IV」(学報17) 不掲載、奈文研1962「1962年度年報」p. 2~8			⑧ PL. 1 Ph. 1
	⑨ 長方形透孔。復原脚数8。脚下端外反。脚端ゆがむ。脚部内面に土器片付着。			
6	① 7次	② 第一次大堀殿院北方官衙地区 6ABO GT77 610731	③	包含層
	④ 龍字鏡(円鏡)	⑤ 残存長11.4 復原幅11.4 残高3.0	⑥ 倒置(視裏面に降灰)	
	⑦ 奈文研1967「平城報告IV」(学報17) 不掲載、奈文研1962「1962年度年報」p. 2~8			⑧ PL. 1 Ph. 1
	⑨ 復原脚数2。脚部裏面長軸方向へラケズリ。陶邑窓産か。			
7	① 8次	② 第一次大堀殿院北方官衙地区 6ABO AN55 620302	③ 床土下	包含層
	④ 圓足円面鏡 c	⑤ 外径7.9 視面径5.0 残高2.4	⑥ 正置(視面-外面降灰)	
	⑦ 奈文研1967「平城報告IV」(学報17) 不掲載			⑧ PL. 1 Ph. 1
	⑨ 円錐長方形透孔。復原脚数4。幅広脚柱の中央に縦沈線1条。低い外縁。脚部内面に爪形痕。			
8	① 10次	② 内裏北外郭地区 6AAO QC74・QB72 620811・620903	③ 滑状土器層	SD536
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径23.0 残高4.1	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅵ」(学報26) PL. 55-13			⑧ PL. 1 Ph. 2
	⑨ 2片接合。復原脚数12。脚部内面横取り、脚内面取り。踏脚円面鏡Bの技法明瞭。陶邑窓産。			
9	① 10次	② 内裏北外郭地区 6ABB CI89・CH87 620804・620806	③ □□・盛土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径13.4 視面径9.0 脚部径17.0 器高5.4	⑥ 正置(視面降灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅵ」(学報26) PL. 55-2、奈文研1963「1963年度年報」p. 2~9			⑧ PL. 1 Ph. 2
	⑨ 2片接合。長方形透孔。復原脚数10。透孔間に縦沈線3条。透孔下に縦沈線1条。脚端外反肥厚。			
10	① 10次	② 内裏北外郭地区 6AAO RF71 620803	③ 滑	SD487
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.6	⑥ 正置(脚部外面に降灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅵ」(学報26) 不掲載、奈文研1963「1963年度年報」p. 2~9			⑧ Ph. 2
	⑨ 脚柱 1本。長方形透孔。脚數不明。側面切りママ。SD487は内裏北外郭南築造の溝を流れる溝。報告では平安時代初頭。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶磚の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概 報		⑧ PL, Ph	
	⑨ 雷 考			
11	① 11次	② 内裏北外郭地区 6A88 AC83 630215	③ 滋	SD557
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径18.0 残高3.4	⑥ 倒置 (窓部内面)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26)、泽文研1963『1963年度年報』p. 2~9		⑧ PL 1 Ph. 2	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数7。外堤端部内肥厚。外面ロクロナデ。12に類似するが焼成法が異なる別個体。			
12	① 11次	② 内裏北外郭地区 6A88 AC83 630215	③ 滋	SD557
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径18.3 残高3.4	⑥ 正置 (外堤上面降灰跡状)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26)、泽文研1963『1963年度年報』p. 2~9		⑧ PL 1 Ph. 2	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数8。外堤端部内肥厚。外面ロクロナデ。11に類似するが焼成法が異なる別個体。			
13	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AA0 DQ19 630808	③ 合炭土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 窓面径18.0	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-11の窓部、写真12		⑧ Ph. 2	
	⑨ 脚柱1個。復原脚数20。窓部内面横ケズリ。報告PL. 55-11の図はこの窓部と15の脚部とで合成。			
14	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AA0 DL21~23 630808	③ 床土下	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径22.0 残高3.1	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) 不掲載		⑧ Ph. 2	
	⑨ 脚柱1本。復原脚数不明。脚台外縁突出。脚柱内面縦方向ケズリ、脚台内面横方向ケズリ。			
15	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UM14 630809	③ 合炭土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径24.6 残高5.2	⑥ 正置 (脚台上面~外面降灰)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-11脚部		⑧ PL. 1 Ph. 2	
	⑨ 脚柱2本。復原脚数20。脚柱内側幅広く面取り。脚台内端突出。報告PL. 55-11の図はこの脚部と、13の脚部とで合成。			
16	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UN49 630807	③	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径11.2 窓面径8.8 残高3.3	⑥ 正置 (窓面降灰)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-4		⑧ PL. 1 Ph. 3	
	⑨ 十字形透孔、復原透孔数8。窓面外周に突帯がめぐる。透孔上部に突帯2条。			
17	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UK49 630807	③	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径13.3 窓面径8.8 残高2.4	⑥ 倒置 (窓部内面降灰跡状)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-1		⑧ PL. 1 Ph. 3	
	⑨ 縞長方形透孔。復原脚数24。海部幅広。窓面外周隆起。透孔上部に突帯1条。窓投窓室。			
18	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UP49・UP48 630808	③ 合炭土	包含層
	④ 圓足円面鏡 c	⑤ 外堤径20.2 窓面径16.0 残高3.8	⑥ 倒置 (窓部内面・外堤外面降灰)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-5		⑧ PL. 1 Ph. 3	
	⑨ 2片接合。長方形透孔。復原脚数18。写真の脚部は279等を参考にした復原。			
19	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UP33 630820	③ 黒色土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径18.8 残高5.1	⑥ 倒置 (脚部内外面降灰)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-10写真		⑧ PL. 1 Ph. 3	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。復原脚数18。脚柱中央に縱沈線1条。透孔下部に突帯1条。透孔側面切りママ。			
20	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UR48 630809	③	包含層
	④ 円形(風字)鏡	⑤ 復原直徑18.0 復原高2.3	⑥ 倒置 (窓部裏面降灰)	
	⑦ 泽文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 56-17		⑧ PL. 2 Ph. 4	
	⑨ 横円形凹みで海部をつくる。窓面に直径9cmの窓焼痕。裏面中央部にヘラ切り痕残る。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	連続番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕)	
	⑦ 概要・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
21	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UZ	③	包含層
	④ 宝珠觀	⑤ 長径15.4 短径13.7 復原高2.8	⑥ 例置 (窓部裏面降灰跡)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 56-16		⑧ PL. 2 Ph. 4	
	⑨ 8角柱の脚 4本。硯部型作り。硯面外周に突帯凸帯。範彫 (長軸方向の木目) から、66 (22南次) と同范。鶴投産。			
22	① 13次	② 内裏北外郭地区 6AAB UO47 630807	③	包含層
	④ 形象模 (鳥形模)	⑤ 長径15.7 短径9.8 復原高5.4	⑥ 例置 (窓部裏面降灰)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅷ』(学報26) PL. 56-15		⑧ PL. 2 Ph. 4	
	⑨ 四柱状脚 3本残存。猪円形の鳥部の前寄りに土手を設けて窓部をつくる。裏面はハラケズリ調整。			
23	① 15次	② 宮西面東門(玉手門)地区 6ADF TO89 640305-640401 ③ 土坑・西北上面	SK1623	
	④ 圓足模(黒色土器B類)	⑤ 復原長17.4 復原幅15.0 復原高3.6	⑥	
	⑦ 奈文研1982『平城報告XII』(学報42) PL. 65-323		⑧ PL. 2 Ph. 4	
	⑨ 黒色土器B類。非接合の2片で復原。8角柱形脚 1本残存。内外面とも密なヘラミガキ調整。内外面に沈線。			
24	① 16次	② 宮南面中門(朱雀門)地区 6ABY EE39 640624 ③ 灰褐色土	包含層	
	④ 踏脚円面模 A	⑤ 外堤径24.6 硫面径19.4 残高4.5	⑥ 例置 (窓部裏面降灰)	
	⑦ 奈文研1978『平城報告Ⅶ』(学報34) PL. 46-202		⑧ PL. 2 Ph. 4	
	⑨ 復原脚數40。密接した脚頭。硯面に径20cmの重焼痕。硯部火彌れあり。脚頭が細身で筋が無く獸脚の可能性あり。			
25	① 16次	② 南面中門(朱雀門)地区 6ABY DS43 640711 ③ 灰褐土	包含層	
	④ 圓足円面模 c	⑤ 外堤径13.6 残高2.4	⑥ 正置 (海部～硯部外側に降灰)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報34) 不掲載、奈文研1965『昭和39年平城概報』		⑧ PL. 2 Ph. 4	
	⑨ 細長方形透孔。復原透孔蓋不明。透孔の間隔が広い。外堤が低く、突帶が太い。小片からの復原。			
26	① 20次	② 内裏北外郭地区 6AAO MM52 640731 ③ 暗灰褐色砂土	包含層	
	④ 圓足円面模 a	⑤ 外堤径10.4 硫面径7.6 残高1.1	⑥ 正置 (硯面降灰)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26)、奈文研1965『昭和39年平城概報』		⑧ PL. 2 Ph. 5	
	⑨ 透孔不明。低い外堤。硯部内面ロクロナデ。			
27	① 20次	② 内裏北外郭地区 6AAO GV28 640901 ③ 暗褐色土	包含層	
	④ 圓足円面模 a	⑤ 外堤径15.2 硫面径9.4 残高2.0	⑥ 例置 (窓部内面・突帶下面降灰)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26)、奈文研1965『昭和39年平城概報』		⑧ PL. 2 Ph. 5	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数10。硯面外周隆起。外堤削離痕明顯。透孔上部突帯1条。硯部内面ロクロナデ。			
28	① 20次	② 内裏北外郭地区 6AAO GT29-GT28 640930-640831 ③ 砂質下土・暗褐色土	包含層	
	④ 圓足円面模 a	⑤ 外堤径12.2 硫面径9.2 残高2.2	⑥ 例置 (窓部内面・突帶下面降灰)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26)、奈文研1965『昭和39年平城概報』		⑧ PL. 2 Ph. 5	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数10。硯面外周突帯状。硯部内面ロクロナデ。外堤の一部押出変形。窓色差か。			
29	① 20次	② 内裏北外郭地区 6AAO GD30 640813 ③ 灰褐土	包含層	
	④ 圓足円面模 a	⑤ 外堤径19.0 硫面径13.6 残高2.7	⑥ 例置 (窓部内面・突帶下面降灰)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26)、奈文研1965『昭和39年平城概報』		⑧ PL. 2 Ph. 5	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数17。硯面外周浅沈線。硯部内面ロクロナデ。器壁肉厚。			
30	① 20次	② 内裏北外郭地区 6AAO GH27 640820 ③ 暗褐色土	包含層	
	④ 圓足円面模 b	⑤ 外堤径15.8 硫面径15.3 残高3.6	⑥ 正置倒置不明	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-3、奈文研1965『昭和39年平城概報』		⑧ PL. 2 Ph. 5	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数13。透孔間隔沈線1条。二次加熱を受け全体に墨染。報告図を変更。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶硯の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概要・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
31	① 20次	② 内裏北外郭地区 6AAC MP52 640730	③ 土器窯	包含層
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径7.8 残高2.1	⑥ 正置 (脚部外面降灰)	
	⑦ 奈文研1976『平城報告Ⅶ』(学報26) PL. 55-6、奈文研1965『昭和39年平城概報』		⑧ PL. 2 Ph. 5	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数30。脚端外反。写真の観部は復原。			
32	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC BH01・BG04 650107・650106	③ 灰褐色土	包含層
	④ 圓足円面硯 a	⑤ 外堤径15.0 観面径9.2 残高6.0	⑥ 倒置 (硯部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ PL. 2 Ph. 5	
	⑨ ト字形透孔。復原透孔数4。硯部内面不定方向ナデ。観面上径11.1cmの重焼痕と火継ぎ。陶邑窯産?			
33	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC BE12 641226	③ 黑色土	包含層
	④ 圓足円面硯 a	⑤ 外堤径9.0 観面径6.4 脚部径10.0 残高2.6	⑥ 正置 (観面降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ PL. 3 Ph. 5	
	⑨ 脚部外面に透孔状刺突文。復原脚数60。刺突文状透孔は貫通しない。脚部外反、端部が外に肥厚。			
34	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC HS27 641215	③ 溝 黒下	SD2700
	④ 踏脚円面硯 B	⑤ 残高6.4	⑥ 正置 (脚柱外面降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ Ph. 6	
	⑨ 脚柱1本。脚柱内面横ケズリ。脚柱外面に前り残し。透孔箇面切りママ。脚台外面横ケズリ。脚台内端突出。			
35	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC BG03 650113	③ 灰褐色砂質土	包含層
	④ 圓足円面硯 a	⑤ 外堤径15.5 観面径12.9 残高2.5	⑥ 正置 (観面~突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ PL. 3 Ph. 6	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数16。低い外堤で溝状の海部。透孔斜向。硯部内面ロクロナデ、中央肥厚気味。陶邑窯産?			
36	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC HU27 641215	③ 溝 黒下	SD2700
	④ 圓足円面硯 b	⑤ 外堤径10.6 窓面径7.0 残高3.0	⑥ 倒置 (硯部内面・突帯下面降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ PL. 3 Ph. 6	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数8。薄い突帯。窓面凹凸あり。窓面裏不定方向ナデ。重焼痕あり。透孔箇面切りママ。			
37	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC BE05 650109	③ 灰褐色土	包含層
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径18.4 残高4.8	⑥ 正置 (外面~突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ PL. 3 Ph. 6	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数14。透孔下に突帯。内脇する脚部。脚端内外に小さく肥厚。透かし窓面切りママ。陶邑窯産?			
38	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC HL27 650116	③ 溝 I 砂	SD2700
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径18.0 残高5.0	⑥ 倒置 (脚柱内面・突帯下面降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ PL. 3 Ph. 6	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数17。脚柱中央沈線1条。透孔下に突帯1条。内湾気味の脚台。脚部内面ロクロナデ。			
39	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC HW27 641215	③ 溝 黒下	SD2700
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径11.5 残高2.6	⑥ 倒置 (脚端下面~内面降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ Ph. 6	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数8。組めの脚。外反する脚の端部肥厚。脚部外外面ロクロナデ。透孔箇面切りママ。			
40	① 21東次	② 内裏東方官衙地区 6AAC HR27 641215	③ 溝 黒下	SD2700
	④ 風字硯 (二面)	⑤ 残存長10.0 復原幅19.2 残高2.0	⑥ 正置 (窓面わざかに降灰)	
	⑦ 奈文研1965『昭和39年平城概報』、奈文研1965『[1965年度年報] p. 34~37		⑧ PL. 3 Ph. 6	
	⑨ 復原表面に五角柱脚削離痕。窓縁上面と復原縁ヘラケズリ。窓面縁突帯で2面に区分。左面不使用。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶碗の種類	⑤ 法 番	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
⑦ 概要・報告				⑧ PL, Ph
⑨ 備 考				
41	① 21次	② 内裏東方官衛地区 6AAC TV34 641201	③ 整地層	包含層
	④ 円形窓	⑤ 外堤径15.0 窓面径13.0 残高3.2	⑥ 倒置 (窓面面わざかに陥灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅶ」(学報26)、奈文研1965「1965年度年報」p. 34~37		⑧ PL, 3 Ph. 6	
	⑨ 7角脚柱1残存。3脚の可能性あり。窓面底縁へラケズリ、中央板目圧痕。窓面の磨耗著しい。			
42	① 21次	② 内裏東方官衛地区 6AAC NO41 641127	③ 盛土中	包含層
	④ 踏脚円面窓A	⑤ 外堤径32.6 脚部径36.0 復原高12.1	⑥ 正置 (外側薄灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅶ」(学報26) fig. 42、奈文研1965「1965年度年報」p. 34~37		⑧ PL, 3 Ph. 7	
	⑨ 復原脚数24。窓面欠。長大な外堤。継長気味脚頭の上面に芯の木目痕。板状脚台内面横ケズリ。大型踏脚円面窓Aの典型。			
43	① 21次	② 内裏東方官衛地区 6AAC ND42 641215	③ 柱穴3	SB2420
	④ 踏脚円面窓A	⑤ 脚部径20.4 残高4.3	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅶ」(学報26)、奈文研1965「1965年度年報」p. 34~37		⑧ Ph. 7	
	⑨ 脚柱2本残存。復原脚数19。脚台外・内面横ケズリ。脚柱内面横ミガキ、外面シャープな継ケズリ。			
44	① 21次	② 内裏東方官衛地区 6AAC ND43 641211	③ 東西溝	SD2350
	④ 圓足円面窓a	⑤ 外堤径9.0 窓面径6.2 残高2.4	⑥ 倒置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅶ」(学報26)、奈文研1965「1965年度年報」p. 34~37		⑧ PL, 3 Ph. 7	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数19。窓部内面ロクロナダ中央隆起。窓面肉厚。			
45	① 21次	② 内裏東方官衛地区 6AAC NJ36 641216	③ 茶地西 橙色土	包含層
	④ 圓足円面窓b	⑤ 外堤径12.4 窓面径9.0 残高2.4	⑥ 倒置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅶ」(学報26)、奈文研1965「1965年度年報」p. 34~37		⑧ PL, 3 Ph. 7	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数17。海と陸の境を辺縁で区分。高台形外堤。窓面内面ロクロナダ。			
46	① 21次	② 内裏東方官衛地区 6AAC NM39 641128	③ 黒地西 橙色土	包含層
	④ 圓足円面窓a	⑤ 外堤径10.0 窓面径7.0 残高1.6	⑥ 正置 (突帯上面かすかに降灰)	
	⑦ 奈文研1976「平城報告Ⅶ」(学報26)、奈文研1965「1965年度年報」p. 34~37		⑧ PL, 3 Ph. 7	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24。外堤側面に梯描き波状文。窓面ロクロケズリ。窓部内面ロクロナダ。窓面覆い焼。狹投窓系。			
47	① 22南次	② 東方官衛地区 6AAF BP~BS32 650610	③ 溝 3歩	SD3410
	④ 踏脚円面窓B	⑤ 外堤径24.2 窓面径18.8 残高3.9	⑥ 正置か (海部降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p. 38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ Ph. 7	
	⑨ 脚頭1剝離痕。復原脚数不明。窓部内面の横ケズりからみて踏脚円面窓Bと推定。			
48	① 22南次	② 東方官衛地区 6AAF BN52 650609	③ 茶褐色粘土	包含層
	④ 踏脚円面窓B	⑤ 脚部径24.2 残高4.9	⑥ 正置 (脚台外側薄灰垂状)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p. 38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ Ph. 7	
	⑨ 脚柱1本。復原脚数不明。脚柱脚台内面横ケズリ、外面削り残しあり。脚台内端突出。脚部49、窓部47に類似。			
49	① 22南次	② 東院西辺地区 6AAF JC32 650406	③ 暗灰砂質土	包含層
	④ 踏脚円面窓B	⑤ 脚部径25.4 残高5.7	⑥ 正置 (脚台外側薄灰垂状)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p. 38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ Ph. 7	
	⑨ 脚柱1本。復原脚数不明。脚柱脚台内面横ケズリ。透孔側面切りママ。脚台内端突出。窓部47、脚部48に類似。			
50	① 22南次	② 東院西辺地区 6AAF PO46 650419	③ 南北溝 下	SD3236
	④ 踏脚円面窓B	⑤ 外堤径22.8 窓面径17.6 残高5.9	⑥ 正置 (窓部側面薄灰垂状)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p. 38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 3 Ph. 8	
	⑨ 球形脚柱3個。復原脚数24。窓面外端円弧状。突帯3条。窓部内面ロクロナダ。窓面が外堤より高い。外堤上端凹線状。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号			
				④ 陶器の種類	⑤ 法 畫	⑥ 焼成（窯痕跡）	⑧ PL, Ph
51	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAF JJ32 650322	③ 暗褐色土	包含層			
	④ 円面鏡	⑤ 視面径17.2 残高1.2	⑥ 正置（窓面に薄く降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ Ph. 8	
	⑨ 硬面部のみ。透孔形状、脚數不明。窓面外縁突起周回。広く平坦な海部。圓足円面鏡A？						
52	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAE LP31 650505	③ 東柱穴	SA3178			
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 視面径13.9 残高2.3	⑥ 正置（海部～外側面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ PL. 3 Ph. 8	
	⑨ 硬部のみ。外堤欠損。窓面覆い施。表面も鏡として使用。尾北條同窓か。						
53	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAF JK33 650326	③ 灰褐色砂質土	包含層			
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外縁径20.4 視面径14.4 残高2.8	⑥ 正置（窓部外縁わずかに降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ PL. 3 Ph. 8	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数15、窓面外縁に沈線、窓部側面ミガキ。窓面磨耗。窓部～外堤に帶付着、窓面断面に及ぶ。						
54	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAF JE31 640403	③ 青灰色砂質土	包含層			
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外縁径19.7 視面径14.8 脚部径25.1 器高9.6	⑥ 正置（外面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ PL. 3 Ph. 8	
	⑨ 硬部と脚部は非接合。長方形透孔。復原脚数27。脚柱内側面取り。透孔下に突帯。128・129次の267・279等と同系。						
55	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAF JL35 650327 6AAF JG34 650402	③ 黄色砂質土 暗褐色土	包含層 包含層			
	④ 圓足円面鏡 c	⑤ 外縁径13.8 残高3.0	⑥ 倒置（突帯下面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ PL. 4 Ph. 9	
	⑨ 2片接合。透孔不明。脚柱に深い縦沈線多数。低い外堤、長い突帯。窓面外周部に四線。窓部内面クロナデ。						
56	① 22番次	② 東方官街地区 6AAF BK52 650610	③ 濃 3秒	SD3410			
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.6	⑥ 正置（外面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ Ph. 9	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数不明。幅狭い脚柱の中央に縦沈線1条。内外面クロナデ。透孔側面切りママ。						
57	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAF NO37 650415	③ 暗褐色パラス土	包含層			
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外縁径14.6 残高5.0	⑥ 正置（海部～外面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ PL. 4 Ph. 9	
	⑨ 長方形透孔？ 復原脚数19。外堤端部内肥厚。外堤側面に握書き波状文。全体に磨耗。						
58	① 22番次	② 東方官街地区 6AAF BR52 650615	③ 清 3秒	SD3410			
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径17.0 残高3.5	⑥ 正置？（外面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ PL. 4 Ph. 9	
	⑨ 長方形透孔と四弁花形透孔。それぞれ6個。透孔下端に横沈線1条。脚部外反上肥厚。外面から脚端に墨痕。						
59	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAF JG31 650403	③ 暗灰砂質土	包含層			
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径22.0 残高2.3	⑥ 正置（外面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ Ph. 9	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数19。透孔下に突帯1条。脚部は壺の高台状に内外肥厚。60と同一個体。						
60	① 22番次	② 東院西辺地区 6AAF JG31 650403	③ 暗灰砂質土	包含層			
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径22.0 残高4.6	⑥ 正置（外面降灰）				
	⑦ 奈文研1965『1965年度年報』p.38~40、奈文研1975『平城宮木簡2』（史料8）					⑧ PL. 4 Ph. 9	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数19。透孔下に突帯1条。脚部は壺の高台状に内外肥厚。内外面クロナデ。59と同一個体。						

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯底跡)	
	⑦ 標 鑑・報告		⑧ PL, Ph	
61	① 22両次	② 東院西辺地区 6AAC JE34 650326	③ 土器層	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径12.6 残高1.1	⑥ 位置 (内面降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 9	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数23。脚端外反。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。猿投窓。			
62	① 22両次	② 東院西辺地区 6AAC NN38 650306	③ 床土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径19.2 残高5.1	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 9	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数14。脚柱中央上位に双円形小穴。透孔の上下に横沈線各1条。脚端外反、壹口縁状に肥厚。内外面ロクロナデ。			
63	① 22両次	② 東方官衛地区 6AAC AO52 650611	③ 南北溝 3秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径20.4 残高4.2	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 9	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24。透孔下端に沈線1条。脚端が壹脚状に内外面肥厚。内外面ロクロナデ。			
64	① 22両次	② 東院西辺地区 6AAC KN38 650402	③ 土坑	
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径9.8 侃面径8.0 残高1.9	⑥ 位置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 10	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数25。窓面分厚い。窓部内面ロクロナデ、径6cmの重焼痕。			
65	① 22両次	② 東方官衛地区 6AAC EN52 650619	③ 南北溝 3秒	SD3410
	④ 黒字鏡	⑤ 残存長5.2 残存幅5.4 厚さ1.1	⑥ 正置? (外壁付近一部降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 10	
	⑨ 刻の有無形状不明。外堤裏面一面裏外周へラケゼリのちナデ。中央部押さえ。侃面中央部に重焼痕。			
66	① 22両次	② 東院西辺地区 6AAC KN35 650329	③ 土坑上面	包含層
	④ 宝珠鏡	⑤ 長径15.4 短径8.7 器高3.5	⑥ 位置 (窓部裏一外縁降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 10	
	⑨ 八花鏡。八角柱形の脚。4本? 侃面外縁の突部と外縁の宝珠形は型作り。長軸方向に木目、范キズあり。猿投窓。			
67	① 22両次	② 東方官衛地区 6AAC AD52 650611	③ 溝 3秒	SD3410
	④ 多角形鏡	⑤ 復原対角30.0 底面円形部径28.4 残高1.2	⑥ 位置 (窓部裏面降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 10	
	⑨ 扇平無脚・復原12角形。外縁面へラ削り、外縁面取り。侃面中央部ロクロナデのちミガキ、墨抗着しい。陶邑窓?			
68	① 22両次	② 東方官衛地区 6AAC AG52・AB52 650607・650611	③ 溝1秒・4秒	SD3410
	④ 形象鏡(鳥形鏡蓋)	⑤ 残長7.8 残幅11.0 器高2.3	⑥ 正置 (上面降灰状)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1973「平城報告VI」(学報26) p.102 fig.43-2		⑧ PL, 4 Ph. 11	
	⑨ V字形と直線で羽毛を表現。U字形張り部で頭部をうける。内面長軸方向へラケゼリ。外縁面へラケゼリ。猿投窓。			
69	① 22両次	② 東院西辺地区 6AAC OG46 650420	③ 南北溝 砂	SD3236
	④ 形象鏡(鳥形鏡蓋)	⑤ 残存長9.8 残存幅7.2 残高3.0	⑥ 正置 (上面降灰状、窓部に被せる)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1975「平城宮木簡2」(史料8)		⑧ PL, 4 Ph. 11	
	⑨ 上面にV字形のヘラガキで羽毛を表現。頭部を受ける張りが一部残存。内面に細布目が微かに残る。			
70	① 22両次	② 内裏東方官衛地区 (造酒司) 6AAC VS15 650412 6AAC VU14 650329	③ 砂II 砂上黒褐色バカラ内	SD3035 SD3031
	④ 跳脚円面鏡B	⑤ 外堤径22.0 残高3.4	⑥ 正置 (突唇上面降灰)	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1965「昭和40年度平城概報」		⑧ PL, 4 Ph. 11	
	⑨ 2片接合。脚不明。奥滑3条で同様の跳脚円面鏡B110と類似。窓側内面ロクロナデ。外堤より内側を覆い焼?			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
71	① 22次	② 内裏東方官衛地区（造酒司） 6AAC VX18 641226	③ パラス上	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径16.2 縦面径10.8 残高3.8	⑥ 倒置（窯部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1965「1965年度年報」p.38~40、奈文研1965「昭和40年度平城概報」		⑧ PL, 4 Ph. 11	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数12。外縦面無と突帯下に櫛目模波状文。窯底裏ロクロナデ。77・134とは同工別個体。			
72	① 22北・13次	② 内裏北外郭地区 6AAO CM18 630730 内裏東方官衛地区（造酒司） 6AAC VZ 650428	③	包含層 包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径21.9 縦面径17.0 残高3.5	⑥ 正置（外堤～海部に降灰）	
	⑦ 奈文研1976「平城報告書」（学報24）PL. 55-7、奈文研1965「1965年度年報」p.38~40		⑧ PL, 5 Ph. 11	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数18。縦面に重複痕。窯部内面指頭痕のちナデ。透孔上端は抉り状。複合口縁形外堤。			
73	① 25次	② 宮西南面（佐伯門）地区 6ADE KL41 650715	③ 灰褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径11.7 縦面径7.0 残高2.1	⑥ 倒置（窯部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1978「平城報告書」（学報34）、奈文研1966「1966年度年報」p.32~34		⑧ PL, 5 Ph. 11	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数14。窯部内外面ロクロナデ。猿投窓席。			
74	① 27次	② 第一次大瓶殿院地区 6ABE KP13 650827	③ 褐色土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 制部径31.0 残高1.5	⑥ 正置（脚台上面降灰袖状）	
	⑦ 奈文研1982「平城報告XII」（学報40）p.185 tab. 33-8		⑧ Ph. 12	
	⑨ 復原脚数32。透孔内側面取り。脚端が凹口縁状に外反。貼付けた踏脚飾りの胎上、色調が異なる。75と同一個体。			
75	① 27次	② 第一次大瓶殿院地区 6ABE KN09 650916	③ 清 パラス	SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 制部径30.8 残高3.9	⑥ 正置（脚部外面降灰袖状）	
	⑦ 奈文研1982「平城報告XII」（学報40）p.185 tab. 33-8		⑧ PL, 5 Ph. 12	
	⑨ 復原脚数32。透孔内側面取り。脚端が凹口縁状に外反。貼付けた踏脚飾りの胎上、色調が異なる。74と同一個体。			
76	① 27次	② 第一次大瓶殿院地区 6ABE KQ13 650327	③ 褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径17.4 縦面径12.6 残高2.7	⑥ 倒置（脚部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1982「平城報告XI」（学報40）p.185 tab. 33-13		⑧ PL, 5 Ph. 12	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数16（広狭あり）。窯面外縁有線。海部に重複痕。外縁内まで降灰。			
77	① 27次	② 第一次大瓶殿院地区 6ABE KG12 650827	③ 褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径16.1 縦面径11.0 残高3.4	⑥ 倒置（窯部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1982「平城報告XI」（学報40）fig. 90-11		⑧ PL, 5 Ph. 12	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数12。突帶上下に櫛目模波状文。窯部内面ロクロナデ。71・134とは別個体。報告は口径14.8cm。			
78	① 27次	② 第一次大瓶殿院地区 6ABD DC09 651018	③ 灰褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径15.6 縦面径11.6 残高3.2	⑥ 倒置（窯部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1966「1966年度年報」p.34~36		⑧ PL, 5 Ph. 12	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数11。脚柱中央に縦沈線1条。窯面多方向ケズリ、窯部内面多方向ナデ。			
79	① 27次	② 第一次大瓶殿院地区 6ABE KJ17 650831	③ 褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径25.0 縦面径20.1 残高4.0	⑥ 正置（突帶上面降灰袖状）	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1966「1966年度年報」p.34~36		⑧ Ph. 12	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数不明。外堤端部内側肥厚。窯部側面突起2条。全体に廻減著しい。			
80	① 27次	② 第一次大瓶殿院地区 6ABD DB09 651020	③ 南北溝	SD3715
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高10.5	⑥ 正置（突帶上面わざかに降灰）	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1966「1966年度年報」p.34~36		⑧ Ph. 12	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数6。脚柱中央に縦沈線1条。大型。窯部内面寄りから脚が伸びる。81と同一個体。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕)	
⑦ 概要・報告				
⑧ PL, Ph				
81	① 27次	② 第一次大施殿地区 6ABD DB09 651020	③ 南北溝上砂	SD3715
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径31.2 残高11.2	⑥ 正面 (突帯上面わずかに降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1966「1966年度年報」p. 34~36		⑧ PL, Ph. 12	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数6。脚柱中央に縱沈線1条。大型。底部内寄りから脚が伸びる。80と同一個体。			
82	① 27次	② 第一次大施殿地区 6ABE KK09 650916	③ 溝 底上	SD3715
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径18.8 残高1.5	⑥ 正面 (脚端上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1966「1966年度年報」p. 34~36		⑧ Ph. 12	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数21。脚下端突帯1条。端部外反。			
83	① 27次	② 第一次大施殿地区 6ABE KS08 650823	③ 南北溝パラス	SD3715上
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外径径18.7 腿部径21.4 巻高8.1	⑥ 正面 (外面部降灰)	
	⑦ 奈文研1982「平城報告XII」(学報40) fig. 90-12 PL. 137-12		⑧ PL, Ph. 13	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数20。脚柱中央に縱沈線1条、脚中央に横凹線1条。内外ロクロナア。猪投窓底。			
84	① 27次	② 第一次大施殿地区 6ABE KE09 671024	③ 溝 1秒	SD3715
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.2	⑥ 側面 (内面部降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1966「1966年度年報」p. 34~36		⑧ Ph. 13	
	⑨ 脚柱1本。細長方形透孔。復原脚数不明。内外面ロクロナア。透孔側面切りママ。外面に墨書きあり。猪投窓底。			
85	① 27・140次	② 第一次大施殿地区 6ABD DI03 651020 中央区朝堂院地区 6ABH AI46 821112	③ 溝 上砂 床土	SD3715 包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径径17.9 岩面径13.2 残高3.2	⑥ 側面 (腿部内面部降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1982「平城報告XII」(学報40) fig. 90-3		⑧ PL, Ph. 13	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数30。硯面周縁突帶。側面突帶2条。腿部内面部中央ナダ。東海地方産。約320m離れた2片が接合。			
86	① 27次	② 第一次大施殿地区 6ABD DC09 651021	③ 溝 中砂	SD3715
	④ 円面鏡 (無脚)	⑤ 外径径14.3 岩面径9.8 腿部径13.3 體高2.8	⑥ 正面 (硯面降灰輪状、円形重焼痕)	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1966「1966年度年報」p. 34~36		⑧ PL, Ph. 13	
	⑨ 腿部下端を削り落し無脚。硯面ヘラミガキ。腿部裏面に径8.5cmの重焼痕。硯面にも重焼痕。猪投窓底。			
87	① 29次	② 東面大延入隅・東方官衙地区 6AAH CI05 660707	③ 溝 1秒	SD3410
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高4.5	⑥ 正面 (突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p. 35~36		⑧ Ph. 13	
	⑨ 脚頭1残存。脚頭上部突帯1条。腿部内面横ヘラケズリ。			
88	① 29次	② 東面大延入隅・東方官衙地区 6AAH CL05 660715	③ 溝 2秒	SD3410
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径径23.0 岩面径19.0 残高3.3	⑥ 正面 (突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p. 35~36		⑧ Ph. 13	
	⑨ 復原脚数不明。突帯2条で内面の横ケズリが72・109等と類似。外堤より内面に覆い焼痕。外外面に墨付着。			
89	① 29次	② 東面大延入隅・東方官衙地区 6AAG MR05 660726	③ 溝 1秒	SD3410
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高5.9	⑥ 正面 (脚外面～脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p. 35~36		⑧ Ph. 13	
	⑨ 脚柱1本。脚台外面ケズリ。脚台内端突出。脚柱側面取り。脚柱削り残しあり。脚柱内面横ケズリ。90と酷似。			
90	① 29次	② 東面大延入隅・東方官衙地区 6AAG MS05 660722	③ 灰褐パラス	SD3410
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 腿部径24.5 残高5.6	⑥ 正面 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p. 35~36		⑧ PL, Ph. 13	
	⑨ 脚柱2本。復原脚数22。脚台内端突出。脚柱内面横ケズリ。側面取り。89と酷似。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 燐成(窯痕跡)	
	⑦ 概 報・報告			⑧ PL, Ph
	⑨ 備 考			
91	① 29・32次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MG05 660728 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI OK51 660202	③ 清 1秒 東西薄 秒	SD3410 SD4006
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 脚部径20.4 残高4.9	⑥ 正置(脚台上面～外面降灰)	⑧ PL, Ph. 13
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36			
	⑨ 約260m離れた異次數片接合。脚柱3本。復原脚数15。脚台内端突出。透孔内側広く面取り。脚柱内面横ケズリ後ナナ。			
92	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MR05 660726	③ 清 1秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径16.0 窓面径11.2 残高3.3	⑥ 倒置(窓部内面降灰)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ PL, Ph. 14	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数12。脚柱中央に縦沈線2条。外堤下に突帯2条。窓面外縁に小突帯。窓面に重焼痕(径11.8cm)。			
93	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAH CD05 660703	③ 清 2秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径11.0 窓面径7.2 残高2.6	⑥ 倒置(窓部内面降灰)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ PL, Ph. 14	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24(広窓あり)。窓部窓面突起1条。内外ロクロナナ。窓面に径7cmの重焼痕。			
94	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MP05 660801	③ 清 2秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径17.0 窓面径10.5 残高2.9	⑥ 倒置(窓部内面・外側面降灰)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ PL, Ph. 14	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数15。窓面部のみ肉厚。ロクロナナ。窓部内面に径10cmの重焼痕。			
95	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MG08 660810	③ 整地層	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径16.9 窓面径13.3 脚部径18.0 売高5.6	⑥ 倒置(窓部内面降灰)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ PL, Ph. 14	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数12。小片からの復原。外堤下に突帯1条。脚端玉線状。内外ロクロナナ。			
96	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MG05 660801	③ 清 2秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径11.5 窓面9.4 残高1.6	⑥ 倒置(窓部内面降灰)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ Ph. 14	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数32。窓面部のみ肉厚。窓面に火書き。約360m上流出土の334と同一個体(非接合)。			
97	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MH05 660728	③ 清 1秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径10.0 窓面径7.4 残高2.1	⑥ 倒置(窓部内面降灰)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ PL, Ph. 14	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数28。薄手、内外面ロクロナナ。透孔箇面切りママ。狼投窓底。			
98	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MC05 660730	③ 清 2秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.1	⑥ 倒置(内面降灰輪状)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ Ph. 14	
	⑨ 脚柱1本。細長方形透孔。内外面ロクロナナ。透孔箇面切りママ。狼投窓底。99と同一個体か。			
99	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MM05 660701	③ 清 2秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径15.6 残高1.4	⑥ 倒置(脚部内面降灰輪状)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ PL, Ph. 14	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数28。荒口縁状脚端。薄手で内外面ロクロナナ。透孔箇面切りママ。狼投窓底。98と同一個体か。			
100	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAH CG12 660728	③ 灰パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 窓面径17.2 残長4.4	⑥ 倒置(外堤下面降灰)	
	⑦ 泰文研1966「第28・29・33次平城概報」、泰文研1967「1967年度年報」p. 35～36		⑧ PL, Ph. 14	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数11。複合口縁状の外堤上欠損。内外面ロクロナナ。全面率減。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕)	
	⑦ 概要・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
101	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAC MC05 660730	③ 溝 1秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡b	⑤ 硬面径12.1 残高2.1	⑥ 鉄置(窓部内面、突帯下面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ PL, 5 Ph. 15	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数17。窓面外縁を引き出して受け口状の突帯とする。外堤斜面。			
102	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAH CE05 660713	③ 溝 1秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡b	⑤ 硬面径10.1 残高4.0	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ Ph. 15	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数17。細い外堤。硬面に小さな段。外堤外を覆い焼か。103と同一個体。			
103	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MH05 660728	③ 灰堀パラスト	包含層
	④ 圓足円面鏡b	⑤ 外堤径14.8 硬面径10.4 残高2.5	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ PL, 5 Ph. 15	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数17。細い外堤。硬面に小さな段。外堤外を覆い焼か。102と同一個体。			
104	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MR05 660726	③ 溝 1秒	SD3410
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外堤径14.5 硬面径10.5 残高2.5	⑥ 鉄置(窓部内面、突帯下面降灰粘状)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ PL, 5 Ph. 15	
	⑨ 幅広長方形透孔。復原脚数14。窓部内面に径11cmの重焼痕。外堤左回りクロコナデ。窓部内面一方向ナデ。東海地方産。			
105	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAH CH18 660805	③ 灰パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外堤径27.4 硬面径21.4 残高4.0	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ PL, 5 Ph. 15	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数15。脚部内厚。硬面薄手。外堤上端外肥厚。外堤下部に突唇1条。105・166等と形状・胎土類似。			
106	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAH CD14 660801	③ 穴	SK4362
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外堤径26.0 残高4.6	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ Ph. 15	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数23。脚部内厚、硬面薄手。外堤内覆い焼。105・107・166等と胎土・焼成類似。			
107	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAH CD11 660726	③ 灰パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外堤径26.0 残高4.5	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ Ph. 15	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数23。脚部内厚。硬面薄手。外堤内覆い焼。105・106・166等と胎土・焼成類似。全面重焼。			
108	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAH CL18 660806	③ 灰パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 残高5.3	⑥ 正置(外側降灰)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ PL, 6 Ph. 15	
	⑨ 幅広長方形透孔。透孔下に突唇2条。脚部小さく外肥厚。105・107・166等と胎土・焼成類似。			
109	① 29次	② 東面大垣入隅・東方官衙地区 6AAG MR03 660726	③ 溝 1秒	SD3410
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 外堤径18.6 脚部径15.6 番高1.8	⑥ 鉄置(外側降灰粘状)	
	⑦ 奈文研1966「第28・29・33次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」p.35~36		⑧ PL, 6 Ph. 15	
	⑨ 外堤・高台は杯蓋端部・杯B高台と類似。硬面の一部を強く凹めて海部とする。硬面使用痕著しい。			
110	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI ND50 660219 6AAI PF53 660128	③ 溝 1秒下 溝 1秒	SD3410 SD3410
	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 外堤径22.5 残高5.6	⑥ 正置(突帯上面重焼)	
	⑦ 奈文研1966「第27・32次平城概報」、奈文研1967「1967年度年報」、奈文研1981「平城宮本簡3」		⑧ PL, 6 Ph. 16	
	⑨ 2片接合。脚部5個残存。復原脚数22。外堤下部に深い凹線3条。窓部内面横ケズリ。外堤内腹い焼。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概 報・報 告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
111	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI ND50 660219	③ 溝 1秒下	SD3410
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径25.0 残高5.4	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 16	
	⑨ 復原脚数22。脚柱内面横ケズリ、外面削り残しあり。透孔側面深い面取り。脚台内端突出。貼付法明瞭。			
112	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI LG36 660110	③ 灰褐砂土	包含層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径25.7 残高6.1	⑥ 正置 (脚台上面・外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 16	
	⑨ 復原脚数21。脚柱内面横ケズリ、外面削り残し。脚台下端ナデ、内端突出。透孔側面切りママ。左京三条二坊に近い。			
113	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NC45 660207	③ 溝 2秒	SD4951
	④ 踏脚円面観B	⑤ 残高5.7	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 16	
	⑨ 脚柱 2本。復原脚数不明。脚柱内面横ケズリ。脚台下端ナデ、内端突出。透孔側面切りママ。貼付部大型。			
114	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI PF53 660128	③ 溝 砂 I	SD3410下層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 残高5.4	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 16	
	⑨ 脚柱 2本。脚柱内面横ケズリ。脚台下端ナデ、内端小さく突出。脚柱飾りの貼付法明瞭。			
115	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI ND45 660209	③ 溝 底	SD4951
	④ 踏脚円面観B	⑤ 残高6.0	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 16	
	⑨ 脚柱内面横ケズリ、外面削り残し。透孔側面切りママ。脚台内端小さく突出。貼付法明瞭。朱墨転用硯(杯蓋)併出。			
116	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NE46 660209	③ 溝 底	SD4951
	④ 踏脚円面観B	⑤ 残高5.7	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 16	
	⑨ 脚柱内面横ケズリ、外面削り残しあり。脚台下端ナデ、内端突出。貼付部大型、脚台小型。朱墨転用硯(杯蓋)併出。			
117	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI OM45 660209 6AAI OM58 660128	③ 溝 暗灰土 灰白砂土	SD4951 包含層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径39.9 残高10.1	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 16	
	⑨ 復原脚数32。脚柱内面横方向ケズリ、下端は横ケズリ。透孔面取り無し。脚台外面に凹線2条。118と同一個体。			
118	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI QK59 660129	③ 東西溝	SD4006
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径39.9 残高6.4	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 16	
	⑨ 復原脚数32。脚柱内面横方向ケズリ、下端のみ横ケズリ。透孔面取り無し。脚台外面に凹線2条。117と同一個体。			
119	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI CN57 660509	③ 黄褐色土	包含層
	④ 踏脚円面観A	⑤ 脚部径28.5 残高2.3	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 17	
	⑨ 復原脚数22。幅広で低い脚柱を板状脚台の外寄りに接合。脚台内面・下面ロクロケズリのちナデ。脚台上面凸凹あり。			
120	① 32・222次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI CJ54 660623 南迎官衙・式部省地区 6AAI AN44 910407	③ 溝 灰黑砂 瓦堆積	SD4100 包含層
	④ 踏脚円面観A	⑤ 脚部径19.8 残高3.8	⑥ 倒置 (脚台下外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 17	
	⑨ 復原脚数18。脚柱内面横ケズリ。脚台内面横ケズリ、外面ロクロナデ。下面に重焼痕(深16.8cm)。南面築造北側溝。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号	
				⑥ 燃成(窯痕跡)	⑧ PL, Ph
121	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI MI46 660216	③ 溝 2秒	SD4951	
	④ 跖脚円面鏡A	⑤ 残高2.5	⑥ 正置(脚台外側降灰)		⑧ Ph. 17
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				
	⑨ 復原脚数不明。幅広肩手の脚柱内面縫ヶ目。脚台内外面横ヶ目。下面ナデ。猿投窓底。				
122	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI OJ46 660208	③ 南北溝 1秒	SD4951	
	④ 跖脚円面鏡B	⑤ 突部径25.6 残高4.5	⑥ 正置(海部降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ PL, 6 Ph. 17
	⑨ 脚頭2箇削離。復原脚数22。外堤・視面ともに欠損。視部内面に補充粘土痕。左京三条一坊十六坪に近い地点。				
123	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI ND46 660209	③ 溝 底	SD4951	
	④ 跖脚円面鏡B	⑤ 脚部径23.4 残高6.4	⑥ 正置(外側降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ PL, 6 Ph. 17
	⑨ 脚1本残存。復原脚数18。短い脚柱の内側を面取り。脚台下面ケズり、内端小さく突出。SD3410との合流点出土。				
124	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NE45 660208	③ 溝 2秒	SD4951	
	④ 跖脚円面鏡B	⑤ 残高4.0	⑥ 正置(脚台上面降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ Ph. 17
	⑨ 復原脚数不明。低い脚柱。脚台内下面口クロケズリのちナデ。突端状に突出する外端で接地。SD3410との合流点出土。				
125	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI MI46 660216	③ 溝 2秒	SD4951	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.7	⑥ 倒置(内外面降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ Ph. 17
	⑨ 脚柱1本。脚柱外面に横スル線1条。内面ロクロナデ。脚柱四隅面取り。363と類似。複合口様状外堤の圓足円面鏡aか。猿投窓底。				
126	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NA46 660212	③ 溝 2秒	SD4951	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.7	⑥ 倒置(内面降灰状)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ Ph. 17
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。内面ロクロナデ。脚柱四隅面取り。脚柱細め。複合口様状外堤の圓足円面鏡aか。猿投窓底。				
127	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI OD46 660211	③ 溝 2秒	SD4951	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.7	⑥ 正置(外側降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ Ph. 17
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。脚端部外反。内外面ロクロナデ。				
128	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NC56 660219	③ 溝 1秒下	SD3410	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.8	⑥ 正置(外側降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ Ph. 17
	⑨ 長方形透孔。透孔下部に突帯1条。脚端部外反手。内外面ロクロナデ。胎土は107・139・324などに類似。				
129	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI ND48 660214	③ 溝 2秒	SD3410	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高2.0	⑥ 倒置(突帯下面降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ Ph. 17
	⑨ 脚端部の小片。長方形透孔。脚数不明。透孔下に突帯1条。溝2秒は溝SD3410の底。				
130	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NC49 660221	③ 溝 1秒	SD3410	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径12.2 残高3.4	⑥ 正置(脚部上・外側降灰)		
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』				⑧ Ph. 17
	⑨ 長方形透孔。復原脚数不明。外反する脚端上下肥厚。脚部上面に細突帯1条。内外面ロクロナデ。透孔鋪面切りママ。				

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概報・報告			⑧ PL, Ph
	⑨ 備 考			
131	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI LJ34 660204 6AAI LK34 650611	③ 暗褐色 第2次焼	包含層 SD3905B
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径32.0 残高3.3	⑥ 正置 (内外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 17	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数32。脚柱外面小さく面取り。脚下端外照上肥厚。左京三条二坊一坪近くの二条大路南無溝。			
132	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI CJ61 660727 6AAI CJ58 660901	③ 滑 2秒 滑 2秒	SD4100 SD4100
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径22.6 残高3.8	⑥ 倒置 (内面降灰軸状)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 17	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数29。脚端外反下に肥厚。内外面ロクロナデ。透孔下部に浅凹線2条。猿投窓底。奈良時代末の木簡伴出。			
133	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI OH46 660218	③ 滑 2秒	SD4951
	④ 圓足円面観 a?	⑤ 外径径19.2 残高4.0	⑥ 正置 (海部～外堤上面障灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 18	
	⑨ 長方形透孔。脚數不明。外堤側面にヘラ抜き唐草文、突唇2条。脚部にヘラ抜き樹木状文。左京三条一坊十六坪に近い。			
134	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NC49 660221	③ 滑 1秒	SD3410下層
	④ 圓足円面観 a	⑥ 外径径16.0 視面径11.0 残高3.3	⑥ 倒置 (視部内面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 18	
	⑨ 長方形透孔。脚數不明。1条の突帯の上下に横書き波状文。77と同一個体。同文様の71と類似。SD4951との合流部出土。			
135	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NE51 660223	③ 滑 2秒	SD3410底
	④ 圓足円面観	⑤ 外径径16.4 残高2.9	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 18	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数13? 透孔上部の突帯が段状をなす。脚柱中央に細沈窓1条。硯部平坦気味。外堤上端まで墨痕。			
136	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI OO46 660212	③ 滑 2秒	SD4951
	④ 圓足円面観 a	⑤ 外径径15.4 視面径10.8 残高2.5	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 18	
	⑨ 長方形透孔? 脚柱断面が三角形を呈する。復原脚数20。外堤下に大きな突帯2条。内外ロクロナデ。外堤内覆い焼。			
137	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NE46 660208	③ 南北溝 2秒	SD4951
	④ 圓足円面観 a	⑤ 外径径19.8 視面径16.0 残高2.4	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 18	
	⑨ 透孔の形状類似不明。視面平滑、復原面ロクロナデ。視面部圓盤状。細突唇1条。外堤内覆い焼。SD3410との合流部出土。			
138	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI ND51 660223	③ 滑 2秒	SD3410
	④ 調脚円面観 B?	⑤ 外径径26.3 視面径22.4 残高3.4	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 18	
	⑨ 脚數不明。突唇2条? 視面裏ヘラケズリ。視部外側の形状が調脚円面観Bの110に類似。視面部に墨痕。			
139	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI OO46 660216	③ 滑 2秒	SD4951
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径30.0 残高3.0	⑥ 正置 (透孔上面降灰)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 18	
	⑨ 長方形透孔。脚數不明。透孔下部に突帯1条。脚端部外側厚手。透孔内側面切りママ。107・324等に胎土・形状が類似。			
140	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AAI NC49 660223	③ 滑 2秒	SD3410
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径14.9 残高1.1	⑥ 倒置 (脚部内外面降灰軸状)	
	⑦ 余文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 6 Ph. 18	
	⑨ 繊長方形透孔。復原脚数19。脚端外反下肥厚。透孔下端に細沈窓1条。内外面ロクロナデ。猿投窓底。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 通構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕)	
	⑦ 概要・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
141	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AA1 NC49 660222	③ 滲 2秒	SD3410
	④ 風字模 (円頭)	⑤ 長径13.6 幅12.2 高さ2.5	⑥ 倒置 (窯部外面粘状)	
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 7 Ph. 19	
	⑨ 暗完形。外堀端部・側面へラケズり。側面中央部円形に磨耗。周縁部ナデ。8角柱形2残存。猿投塗装。			
142	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AA1 NC50 660219	③ 滲 1秒	SD3410
	④ 風字模(黒色土器A類)	⑤ 残存長19.0 残存幅15.0 高さ3.6	⑥ 伏せ燃し	
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 7 Ph. 19	
	⑨ 黒色土器A類。側頭部をくぐる。裏面に閉丸形脚の刺離痕。側縁部下半の弧状凹部のほか側縁端部全てへラケズり。全面へラミガキ。側面には凹凸が残る。側面内面表層のみ黒色。143・171と同質同工。			
143	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AA1 OL46 660210	③ 滲 1秒	SD4951
	④ 風字模(黒色土器A類)	⑤ 残存長7.5 残存幅5.0 残高2.0	⑥ 伏せ燃し	
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ Ph. 19	
	⑨ 視尻左半・脚刺離。外縁部へラケズり。視部全面へラミガキ。視部内面の表層のみ漆黒色。142・171と同質同工。			
144	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AA1 NC49 660222	③ 滲 2秒	SD3410
	④ 宝珠模	⑤ 残存長11.2 残存幅3.7 高さ3.5	⑥ 倒置 (窯部外面降灰粘状)	
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 7 Ph. 19	
	⑨ 异称: 八花模。側面は外堤まで型作り。宝珠の長輪方向に木目が通る。21・66とは異差。面取り方形の脚。猿投塗装。			
145	① 32次	② 宮城東南隅・二条大路地区 6AA1 NC49 660222	③ 滲 2秒	SD3410
	④ 円形模(輪状高台)	⑤ 外堤径18.9 高台径16.0 高さ2.5	⑥ 正置 (窯部外周にわざかな降灰)	
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 7 Ph. 19	
	⑨ 外堀覆面の全面に暗文状の密なヘラミガキ。高台端部内傾面。外堤端部丸い。側面に重焼痕(径16cm)。			
146	① 32次	② 宮城東南隅式部省・二条大路地区 6AA1 OD39 660212	③ 土器滴り	SX3913
	④ 円面模(無脚)	⑤ 視面径9.8 最大径16.9 高さ2.0	⑥ 倒置 (窯部裏面降灰)	
	⑦ 奈文研1966『第27・32次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』、奈文研1981『平城宮木簡3』		⑧ PL, 7 Ph. 19	
	⑨ 視面の外周に高い三角突起。外堀刺離。視部裏中央部をロクロナデ。外縁を丸くへラケズりし低い高台状の脚を作る。幅広い海部に重焼痕。遺構は報告に不掲載。左京三条二坊一坪に近い。			
147	① 33・70北次	② 内裏東外都地区 6AAD IK46・GO35 660607・710129	③ 灰褐土・黑拂	包含層
	④ 踏脚円面模 B	⑤ 外堤径24.4 視面径18.6 脚部径29.2 高さ10.3	⑥ 正置 (脚・突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1966『第28・29・33次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』 p.37~38		⑧ PL, 8 Ph. 20	
	⑨ 復原脚数23。視部下半内面横ケズリ。透孔内面側取り。踏台内面ロクロナデ。下面へラケズリ。206と同一個体。			
148	① 33次	② 内裏東外都地区 6AAD IH41 660705	③ 滲	SD4240
	④ 円形模	⑤ 残存長10.2 残存幅8.5 残高3.0	⑥ 倒置 (外面降灰)	
	⑦ 奈文研1966『第28・29・33次平城概報』、奈文研1967『1967年度年報』 p.37~38		⑧ PL, 7 Ph. 20	
	⑨ 円頭風字模? 番形の脚1残存。脚數不明。暗円形の外周に低い外堀。周縁外側へラケズリ。脚の長輪方向に使用痕。			
149	① 35次	② 内裏東外都東南隅地区 6AAE NF37 690401	③ 黄褐色土 II	包含層
	④ 踏脚円面模 B	⑤ 外堤径24.4 視面径18.4 残高3.7	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1970『1970年度年報』 p.34~35		⑧ PL, 8 Ph. 20	
	⑨ 脚數不明。視部内面有段ロクロナデ。視部下半内面横ケズリ。直立気味の外堤下に突帯2条。外堀上面に内側へ焼。			
150	① 35次	② 内裏東外都東南隅地区 6AAE NA37 690331 6AAE NB36 690421	③ 黄褐色土 II 黄褐色土 II	包含層 包含層
	④ 踏脚円面模 B	⑤ 踏脚径35.8 残高6.0	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1970『1970年度年報』 p.34~35		⑧ PL, 8 Ph. 20	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ。透孔内面大きく面取り。透孔脚台内面横ケズリのちナデ、下・外面ロクロナデ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
151	① 35次	② 内裏東外郭東南隅 (宮内省) 6AAE SN41 690507	③ 灰褐色	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径25.3 瓦面径19.8 残高3.0	⑥ 倒置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1970「1970年度年報」p.34~35		⑧ PL, 8 Ph. 20	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数19。複合口縁様の外堤。瓦面外周突帯状に隆起。瓦面の墨痕顯著。内外面ロクロナデ。			
152	① 35次	② 内裏東外郭東南隅 (宮内省) 6AAE KB32 690515	③ 灰色バラス	包含層
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径11.8 瓦面径7.2 残高2.4	⑥ 倒置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1970「1970年度年報」p.34~35		⑧ PL, 8 Ph. 20	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数18。窓部上面に高い内堤を設けて瓦面とする。細い外堤。内外面ロクロナデ。猿投窓座か。			
153	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AP19 661105	③ 黒褐色下層	包含層
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径25.6 残高1.8	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ PL, 8 Ph. 21	
	⑨ 復原脚数33。丸みのある三角形脚柱が脚台内側に補強粘土を足して密に貼り付け。脚台内外面ナデ、下面に板目压痕。			
154	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AA09 661121	③ 褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径16.2 瓦面径11.4 残高4.4	⑥ 倒置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ PL, 8 Ph. 21	
	⑨ 細長方形透孔。幅広脚柱2枚残存。復原脚数21。太い突帯2条。脚柱上の突帯間と外堤側面に竹管文。155と同一個体。			
155	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AA09 661121	③ 褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径16.4 瓦面径11.4 残高4.5	⑥ 倒置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ Ph. 21	
	⑨ 細長方形透孔。幅広脚柱3枚残存。復原脚数21。太い突帯2条。脚柱上の突帯間と外堤側面に竹管文。155と同一個体。			
156	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AC10 661101	③ 黒褐色下層	包含層
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径16.2 残高3.0	⑥ 倒置 (窓部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ PL, 8 Ph. 21	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数16。端部内傾面の外堤。海舟極めて薄い。幅広脚柱。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。			
157	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AD22 661110	③ 黒褐色下層	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径15.2 瓦面径12.6 脚部径18.4 残高6.7	⑥ 正置 (窓部上面~外側降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ PL, 8 Ph. 21	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数15。低高凸状外堤。透孔上下に突帯各1条。脚部内照、端部内傾小さく肥厚。透孔内側面取り。			
158	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AA09 661121	③ 褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.9	⑥ 正置 (外側降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ Ph. 21	
	⑨ 長方形透孔。透孔側面切りママ。脚柱内外面ロクロナデ。			
159	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AP03 661215	③ 黒褐色	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径15.8 瓦面径11.2 残高4.4	⑥ 倒置 (透孔上端・内面降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ PL, 8 Ph. 21	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数8。窓部下端が内屈し脚部に至る杯形窓に通じる形態。幅広脚柱。丸みのある瓦面中央にヒビ。外傾する窓外縁。内外面ロクロナデ。			
160	① 38次	② 内裏東方官衙 (磯倉官衙) 地区 6AAD AQ19 661107	③ 黒褐色下層	包含層
	④ 龍字磚	⑤ 残存5.0 残存幅5.5 残高2.9	⑥ 正置 (窓部上面降灰)	
	⑦ 奈文研1967「第36・38次平城概報」p.6~9、奈文研1967「1967年度年報」p.40~42		⑧ Ph. 21	
	⑨ 瓦尻左半の破片。6角形板状脚1枚残存。外堤の下部をヘラケズリ。白色粘土の縞が激しい胎土。147に類似、別個体。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 道構・層序	道構番号				
				④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	⑦ 水・報告	⑧ PL, Ph
備 考								
161	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAH TL46 670116	③ 暗褐色					包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径22.9 硬面径17.3 残高4.8	⑥ 正置 (突起上面降灰)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ PL, 8 Ph. 22					
	⑨ 牌頭 3 残存。復原脚数20。外堤端部内肥厚。外堤下に突帯 2 条。硬部下半内面横ケズり。外堤以内覆い焼。							
162	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAG DP30 661215	③ 床土					包含層
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径32.0 残高4.6	⑥ 倒置 (脚台下面降灰粘状)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ PL, 8 Ph. 22					
	⑨ 復原脚数28。脚台内寄りの円柱状脚柱を粘土で補強。脚台外縁ロクロケズり。他はロクロナデ。504・497・262と類似。							
163	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAG IG46 670306	③ 黄色土					包含層
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径33.8 残高3.7	⑥ 倒置 (脚台下面降灰)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ PL, 8 Ph. 22					
	⑨ 復原脚数27。幅広脚柱。内側に補強粘土。脚柱内面継ヘラケズり。脚台内外面ロクロナデ。硬部164・182と同一個体。							
164	① 39・43次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAG JA46 670224 東院西辺地区 6ALS TO44 680125	③ 混 2砂				SD4951	
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 外堤径23.6 硬面径18.7 残高4.7	⑥ 倒置 (視部内面降灰)				SD4951	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ Ph. 22					
	⑨ 復原脚数27。直立する高い外堤。硬部内面不定方向ナデ。他はロクロナデ。粘土質良好厚手。182・163と同一個体。							
165	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAG JS47 670217	③ 南北溝 1黒				SD5100上層	
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径28.4 硬面径22.0 残高3.5	⑥ 正置 (外堤～外面降灰)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ PL, 8 Ph. 22					
	⑨ 長方形透孔。復原脚数21。脚部内厚。外堤下に突帯 1 条。外堤～硬面に墨痕。白砂粒の多い粘土。106・166と粘土形状類似。							
166	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAG IG46 670306	③ 黄色砂				包含層	
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径28.3 硬面径22.1 残高4.7	⑥ 倒置 (硬面～外面降灰)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ PL, 8 Ph. 23					
	⑨ 長方形透孔。復原脚数20。脚部内厚。外堤～硬面に墨痕。粘土・形状が106と類似するが大型で別個体。							
167	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAG TT46 670119	③ 溝 1砂				SD4951	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.0	⑥ 倒置 (内面降灰粘状)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ Ph. 23					
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数不明。内外面ロクロナデ。透孔周囲切りママ。猿投窓座。							
168	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAG IH45 670308	③ 46溝 1砂				SD4951	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.7	⑥ 正置 (脚柱外面降灰)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ Ph. 23					
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数不明。内外面ロクロナデ。脚柱内面降灰。							
169	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAH RH33 670202	③ 穴					
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径21.2 残高3.9	⑥ 倒置 (脚柱内面降灰)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ Ph. 23					
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数24。脚柱中程に凹線 2 条。脚端外反。内外面ロクロナデ。外面に墨痕。底面には東院南方遺跡。							
170	① 39次	② 宮城東南入隅 (小子門) 地区 6AAH TE46 670125	③ 溝 1黒				SD4951	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.3	⑥ 倒置 (脚部内面降灰)					
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p. 3~6、奈文研1967『1967年度年報』p. 42~45		⑧ PL, 8 Ph. 23					
	⑨ 十字形透孔。復原脚数不明。脚柱中位に凹線 1 条。脚端に突帯 2 条。透孔内外面取り。							

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶磚の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成（窯痕跡）	⑦ PL, Ph
	⑦ 概要・報告	⑧	⑨ 備 考	
171	① 39次	② 宮城東南入隅（小子門）地区 6AAG JD46 670225	③ 潟 砂	SD4951
	④ 龍字模（黒色土器A類）	⑤ 残存長7.8 残存幅6.5 残高2.2	⑥	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p.3~6、奈文研1967『1967年度年報』p.42~45		⑧ PL, Ph. 23	
	⑨ 視尻右半片。6角柱脚。外堤側面へラケズリ、全面ヘラミガキ。内面表層漆黒色。142・143と同工。内外面に朱付着。			
172	① 40次	② 内裏東方官衙（跡積官衙）地区 6AAD BR20 670720	③ 床上	包含層
	④ 圓足円面鏡 B	⑤ 外堤径23.6 残高5.6	⑥ 倒置（内面降灰堆積）	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p.7~9、奈文研1968『1968年度年報』p.37		⑧ PL, Ph. 23	
	⑨ 復原脚数23。直立する高い外堤表面に8条の櫛引き波状文。外堤端部下に凹縫1条。脚頭上部に太い突帯1条。			
173	① 40次	② 内裏東方官衙（跡積官衙）地区 6AAD BS17 670731	③ 暗褐色 凹み	SK5406直上
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径14.4 視面径10.4 残高2.8	⑥ 倒置（観部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p.7~9、奈文研1968『1968年度年報』p.37		⑧ PL, Ph. 23	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数22。2条の突帯間に円形浮文。観部内面不定方向ナデ。海部に杯B高台漆塗。硬面に火拂き。			
174	① 40次	② 内裏東方官衙（跡積官衙）地区 6AAD BI24 670731	③ 東西溝	SD5480
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径16.8 視面径11.0 残高3.9	⑥ 倒置（観部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p.7~9、奈文研1968『1968年度年報』p.37		⑧ PL, Ph. 23	
	⑨ 長方形と三日月形透孔。數不明。突帯の上下に櫛引き波状文。透孔上部に細沈線2条。観部内面ロクロナデ。			
175	① 40次	② 内裏東方官衙（跡積官衙）地区 6AAD BS17 670731	③ 暗褐色 凹み	SK5406直上
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径13.0 視面径9.1 残高3.3	⑥ 正圓（外堤・突帯～外面降灰）	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p.7~9、奈文研1968『1968年度年報』p.37		⑧ PL, Ph. 24	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数15。広い海部。長い突帯。外堤上端内肥厚。透孔上部に細沈線1条。脚柱中央に細沈線1条。観部内面不定方向ナデ。遺構は官衙内庭の磚敷舗装を壊す寛寶物土坑。			
176	① 40次	② 内裏東方官衙（跡積官衙）地区 6AAD BS17 670805	③ 土坑	SK5406
	④ 龍字模	⑤ 復原長14.0 復原幅11.7 復原高3.5	⑥ 倒置（観部内面降灰堆積）	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p.7~9、奈文研1968『1968年度年報』p.37		⑧ PL, Ph. 24	
	⑨ 六角柱脚刺離。観面部腰作り。層状突帯で海部を仕切る。両周縁へラケズリ。観面縱方向ヘラミガキ。雲母黑並密底。			
177	① 40次	② 内裏東方官衙（跡積官衙）地区 6AAD BA03 670904	③ 潟 上（黄色土下）	SD4850
	④ 円形模（輪状高台）	⑤ 外堤径22.8 高台径19.8 高2.0	⑥ 倒置（観部内面降灰堆積）	
	⑦ 奈文研1967『第37・39・40・41次平城概報』p.7~9、奈文研1968『1968年度年報』p.37		⑧ PL, Ph. 24	
	⑨ 端部が内傾する皿B高台が付く円形模。丸い外堤端部。底部ロクロケズリ。観面ロクロナデ、中央部研磨、重焼痕。			
178	① 41次	② 第一次大極殿院地区東南隅 6ABE MG17 670817	③ 茶バラ	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外堤径13.2 残高2.7	⑥ 正圓（海部～外面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『平城報告XII』（学報40）tab.33~36、奈文研1968『1968年度年報』p.37~38		⑧ PL, Ph. 24	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数14。脚柱中央に細沈線1条。織い三角形突帯1条。高い外堤、広く平坦な海部。報告は表のみ。			
179	① 41次	② 第一次大極殿院地区東南隅 6ABR QF24 670913	③ 西南北北溝	SD5573
	④ 圓足円面鏡	⑤ 突帯径約24 残高4.5	⑥ 倒置（突帯下面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『平城報告XII』（学報40）遺物不掲載、奈文研1968『1968年度年報』p.37~38		⑧ Ph. 24	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数24。突帯径約24cm。脚柱中央に經沈線1条。全体に磨滅。遺構は不掲載。			
180	① 41次	② 第一次大極殿院地区東南隅 6ABE PE09 670904	③ 濑 1号	SD3715
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径15.5 我高4.0	⑥ 正圓（脚端上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『平城報告XII』（学報40）fig.90~92 PL.137~2、奈文研1968『1968年度年報』p.37~38		⑧ PL, Ph. 24	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数13。脚柱中央に經沈線1条、透孔中位横凹線1条。脚端外反肥厚。内外面ロクロナデ。83に類似。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
⑦ 概要・報告				
⑧ PL, Ph				
181	① 41次	② 第一次大坂殿院地区東南隅 6ABE PB09 670904	③ 滝 1秒	SD3715
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腳部径16.4 残高4.5	⑥ 正置か (窯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1982「平城報告X」(学報40) PL. 137-7 (写真のみ)、奈文研1968「1968年度年報」p. 37-38		⑧ Ph. 24	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数16。透孔下に突帯1条。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。外面に墨垂れ線4条。			
182	① 43次	② 東院西辺地区 6ALS WQ44 680123	③ 玉石溝	SD5645
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 外堤径23.6 窓面径18.7 残高10.1	⑥ 倒置 (窯内部面降灰)	
	⑦ 奈文研1968「1968年度年報」p. 38、奈文研1981「平城宮木簡3」		⑧ PL. 9 Ph. 24	
	⑨ 復原脚数27。窓面ヘラミガキ。窓部内面ナテ窓底惑。厚手軟質。163・164と同一個体。			
183	① 43次	② 東院西辺地区 6ALS VS39 671122	③ バラス土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 腳部径約28 残高4.2	⑥ 正置 (脚台上面降灰輪伏)	
	⑦ 奈文研1968「1968年度年報」p. 38、奈文研1981「平城宮木簡3」		⑧ Ph. 24	
	⑨ 脚柱1本。復原脚数24。脚柱内面横ケズり。脚台下・外面ケズリのちナデ。脚台内端突出。			
184	① 43次	② 東院西辺地区 6ALS WD42 671205	③ 南北斜溝 1秒	SD4951
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.6	⑥ 正置 (脚柱外側降灰)	
	⑦ 奈文研1968「1968年度年報」p. 38、奈文研1981「平城宮木簡3」		⑧ Ph. 24	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。脚数不明。内外面ロクロナデ。透孔内側面取り。			
185	① 43次	② 東院西辺地区 6ALS WC42 671215	③ 南北溝 3秒	SD4951
	④ 圓足円面鏡 c	⑤ 外堤径11.0 窓面径8.4 腳部径13.0 残高4.1	⑥ 正置 (脚部外側降灰)	
	⑦ 奈文研1968「1968年度年報」p. 38、奈文研1981「平城宮木簡3」		⑧ PL. 9 Ph. 25	
	⑨ 方形透孔。平坦な窓面を突帯で区分。低く小さな外堤。内溝気味の窓部下半に突帯1条。脚端外反。裏にも墨痕。			
186	① 43次	② 東院西辺地区 6ALS BQ39 671208	③ 南北溝 2秒	SD4951
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外堤径16.0 残高2.2	⑥ 倒置 (窓部内・外面降灰)	
	⑦ 奈文研1968「1968年度年報」p. 38、奈文研1981「平城宮木簡3」		⑧ PL. 9 Ph. 25	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数28。外堤下に突帯1条。内外面ロクロナデ。同地点から朱墨軸用鏡(杯A IV 内面)出土。			
187	① 43次	② 東院西辺地区 6ALS TG41 671204	③ 南北溝 2秒	SD4951
	④ 形象鏡 (鳥形鏡)	⑤ 残存長7.5 残有幅4.9 残高6.0	⑥ 正置 (外側面降灰)	
	⑦ 奈文研1968「1968年度年報」p. 38、奈文研1981「平城宮木簡3」		⑧ PL. 9 Ph. 25	
	⑨ 額部下半~右前脚部。内外側面・脚部面ヘラケズリ。円柱形脚。海部脚面上半に墨痕。海部降灰、窓面は蓋で覆う。			
188	① 44次	② 東院庭園地区 6ALG CJ59 680214	③ 滝 1秒	SD5785
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 腳部径26.8 残高4.0	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」(学報69)、奈文研1968「1968年度年報」p. 38~39		⑧ PL. 10 Ph. 25	
	⑨ 脚柱4本残存。復原脚数22。脚柱内面横ケズり、外面型抜き不調整。薄い脚台内面横ケズり、下面に粘土接合痕。			
189	① 44次	② 東院庭園地区 6ALG C162 680205	③ 床土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 窓面径22.8 窓面径17.0 残高3.4	⑥ 倒置 (窓部内面降灰輪伏)	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XVI」(学報69)、奈文研1968「1968年度年報」p. 38~39		⑧ PL. 10 Ph. 25	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数20。複合口縁状の外堤。窓面外周が突帯状に隆起。窓面に墨痕。内外面ロクロナデ。151と同形。			
190	① 44次	② 東院庭園地区 6ALG CJ61・62 680131	③ 床土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外堤径13.6 残高4.1	⑥ 倒置 (窓部内面降灰輪伏)	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」(学報69)、奈文研1968「1968年度年報」p. 38~39		⑧ PL. 10 Ph. 25	
	⑨ 方形・半円形透孔。透孔数不明。脚部肉厚。薄く低い外堤。内外面ロクロナデ。焼成温度高い。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶硯の種類	⑤ 法 量	⑥ 燒成（窯痕跡）	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
191	① 44次	② 東院庭園地区 6ALF FB56 680112	③ 灰褐土	包含層
	④ 圓足円面硯 c	⑤ 外径14.8 穏面径8.4 残高5.0	⑥ 倒置（硯部内面・突帯下面降灰）	
	⑦ 余文研2003『平城報告XV』（学報69）、余文研1969『1968年度年報』p. 38~39		⑧ PL, 10 Ph. 25	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數8。肉厚で高い外堤。脚部は肉薄。幅広い漆部。硯部内面ナナの他はロクロナナ。南邑窯裏。			
192	① 47次	② 西方官街（馬寮）地区 6ADD LB55 680611	③ 瓦溜	包含層
	④ 圓足円面硯 a	⑤ 外径16.0 穏面径13.3 残高3.9	⑥ 正置（硯面～外側降灰）	
	⑦ 余文研1985『平城報告XII』（学報42）fig. 48-807、余文研1969『1969年度年報』p. 34~37		⑧ PL, 10 Ph. 26	
	⑨ 長方形透孔。透孔数不明（僅少）。外縁が弧を描く緩面。細く短い外堤。太い三角形突帯1条。内外面ロクロナナ。			
193	① 48次	② 朝魚殿院地区 6AAC AR06 680712	③ 灰褐土	包含層
	④ 圓足円面硯 b	⑤ 外径23.8 残高3.4	⑥ 倒置（硯部内面・突帯下面降灰）	
	⑦ 余文研1968『第47・48・49次平城概報』p. 2~3、余文研1969『1969年度年報』p. 38~40		⑧ PL, 10 Ph. 26	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數23。小片で復原。透孔側面切りママ。内外面ロクロナナ。硯面外周に爪形痕。硯部外周に墨痕。			
194	① 50次	② 西方官街（馬寮）地区 6ADD MM46 680807	③ 朱土	包含層
	④ 圓足円面硯 a	⑤ 外径17.6 穏面径13.0 残高4.2	⑥ 正置（硯面～外側降灰）	
	⑦ 余文研1985『平城報告XIII』（学報42）p. 104 fig. 48-808、余文研1969『1969年度年報』p. 34~37		⑧ PL, 10 Ph. 26	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數12。硯面外斜面に小段。硯面降灰後摩滅。硯部内面ロクロナナ。透孔側面切りママ。			
195	① 64次	② 東面大庭地区 6ALC WD55 700511	③ 土坑 灰色粘土	
	④ 圓足円面硯 b	⑤ 外径9.4 脚部径11.6 器高3.7	⑥ 倒置（硯部内面・突帯下面降灰）	
	⑦ 余文研1970『第58~68次平城概報』p. 9、余文研1971『1971年度年報』p27		⑧ PL, 10 Ph. 26	
	⑨ 方形透孔。復原脚數4。脚柱に綴沈痕9条。脚端外反。硯部内面ロクロナナ。硯面中央ナナ。猿投窓座。			
196	① 70次	② 内裏東外郭地区 6AAE NS38 701216	③ 土坑	SK6800
	④ 踏脚円面硯 B	⑤ 外径約25 残高4.8	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 余文研1971『第69・70次平城概報』p. 6~10、余文研1971『1971年度年報』p. 30~31		⑧ Ph. 26	
	⑨ 復原脚數16。外傾する外堤の端部が尖る。凹縫2条による細突帯3条。透孔側面切りママ。内外面ロクロナナ。			
197	① 70次	② 内裏東外郭地区 6AAE NT39 701215	③ 灰褐土	包含層
	④ 踏脚円面硯 B	⑤ 突帯径約23 残高4.8	⑥ 正置（外側降灰）	
	⑦ 余文研1971『第69・70次平城概報』p. 6~10、余文研1971『1971年度年報』p. 30~31		⑧ Ph. 26	
	⑨ 脚頭2残存。脚頭上にシャープな突帯2条。透孔上端折り取る。硯部内面ロクロナナ。海部に覆い焼淡。			
198	① 70次	② 内裏東外郭地区 6AAE NS38 701216	③ 土坑	SK6800
	④ 踏脚円面硯 B	⑤ 外径約23 残高4.2	⑥ 正置か（外側降灰）	
	⑦ 余文研1971『第69・70次平城概報』p. 6~10、余文研1971『1971年度年報』p. 30~31		⑧ Ph. 26	
	⑨ 突帯2条、下に脚頭剥離痕。外堤上端平面、内肥厚。内外面ロクロナナ。			
199	① 70次	② 内裏東外郭地区 6AAE NS38 701210	③ 土坑	SK6800
	④ 踏脚円面硯 B	⑤ 突帯径約21 残高4.8	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 余文研1971『第69・70次平城概報』p. 6~10、余文研1971『1971年度年報』p. 30~31		⑧ Ph. 2	
	⑨ 脚頭剥離。外傾する外堤。凹縫による突帯2条。硯部外面カキメ状。内面ロクロナナ。透孔内側切りママ。海部覆い焼。			
200	① 70次	② 内裏東外郭地区 6AAE NT39 701215	③ 灰褐土	包含層
	④ 踏脚円面硯 B	⑤ 脚部径約28 残高5.5	⑥ 正置（脚台上面降灰）	
	⑦ 余文研1971『第69・70次平城概報』p. 6~10、余文研1971『1971年度年報』p. 30~31		⑧ PL, 10 Ph. 26	
	⑨ 復原脚數24。脚柱内面横ケズリ。脚台外面ロクロケズリ。脚台下面ロクロナナ。脚柱倒り剥離。脚台内厚、内端突出。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 烧成 (窯痕)	⑦ PL, Ph
概報・報告 備 考				
201	① 70両次	② 内裏東外郭地区 6AAE NS38 701216	③ 土坑	SK6800
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径23.5 残高4.9	⑥ 正置 (脚台上面陥灰軸状)	
	⑦ 奈文研1971「第69・70次平城概報」p. 6~10、奈文研1971「1971年度年報」p. 30~31		⑧ PL, 10 Ph. 27	
	⑨ 復原脚数17。脚柱内面横ケズリのちナデ。透孔側面切りママ。脚柱外面削り残しあり。脚台内端突出。			
202	① 70両次	② 内裏東外郭地区 6AAE NS38 701210	③ 土坑	SK6800
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径27.4 残高2.8	⑥ 正置 (脚台上面陥灰)	
	⑦ 奈文研1971「第69・70次平城概報」p. 6~10、奈文研1971「1971年度年報」p. 30~31		⑧ Ph. 27	
	⑨ 脚柱1本剝離。復原脚数17。脚台上面西ケズリ後ナデ。脚台内端突出。			
203	① 35・70両次	② 内裏東外郭地区 6AAE NS38・NQ46 701210・701215 6AAE NB38 690311	③ 土坑・褐色土 褐色土	SK6800・包含層 包含層
	④ 圆足円面鏡 a	⑤ 外堤径20.7 硬面径14.8 脚部径26.2 残高7.9	⑥ 正置 (外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1971「第69・70次平城概報」p. 6~10、奈文研1971「1971年度年報」p. 30~31		⑧ PL, 10 Ph. 27	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数9。脚柱に縦スジ2条と横凹線4条。硬面外周に突線。外堤下突帯2条。底部内面不定方向ナデ。他はロクロナデ。脚盤外反下厚肥。			
204	① 70両次	② 内裏東外郭地区 6AAE NS38 701219	③ 土坑	SK6800
	④ 圆足円面鏡 b	⑤ 外堤径17.2 硬面径11.0 残高4.6	⑥ 正置 (硬部内面・突帯下陥灰)	
	⑦ 奈文研1971「第69・70次平城概報」p. 6~10、奈文研1971「1971年度年報」p. 30~31		⑧ PL, 10 Ph. 27	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数21。硬部内面不定方向ナデ。透孔上端位置不揃い。縦長い突帯1条。外堤上端内肥厚、重競痕。			
205	① 70両次	② 内裏東外郭地区 6AAE MH36 701117	③ 床土	包含層
	④ 圆足円面鏡	⑤ 残高3.4	⑥ 正置 (外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1971「第69・70次平城概報」p. 6~10、奈文研1971「1971年度年報」p. 30~31		⑧ PL, 10 Ph. 27	
	⑨ 透孔不明。高い外堤。縦長い突帯。傾斜する広い海部。全面ロクロナデ。全面に塗沫。			
206	① 70両次	② 内裏東外郭地区 6AAE GQ43 710203	③ 褐色土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径25.8 残高5.5	⑥ 正置 (脚台上面陥灰軸状)	
	⑦ 奈文研1971「第69・70次平城概報」p. 6~10、奈文研1971「1971年度年報」p. 30~31		⑧ Ph. 27	
	⑨ 復原脚数23。透孔内側面取り。脚柱外面シャープなケズリ。脚台内面ロクロナデ。下面ヘラケズリ。147と同一個体。			
207	① 73次	② 内裏地区東南部 6AAQ BF08 710917	③ 東西南	SC640雨落溝
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約21 残高3.2	⑥ 正置 (脚台上面陥灰)	
	⑦ 奈文研1991「平城報告書XIII」(学報50) PL. 108-800、奈文研1972「1972年度年報」p. 31~35		⑧ PL, 10 Ph. 27	
	⑨ 短い脚柱。脚柱外側ナデ。脚台底・内面ロクロナデ。底面に火捺き。報告本文では6AAQ地区出土の323。			
208	① 73次	② 内裏地区東南部 6AAQ BG15 710907	③ 土坑	SK7659
	④ 圆足円面鏡	⑤ 外堤径12.7 残高4.3	⑥ 正置 (復面～突帯上陥灰軸状)	
	⑦ 奈文研1971「第71・72・73次平城概報」p. 12~13、奈文研1972「1972年度年報」p. 31~35		⑧ PL, 10 Ph. 27	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数9か。低い外堤。太い三角形突帯。脚盤外反。内外面ロクロナデ。220次425と接合。距離620m。			
209	① 77次	② 第一次大廈殿院(南門・東櫓)地区 6ABR HD35 730322	③ 柱抜穴	SB7802
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外堤径22.4 硬面径18.4 脚部径23.3 残高7.8	⑥ 正置 (外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1982「平城報告書XI」(学報40) fig. 90-1 PL. 137-1、奈文研1973「1973年度年報」p. 20~25		⑧ PL, 10 Ph. 27	
	⑨ 復原脚数23。薄い外堤、突帯3条。外反し折り返す脚盤に脚柱を貼付。脚盤端突出。脚柱内側横ケズリ。他はロクロナデ。外側全面に墨痕。SB7802柱抜穴出土土器は平城宮土器IVの様式資料。			
210	① 78両次	② 内裏地区東北部 6AAP LE09 730522	③ 土坑	SK7915
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外堤径24.7 硬面径20.0 残高4.7	⑥ 正置 (外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1991「平城報告書XIII」(学報50) PL. 108-802、奈文研1974「1974年度年報」p. 22~26		⑧ PL, 10 Ph. 28	
	⑨ 復原脚数26。外傾外堤上端に凹線。側面に太い突帯2条。脚頭円筒形。底部内側横ケズリ。透孔側面切りママ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成（窯痕跡）	
	⑦ 概 報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
211	① 78南・10次	② 内裏地区北東部 6AAP LJ10 730699 内裏北外郭地区 6AAO RF76 620820	③ 東西溝 溝	SD7863 SD487
	④ 跖脚円面観A	⑤ 外径約30 制部径約34 残高9.3	⑥ 正置（窓帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1991『平城報告XIII』（学報50）PL. 108-801、奈文研1974『1974年度年報』p. 22~26		⑧ PL. 10 Ph. 28	
	⑨ 復原脚数23。脚底に範の板目痕。覗面内面コクロナデ。外堤以内を覆い焼。猿投焼產か。奈良時代前半の暗渠放收構。			
212	① 78南次	② 内裏地区北東部 6AAP LO10 730601	③ 南北斜行溝	SD7872
	④ 八花形鏡	⑤ 復原径20.0 残存長12.3 残有幅10.5 残高2.0	⑥ 例置（現部裏面降灰状）	
	⑦ 奈文研1991『平城報告XIII』（学報50）PL. 108-804、奈文研1974『1974年度年報』p. 22~26		⑧ PL. 11 Ph. 28	
	⑨ 花文数18か。外堤外周と裏面カキメ状ナデ。覗面ヘラミガキ。裏面に重焼痕（径11cm）。裏面表裏に火勝れ。後期の暗渠。			
213	① 78北次	② 内裏地区北東部 6AAP KS07 740727	③ 床上	包含層
	④ 跖脚円面観B	⑤ 復原外堤径22.1 視面径16.4 残高4.2	⑥ 正置（脚頭上部降灰）	
	⑦ 奈文研1991『平城報告XIII』（学報50）本文p. 144~803に相当、奈文研1975『1975年度年報』p. 11~15		⑧ PL. 11 Ph. 28	
	⑨ 復原脚数21？ 脚頭直下に2条の縫接き直線文。上部に突宍2条。視面内部有段。側面下半焼ケズリ。他はロクロナデ。			
214	① 78北次	② 内裏地区北東部 6AAP KG04 740812	③ 繁地回廊西側柱 暗黄褐色土質	SC156
	④ 中空円面観	⑤ 残存長6.5 外径2.1×1.6 残高3.1	⑥ 正置（上面降灰）	
	⑦ 奈文研1991『平城報告XIII』（学報50）本文p. 144~803に相当、奈文研1975『1975年度年報』p. 11~15		⑧ PL. 11 Ph. 28	
	⑨ 把手（亀又は鳥頭）の一端。体部側上面に方形小孔。上面ナデ、下面は細かくヘラケズリ。先端部上面ヘラケズリ。			
215	① 81東次	② 第一次大振殿北方官衙地区 6ABO EI82 730620	③ 黄褐色土	包含層
	④ 圓足円面観a	⑤ 外堤径14.8 視面径10.2 残高3.4	⑥ 正置（外堤上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『平城報告XI』（学報40）tab. 33、奈文研1974『1974年度年報』p. 26~27		⑧ PL. 11 Ph. 28	
	⑨ 細長方形透孔。復原剥落16。肉厚の視部に薄い外堤。視面内部ロクロナデ。海部側面横筋。外堤下に三角突宍1条。			
216	① 81東次	② 第一次大振殿院北方官衙地区 6ABO EI71 730526	③ 砂褐土	包含層
	④ 黒字印（二面）	⑤ 残存長9.6 残存幅6.6 残高3.0	⑥ 例置（外堤側面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『平城報告XI』（学報40）tab. 33~19、奈文研1974『1974年度年報』p. 26~27		⑧ PL. 11 Ph. 29	
	⑨ 研磨中央部の破片。脚の有無形状不明。高い突宍で視面を2分する。視面以外ヘラケズリ調整。視表面に重焼痕。			
217	① 81中次	② 第一次大振殿院北方官衙地区 6ABO PL36 740117	③ 黄褐色土	包含層
	④ 圓足円面観a	⑤ 外堤径7.9 視面径4.5 残高3.1	⑥ 例置（視部内部・外堤外面降灰状）	
	⑦ 奈文研1982『平城報告XI』（学報40）fig. 90~18、奈文研1975『1975年度年報』p. 15~16		⑧ PL. 11 Ph. 29	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数18。視面外縁丸い。外堤外面に拂描き波状文。外堤上端内傾面。外堤上に重焼痕。猿投窓窓。			
218	① 87南次	② 第一次大振殿院地区 6ABP BR13 760209	③ 東西溝（古）	SD6607
	④ 跖脚円面観B?	⑤ 外堤径22.9 視面径18.2 残高3.8	⑥ 正置（外堤上端～外堤側面降灰）	
	⑦ 奈文研1976『平城報告XI』（学報40）tab. 33~9、奈文研1976『1976年度年報』p. 19~25		⑧ PL. 11 Ph. 29	
	⑨ 外堤外反、丸い端部。外堤下に細孔彌による突宍3条。視部内部ナデ、他はロクロナデ。外堤上端に重焼痕。 脚頭不明で報告では圓足円面観。遺構・伴出土器は奈良時代來。			
219	① 87北次	② 第一次大振殿院地区 6ABC UG06 750817	③ 黄褐色土（暗褐色土下）	包含層
	④ 跖脚円面観?	⑤ 残高3.4	⑥ 例置（突宍下面降灰）	
	⑦ 奈文研1976『平城報告XI』（学報40）不掲載、奈文研1976『1976年度年報』p. 19~25		⑧ Ph. 29	
	⑨ 透孔不明。太い三角形突宍2条。視面部剥離。視部内部ナデ。			
220	① 91次	② 内裏西外郭地区 6ABE GR36 740829	③ 砂褐含鐵	包含層
	④ 跖脚円面観B	⑤ 突宍径23.0 残高4.2	⑥ 正置（外側側面降灰状）	
	⑦ 奈文研1975『昭和49年度平城概報』p. 10~16、奈文研1975『1975年度年報』p. 16~18		⑧ PL. 11 Ph. 29	
	⑨ 復原脚数24。視部内部横筋ケズリ。他はロクロナデ。突宍2条の下が細い点は210・213・221などと類似。全体に薄手。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 烧成・窯痕	
	⑦ 捷報・報告			⑧ PL, Ph
	⑨ 備 考			
221	① 91次	② 内裏西外郭地区 6ABE QU39 740902	③ 暗掲土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 窄帯径23.0 残高3.9	⑥ 正置（外面部灰）	
	⑦ 奈文研1975「昭和49年度平城概報」p. 10~16、奈文研1975「1975年度年報」p. 16~18			⑧ Ph. 29
	⑨ 復原脚数24。復元内側面鏡ケズリ、両手で下の突部が細い点が210・213・220などと類似。			
222	① 91次	② 内裏西外郭地区 6ABE GS38 740902	③ 暗掲土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高6.8	⑥ 正置（外面部灰）	
	⑦ 奈文研1975「昭和49年度平城概報」p. 10~16、奈文研1975「1975年度年報」p. 16~18			⑧ Ph. 29
	⑨ 太い脚柱 1本。脚柱内側面鏡ケズリのちクロクロナダ、外側面削り残しあり。脚柱下面ケズリ。透孔内側面取り。			
223	① 91次	② 内裏西外郭地区 6ABE GN35 740828	③ 灰掲砂質土(付穴か) SB8160硬石抜取	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外堤径20.7 残高4.4	⑥ 正置（外面部灰）	
	⑦ 奈文研1975「昭和49年度平城概報」p. 10~16、奈文研1975「1975年度年報」p. 16~18			⑧ PL, 11 Ph. 29
	⑨ 凸字形透孔？ 外傾する外堤。細長い突部2条。突部間に沿着物。視部内面ナダ。奈良時代後半の内裏西外郭南門。			
224	① 91次	② 内裏西外郭地区 6ABE GB41 740918	③ 黄掲土	包含層
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径13.1 窄帯径9.0 残高3.3	⑥ 正置（模面～外面部灰）	
	⑦ 奈文研1975「昭和49年度平城概報」p. 10~16、奈文研1975「1975年度年報」p. 16~18			⑧ PL, 11 Ph. 29
	⑨ 長方形透孔。復原脚数6。透孔周際と脚中央2条の縦沈継。太く低い外堤。復元内面不定方向ナダ。視面の降灰明瞭。			
225	① 91次	② 内裏西外郭地区 6ABE GG42 740925	③ 濃 紫掲砂土	
	④ 形象鏡（鳥形鏡）	⑤ 頭幅3.4 残高5.6	⑥ 正置（後頭部厚灰輪状）	
	⑦ 奈文研1975「昭和49年度平城概報」p. 10~16、奈文研1975「1975年度年報」p. 16~18			⑧ PL, 11 Ph. 30
	⑨ 中央の頭部。全面ヘラケズリ整形、脣部に沈継。目は外径0.7cmの竹管文押捺。『概報』等に出土の記載無し。			
226	① 99次	② 東院庭園地区 6ALF HE59 761204	③ 井戸 青灰砂質土 SE8454	
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径18.0 窄帯径11.2 残高3.5	⑥ 倒置（視部内面・突部下面灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）不掲載、奈文研1977「1977年度年報」p.24~28			⑧ PL, 11 Ph. 30
	⑨ 長方形透孔。復原脚数18。外堤と細い突部の貼り付け明確。外堤外縁まで墨痕。視部内面に付着物。還拵は奈良時代後半。			
227	① 99次	② 東院庭園地区 6ALF HB56 761111	③ 暗掲砂土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径約23 残高4.4	⑥ 正置（外面部灰）	
	⑦ 奈文研1977「昭和51年度平城概報」p. 12~21、奈文研1977「1977年度年報」p. 24~28			⑧ Ph. 30
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24。脚端外肥厚。透孔下に段状突脊1条。内外面ロクナダ。透孔側面切りママ。陶邑窯産？			
228	① 99次	② 東院庭園地区 6ALF JE72 761101	③ 黑灰砂質土 SG5800B	
	④ 亂字鏡(黒色土器B類)	⑤ 残存長10.4 残存幅8.3 残高3.4	⑥	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）PL. 92-818、奈文研1977「1977年度年報」p. 24~28			⑧ PL, 12 Ph. 30
	⑨ 瓦尻右半部。8角柱脚 1本残存。外縁内沿いに沈継。視面表裏とも中央横方向、周縁横方向へのラミガキ。平安時代初期。			
229	① 99次	② 東院庭園地区 6ALF KM56 761203	③ 細灰粘土	包含層
	④ 亂字鏡(黒色土器B類)	⑤ 残存長6.6 残存幅4.2 残高4.0	⑥	
	⑦ 奈文研1977「昭和51年度平城概報」p. 12~21、奈文研1977「1977年度年報」p. 24~28			⑧ PL, 12 Ph. 30
	⑨ 瓦頭左半部片。内外面縦方向へラミガキ。SD3236関連の可能性。報告不掲載。平安時代初期。			
230	① 99次	② 東院庭園地区 6ALF KS69 761111	③ 東院畦 黑灰砂質土 SG5800B	
	④ 亂字鏡(黒色土器B類)	⑤ 残存長4.7 残存幅3.3 器厚0.5	⑥	
	⑦ 奈文研1977「昭和51年度平城概報」p. 12~21、奈文研1977「1977年度年報」p. 24~28			⑧ Ph. 30
	⑨ 瓦頭部片。瓦頭表裏中央横方向、周縁部横方向へラミガキ。瓦頭磨耗有り。231と同一個体。報告不掲載。平安時代初期。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号					
				④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕)	⑦ 概報・報告	⑧ PL, Ph	
⑨ 備 考									
231	① 99次	② 東院庭園地区 6ALF KS69 761111	③ 東西溝 黒褐砂質土	SG58008	④ 馬蹄印(墨色土器B類)	⑤ 残存長7.8 残存幅5.1 残高1.7	⑥	⑦ 余文研2003『平城報告XV』(学報69) p. 92-819、奈文研1977『1977年度年報』p. 24~28	⑧ PL, 12 Ph. 30
								⑨ 視戻右半片。格状筒形板状脚1本残存。周縁部扁平。窓面横方向、窓面縱方向へラミガキ。230と同一個体。	
232	① 104次	② 東院西辺地区 6ALR TA46 770812	③ 暗灰粘質土	包含層	④ 踏脚円面鏡A	⑤ 外径径28.6 窓面徑23.2 残高5.0	⑥ 正置 (窓上面降灰)	⑦ 余文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ PL, 12 Ph. 31
								⑨ 後原脚数19。脚頭3脚離。突帯2条。窓面裏ナテのうち心円当共痕。他はクロナナ。外堤以内に墨痕。窓面暖い焼。	
233	① 104次	② 東院西辺地区 6ALR TQ45 770825	③ 南北溝 黄褐色砂	SD3236A	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 脚部径18.4 残高5.0	⑥ 正置 (外面降灰)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ PL, 12 Ph. 31
								⑨ 後原脚数16。脚柱内面横ケズリ、脚台内下面ロクロナナ。透穴内側面取り。脚台内端突出。平城宮土器V併出。	
234	① 101次	② 東院西辺地区 6ALR SI41 770823	③ 断続バラス	包含層	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外径径25.2 残高3.5	⑥ 正置 (海部・突帯上面降灰)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ PL, 12 Ph. 31
								⑨ 長方形透孔。復原脚数33。透孔上部に小三角形突帯1条。外堤外版気味。内外面ロクロナナ。265と同一個体か。	
235	① 104次	② 東院西辺地区 6ALR SF46 770927	③ 南北溝 暗灰粘質土	SD3236C	④ 圓足円面鏡	⑤ 外径径17.8 残高1.5	⑥ 倒置 (外堤下面降灰)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ Ph. 31
								⑨ 端部幅広く外肥厚の外堤部片。復原脚数30。透孔両側の切り込みあり。内外面ロクロナナ。平城宮土器V併出。	
236	① 104次	② 東院西辺地区 6ALR UD46 770907	③ 喰掘バラス	包含層	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外径径6.9 窓面徑3.4 残高1.4	⑥ 倒置 (復原内面降灰)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ PL, 12 Ph. 31
								⑨ 細長方形透孔。復原脚数21。低い視面脚、幅広い海部。端部内傾脚の低い外堤。視面・海部墨痕。猪投窓底。	
237	① 101次	② 東院西辺地区 6ALR SE46 770902	③ 南北溝	SD3236	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.7	⑥ 倒置 (脚柱内面降灰軸)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ Ph. 31
								⑨ 細長方形透孔。脚數不明。内外面ロクロナナ。透孔両面切りママ。透孔下端に細沈線1条。猪投窓底。	
238	① 104次	② 東院西辺地区 6ALR TQ46 770912	③ 溝 暗灰褐色バラス	SD3236B	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径18.8 残高4.3	⑥ 倒置 (脚柱内面降灰)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ PL, 12 Ph. 31
								⑨ 細長方形透孔。復原脚数12。脚柱に縱沈線2条、横凹線4条。脚端外反肥厚。内外面ロクロナナ。透孔両面切りママ。239と同一個体。伴出土器は余良時代後半~末。	
239	① 104次	② 東院西辺地区 6ALR SC46 771005	③ Cライン駐 SD3236B	SD3236B	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径18.4 残高4.3	⑥ 倒置 (脚柱内面降灰)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 9~18、奈文研1978『1978年度年報』p. 23~25	⑧ Ph. 31
								⑨ 細長方形透孔。復原脚数12。脚柱に縱沈線2条、横凹線4条。脚端外反肥厚。内外面ロクロナナ。透孔両面切りママ。238と同一個体。伴出土器は余良時代後半~末。	
240	① 107次	② 佐紀池東京官衙地区 6ABN WA07 771201	③ 東西溝 灰色砂層	SD8850	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 脚部径26.2 残高5.0	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	⑦ 奈文研1978『昭和52年度平城概報』p. 21~22、奈文研1978『1978年度年報』p. 21~22	⑧ Ph. 31
								⑨ 復原脚数17。脚柱内面横ケズリ。脚台外面ロクロケズリ、下面ナナ、外縁突出。透孔内側面切りママ。241と同一個体。	

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 連構・層序	連構番号
			④ 陶器の種類	⑤ 法 量
241	① 107次	② 佐紀池東京官衙地区 6ABN WA06・07 771201	③ 東西溝 灰色砂層	SD8850
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径26.2 残高5.0	⑥ 正置（脚台上面降灰）	⑧ PL. Ph.
	⑦ 奈文研1978「昭和52年度平城概報」p. 21~22、奈文研1978「1978年度年報」p. 21~22			⑨ PL. 12 Ph. 31
	⑨ 復原脚数17。脚柱内面横けケズリ。脚台外面ロクロケズリ、下面ナデ、外端突出。透孔内側面切りママ。240と同一個体。			
242	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IM67 780823	③ 黄褐色土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径25.0 残高5.7	⑥ 正置（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）PL. 92-517、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑧ PL. 12 Ph. 31
	⑨ 復原脚数19。脚柱内面ロクロケズリ。脚台下面ロクロナデ、内端突出。脚台上面に貼付時の指頭压痕。			
243	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IN65 781005	③ 黄褐色土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B ?	⑤ 外堤径21.6 硬面径17.5 残高2.4	⑥ 正置（外面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）PL. 92-515、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑨ Ph. 32
	⑨ 外堤下突帶2条。硯舎内部に段ロクロナデ。硯舎内面横けケズリ。244と同一個体か。報告では圓足円面鏡。			
244	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IN65 781027	③ 灰褐色砂質土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B ?	⑤ 硬面径17.5 残高3.0	⑥ 正置（外面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）PL. 92-515、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑧ PL. 12 Ph. 32
	⑨ 外堤下突帶2条。硯舎内部に段ロクロナデ。硯舎内面横けケズリ。243と同一個体か。報告では圓足円面鏡。			
245	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IK62 780824	③ 灰色パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径16.2 残高1.7	⑥ 正置（脚柱外面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）PL. 92-514、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑧ PL. 12 Ph. 32
	⑨ 長方形透孔。復原脚数15。外外面ロクロナデ。脚端外反肥厚。透孔側面切りママ。			
246	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IK66 780725	③ 上土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高6.1	⑥ 侧置（脚部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 3~10、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑨ Ph. 32
	⑨ 長方形透孔。幅数不明。外外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。透孔下端に細沈線1条。猿投窟痕。			
247	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IH63 780822	③ 灰色パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡 c	⑤ 外堤径15.6 硬面径10.8 残高6.5	⑥ 侧置（硯舎内面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）PL. 92-513、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑧ PL. 12 Ph. 33
	⑨ 長方形透孔。復原脚数12。硯舎内部ロクロナデ。脚柱中央に縦沈線1条。透孔側面切りママ。249・454と同一。			
248	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IK62 780906	③ 黄褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高7.3	⑥ 侧置（脚部内外面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑧ Ph. 33
	⑨ 長方形透孔。幅広脚柱中央に縦沈線1条。透孔側面切りママ。透孔下端細沈線1条。247と類似、脚高・厚さが異なる。			
249	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IL62 780906	③ 黄褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.4	⑥ 侧置（脚部内外面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）PL. 92-513、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑧ Ph. 33
	⑨ 長方形透孔。復原脚数12。幅広の脚柱中央に縦沈線1条。透孔側面切りママ。247・454と同一個体。			
250	① 110次	② 東院庭園地区 6ALF IH70 780927	③ 灰褐色土	包含層
	④ 形象鏡（鳥形鏡）	⑤ 復原長25.0 復原幅14.2 復原高14.0	⑥ 正置（尾羽上面降灰）	
	⑦ 奈文研2003「平城報告XV」（学報69）、奈文研1979「1979年度年報」p. 21~23			⑧ PL. 13 Ph. 32
	⑨ 左体側～左脚と尾羽部残存。脚部下に突帯で海部を区切る。裏面と丸い体側部外へラミガキ。体部表級方向ケズリ。折疊んだ脚の付け根に円孔。68・69のような蓋を被せて焼成。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成（窯痕跡）	
	⑦ 検報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
251	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AQ45 780524	③ 柱穴上面 灰褐色土	SB8960柱採取穴
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径約23 瓦面径約18 残高3.3	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 33	
	⑨ 硬部内面有段ロクロナデ、内面下半横ケズリ。外堀下部に突帯1条残存。外堀以内覆い焼。SB8960は奈良時代末の遺物。			
252	① 111次	② 中央区新堂院東地区 6ABH AS46 780524 6ABG BD46 780524	③ 柱痕跡 黒褐色土 暗灰パラス	SB8960 包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径22.2 瓦面径18.0 残高4.7	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ PL. 13 Ph. 33	
	⑨ 復原脚數23。瓦面ロクロケズリ。復部内面有段ロクロナデ、内面下半横ケズリ。透孔面部切りママ。253・254と類似。			
253	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AR43 780502	③ 暗灰パラス	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径22.6 瓦面径17.5 残高5.7	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 33	
	⑨ 復原脚數24。硬部内面有段、ロクロナデ、内面下半横ケズリ。252と類似、瓦面高が異なる。254と同一個体。			
254	① 111次	② 中央区新堂院東地区 6ABH AQ40 780504	③ 黄褐色土上面	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径22.6 瓦面径17.5 残高5.2	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 33	
	⑨ 復原脚數24。硬部内面有段ロクロナデ。下半横ケズリ。252と類似、瓦面高が異なる。253と同一個体。			
255	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AP42 780502	③ 暗灰パラス	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径24.4 瓦面径18.4 残高4.9	⑥ 正置（外面降灰）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ PL. 13 Ph. 34	
	⑨ 復原脚數21。外堀端面肥厚。突帯2条。円柱形脚頭。外堀内面まで墨痕。硬部内面有段ロクロナデ、下半横ケズリ。			
256	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AP39 780504	③ 黄褐色土上面	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約27 瓦高5.1	⑥ 正置（脚台上面降灰状）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 34	
	⑨ 復原脚數不明。脚柱内面横ケズリ。脚台下・外覆ロクロナデ。脚台内縫突出。脚柱外面に貼付時の指痕残る。			
257	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AQ43 780523	③ 灰褐色土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約27 瓦高5.2	⑥ 正置（脚台上面降灰状）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 34	
	⑨ 復原脚數不明。脚柱内面横ケズリ。貼付脚柱跡内縫ケズリ。脚台下面～外側面ケズリ後ナデ。脚台内縫突出。透孔面部切りママ。脚柱外縫はほとんどケズリが及ばない。透孔面部切りママ。			
258	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AR45 780501	③ 暗灰パラス	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約27 瓦高5.4	⑥ 正置（脚台上面降灰状）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 34	
	⑨ 脚柱内面横ケズリ。脚台下面～外側面ケズリ後ナデ。脚台内縫突出。透孔面部切りママ。259と同一個体。			
259	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AZ 780628	③	
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約28 瓦高4.8	⑥ 正置（脚台上面降灰状）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 34	
	⑨ 脚柱内面横ケズリ。脚台下面～外側面ケズリ後ナデ。脚台内縫突出。透孔面部切りママ。258と同一個体。			
260	① 111次	② 中央区朝堂院東地区 6ABH AS36 780620	③ 大土坑	SK8948
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚内端径23.8 残高5.2	⑥ 正置（外面降灰）	
	⑦ 奈文研1979「昭和53年度平城概報」p. 11~16、奈文研1979「1979年度年報」p. 23~25		⑧ PL. 13 Ph. 34	
	⑨ 復原脚數21。脚柱内面横ケズリ。脚台下面内縫突出、下面ロクロナデ。脚柱外縫前リ残しの指痕。透孔面部切りママ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕跡)	
	⑦ 概要・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
261	① 111次	② 中央区朝天院東地区 6ABU AJ54 780413	③ 床土	包含層
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外径径約21 残高3.5	⑥ 正置(海部～外面降灰)	
	⑦ 奈文研1979『昭和53年度平城概報』p. 11～16、奈文研1979『1979年度年報』p. 23～25		⑧ Ph. 34	
	⑨ 4弁花形透孔か。復原透孔数不明。外堤端部内肥厚。肉厚の脚部に細い受け口状突起1条。硯部内面ロクロナナ後不定方向ナデ。296と同一個体か。348・360・435と形状類似、焼成法異なる。			
262	① 122次	② 壬生門・二条大路地区 6AAY CP15 800526	③ SD1250 賞灰砂	SD1250
	④ 圓脚円面鏡 A	⑤ 脚部径約27 残高2.9	⑥ 侧置(脚台下面降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 3～10、奈文研1981『1981年度年報』p. 14～16		⑧ PL, 13 Ph. 34	
	⑨ 復原脚数24? 福広脚台と円柱状脚柱。脚台内面ケズりのちナデ。脚柱内面ケズケズリ。平城宮土器Ⅱ～Ⅲ。			
263	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QF33 810126	③ 咲褐土	包含層
	④ 圓脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約32 残高4.6	⑥ 正置(脚台上・外面降灰)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 復原脚数24。逆台形内厚脚台、内端突出。脚台外面ロクロケズリ。脚台下面～脚柱内面ロクロナデ。脚柱外面削り残し。			
264	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QH36 810221	③ SD3109 砂層	SD3109
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外径径13.3 研磨面9.4 残高2.4	⑥ 侧置(硯部内面降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ PL, 13 Ph. 35	
	⑨ 長長方形透孔。復原脚数19。外堤端部内幅、内側に肥厚。硯面・硯部内面ロクロナデ。透孔上端は折り取り。猿掛痕。SD3109は奈良時代後半の東院西界隈地東南落溝であるとともに基幹水路、砂層は発見時。			
265	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QA32 810122	③ 黄褐パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 突帯径21.2 残高3.4	⑥ 正置(海部～外面降灰)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数36。脚柱狭いが23と同一個体か。外縁気味外堤。円錐2条による突起1条。内外面ロクロナデ。			
266	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QP38 810323	③ 亂泥粗パラス	SD13 (SD9688)
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径12.2 残高0.9	⑥ 侧置(外面降灰)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ PL, 13 Ph. 35	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数11。脚部外反、端部は蓋口縁状に垂下。内外面ロクロナデ。平城宮土器Ⅲ・Ⅳ併出。			
267	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QV27 810602	③ 土坑④	SK9608?
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高8.1	⑥ 侧置(硯部内面、突起下面降灰)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ PL, 13 Ph. 35	
	⑨ 長方形透孔。脚内端に重焼痕。突起1条。内外面ロクロナデ。透孔内外側面取り。胎土精良。268・269と同一。278・279と類似。			
268	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QV27 810602	③ 土坑④	SK9608?
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高6.8	⑥ 侧置(硯部内面、突起下面降灰)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 長方形透孔。突起1条。内外面ロクロナデ。透孔内外側面取り。胎土精良。267・268と同一。278・279と類似。			
269	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QV27 810602	③ 土坑④	SK9608?
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高2.2	⑥ 侧置(硯部内面、突起下面降灰)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 長方形透孔。透孔下に突起1条。内外面ロクロナデ。透孔内外側面取り。胎土精良。267・268と同一。278・279と類似。			
270	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QS38 810319	③ 南北大溝 砂層	SD13 (SD9688)
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高2.8	⑥ 正置(外面降灰)	
	⑦ 奈文研1981『昭和55年度平城概報』p. 15～24、奈文研1981『1981年度年報』p. 17～22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数48? 脚端肥厚。内外面ロクロナデ。透孔内側面取り。271と同一。平城宮土器Ⅲ・Ⅳ併出。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成（窯痕跡）	
	⑦ 概 報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 雷 考			
271	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QK37 810213	③ 暗褐土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径約30 残高7.6	⑥ 正置（外面降灰）	
	⑦ 奈文研1981「昭和55年度平城概報」p. 15~24、奈文研1981「1981年度年報」p. 17~22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數48? 脚端内外肥厚。外外面ロクロナデ。透孔内傾面取り。270と同一個体。			
272	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QF39 810126	③ 灰色砂	包含層
	④ 圓足円面鏡 A?	⑤ 脚部径約30 残高2.5	⑥ 倒置（脚台下面わずかに降灰）	
	⑦ 奈文研1981「昭和55年度平城概報」p. 15~24、奈文研1981「1981年度年報」p. 17~22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 内寄りに脚柱を貼付けた薄い脚台部片。上下面ともケズリのちナデ。外側面ナア。			
273	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QU35・36 810122	③ 土坑 東西焼上上 SD35 (SD9604) 上	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径14.8 残高3.3	⑥ 倒置（脚部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1981「昭和55年度平城概報」p. 15~24、奈文研1981「1981年度年報」p. 17~22		⑧ PL. 13 Ph. 35	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數23。脚端外反、上下肥厚。外外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。猿投窓座。最上層に相当。			
274	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QK35 810209	③ 燐土溝 SD30 (SD9649)	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.8	⑥ 倒置（内面降灰輪状）	
	⑦ 奈文研1981「昭和55年度平城概報」p. 15~24、奈文研1981「1981年度年報」p. 17~22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。白上入り微密な埴土。SD9649は墳地南落溝SD3109に流入する溝。			
275	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QU32 810204	③ 東西石組溝 SD35 (SD9604)	
	④ 円形鏡?	⑤ 長径6.0 短径4.5 厚さ0.7	⑥ 倒置（複部裏面降灰輪状）	
	⑦ 奈文研1981「昭和55年度平城概報」p. 15~24、奈文研1981「1981年度年報」p. 17~22		⑧ Ph. 35	
	⑨ 裏面部片。裏面ロクロナデのち縫合のミガキ。裏面の調整・縫合裏面の降灰が輪状高台円形鏡177と酷似。猿投窓座。			
276	① 128次	② 東院西辺地区 6ALR QO37~39 810210	③ 排水溝 包含層	
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 復原外堀徑26.1 長径18.2 短径10.1 残高1.4	⑥ 倒置（外側面降灰）	
	⑦ 奈文研1981「昭和55年度平城概報」p. 15~24、奈文研1981「1981年度年報」p. 17~22		⑧ PL. 14 Ph. 36	
	⑨ 高台側斜面。裏面外周沿いの幅2.8cmの浅い溝が海部。裏面ナデのちミガキ。側面ケズリのちナデ。裏面外周重焼痕。280と酷似。断面図は两者を合成して作成。			
277	① 129次	② 内裏北方官衙東北隅地区 6AAA GN42 810502	③ 大土坑 黄褐粘土 SK9880	
	④ 円面鏡	⑤ 砕面徑19.0 残高1.2	⑥ 倒置（複部裏面降灰）	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 3~9、奈文研1982「1982年度年報」p. 32~34		⑧ Ph. 36	
	⑨ 大型鏡面部片。内面ロクロナデ後ナデ。裏面ロクロナデ、火影れ。造構は天平宝字年間~奈良時代末の皇后宮殿に関連。			
278	① 129次	② 内裏北方官衙東北隅地区 6AAA GF33 810526	③ 南北大溝 棕褐色パラス SD27008	
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 脚部徑24.5 残高5.6	⑥ 倒置（脚部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 3~9、奈文研1982「1982年度年報」p. 32~34		⑧ Ph. 36	
	⑨ 脚柱1本。長方形造孔。復原脚數21。透孔下に突帯1条。279と同一個体。267・268と類似、脚外側の面取りが異なる。			
279	① 129次	② 内裏北方官衙東北隅地区 6AAA GF33 810525 6AAA GD34 810529	③ 南北大溝 棕褐色質土 SD27008 南北大溝 暗褐色質土 SD27008	
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堀徑18.2 砕面徑14.9 脚部徑24.5 畦高10.8	⑥ 倒置（脚部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 3~9、奈文研1982「1982年度年報」p. 32~34		⑧ PL. 13 Ph. 36	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數21。透孔下に突帯各1条。透孔側面外無面取り。278と同一個体。267・268と類似。			
280	① 129次	② 内裏北方官衙東北隅地区 6AAA GN34 810527	③ 灰褐色質土 (SD2700)	
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 外堀徑26.0 脚部徑22.4 残高2.6	⑥ 倒置（複部裏面降灰）	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 3~9、奈文研1982「1982年度年報」p. 32~34		⑧ PL. 14 Ph. 36	
	⑨ 裏面側斜面。裏面ケズリ後ミガキ。底面ロクロナデ。高台内側面。高台内重焼痕（径18cm）。276と酷似、断面図合成。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 踏脚の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 稽報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
281	① 133次	② 南面西門（若大曾門）地区 6ACU ER47 811211	③ 東西大溝 灰色砂	SD1250
	④ 踏脚円面鏡	⑤ 脚部径15.2 残高1.5	⑥ 鉄置（内面降灰鉢状）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 23~28、奈文研1982『1982年度年報』p. 9~10		⑧ Ph. 36	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24。透孔下端に沈線1条。脚端外反肥厚。内外面クロナナ。施設窓座。			
282	① 136~140次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AP47 821013	③ SD3715 堀土	SD3715
		6ABJ・6ABJ BH49・BC51・AU51 820309-820316-820316	東西溝 景上層・南北溝	SD10707-10325B
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径25.5 硬面径20.1 脚部径30.8 残高10.0	⑥ 正面（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ PL. 14 Ph. 37	
	⑨ 復原脚数26。硯部内面無段。外傾する外縁。短い脚柱内面横ケズリ、内側面取り。脚台内溝突出。284・286とは別個体。			
283	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AQ50 820225	③ 北東柱穴	
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 硬面径22.0 残高4.2	⑥ 正面（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ Ph. 37	
	⑨ 硯面ケズリ後ナナ。内面クロナナ。外傾下に凹線による突帯2条。硯部内面の横ケズリ等から踏脚円面鏡Bと推定。			
284	① 136~171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AU47 820311	③ SD3715溝上層	SD3715
		6ABJ AT45 860122	黄灰粘質土	
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径27.5 硬面径21.5 残高5.9	⑥ 正面（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982・1986『昭和56・60年度平城概報』、奈文研1982・1986『1982・1986年度年報』		⑧ Ph. 37	
	⑨ 復原脚数21。硯面表クロナナ、同心円压痕。282は個體、別個体。286と同一個体か。図は286と合成。			
285	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AL47・AJ47 821227	③ 球状埴物周辺	SX10703
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径31.0 残高5.4	⑥ 正面（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ PL. 14 Ph. 37	
	⑨ 復原脚数25。脚柱内面横ケズリ。外面削り残し。脚台底・外面ケズリのちナナ。304・305・318等と類似。			
286	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AP46 820422	③ SD3715 木肩溜り	SD3715
		6ABJ AQ46・AQ47 820304-820329	SD3715 堀土・排水溝	SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径27.5 硬面径21.6 脚部径27.9 器高11.1	⑥ 正面（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ PL. 14 Ph. 37	
	⑨ 復原脚数21。外傾外縁下突帯2条。脚柱内面横ケズリ、内側面取り。282は別個体。284と同一個体か。図は284と合成。			
287	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AU51 820316	③ 南北大溝 上層	SD10325
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径23.0 硬面径17.2 残高5.2	⑥ 正面（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ PL. 15 Ph. 38	
	⑨ 制頭大瓦。復原脚数22。萬手の外縁外縁。硯部内面無段クロナナ。凹線による突帯3条。硯面に細かなキズと墨斑。平城宮土器IV~V、須恵器表内面使用朱墨転用現件出。308と接合。321と同一個体。			
288	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AQ47 820329	③ SD3715 堀土	SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約25 残高5.5	⑥ 正面（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ Ph. 38	
	⑨ 復原脚数21か。脚柱内面横ケズリ。透孔内側面取り。脚台外底面ケズリ。脚柱飾輪面底ケズリ。286・284と同一か。			
289	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AR47 820311	③ 斜行溝	SD10325
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約28 残高4.6	⑥ 正面（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ Ph. 38	
	⑨ 脚柱内面横ケズリ後クロナナ。脚台内・底・外縁クロナナ。内溝突出。透孔内側面取り。脚柱外縁削り残しあり。			
290	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABV BH169 820219	③ 南北溝	SD10400
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約28 残高4.6	⑥ 正面（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1982『昭和56年度平城概報』p. 29~33、奈文研1982『1982年度年報』p. 36~37		⑧ Ph. 38	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面・脚台外縁クロナナ。透孔内側面取り。脚柱の縁を削り残す。平城宮土器IV~V伴出。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
291	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AT51 820316	③ 南北大溝 灰土	SD3715
	④ 踏脚円面鏡A	⑤ 脚部径28.6 残高3.8	⑥ 正置 (脚台上外面降灰)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 14 Ph. 38	
	⑨ 復原脚数26。薄板状脚台に幅広三角形脚柱を斜めに貼り付ける。脚柱内面縫ナナ。脚台内外面ロクロナナ。透孔側面はケズリ。358・359と同一個体か。図は3者で合成。幅広脚柱は尾北猿岡112号窯に類似。			
292	① 136・140次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AK47 821026 6ABJ BD47 820312	③ SD3715 伴状族設内灰色パラス (SX10703) SD3715 灰土	SD3715
	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 脚部径29.2 残高5.4	⑥ 正置 (外面降灰状)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 14 Ph. 38	
	⑨ 復原脚数24。脚柱・脚台外面ロクロケズリ後ナナ。透孔側面切りママ。脚台内端に直焼素。異次段間接合、距離約21m。			
293	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AS47 820309	③ 灰褐色土	包含層
	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 外縫径17.6 窓面径13.8 残高4.8	⑥ 正置 (突堤上面わすかに降灰)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 15 Ph. 38	
	⑨ 小型踏脚鏡。復原脚数10。直立する外縫端四線状。復元内外面ロクロナナ。窓面中央へ凹む。外堤下に太い突帯2条。			
294	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ BG47 820327	③ SD3715 灰色砂礫	SD3715
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外縫径21.2 窓面径16.8 残高3.0	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 15 Ph. 38	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数48。外堤下突帯3条。透孔は最下突帯に及ぶ。窓面内外面ロクロナナ。295と同一個体。			
295	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ BA47 820329	③ SD3715 灰色砂礫	SD3715
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 脚部径22.0 残高2.9	⑥ 正置 (脚外面降灰)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 15 Ph. 38	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数48。内沟する脚部。透孔下突帯1条。内外面ロクロナナ。透孔側面切りママ。294と同一個体。			
296	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AU50 820302	③ 灰褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡b	⑤ 外縫径21.4 残高3.9	⑥ 正置 (外堤・突帯外面降灰)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 15 Ph. 39	
	⑨ 上端丸い広底2種、四弁花形か。復原8組か。外堤上端内肥厚。肉厚の脚部上端に受け口状突起。窓部内面ロクロナナ、中央部不定方向ナナ。261・348・360・435と類似。			
297	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ BB50 820221	③ 灰褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外縫径13.3 窓面径10.0 残高4.2	⑥ 正置 (窓面～外面降灰)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 15 Ph. 39	
	⑨ 凸字形透孔。復原透孔数4。透孔上端に沈線1条。杯B高台形の低い外堤。外開きの脚部。窓部内面中央肥厚。			
298	① 136次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AR47 820311	③ 斜行溝	SD10325
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外縫径9.4 窓面径6.1 残高2.8	⑥ 正置 (外面降灰・外堤部複い施)	
	⑦ 奈文研1982「昭和56年度平城概報」p. 29~33、奈文研1982「1982年度年報」p. 36~37		⑧ PL. 15 Ph. 39	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数16。窓面肉厚。幅広い海部。窓部内面ロクロナナ。細い外堤の上端四線状内肥厚。			
299	① 139次	② 内裏北方官衙地区・東大溝 6AAA TM43 820526	③ 灰褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡a	⑤ 外縫径12.8 窓面径8.0 残高1.6	⑥ 倒置 (窓部内面降灰状)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 1~7、奈文研1983「1983年度年報」p. 19~20		⑧ PL. 15 Ph. 39	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数23。窓面肉厚。広い海部。外堤割離。角ぼった突帯。内外面ロクロナナ。			
300	① 139次	② 内裏北方官衙地区・東大溝 6AAA FR35 820701	③ 木構下 灰砂	SX10560
	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 残高5.3	⑥ 正置 (脚外面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 1~7、奈文研1983「1983年度年報」p. 19~20		⑧ Ph. 40	
	⑨ 脚柱1本。復原脚数不明。脚台内端突出。脚柱内面横ケズリのちロクロナナ。301・302とは別個体。遺構は奈良時代中頃。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法量	⑥ 焼成(窯痕)	⑧ PL, Ph
概報・報告				
⑨ 備 考				
301	① 139・172次	② 内裏北方官衙地区・東大溝 6AAB SL35 820612 6AAC JN27 861001	③ SD2700 灰砂② SD2700 灰白パラス	SD2700 SD2700
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径27.6 残高7.5	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 1~7、奈文研1983「1983年度年報」p. 19~20		⑧ Ph. 40	
	⑨ 其次2片接合。復原脚数24。脚内面横ケズリ。脚台下・外面部ロクロナデ平坦。透孔面面切りマツ。302と同一個体。			
302	① 139次	② 内裏北方官衙地区・東大溝 6AAB SO35 820615	③ SD2700 灰砂②	SD2700
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径24.6 残高5.6	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 1~7、奈文研1983「1983年度年報」p. 19~20		⑧ PL, 15 Ph. 40	
	⑨ 脚柱5本残存。復原脚数24。脚内面横ケズリ。脚台下・外面部ロクロナデ平坦。透孔面面切りマツ。301と同一個体。			
303	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AL46 821020	③ 暗灰塗地所	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外垂径23.0 瓦面径18.0 脚部径27.0 器高10.0	⑥ 正置(外堤以下の外面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL, 15 Ph. 40	
	⑨ 復原脚数22。脚柱内面横ケズリ。脚台部ロクロナデ。脚部内面ロクロナデ、有段。304等と酷似。282より高い脚柱。			
304	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AJ47 821020 6ABI AK47 821025ほか	③ 明灰塗地層 SD3715 暗灰パラス	包含層 SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外垂径24.2 瓦面径19.2 脚部径28.4 器高10.0	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL, 15 Ph. 40	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ、脚台外側面ケズリ後ナデ。脚部内面ロクロナデ有段。315・285も同一個体か。			
305	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AK47・AL47 821026 6ABI BI47 821026	③ 特状施設内灰褐色パラス SD3715 暗灰砂	SD3715 SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外垂径24.2 瓦面径19.2 脚部径28.4 器高10.0	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 40	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ、脚台下・外面部ケズリのちナデ。脚部内面ロクロナデ有段。304等と同一個体。			
306	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AU49 821115	③ 大土坑暗灰褐色パラス	SK10713
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 突帝径約23 残高5.1	⑥ 正置(外堤外側・突帝上面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 復原脚数22。薄い外堤の端部丸い。硯面部外側凹線2条で突希3条。硯面部内面横ケズリ。			
307	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AJ47 821020	③ 明灰塗地層	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 突帝径約24 残高4.2	⑥ 正置(外堤・外側面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 脚頭2個。硯面部のみ。復原脚数24。硯面部内面有段。復縫内面横ケズリ。外縫細突帯と沈縫。海部ナデ調整。			
308	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABU AM56 821109	③ 床土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高4.6	⑥ 正置(突帝上面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 復原脚数22。外側する薄い外堤。肉厚複縫部内面ロクロナデ。無段。凹縫による突希3条。287と接合。321と同一個体。			
309	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AM48・AM49 821016	③ 東西溝A最上層黑灰褐砂質土	SD10705
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径23.8 残高4.0	⑥ 倒置?(脚台下面～外側面)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 復原脚数16。脚柱内面縫ケズリ。脚台ロクロナデ。外面上部に細沈縫。310と同一。脚台下面に重焼板。平城宮土器Ⅲ下限。			
310	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AL49 821022	③ 南北溝Dパラス層	SD10706
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径23.4 残高3.7	⑥ 侧置?(脚台下面～外側面)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL, 15 Ph. 41	
	⑨ 復原脚数16。脚柱外側面縫ケズリ。脚柱内面縫ケズリのち脚台内外ロクロナデ。外面上部に細沈縫。309と同一個体。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶鏡の種類	⑤ 法 量	⑥ 燃成 (窯痕跡)	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
311	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AI47 821026	③ SD3715 疊灰砂	SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高5.0	⑥ 正置 (脚部外面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 復原脚数不明。脚柱内面横ケズり、脚台外面ケズりのち脚台内外下面ロクロナデ。			
312	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI BH48 821022	③ 東西溝C 疊灰拖粘質土	
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径27.0 残高5.1	⑥ 正置 (脚台外面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 復原脚数21。脚柱扁平。側面シャープな削り。脚柱内面~脚台ロクロナデ。脚台内肥厚。314・313と同一個体。			
313	① 140・136次	② 中央区朝堂院地区 6ABI BH47 821020 6ABJ AS47 820330	③ 明灰整地層 SD3715 疊灰砂層	包含層 SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径27.0 残高5.4	⑥ 正置 (脚台外面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL. 15 Ph. 41	
	⑨ 復原脚数21。脚柱扁平。脚柱内面~脚台ロクロナデ。脚台内肥厚。312・313と同一個体。			
314	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI BH47 821020	③ 明灰整地層	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約27 残高4.6	⑥ 正置 (脚台外面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 復原脚数21。扁平な脚柱。脚柱内面~脚台ロクロナデ。脚台内肥厚。312・313と同一個体。SD3715中層より新。			
315	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AH47 821117	③ SD3715C	SD3715C
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約27 残高6.1	⑥ 正置 (脚台上面降灰軸状)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 脚数不明。脚柱内面横ケズり、脚台外面ケズりのち脚台内外下面ロクロナデ。脚柱飾り貼付明晰。304等と類似。			
316	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AR51 821012	③ 南北溝 最下層	SD10325B
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外堤径22.0 視面径17.4 残高5.0	⑥ 正置 (海部~外側面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL. 16 Ph. 41	
	⑨ 復原脚数24。薄く短い外堤の上端凹縁状。硯側面細突脊2条。硯側内面横ケズり後ナデ。平城宮土器V件出。			
317	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AM50 820918	③ 東西溝下層埋空	SD10705A
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外堤径約27 残高4.9	⑥ 正置 (突堤上面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 41	
	⑨ 復原脚数24。外堤外堤。脚柱上に幅い突脊2条。硯内部内面無段、ロクロナデか。284と類似。平城宮土器Ⅲが下限。			
318	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AJ47 821018	③ 東西溝 B 墓土	SD10712
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外堤径21.5 残高4.5	⑥ 正置 (脚頭上面・外面降灰軸状)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL. 16 Ph. 41	
	⑨ 復原脚数22。硯部内面有段ロクロナデ。硯側内面横ケズリ。低い外堤端部外肥厚。細突脊2条。水平で広い海部。			
319	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AK47 821025	③ 伴状施設内灰褐バラス	SD3715
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径26.7 視面径20.6 脚部径30.4 器高9.7	⑥ 正置 (外面降灰、外堤内面肥い焼)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL. 16 Ph. 42	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数23。外傾外堤と複開き脚部。硯部内面有段ロクロナデ。透孔上下に突帯各2条。透孔内側面取り。			
320	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AR47-AO47 821016-821008	③ SD3715C 墓土・磧層	SD3715C
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 突帯径約23 残高3.8	⑥ 正置 (外面降灰)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL. 16 Ph. 42	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数32。外傾外堤と複開き脚部。硯部内面有段ロクロナデ。透孔上に凹縁突脊3条。透孔内側面取り。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕跡)	
	⑦ 概要・報告			⑧ PL, Ph
	⑨ 備 考			
321	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABH AL52 820717	③ 南北溝 上層	SD10325
	④ 跳脚円面鏡B	⑤ 鏡面径17.2 残高3.1	⑥ 正置(突唇上面薄仄)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ Ph. 42	
	⑨ 特徴不明。鏡面に細かな擦痕。鏡部内面ロクロナデ。287・308と同一個体。奈良時代末の土器件出。			
322	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABH AF47 821117	③ 床上	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径37.0 残高4.3	⑥ 正置(脚部外側薄仄、脚内側火捺)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL, 16 Ph. 42	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数22。透孔下突帯1条。脚端ロクロナデ、内面不定ナデ。外側は縱方向ナデ。透孔内側面取り。342・350・431等と形態、胎土が類似。			
323	① 140次	② 中央区朝堂院地区 6ABI AL48 821021 6ABI AJ49 821921	③ 東西溝灰褐色質土 南北溝明茶褐粘土	SD10705A SD10706
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堀径27.8 鏡面径22.0 腿部径35.0 器高7.8	⑥ 正置(鏡面~外側薄仄)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 12~28、奈文研1983「1983年度年報」p. 21~22		⑧ PL, 16 Ph. 42	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数41。脚部内厚で縦間さ。透孔上下に突帯各1条。鏡部内面不定方向ナデ。他はロクロナデ。			
324	① 146次	② 中央区朝堂院南方池地区 6ABW AQ51 830124	③ 黄褐色土	包含層
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堀径20.1 残高2.2	⑥ 正置(外堀上端~外側降伏)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度平城概報」p. 29~35、奈文研1983「1983年度年報」p. 24		⑧ PL, 16 Ph. 42	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24?。横部内面不定方向ナデ。鏡面外側に爪形痕。鏡面中央部隆起気味、海部の広い圓足円面鏡 aか。広い脚柱に小字形ヘラガキ文様。362と同一文様、同一個体。SD3765は平城宮土器 I ~ II。			
325	① 146次	② 中央区朝堂院南方池地区 6ABW BI54 830216	③ 南北大溝灰褐色土 II	SD3765
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径27.0 残高5.5	⑥ 正置(外側降伏)	
	⑦ 奈文研1983「昭和57年度概報」p. 29~35、奈文研1983「1983年度年報」p. 24		⑧ PL, 16 Ph. 42	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数28。脚幅広狭あり。透孔内側面取り。脚端内湾に肥厚。脚上に突帯1条。内外面ロクロナデ。			
326	① 153次	② 第二次大極殿跡地区・東面回廊 6AAAR EJ02 840125	③ 粘土	包含層
	④ 跳脚円面鏡 A	⑤ 腿部径約28 残高2.8	⑥ 倒置(脚台下面降伏状)	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 5~26、奈文研1984「1984年度年報」p. 22~25		⑧ Ph. 43	
	⑨ 円柱状脚柱 2本残存。復原脚数24?。脚台外・下面ケズリのちナデ、上・内面ナデ。			
327	① 153次	② 第二次大極殿跡地区・東面回廊 6AAAR FF08 831208	③ 砂土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 鏡面径19.0 残高3.8	⑥ 正置(鏡面薄仄)	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 5~26、奈文研1984「1984年度年報」p. 22~25		⑧ PL, 16 Ph. 43	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数32。脚部肉厚。鏡面外側に小突筋。海部・外堀・突帯が一連刻離。貼付前は縫隙状ロクロナデ。			
328	① 154次	② 内裏東方官衛地区 6AAD FF27 840301	③ SD2700 灰砂	SD2700上層
	④ 跳脚円面鏡 A	⑤ 残高3.7	⑥ 正置(外側薄仄)	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ Ph. 43	
	⑨ 脚柱部片。内面破けず。下面ケズリ。外側シャープな縫隙ケズリ。側面小さく面取り。42・121・372と類似。			
329	① 154次	② 内裏東方官衛地区 6AAD GF07 840313	③ SD3410 西脇地山食込	SD3410
	④ 跳脚円面鏡 B	⑤ 外堀径21.8 残高6.7	⑥ 倒置(鏡部内面・外堀外側降伏状)	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 16 Ph. 43	
	⑨ 復原脚数22。高い外堀の外面上に2条一组の円錐。内外面ロクロナデ。猿投窓座。脚部330と同一個体か。			
330	① 154次	② 内裏東方官衛地区 6AAD CE15 840215	③ 灰褐色土	包含層
	④ 跳脚円面鏡 B	⑤ 残高3.5	⑥ 倒置(脚台下面全面降伏状)	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ Ph. 43	
	⑨ 脚柱を外反、上に細身の脚柱飾りを貼付け、間を抉り透孔とする。内面ロクロナデ。鏡部329と同一個体か。猿投窓座。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶硯の種類	⑤ 法 量	⑥ 燃成（窯痕跡）	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
331	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD CE19 840128	③ 茶灰土	包含層
	④ 圓足円面硯 b	⑤ 外堀径11.6 視面径7.8 残高2.1	⑥ 倒置（硯部内面降灰状）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 16 Ph. 43	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數18。外堤上端は内側する輕広い面。硯部内面ロクロナデ。中央部ナデ。硯面ロクロナデ。			
332	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD FF28 840128	③ 喜沃沙	包含層
	④ 圓足円面硯 b	⑤ 外堀径10.8 残高4.5	⑥ 正置（外面・突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 16 Ph. 43	
	⑨ 顶部の丸い長方形透孔。復原脚數8。外堤上端内面肥厚。幅広脚柱にヘラ書き文。内外面ロクロナデ。			
333	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD FI27 840221 6AAD FJ28 840221	③ SD2700 黒灰粘土	SD2700巻上層
	④ 圓足円面硯 b	⑤ 外堀径14.0 残高4.7	⑥ 正置（外堀外端・突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 16 Ph. 43	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數4。幅広脚柱中央にヘラ書き樹木状文。外堤下に三角形突奇。透孔下四線1条。内外面ロクロナデ。			
334	① 154・259次	② 内裏東方官衙地区 6AAD CH05 840314 6AAD CR15 950829	③ 東西溝灰色パラス 東西人溝灰褐色砂	SD3410 SD11600
	④ 圓足円面硯 a	⑤ 外堀径11.5 視面径9.2 残高1.6	⑥ 倒置（硯部内面降灰状）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 16 Ph. 44	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數32。硯部内面厚表面平坦。低い外堀上端外肥厚。幅広突帶。硯面に火摩さ。 異次の2片接合。距離30m。下流の96(29次)と同一個体。彼我の距離約360m。			
335	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD CH05 840314	③ SD3410 灰色パラス	SD3410
	④ 圓足円面硯 a	⑤ 突帯外径13.2 砧面径8.0 残高1.9	⑥ 倒置（硯部内面・突帯下面降灰）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 16 Ph. 44	
	⑨ 繊長方形透孔。剥落25。硯面のみ肉厚。硯面外端に凹門。外堤制縫。硯部内面ロクロナデ。			
336	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD FG28 840228	③ SD2700 木屑層	SD2700
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径約21 残高3.7	⑥ 倒置（突帯下面降灰）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ Ph. 44	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數24。透孔下部に三角形突奇1条。脚下面外肥厚。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。			
337	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD FG27 840227	③ SD2700 鵜飼砂	SD2700
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径26.8 残高4.8	⑥ 正置（脚柱外面降灰）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 17 Ph. 44	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數20。脚柱上・中に沈継各2条、下に四線1条。脚端外反。透孔側面切りママ。393と同一個体？			
338	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD CH06 840314	③ SD3410 灰色パラス	SD3410
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径21.4 残高3.2	⑥ 倒置（脚端内面降灰）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 17 Ph. 44	
	⑨ 長方形と宝珠形透孔。復原脚數12？ 外曲脚部端上下外肥厚。透孔下部に縮沈継1条。内外面ロクロナデ。58・62に類似。			
339	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD FI27 840204	③ SD2700 鵜飼	SD2700
	④ 中空円面硯	⑤ 砧部最大径14.2 視面径12.4 残高2.4	⑥ 倒置？（外側面降灰）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 17 Ph. 44	
	⑨ 硫面ロクロケズリ。硯部内面ロクロナデ、窓内舞状に中央が凹む。硯部外側面は弧を描く。硯面外周に重焼痕。			
340	① 154次	② 内裏東方官衙地区 6AAD CH07 840313	③ SD3410 西岸灰褐粘土	SD3410
	④ 形象模（鳥形硯）	⑤ 残存長11.5 残存幅9.2 厚厚0.9	⑥ 正置（上面降灰状）	
	⑦ 奈文研1984「昭和58年度概報」p. 27~33、奈文研1984「1984年度年報」p. 26		⑧ PL, 17 Ph. 44	
	⑨ 上面に篦書き波状文で羽毛を表現。側縁・抉り部ヘラケズリ。内面縦方向ヘラケズリ、中央ナデ。箇投窓。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 観察・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
341	① 155次	② 壬生門東方・南面大垣東端地区 6AAI DH51 840518	③ SD3410柱 線状粘土	SD3410
	④ 踏脚円面観B	⑤ 腳部径27.8 残高5.5	⑥ 正置 (脚台上面・外側薄灰)	
	⑦ 奈文研1985『昭和59年度平城概報』p. 3~12、奈文研1985『1985年度年報』p. 21~22		⑧ PL, 17 Ph. 44	
	⑨ 復原脚数20。長めの脚柱内面横ケズリ。脚台下・外側ケズリのちナデ。透孔面切りママ。			
342	① 155次	② 壬生門東方・南面大垣東端地区 6AAI 東南区 840409	③ 灰褐色質土	包含層
	④ 圓足円面観	⑤ 腳部径約29 残高4.4	⑥ 正置 (外側・突唇上面降灰)	
	⑦ 奈文研1985『昭和59年度平城概報』p. 3~12、奈文研1985『1985年度年報』p. 21~22		⑧ Ph. 44	
	⑨ 長方形透孔。透孔下に突帯1条。脚端ロクロナデ、内面不定ナデ、外側は縱方向ナデ。透孔内側面取り。322等と類似。			
343	① 155次	② 壬生門東方・南面大垣東端地区 6AAI DJ32 840511	③ SD9481 中層灰褐色質土	SD4100B
	④ 踏脚円面観B	⑤ 外堤径24.2 硬面径18.3 腳部径28.6 器高9.4	⑥ 正置 (外堤下面以下降灰)	
	⑦ 奈文研1985『昭和59年度平城概報』p. 3~12、奈文研1985『1985年度年報』p. 21~22		⑧ PL, 17 Ph. 45	
	⑨ 復原脚数21。肉厚外堀下に三角突帯1条。観部内面・脚柱内面ロクロナデ。脚台内・下面横ケズリ、外側ケズリ後ナデ。折り重ねた脚柱上に飾りを貼り付け、ケズリで整える。外堤外面に覆瓦 (口径25cmの蓋)。奈良時代中頃。			
344	① 161次	② 東区朝堂院地区・東第一堂 6AAS AT08 841102	③ 床土	包含層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 腳部径約28 残高5.2	⑥ 正置 (脚柱外側薄灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 20~38、奈文研1985『1985年度年報』p. 24~26		⑧ Ph. 45	
	⑨ 復原脚数24? 外側脚台に飾りを貼付。脚台外端突出。脚柱内面～脚台外側ロクロケズリ後ナデ。脚柱外側面削り残し。			
345	① 165次	② 壬生門東方・南面大垣・式部省地区 6AAV BC18 850509	③ 灰褐色質土	包含層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 外堤径26.0 硬面径20.5 残高4.9	⑥ 正置 (外側降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 3~13、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ PL, 17 Ph. 45	
	⑨ 復原脚数26。外側外堀の端部巴綱状。観部裏面不定方向ナデ。内面ロクロナデ+横ケズリ。346と同一個体。			
346	① 165次	② 壬生門東方・南面大垣・式部省地区 6AAI DM92 850518	③ 下瓦層	包含層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 宽管径約25 硬面径20.5 残高4.1	⑥ 正置 (外側・突唇上面降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 3~13、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ Ph. 45	
	⑨ 復原脚数26。観部裏面不定方向ナデ。観部内面ロクロナデ+横ケズリ。下部に突帯2条。硬面平滑。345と同一個体。			
347	① 165次	② 壬生門東方・南面大垣・式部省地区 6AAV BC23 850515	③ 東西溝 (新)	SD4100
	④ 円面観	⑤ 観面径12.3 残高2.7	⑥ 正置 (保土上・側面降灰輪狀)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 3~13、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ PL, 17 Ph. 45	
	⑨ 観面のみで脚型式不明。極めて厚い観面部が特徴的。観部内面ロクロナデ、平滑なのは後の使用によるものか?			
348	① 165・220次	② 壬生門東方・南面大垣・式部省地区 6AAI DK95 850523 6AAV GS28 910306	③ 東西溝 (古) 灰褐色質土	SD1250
	④ 圓足円面観b	⑤ 外堤径21.6 観面径16.2 残高3.3	⑥ 侧置 (観部内面・突唇下面降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 3~13、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ PL, 17 Ph. 45	
	⑨ 上縁が丸い広張2種の透孔。四弁花形か。復原8組。外堀上端内肥厚。肉厚脚部上端に受け口状突帯。観部内面ロクロナデ。中央部不定方向ナデ。観面に火迹れ。261・296・360等と重複。435と同一個体。			
349	① 165次	② 壬生門東方・南面大垣・式部省地区 6AAV CM33 850405	③ 黄褐土	包含層
	④ 圓足円面観a	⑤ 外堤径25.0 観面径19.4 残高3.3	⑥ 正置 (外堤～外側降灰・硬面覆い焼)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 3~13、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ PL, 17 Ph. 45	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数36。脚部肉厚。底く頑丈な外堀の端部巴綱状。観部外周に巴綱と突筋。透孔上部に三角形突筋。			
350	① 165次	② 壬生門東方・南面大垣・式部省地区 6AAI DL94 850521 6AAV 850706	③ 下瓦層	包含層
	④ 圓足円面観a	⑤ 腳部径約28 残高6.9	⑥ 正置 (外側降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 3~13、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ Ph. 46	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数22。透孔下突帯1条。脚端ロクロナデ、内面ナデ。透孔内側面取り。322・342・431等と胎土が類似。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕跡)	
	⑦ 資料・報告	⑧ 備 考	⑨ PL, Ph	
351	① 167次	② 壬生門西方南面大垣・兵部省地区 6AAY EB35 850821	③ 黄褐パラス	包含層
	④ 圈足円面鏡 a	⑤ 外径約17.3 縦面径12.6 残高4.9	⑥ 例置(縁部内面・外堤外側灰粒状)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 14~24、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ PL, 17 Ph. 46	
	⑨ 縁面外周高い突堤。外堤端部内傾面。外堤下に突堤1条。縦部下半内湾、凹線1条。内外面ロクロナダ。猿投窓底。			
352	① 167次	② 壬生門西方南面大垣・兵部省地区 6AAY FC35 850913	③ 黄灰粘土	包含層
	④ 圈足円面鏡	⑤ 總部径20.2 残高2.2 (二条大路南御津SD4006に近い)	⑥ 例置(縁部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 14~24、奈文研1986『1986年度年報』p. 15~17		⑧ PL, 17 Ph. 46	
	⑨ 繪長方形透孔。復原脚数27。脚端外反上肥厚。内外面ロクロナダ。透孔下部に細柵線。透孔侧面切りママ。猿投窓底。			
353	① 169次	② 東区朝堂院朝庭地区 6AAT AT24 851111	③ 株穴3撫形	SB12300
	④ 円面鏡	⑤ 突堤径約24 縦面径約23 残高3.4	⑥ 正置? (突上面下降灰?)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 25~44、奈文研1986『1986年度年報』p. 18~20		⑧ Ph. 46	
	⑨ 外傾する薄い外堤。外堤下部に凹線による突堤2条。内面ロクロナダ。199に類似。脚部円面鏡Bか。奈良時代後半。			
354	① 169次	② 東区朝堂院朝庭地区 6AAT AF17 851025	③ 黄灰粘土	整地土
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 總部径約25 残高4.5	⑥ 正置? (脚上面下降灰?)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 25~44、奈文研1986『1986年度年報』p. 18~20		⑧ Ph. 46	
	⑨ 復原脚数24? 脚柱内面横ケズリ。脚台内面・下面・外面ロクロナダ。脚柱内面幅広く面取り。			
355	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AN47-AH47 860222-860328等	③ SD3715 ③-④縦・暗灰砂、灰砂	SD3715
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外堤径23.8 縦面径約17.1 脚部径約27.4 器高9.9	⑥ 正置(外面降灰輪状)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ PL, 18 Ph. 46	
	⑨ 復原脚数26。凹線による突堤2条。縦部内面有段。脚柱内面横ケズリ。脚台内面突出。透孔侧面切りママ。			
356	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AP37 860111	③ 黄灰粘質土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径28.0 残高8.0	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ PL, 18 Ph. 46	
	⑨ 復原脚数24。高い脚柱・大型脚柱。脚柱内面横ケズリ。脚台下面ロクロナダ/平滑。透孔侧面切りママ。			
357	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AQ36・AQ36 860113-860124	③ 黄灰粘質土・東西溝2	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径26.0 残高5.5	⑥ 正置(外面降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ PL, 18 Ph. 46	
	⑨ 2片接合。復原脚数24。脚柱内面横ケズリのちロクロナダ。脚台下面ロクロナダ。内面突出。脚柱内側面取り。			
358	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABW ZZ 860304	③	
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径約29 残高4.8	⑥ 例置(脚台下・内面薄灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ Ph. 47	
	⑨ 復原脚数26? 細身の脚柱内外面ナダ。板状脚台面横ケズリのちナダ。内面に補強粘土。291・359と同一個体か。			
359	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ ZZ 860417	③	
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径約29 残高3.8	⑥ 例置(脚台下・内面薄灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ Ph. 47	
	⑨ 復原脚数26? 細身の脚柱内外面ナダ。板状脚台面横ケズリのちナダ。内面に補強粘土。291・358と同一個体か。			
360	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ BQ48 860220	③ 暗灰砂質土	包含層
	④ 圈足円面鏡 b	⑤ 突唇径約22 残高4.3	⑥ 例置(縁部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ Ph. 47	
	⑨ 四弁花形透孔か。肉厚脚部上に受け口状突堤1条。外堤は削離。261・296と類似。焼成法が異なる。348・435とも類似。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 燃成 (窯底跡)	
	⑦ 摘 報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
361	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AS42・AS45 860120・860123	③ 東西溝灰色パラス・砂混灰色粘土	
	④ 圈足円面観	⑤ 脚部径30.8 残高5.3	⑥ 正置 (突帯上面障灰)	SD12540
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ PL, 18 Ph. 47	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数36。透孔下突帯1条。脚柱外面カキメ。内面ロクロナデ。透孔内側面取り。脚土は350等と類似。			
362	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ BJ49 860207	③ 黄褐色粘土	包含層
	④ 圈足円面観	⑤ 脚部径26.0 残高4.9	⑥ 正置 (外面障灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ Ph. 47	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数32。脚端内湾肥厚、肩に突帯1条。透孔内側面取り。脚柱に小字形ヘラ書き文様。325と同一文様。			
363	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AQ34 860124	③ 大土坑灰黒粘土	SK12530
	④ 圈足円面観	⑤ 残高4.7	⑥ 倒置 (脚柱内面障灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ Ph. 47	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数32。脚柱内外面ロクロナデ。脚柱四隅面取り。151など圈足円面観 a の脚部か。平城宮土器I件出。写真の天地方。			
364	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AS36 860120	③ 東西溝 黄灰粘土	SD12540
	④ 圈足円面観	⑤ 脚部径31.6 残高2.7	⑥ 倒置 (脚柱内面障灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ PL, 18 Ph. 47	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数16。脚下半が幅広く外反。端部丸い。内外面ロクロナデ。365と同一個体。奈良時代末の土器作出。			
365	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AJ39 860125	③ 東西溝	SD12540
	④ 圈足円面観	⑤ 脚部径31.6 残高2.6	⑥ 倒置 (脚柱内面障灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ Ph. 47	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数16。脚下半が幅広く外反。端部丸い。内外面ロクロナデ。361と同一個体。奈良時代末の土器作出。			
366	① 171次	② 中央区朝堂院地区 6ABJ AN47 860224	③ SD3715 ③層	SD3715
	④ 圈足円面観	⑤ 残高6.3	⑥ 倒置 (内面障灰)	
	⑦ 奈文研1986『昭和60年度平城概報』p. 45~54、奈文研1986『1986年度年報』p. 20~25		⑧ Ph. 47	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。脚柱底部内厚。脚端薄手。小さく外反し下肥厚。透孔下部に細沈線1条。透孔圓面切りママ。			
367	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD ES27 860621 6AAC JN27 860930	③ SD2700 上層 SD2700 灰白パラス①	SD2700上層 SD2700下層
	④ 踏脚円面観 B	⑤ 脚部径29.0 残高4.9	⑥ 正置 (脚台上面障灰)	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ PL, 18 Ph. 47	
	⑨ 復原脚数22。脚柱内面横ケズリ。小型の脚台下・外側ケズリのちナデ。脚台内寄りが接地し磨损。			
368	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAC JN28 861022	③ SD2700 吻瓦溝	SD2700
	④ 踏脚円面観 B	⑤ 窓面径18.8 残高4.9	⑥ 正置 (突帯上面障灰)	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ PL, 18 Ph. 48	
	⑨ 復原脚数24。窓部内面有段、横ケズリ。縦手で外傾する外堤。突帯2条。海部まで墨塗。			
369	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD JF27 860925	③ SD2700 木肩脛①	SD2700下層上半
	④ 踏脚円面観 B	⑤ 外堤径23.8 残高6.3	⑥ 正置 (外側・外面障灰状)	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ Ph. 48	
	⑨ 復原脚数16。平坦で広い海部。外傾気味で丸い外堤端部。脚柱上部に繰り突帯3条。復原部内面横ケズリ。			
370	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EK27 860618	③ SD2700 灰白パラス	SD2700下層
	④ 踏脚円面観 A	⑤ 残高3.6	⑥ 正置 (脚踏上面障灰)	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ PL, 18 Ph. 48	
	⑨ 細い脚柱1本のみ。脚踏の上下面に木目痕。脚柱外面ナデ、内面経方向ナデ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 燃成 (窯痕跡)	
	⑦ 概 観・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
371	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EN28 860613	③ SD2700 灰青灰色粗砂	SD2700最下層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径26.0 残高5.5	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ Ph. 48	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ。脚台下面ロクロナデ、内端突出。透孔側面切りママ。373~375等同一個体。			
372	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD JC27 860910	③ SD2700 黒粘土	SD2700最上層
	④ 踏脚円面観A	⑤ 残高4.4	⑥ 正置 (脚台上面~外面部降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ PL, 18 Ph. 48	
	⑨ 復原脚数24? 幅広扁平な脚柱。脚柱内面横ケズリ。脚台内・下面ロクロケズリ。42・121・328と類似。			
373	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD JE27 860924	③ SD2700 灰白バカラス直下	SD2700
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径26.0 残高5.1	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ Ph. 48	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ。脚台下面ロクロナデ、内端突出。透孔側面切りママ。371・375等同一個体。			
374	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EO27 860703	③ SD2700 灰白バカラス直下	SD2700下層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径26.0 残高5.0	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ Ph. 48	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ。脚台下面ロクロナデ、内端突出。透孔側面切りママ。371・375等同一個体。			
375	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EN28 860613	③ SD2700 灰白バカラス直下	SD2700最下層
	④ 踏脚円面観B	⑤ 脚部径26.0 残高5.2	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ PL, 18 Ph. 48	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ。脚台下面ロクロナデ、内端突出。透孔側面切りママ。371・375等同一個体。			
376	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EB28 860527	③ SD2700 黑粘土	SD2700最上層
	④ 圓足円面観	⑤ 残高5.8	⑥ 正置 (脚部外面降灰状)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ Ph. 48	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数不明。脚部外反。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。獣投糞痕。377と同一個体。			
377	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EB27 860529	③ SD2700 灰砂	SD2700上層
	④ 圓足円面観	⑤ 残高5.2	⑥ 正置 (脚部外面降灰状)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ Ph. 48	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数不明。脚部外反。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。獣投糞痕。376と同一個体。			
378	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD ED27 860528	③ SD2700 灰褐色粗砂	SD2700
	④ 圓足円面観	⑤ 残高4.8	⑥ 倒置 (脚端内面降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ Ph. 48	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数不明。脚柱幅広め。脚柱小さく外屈し、下肥厚。透孔側面切りママ。獣投糞痕。			
379	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD JC27 860910	③ SD2700 灰褐色粗砂	SD2700
	④ 圓足円面観a	⑤ 外径11.9 突面径7.4 残高2.6	⑥ 倒置 (脚端内面降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ PL, 18 Ph. 49	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数19。視面外縁傾斜、肉厚。内面ロクロナデ。外端上端幅広下肥厚。外堤基部の貼付痕。獣投糞痕。			
380	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EI27 860529	③ SD2700 灰褐色粗砂・東岸南北断溝	SD2700
	④ 圓足円面観b	⑤ 外径13.0 突面径10.4 残高2.6	⑥ 正置 (視面~突端上面降灰)	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28		⑧ PL, 18 Ph. 49	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数16。外傾する外堤端部丸い。視面ロクロナデ不整。端部内面不定方向ナデ。根部内面に墨書。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 烧成・痕跡	
	⑦ 概要・報告			⑧ PL, Ph
	⑨ 備 考			
381	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EI27 860603	③ SD2700 灰褐粗砂	SD2700
	④ 圆足円面鏡	⑤ 脚部径29.9 残高4.0	⑥ 倒置（脚部内面降灰軸状）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 18 Ph. 49
	⑨ 長方形透孔。復原脚数23。脚部外溝内外に大きく肥厚。透孔下部に細突壹1条。内外面コクロナデ。透孔裏面切りマツ。			
382	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EG28-ED27 860603-860702	③ SD2700 木肩層・灰白パラス・灰白莎 6AAC JK27-JJ27 860929-861002	SD2700 SD2700 灰白パラス・木肩層 SD2700
	④ 圆足円面鏡 a	⑤ 外堤径20.5 破面径15.8 脚部径24.1 器高6.1	⑥ 倒置（脚部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 49
	⑨ 長方形透孔。復原脚数26。外堤端部が内瓶面肥厚。脚部横が外反、端部上肥厚。脚輪の対向位置に2つの耳（縦8.8cm）が付き、一方の耳の前の脚は削り取る。			
383	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EQ27 860619	③ SD2700 灰褐粗砂	SD2700
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 外堤径27.0 高台径21.8 器高3.2	⑥ 倒置（鏡部裏面降灰軸状）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 50
	⑨ 端部に内傾面をもつ輪状高台。鏡面中央寄りに凹部を設けて海部とする。杯蓋端部に似た玉線状の外堤。鏡面に墨痕。			
384	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD ED27 860604	③ SD2700 灰白莎	SD2700下層下半
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 外堤径21.0 高台径14.7 番高2.8	⑥ 倒置か（鏡部外側わざかに降灰）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 50
	⑨ 蓋端部に似た外堤に内接する台形凹みを海部とする。外傾する高台の端部丸い。鏡部裏面コクロケズリのちコクロナデ。鏡面コクロナデ。表裏面ともミガキで平滑。墨痕付着。高台内に重焼痕。			
385	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EQ27 860619	③ SD2700 灰褐粗砂	SD2700
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 外堤径約19 高台径12.0 残高2.1	⑥ 倒置（鏡部外側降灰軸状）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 50
	⑨ 外堤に内接する突橋で海部（縦約5.7）を作る。脚は杯B高台と類似。鏡面ナデ。鏡面底コクロケズリのちナデ。			
386	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EE27 860606	③ SD2700 灰白パラス	SD2700下層下半
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 外堤径18.4 高台径12.7 番高2.0	⑥ 倒置（外側降灰軸状）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ Ph. 50
	⑨ 蓋端部に似た外堤・杯高台似の脚部。鏡部内面コクロナデ。外面コクロケズリ。鏡面墨痕。387と類似。			
387	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EC27 860606	③ SD2700 灰白パラス	SD2700下層下半
	④ 円形鏡(輪状高台)	⑤ 外堤径18.4 高台径12.7 番高2.1	⑥ 倒置（外側降灰軸状）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 50
	⑨ 蓋端部に似た外堤に内接する凹部を海部とする。杯高台形脚部。鏡部内面コクロナデ。外面コクロケズリ。386と類似。			
388	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EI27 860430	③ SD2700 黑灰粘土	SD2700最上層
	④ 圆足円面鏡 b	⑤ 外堤径14.4 破面径9.1 残高2.6	⑥ 倒置（鏡部内面降灰軸状）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 51
	⑨ 長方形透孔？ 外堤端部内傾面。鏡部内面不定方向ナデ。他はコクロナデ。鏡部内面火彌れ。鏡面に重焼痕。猿投窓痕。			
389	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EG27 860510	③ SD2700 灰褐粗砂	SD2700
	④ 圆足円面鏡 a	⑤ 外堤径14.9 破面径9.2 残高2.1	⑥ 倒置（鏡部内面降灰）	
	⑦ 余文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 51
	⑨ 長方形透孔。復原脚数16。太三角突壹。鏡面コクロナデのちナデ。鏡部内面ナデ。内外面火彌れ。外堤上面に重焼痕。			
390	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD JA27 860912	③ SD2700 灰褐粗砂	SD2700
	④ 圆足円面鏡 a	⑤ 外堤径11.6 破面径7.6 残高1.5	⑥ 倒置（鏡部内面降灰・重焼痕）	
	⑦ 奈文研1987「昭和61年度平城概報」p. 11~26、奈文研1987「1987年度年報」p. 26~28			⑧ PL, 19 Ph. 51
	⑨ 長方形透孔？ 鏡面平坦中央凹み。外堤端内傾面、剥離明顯。鏡部内面コクロナデ。鏡面コクロケズリ。猿投窓痕。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成（窯痕跡）	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
391	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD ET27 860619	③ SD2700 灰褐色砂	SD2700
	④ 圓足円面観	⑤ 残高3.7	⑥ 位置？（脚柱内面かすかに降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ Ph. 51	
	⑨ 長方形透孔。脚端外反。透孔下に突帝。内外面ロクロナデ。脚柱外側縫ケゼリ。透孔側面切りママ。			
392	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EI27 860529	③ SD2700 東岸南北細溝	SD2700
	④ 圓足円面観	⑤ 残高2.9	⑥ 正置？（脚柱外側降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ Ph. 51	
	⑨ 長方形透孔。脚數不明。内外面ロクロナデ。透孔際の外側を小さく削る。透孔側面切りママ。			
393	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD ET27 860529	③ SD2700 灰褐色砂	SD2700
	④ 圓足円面観	⑤ 残高4.9	⑥ 正置？（脚柱外側かすかに降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ Ph. 51	
	⑨ 長方形透孔。脚柱外側中程に2条1組の横凹線2組。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。337と同一個体か。			
394	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD EZ27 860613	③ SD2700 木肩脛	SD2700下層上半
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径8.4 残高2.8	⑥ 位置（脚柱内面降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ PL, 19 Ph. 51	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数12。脚下部外曲輪部下肥厚。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。			
395	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD ES27 860619	③ SD2700 灰褐色	SD2700
	④ 圓足円面観	⑤ 残高5.2	⑥ 正置（脚柱外側降灰跡者）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ Ph. 51	
	⑨ 細長方形透孔。脚數不明。内外面ロクロナデ。脚柱外側面取り。			
396	① 172次	② 内裏東方・東大溝地区 6AAD JE27 860910	③ SD2700 黒粘土	SD2700最上層
	④ 圓足円面観	③ 脚部径19.2 残高2.8	⑥ 正置（脚部外側降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 11~26、奈文研1987『1987年度年報』p. 26~28		⑧ PL, 19 Ph. 51	
	⑨ 長方形透孔。透孔下部に凹線1条。脚部外反、端部が上下肥厚し凹面をなす。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。			
397	① 173次	② 東区朝堂院地区・東第二堂 6AAT AT13 860805	③ 明間上	包含層
	④ 圓足円面観 c	⑤ 外径径17.8 残高15.8 残高2.3	⑥ 位置（視部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 3~10、奈文研1987『1987年度年報』p. 24~25		⑧ PL, 19 Ph. 51	
	⑨ 長方形透孔か。復原脚数16。細い外縁部内肥厚。覗面周縁低央帶。内外面ロクロナデ。脚柱外側にヘラ書き波状文。			
398	① 173次	② 東区朝堂院地区・東第二堂 6AAT AII1 860719	③ 基壇盛土 茶褐色	SB12920（上層）
	④ 踏脚円面観 B	⑤ 突帯径約27 残高3.6	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 3~10、奈文研1987『1987年度年報』p. 24~25		⑧ Ph. 51	
	⑨ 復原脚数24？ 幅広く平坦な海部。細い外縁部堤欠損。突帯2条。脚頭剥離。覗部内面横縫ケゼリ。奈良時代中頃。			
399	① 175次	② 南辺官衙・兵部省地区 6ABL AD20 870525	③ 黄褐色バラス	包含層
	④ 踏脚円面観 B	⑤ 突帯径約30 残高3.4	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦ 奈文研2005『平城報告XVII』（学報70）PL. 133~450、奈文研1988『昭和62年度平城概報』p. 10~14		⑧ Ph. 51	
	⑨ 報告本文では圓足円面観(444)とするが脚頭剥離痕あり。復原脚数32。突帯1条。覗部内面有段ロクロナデ、下半横ケゼリ。			
400	① 177次	② 佐紀池南方地区 6ACC DN27 861030	③ 茶褐色泥層	整地土
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径17.4 残高2.9	⑥ 位置（脚部内面降灰）	
	⑦ 奈文研1987『昭和61年度平城概報』p. 35~41、奈文研1987『1987年度年報』p. 29		⑧ PL, 19 Ph. 51	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数16。脚部外反、端部下肥厚。内外面ロクロナデ。透孔外側面取り、内側切りママ。養老6年頃。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕)	
	⑦ 概報・報告			⑧ PL, Ph
	⑨ 備 考			
401	① 182次	② 内裏東方官衛・造酒司地区 6ALP GP24 871023	③ 大土坑	SK13245
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外径29.1 残高2.1	⑥ 斜置(鏡部内面・突帯下面降灰軸)	
	⑦ 余文研1988「昭和62年度平城概報」p. 15~22、余文研1988「1988年度年報」p. 22			⑧ Ph. 51
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数24。内傾面をもつ外堤。縦突帯1条。内外面ロクロナデ。斜投窓座。平城宮土器IV~V。			
402	① 182次	② 内裏東方官衛・造酒司地区 6ALP GT24 871029	③ 大土坑	SK13245
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径13.2 残高2.9	⑥ 正置(脚部外面・突帯上面降灰)	
	⑦ 余文研1988「昭和62年度平城概報」p. 15~22、余文研1988「1988年度年報」p. 22			⑧ PL, 19 Ph. 51
	⑨ 幅広長方形透孔。復原脚数12。脚部外反、端部上肥厚。内外面ロクロナデ。透孔上部突帯1条。透孔下部細沈線1条。脚柱全面に沈線各5条斜格子文。斜投窓座。平城宮土器IV~V件出。			
403	① 185次	② 南辺官衛・兵部省地区 6ABL AP87 870803	③ 斜褐土	包含層
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 脚部径23.0 残高2.5	⑥ 斜置(脚部内面降灰)	
	⑦ 余文研2005「平城報告XVI」(学報70) PL. 133-448、余文研1988「1988年度年報」p. 21			⑧ PL, 19 Ph. 51
	⑨ 四分花形透孔。復原脚数17。脚部外反、下肥厚する端部に凹線2条。内外面ロクロナデ。報告本文では450とする。296(136次)、348(165次)、435(235次)などの脚部であろう。			
404	① 188次	② 東区朝堂院地区・朝庭城 6AAU BJ21 880714	③ 黄褐粘質土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 突帯径29 残高3.3	⑥ 斜置(鏡部内面降灰)	
	⑦ 余文研1989「昭和63年度平城概報」p. 3~10、余文研1989「1989年度年報」p. 22~24			⑧ Ph. 52
	⑨ 復原脚数32。継長気味の脚頭。端部に凹線をもつ突帯1条。鏡部内外面ロクロナデ。斜投窓座?			
405	① 203次	② 東区朝堂院地区・朝庭城 6AAU AP13-AQ13 890918-890920	③ 南落溝上層	SD13664
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 外径26.8 脚部径25.4 残高9.2	⑥ 正置(脚部上面降灰、外堤に内縫い焼)	
	⑦ 余文研1990「1989年度平城概報」p. 17~24、余文研1990「1990年度年報」p. 20~23			⑧ PL, 20 Ph. 52
	⑨ 復原脚数21。端部の丸い外堤。脚頭を外曲し下方へ折り曲げた脚台に脚頭・脚柱を貼付け。低い脚柱。脚台外端突出。鏡部下半~脚柱内面横けケズリ。脚台ロクロナデ。406と同一個体。造構は上層朝堂院東門の雨落溝で奈良時代後半~末。			
406	① 203次	② 東区朝堂院地区・東第三堂 6AAU AQ13 890920	③ 南落溝上層	SD13664
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径25.4 残高5.4	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 余文研1990「1989年度平城概報」p. 17~24、余文研1990「1990年度年報」p. 20~23			⑧ Ph. 52
	⑨ 復原脚数21。脚柱を折り曲げて脚台外端突出。低い脚柱。鏡部下半~脚柱内面横けケズリ。脚台ロクロナデ。405と同一個体。			
407	① 203次	② 東区朝堂院地区・東第三堂 6AAU AO16 891102	③ 下層雨落溝	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径26.4 残高7.0	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 余文研1990「1989年度平城概報」p. 17~24、余文研1990「1990年度年報」p. 20~23			⑧ PL, 20 Ph. 52
	⑨ 長方形透孔。復原脚数26。透孔下突帯2条。脚部内外面ロクロナデ。透孔内側面取り。下層の東第三堂雨落溝。			
408	① 205次	② 南辺官衛・兵部省地区 6ABL CQ16 900316	③ 灰褐土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約30 残高4.0	⑥ 正置(脚台上面降灰軸)	
	⑦ 余文研2005「平城報告XVI」(学報70) PL. 133-452、余文研1991「1990年度平城概報」p. 3~15			⑧ Ph. 52
	⑨ 脚部不明。脚柱~脚台上半内面横けケズリ。脚台下面ケズリのちナデ。透孔側面切りママ。脚柱外端削り残し。			
409	① 205次	② 南辺官衛・兵部省地区 6ABL CP24 900417	③ 灰褐土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外径14.6 突帯径11.0 残高2.3	⑥ 正置(突帯上面降灰、海部内縫い焼)	
	⑦ 余文研2005「平城報告XVI」(学報70) PL. 133-445、余文研1991「1991年度年報」p. 22~24			⑧ PL, 20 Ph. 52
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数40。鏡面部肉厚。内外面ロクロナデ。外縦縫部内側面。太い三角形突帯1条。報告は尾張塗。			
410	① 206次	② 南辺官衛・兵部省地区 6AAY HH55 891213	③ 不整形土坑	SK13790
	④ 円面鏡	⑤ 突帯径20.6 残高2.1	⑥ 正置(内面に降灰無し)	
	⑦ 余文研1990「1989年度平城概報」p. 25~33、余文研2003「畿内土器集成Ⅲ」(史料59)			⑧ Ph. 52
	⑨ 鏡面のみの破片。鏡面部が高く、内面有段の薄脚円面鏡の可能性大。鏡面ロクロナデ。鏡面裏に同心円当具痕あり。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶硯の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕跡)	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
411	① 206次	② 南辺官衙・兵部省地K 6AAV HL54 891213	③ 灰褐土	包含層
	④ 踏脚円面硯B	⑤ 残高5.3	⑥ 正置(脚台上面降灰積状)	
	⑦ 奈文研1990「1989年度平城概報」p. 25~33、奈文研1990「1990年度年報」p. 23~25		⑧ Ph. 52	
	⑨ 復原脚數不明。脚柱内面焼けケリ。脚台内・下・外面ケズリのちナデ。脚台内端突出。長い脚柱外表面剝り残しあり。			
412	① 206次	② 南辺官衙・兵部省地区 6AAV GRS4-GT54 900125-900330	③ 瓦溜・片庇西雨落溝	SD13736
	④ 圓足円面硯b	⑤ 外堤径15.2 窓面径11.2 残高3.0	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研2005「平城報告XVII」(学報70) PL. 133-144、奈文研1990「1989年度平城概報」p. 25~33		⑧ PL. 20 Ph. 52	
	⑨ 細長方形透孔。透孔数26。透孔幅不揃い。隆起する窓面外周に細突部、ロクロナデ。窓部内面不定方向ナデ。太い外堤端部外肥厚。透孔上部に角形突壁1条。SD13736は兵部省東面塗地の片庇西雨落溝。奈良時代中期以降の造構。			
413	① 213次	② 東区朝堂院地区・東第四堂 6AAV MK15 911021	③ 黄褐色土	包含層
	④ 踏脚円面硯B	⑤ 突帯径約26 残高5.8	⑥ 倒置(突帯下面降灰)	
	⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 3~19、奈文研1992「1992年度年報」p. 18~22		⑧ Ph. 53	
	⑨ 復原脚數24? 外傾外堤の外面カキメのちナデ。突唇2条の上が縫い。窓部内面ロクロナデ無段、下半横ケズリ?			
414	① 213次	② 東区朝堂院地区・東第四堂 6AAV MF14 911105	③ 灰褐粘土	包含層
	④ 踏脚円面硯B	⑤ 脚部径23.8 残高4.3	⑥ 正置(脚台上面かすかに降灰)	
	⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 3~19、奈文研1992「1992年度年報」p. 18~22		⑧ PL. 20 Ph. 53	
	⑨ 復原脚數19。脚柱内面焼けケリ。脚台内外面ケズリのちロクロナデ。脚台内端突出。脚柱内側面大きく述取り。			
415	① 213次	② 東区朝堂院地区・東第四堂 6AAV NR21 911101	③ 灰褐色土	包含層
	④ 踏脚円面硯B	⑤ 突帯径約27 残高2.9	⑥ 正置(突帯上面降灰、窓面覆い焼)	
	⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 3~19、奈文研1992「1992年度年報」p. 18~22		⑧ Ph. 53	
	⑨ 直立気味の外堤下部に深い凹線による突壁2条。窓部内面を横ケズリのちナデ調整することから、踏脚円面硯Bと推定。			
416	① 213次	② 東区朝堂院地区・東第四堂 6AAV MT22 911030	③ 黄褐色土	包含層
	④ 踏脚円面硯B	⑤ 脚部径約28 残高5.3	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 3~19、奈文研1992「1992年度年報」p. 18~22		⑧ Ph. 53	
	⑨ 復原脚數23? 外曲脚部に脚柱飾りを貼付。脚台外端突出。脚柱内面横ケズリ。脚台下面ロクロナデ。透孔内側面取り。			
417	① 213次	② 東区朝堂院地区・東第四堂 6AAV MT21 911030	③ 灰褐色土	包含層
	④ 踏脚円面硯B	⑤ 脚部径約30 残高5.3	⑥ 正置(脚柱外面、脚台上面降灰軽状)	
	⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 3~19、奈文研1992「1992年度年報」p. 18~22		⑧ Ph. 53	
	⑨ 復原脚數26? 外曲する脚部に脚柱飾りを貼付。脚台外端突出。脚柱内面横方向ナデ。脚台内面削ぎ落とし。脚部内厚。			
418	① 213次	② 東区朝堂院地区・東第四堂 6AAV MP22 911113	③ 南北瓦溜?	包含層
	④ 圓足円面硯	⑤ 脚部径30.8 残高5.7	⑥ 正置(脚部外表面降灰)	
	⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 3~19、奈文研1992「1992年度年報」p. 18~22		⑧ PL. 20 Ph. 53	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數24。脚頭広拵あり。透孔下太突壁1条。脚端外肥厚。透孔側面切りママ。323・350等と形態類似。			
419	① 213次	② 東区朝堂院地区・東第四堂 6AAV MG17 911205	③ 上層基壇土	SB15040
	④ 圓足円面硯a	⑤ 外堤径22.5 窓面径17.4 残高1.9	⑥ 倒置(窓部内面降灰軽状、溶着物あり)	
	⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 3~19、奈文研1992「1992年度年報」p. 18~22		⑧ PL. 20 Ph. 53	
	⑨ 透孔不明。水平幅広の海部と一段高い視面。窓面ロクロケズリ。直立気味の外堤端部丸い。窓部内面ロクロナデ。			
420	① 214次	② 南辺官衙・兵部省地区 6AAV HT58 900502	③ 灰褐色土	包含層
	④ 踏脚円面硯B	⑤ 外堤径22.4 窓面径17.0 残高4.2	⑥ 正置(突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研2005「平城報告XVII」(学報70) PL. 133-144、奈文研1991「1990年度平城概報」p. 16~27		⑧ PL. 20 Ph. 53	
	⑨ 復原脚數19。外傾気味外堤。突唇2条。脚頭剥離高あり。窓面裏ロクロナデ、同心円压痕。窓部内面下半横ケズリ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕)	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
421	① 216次	② 南辺官衙・式部省西地区 6AAY GO31 901016	③ 床土	包含層
	④ 圓足円面鏡 A	⑤ 腿部径約26 残高3.8	⑥ 正置(脚柱外面陥灰)	
	⑦ 奈文研2005「平城報告XVII」(学報70) PL. 133-451、奈文研1991「1990年度平城概報」p. 28~35		⑧ Ph. 54	
	⑨ 脚柱内面縦ケズリ。舞台内面ロクロナデ。下面~外面ロクロケズリ。下面内縫ロクロナデ。42・328・372と類似。			
422	① 216次	② 南辺官衙・式部省西地区 6AAY GO29 910307	③ 灰褐埴地土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高6.0	⑥ 正置(脚外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1991「1990年度平城概報」p. 28~35、奈文研1991「1991年度年報」p. 26~27		⑧ Ph. 54	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。内外面ロクロナデ。透孔下に細沈線2条。423、424と同一個体。奈良時代末の土器など共伴。			
423	① 216次	② 南辺官衙・式部省西地区 6AAY GO31 910123	③ 大土坑	SK14445
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高3.8	⑥ 正置(脚外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1991「1990年度平城概報」p. 28~35、奈文研1991「1991年度年報」p. 26~27		⑧ Ph. 54	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。内外面ロクロナデ。422・424と同一個体。奈良時代末の土器など共伴。蓋板は概報等に不載。			
424	① 216次	② 南辺官衙・式部省西地区 6AAY GO31 910123	③ 大土坑	SK14445
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径30.4 残高6.1	⑥ 正置(脚外面陥灰)	
	⑦ 奈文研2005「平城報告XVI」(学報70) PL. 133-449、奈文研1991「1990年度平城概報」p. 36~43		⑧ PL. 20 Ph. 54	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數25。透孔下に細沈線。脚部外反折り返し。内外面ロクロナデ。422・423と同一。433等と類似。			
425	① 220次	② 南辺官衙・式部省地区 6AAY GT19 910118	③ 疎渴砂質土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外堀径13.1 残高3.1	⑥ 正置(海部~突帯上面陥灰粘土)	
	⑦ 奈文研2005「平城報告XVII」(学報70) PL. 133-444、奈文研1991「1990年度平城概報」p. 36~43		⑧ Ph. 54	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數9。低い外堤。太い三角形の突唇。脚端外反。内外面ロクロナデ。報告は175次出土とする。内裏東南隅(第73次) SK769出土の208と接合。後段の距離直線620m。			
426	① 220次	② 南辺官衙・式部省地区 6AAY GN18 910117	③ 165次埋土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 外堀径12.8 残高5.0	⑥ 倒置(内面・突帯下面陥灰)	
	⑦ 奈文研1991「1990年度平城概報」p. 36~43、奈文研1991「1991年度年報」p. 27~29		⑧ PL. 20 Ph. 54	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數9。鏡面部欠損。上面平坦で外肥厚の高台形外堤。前長い突帯1条。内外面ロクロナデ。			
427	① 220次	② 南辺官衙・式部省地区 6AAY GR25 910312	③ 暗灰パラス	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径23.5 残高1.5	⑥ 侧置(脚端内面陥灰)	
	⑦ 奈文研1991「1990年度平城概報」p. 36~43、奈文研1991「1991年度年報」p. 27~29		⑧ PL. 20 Ph. 54	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數28。縦縫外反、端部折り返して幅広い面をつくる。内外面ロクロナデ。透孔下に細沈線2条。			
428	① 220・165次	② 南辺官衙・式部省地区 6AAY GO28·GR28 910306-910307	③ 瓦溝・大土坑	SK12050
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堀径21.0 縦径15.3 残高3.3	⑥ 下瓦槽	包含層
	⑦ 奈文研1991「1990年度平城概報」p. 36~43、奈文研1991「1991年度年報」p. 27~29		⑧ PL. 20 Ph. 54	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數20。鏡面部に細突唇。幅広い海部。直立する外堤。鏡面部内面不定方向ナデ。他はロクロナデ。422・423・424・433と類似。盤座窓。SK12050は式部省施設西方の土坑。下瓦槽は南外方。			
429	① 220次	② 南辺官衙・式部省地区 6AAY CS25 910312	③ 南土坑	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腿部径29.6 残高6.3	⑥ 正置(外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1991「1990年度平城概報」p. 36~43、奈文研1991「1991年度年報」p. 27~29		⑧ PL. 21 Ph. 55	
	⑨ 長方形透孔。復原脚數22。透孔下部に突唇1条。脚端内外肥厚。脚柱内面ロクロナデ。外面縦ケズリ。透孔内面取り。舞台下内面に火事さ。342・350・431と類似。式部省施設内坑内側の土坑。			
430	① 220次	② 南辺官衙・式部省地区 6AAY HC24 910118	③ 暗褐砂質土	包含層
	④ 風字模(平頭)	⑤ 長径5.8 短径5.4 厚さ0.7	⑥ 正置(窯痕不明)	
	⑦ 奈文研1991「1990年度平城概報」p. 36~43、奈文研1991「1991年度年報」p. 27~29		⑧ PL. 21 Ph. 55	
	⑨ 鈍角に開く2刃焼残。多角形脚柱削離。外堤上面ヘラケズリ。鏡面平滑、外周沿いにナデ。鏡部裏面ケズリ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号			
				④ 陶窯の種類	⑤ 法 量	⑥ 燃成(窯痕跡)	⑧ PL, Ph
431	① 165・222次	② 南辺官衙・式部省地区	③ 東西南(古) 南北大溝 最下層	SD4100A SD11620	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径27.4 残高6.0	⑥ 正置(外面降灰)
							⑦ 奈文研1992「1991年度平城概報」p. 20~38、奈文研1992「1992年度年報」p. 23~25
							⑧ 長方形透孔。復原脚数22。脚柱幅に広状。透孔下に突帯1条。透孔内側面取り。脚台下面に火書き。342・429と類似。 SD4100Aは南面筋地内側溝で平城宮土器Ⅲ。SD11620は式部省東官衙西側溝。須恵器杯蓋内面使用の朱墨軸用硯伴出。
432	① 229次	② 南辺官衙・式部省地区	③ 灰褐色土	包含層	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 突帯径24.0 硬面径20.4 残高4.5	⑥ 正置(突帯上面降灰)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 3~23、奈文研1993「1993年度年報」p. 23~26
							⑧ PL, 21 Ph. 55 ⑨ 復原脚数24。丸みのある硬面肩。薄く外傾する外堤。先端欠。外堤下に組突帯2条。台形状脚頭。穂部内面有段ロクロナダ。
433	① 229次	② 南辺官衙・式部省地区	③ 小穴①		④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.2	⑥ 倒置(脚内面降灰)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 3~23、奈文研1993「1993年度年報」p. 23~26
							⑧ Ph. 55 ⑨ 長方形透孔。脚數不明。透孔下細スリ線1条。内外面ロクロナダ。穂部428と同一個体。脚部422~424は類似する別個体。
434	① 235次	② 南辺官衙・式部省地区	③ 土坑		④ 踏脚円面鏡B	⑤ 残高5.2	⑥ 正置(外面降灰)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 3~23、奈文研1993「1993年度年報」p. 23~26
							⑧ Ph. 55 ⑨ 脚數不明。脚柱・脚台内面横ケズリ。下・外面ロクロケズリのちロクロナダ。付着物あり。脚柱外面削り残しあり。
435	① 235次	② 南辺官衙・式部省地区	③ 土坑①	包含層	④ 圓足円面鏡b	⑤ 外堤径21.9 硬面径16.0 残高4.5	⑥ 倒置(穂部内面降灰)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 3~23、奈文研1993「1993年度年報」p. 23~26
							⑧ Ph. 55 ⑨ 上端が丸い広状2種の透孔。四弁花形透孔か。復原透孔数8組。外堤上端内肥厚。内厚の脚部上端に受け口状の突唇。穂部内面ロクロナダ、中央部不定方向ナダ。261・296・360と断似。348と同一個体か。
436	① 236次	② 南辺官衙・式部省東官衙	③ 瓦入りくぼみ	包含層	④ 踏脚円面鏡A	⑤ 脚部径26.6 残高5.0	⑥ 倒置(脚台下面降灰)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 24~38、奈文研1993「1993年度年報」p. 27~29
							⑧ PL, 21 Ph. 56 ⑨ 復原脚数19。繊棒状脚部。脚柱内面一部縦ケズリ。肉厚脚台の上端ナダ、他面はケズリのちナダ。531と同一個体か。
437	① 236次	② 南辺官衙・式部省東官衙地区	③ 瓦入りくぼみ	包含層	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 残高5.8	⑥ 正置(外面降灰強化)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 24~38、奈文研1993「1993年度年報」p. 27~29
							⑧ Ph. 56 ⑨ 脚數不明。脚柱・脚台内面横ケズリ。脚台下面外ロクロナダ。脚台内端突出。透孔側面切りマサ。脚柱鋸り貼付痕。
438	① 236次	② 南辺官衙・式部省東官衙	③ 黄褐色土	包含層	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 外堤径26.8 硬面径21.3 残高4.5	⑥ 正置(脚頭上面降灰)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 24~38、奈文研1993「1993年度年報」p. 27~29
							⑧ PL, 21 Ph. 56 ⑨ 復原脚数21。穂部内面有段ロクロナダ。穂部内面下半横ケズリ。平滑で薄い観面。直立気味外堤下に突帯2条。
439	① 236次	② 南辺官衙・式部省東官衙	③ 床土	包含層	④ 圓足円面鏡a	⑤ 硬面径9.6 残高2.6	⑥ 正置倒置不明
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 24~38、奈文研1993「1993年度年報」p. 27~29
							⑧ PL, 21 Ph. 56 ⑨ 長方形透孔? 脚數不明。穂部・脚部共に内厚。硬面平滑。穂部内面凹凸あり。表層のみ黒色で瓦質。摩滅。
440	① 236次	② 南辺官衙・式部省東官衙	③ 炭土坑 灰色土	SK15427	④ 圓足円面鏡a	⑤ 突帯径約28 残高3.4	⑥ 正置か(突帯上面僅かに降灰)
							⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 24~38、奈文研1993「1993年度年報」p. 27~29
							⑧ Ph. 56 ⑨ 長方形透孔。復原脚数24。外傾する肉厚な外堤。端部外肥厚。外堤下部に高い突帯1条。脚柱厚手。穂部内面ナダ。穂部外ロクロナダ。349などと胎土形態類似。平城宮土器Ⅱ伴出。

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概要・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
441	① 238次	② 東区朝堂院地区・東第五堂 6AAV MQ36 930120	③ 床土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 窄帶径約25 残高5.8	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 39~48、奈文研1993「1993年度年報」p. 29~30		⑧ Ph. 56	
	⑨ 牌数不明。外側外堀下に突帯2条。外堤・堤部外面カキメ後ナデ。堤部内面ロクロナデ。脚柱内面横ケズリ。			
442	① 238次	② 東区朝堂院地区・東第五堂 6AAV MS27 930121	③ 混疊暗灰移	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高5.4	⑥ 正置 (外側面降灰袖状)	
	⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 39~48、奈文研1993「1993年度年報」p. 29~30		⑧ Ph. 56	
	⑨ 脚柱内面横ケズリ。透孔面切りママ。脚柱跡を貼り付ける以前に目印の沈線2条。			
443	① 238次	② 東区朝堂院地区・東第五堂 6AAV 930308	③ 基壇北土管溝断割	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径28.8 残高1.9	⑥ 侧置 (脚部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1993「1992年度平城概報」p. 39~48、奈文研1993「1993年度年報」p. 29~30		⑧ PL, 21 Ph. 56	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数40。外曲する脚柱端部下肥厚。外側面ロクロナデ。奈良時代後半の東第五堂基壇に關わる。			
444	① 241次	② 内裏東方官街・造酒司地区 6ALP KI43 930427	③ 暗褐土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径22.6 残高4.6	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1994「1993年度平城概報」p. 11~23、奈文研1994「1994年度年報」p. 15~17		⑧ Ph. 57	
	⑨ 復原脚数24。脚柱・脚台内面横ケズリ。下面ロクロナデ。内縫突出。脚柱貼付痕。透孔面切りママ。445と同一個体。			
445	① 241次	② 内裏東方官街・造酒司地区 6ALP KF42 930521	③ 暗灰褐土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高5.9	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 余文研1994「1993年度平城概報」p. 11~23、余文研1994「1994年度年報」p. 15~17		⑧ Ph. 57	
	⑨ 復原脚数24。脚柱・脚台内面横ケズリ。下面ロクロナデ。内縫突出。透孔面切りママ。脚柱貼付痕。444と同一個体。			
446	① 241次	② 内裏東方官街・造酒司地区 6AAD PI11 930518	③ 暗灰褐土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約29 残高5.4	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1994「1993年度平城概報」p. 11~23、奈文研1994「1994年度年報」p. 15~17		⑧ Ph. 57	
	⑨ 復原脚数24? 脚柱・脚台内面ロクロナデ。脚台下折り返して外縫突出、ロクロナデ。脚柱外面前り残しあり。			
447	① 241次	② 内裏東方官街・造酒司地区 6ALP・6AAD ZZ 930624	③ 排土	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 窄帶径約24 残高3.9	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1994「1993年度平城概報」p. 11~23、奈文研1994「1994年度年報」p. 15~17		⑧ Ph. 57	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数36? 外堤欠損。低い突帯1条。復原内面ナデ。106等と胎土形態類似。456と同一個体か。			
448	① 243次	② 東院南辺地区 6ALF AN49 931018	③ 灰褐砂質土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径33.5 残高2.4	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 余文研1994「1993年度平城概報」p. 24~41、余文研1994「1994年度年報」p. 17~19		⑧ Ph. 57	
	⑨ 復原脚数20。薄板状脚台。脚台内面ロクロケズリ。幅広三角形の脚柱刺離。外縫はナデ調整。182など焼成色調類似。			
449	① 243次	② 東院南辺地区 6ALS DE30 930706	③ 灰褐土	SK16275
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外堤径14.8 窪徑10.6 残高3.3	⑥ 侧置 (視部内面降灰)	
	⑦ 奈文研1994「1993年度平城概報」p. 24~41、奈文研1994「1994年度年報」p. 17~19		⑧ PL, 21 Ph. 57	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数16。復原内面ロクロナデ。太い突帯1条。脚柱中央に縱沈線1条。透孔上部に凹線1条。			
450	① 243次	② 東院南辺地区 6ALS DF17 930615	③ 黄褐土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径25.0 窄徑18.8 残高3.2	⑥ 正置 (突帯上面降灰、外堤に重焼痕)	
	⑦ 奈文研1994「1993年度平城概報」p. 24~41、奈文研1994「1994年度年報」p. 17~19		⑧ PL, 21 Ph. 57	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数20。復原脚丸く、広い薄部。突帯が太く外堤が複合口縁状をなす。復原内面有段ロクロナデ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶硯の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 概報・報告		⑧ PL, Ph	
451	① 245-2次	② 東院庭園地区・東面大垣 6ALF BN15 940207	③ 南北溝	SX16305
	④ 円面鏡	⑤ 砥面径23.0 残高2.5	⑥ 倒置? (窓部内面陥灰?)	
	⑦ 奈文研2003『平城報告XVI』(学報69) PL. 92-516、奈文研1994『1993年度平城概報』p. 51-57		⑧ Ph. 58	
	⑨ 窓部面のみ。窓部内面有段ロクロナデ。硯面平滑ロクロナデ。外縁わずかに上肥厚。跡脚円面鏡? 池SG5800への導水路。			
452	① 245-2次	② 東院庭園地区・東面大垣 6ALF BN16 940207	③ バラス土	包含層
	④ 跡脚円面鏡B	⑤ 残高4.6	⑥ 正置 (脚台上面陥灰)	
	⑦ 奈文研2003『平城報告XV』(学報69) PL. 92-516、奈文研1994『1993年度平城概報』p. 51-57		⑧ Ph. 58	
	⑨ 脚柱内面横・斜ケズリ。逆台形脚台、下面・外面ロクロナデ。脚台内端突出。脚柱彫り接合明瞭。透孔面切りママ。			
453	① 245-1次	② 京院南辺地区 6ALF AF56 940204	③ 広括土	包含層
	④ 圏足円面鏡 a	⑤ 外堤径12.0 亂面径9.2 残高2.8	⑥ 正置 (硯面・外堤上面陥灰)	
	⑦ 奈文研1994『1993年度平城概報』p. 24~41、奈文研1994『1994年度年報』p. 17~19		⑧ PL. 21 Ph. 58	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数14。硯面の肩丸く、外周の凹縁線で区切る。窓部内面ロクロナデのちナデ。外堤上端凹縁状。窓面に三角形突帯1条。透孔面切りママ。旗投窓座。			
454	① 245-2次	② 東院庭園地区・東面大垣 6ALF CD18 940120	③ 広括土	包含層
	④ 圏足円面鏡	⑤ 残高3.4	⑥ 倒置? (内外面陥灰)	
	⑦ 奈文研2003『平城報告XV』(学報69) 不掲載、奈文研1994『1993年度平城概報』p. 51~57		⑧ Ph. 58	
	⑨ 幅広脚柱中央縦スジ線1条。透孔下細凹線1条。透孔面切りママ。内外面ロクロナデ。247と類似。248・249と同一か。			
455	① 256次	② 南辺官衛・式部省東官衛地区 6AAI OA48 950513	③ ピット	
	④ 圏足円面鏡	⑤ 残高6.4	⑥ 正置 (外面下半陥灰)	
	⑦ 奈文研1995『1994年度平城概報』p. 15~17、奈文研1995『1995年度年報』p. 76~77		⑧ Ph. 58	
	⑨ 脚柱1本。縦長方形透孔。内外面ロクロナデ。透孔外側面小さく面取り。279に類似。			
456	① 259次	② 内裏東方官衛・造酒司地区南辺 6AAD OS14 950601	③ 黒灰バラス	包含層
	④ 圏足円面鏡	⑤ 突帶径約24 残高3.9	⑥ 正置 (突帶上面・薄部陥灰)	
	⑦ 奈文研1996『1995年度平城概報』p. 4~21、奈文研1996『1996年度年報』p. 12~14		⑧ Ph. 58	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数36。剥離した外堤下に低い突帶1条。窓部内面ナデ。106等と諸柱形態類似。447と同一個体か。			
457	① 259次	② 内裏東方官衛・造酒司地区南辺 6ALQ JB36 950822	③ 東西大溝灰鰐多	SD11600
	④ 圏足円面鏡 c	⑤ 外堤径5.6 砥面径4.4 残高1.3	⑥ 倒置 (窓部内面陥灰・難観者)	
	⑦ 奈文研1996『1995年度平城概報』p. 4~21、奈文研1996『1996年度年報』p. 12~14		⑧ PL. 21 Ph. 58	
	⑨ 縦長方形透孔。復原脚数18。硯面ロクロナデ、中央に疵痕。低い外堤の下部に細突帯1条。肉厚の硯部に寄い脚部。			
458	① 259次	② 内裏東方官衛・造酒司地区南辺 6AAD OK11 950721	③ 橙色バラス	包含層
	④ 圏足円面鏡 a	⑤ 砥面径4.6 残高1.4	⑥ 倒置 (窓部内面陥灰袖状)	
	⑦ 奈文研1996『1995年度平城概報』p. 4~21、奈文研1996『1996年度年報』p. 12~14		⑧ PL. 21 Ph. 58	
	⑨ 縦長方形透孔。復原脚数19。外堤欠損。窓部内外面ロクロナデ。旗投窓座。			
459	① 259次	② 内裏東方官衛・造酒司地区南辺 6AAD OA16 950828	③ 東西大溝褐色粗砂	SD11600
	④ 圏足円面鏡 b	⑤ 外堤径17.7 砥面径11.8 残高2.9	⑥ 倒置 (窓部内面陥灰、付着物あり)	
	⑦ 奈文研1996『1995年度平城概報』p. 4~21、奈文研1996『1996年度年報』p. 12~14		⑧ PL. 21 Ph. 58	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数16。脚柱中央に縱スジ線1条。太い突帶1条。硯面傾斜面ロクロナデ。窓部内面不定ナデ。			
460	① 259次	② 内裏東方官衛・造酒司地区南辺 6ALQ JB38 950821	③ 東西大溝木屑層	SD11600
	④ 圏足円面鏡	⑤ 脚部径15.2 残高2.0	⑥ 倒置 (脚部内面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996『1995年度平城概報』p. 4~21、奈文研1996『1996年度年報』p. 12~14		⑧ PL. 21 Ph. 58	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数24。脚柱外反下肥厚。脚柱外側に透孔切込みの傷。旗投窓座。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕跡)	⑧ PL, Ph
概報・報告				
⑨ 備 考				
461	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6ALQ JB42 950818	③ 東西大溝灰褐色砂・床土 SD11600最下層	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腹部径19.0 残高0.9	⑥ 倒置(脚端内面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ PL, 21 Ph. 58
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数36。脚端上肥厚。内外面ロクロナデ。猿投窓底。			
462	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6ALQ JA39 950927-950817	③ 東西大溝灰褐色砂・床土 SD11600	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腹部径15.9 残高5.1	⑥ 倒置(内面降灰粘状)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ PL, 21 Ph. 58
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数22。脚端外反上肥厚。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。463・467と同一個体。猿投窓底。			
463	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6ALQ JA37 950818	③ 東西大溝上層時灰粘質土 SD11600	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 腹部径15.9 残高3.9	⑥ 倒置(内面降灰粘状)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ Ph. 58
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数22。脚端外反上肥厚。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。462・467と同一個体。猿投窓底。			
464	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6AAD OC16 950831	③ 灰褐パラス SD11600	
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 硬面径10.3 残高1.5	⑥ 正置(突堤上面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ Ph. 59
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数3?。視部内面ロクロナデ。傾斜海道との境に突堤。外堤剥離。外堤下に突堤1条。摩滅顯著。			
465	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6AAD OC16 950901	③ 灰褐パラス SD11600	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高6.0	⑥ 正置(外面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ Ph. 59
	⑨ 長方形透孔。脚柱基部肉厚。脚端外反。内外面ロクロナデ。透孔下に細沈線1条。透孔側面切りママ。466と同一個体。			
466	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6AAD OA13 950820	③ 東西大溝灰褐色砂 SD11600最下層	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高6.3	⑥ 正置(外面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ Ph. 59
	⑨ 長方形透孔。脚柱基部肉厚。脚端外反。内外面ロクロナデ。透孔下に細沈線1条。透孔側面切りママ。465と同一個体。			
467	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6ALQ JA39 950817	③ 床土 包含層	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.1	⑥ 倒置(内面降灰粘状)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ Ph. 59
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数22。脚端外反上肥厚。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。463・462と同一個体。猿投窓底。			
468	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6ALQ JT39 950817	③ 床土 包含層	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.2	⑥ 倒置(脚台内面わずかに降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ Ph. 59
	⑨ 脚柱1本。透孔切り込み斜め、正造三角形か台形透孔か。脚數不明。脚端外反、下肥厚。内外面ロクロナデ。			
469	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6ALQ JA42 950818	③ 東西大溝 木崩層 SD11600	
	④ 形象鏡(鳥形鏡)	⑤ 長径18.9 短径11.7 残高9.3	⑥ 正置(上面降灰、視面部様い浅)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21 図7-1、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ PL, 22 Ph. 59
	⑨ 頭・尾・脚部欠損。頭部寄りにく字形突堤で海部と視面とを区分。頭部に首輪のヘラ描きと墨書きによる羽毛を表現。墨書き「道」。頭部下面に折り曲げた鳥の脚2本貼り付け。両脚間に布目压痕。			
470	① 259次	② 内裏東方官衙・造酒司地区南辺 6ALQ JB38 950802	③ 床土 包含層	
	④ 形象鏡(亀形鏡)	⑤ 長径6.3 短径4.5 残高0.8	⑥ 正置(上面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 4~21 図7-2、奈文研1996「1996年度年報」p. 12~14			⑧ PL, 22 Ph. 59
	⑨ 頭部側の破片。表面頭部側に房状、体部中央に亀平文のヘラ書き。外周ヘラケズりの後ヘラミガキ。内面に針描き×文。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕)	⑦ PL, Ph
	⑧ 備 考			
471	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MM36 951006	③ 喰堀土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 突帯径約24 残高5.8	⑥ 正置 (突帯上面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 復原脚数24? 肉薄で外傾する外堤の脚部が丸い。外堤下に突帯2条。鏡部下半内面横ケズリ。			
472	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MJ35 951009	③ 喰堀土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高4.4	⑥ 正置 (外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 肉厚幅広の脚柱1本。脚柱内面縦ケズリ、外面の縦ケズリは彌を描く。脚柱飾り接合痕明瞭。			
473	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MN37 951005	③ 喰堀土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径20.4 残高4.2	⑥ 正置 (脚臼上面薄く陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面ロクロナデ。脚台下外面ロクロナデ。内端突出。透孔内側面取り。脚柱外面削り残しあり。			
474	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MO36 951006	③ 喰堀土	包含層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 残高4.2	⑥ 正置 (外面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 低い脚柱。脚柱内面横ケズリ。脚台下外面ロクロナデ。脚台外端突出。209・344・406など類似。			
475	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MH30 960110	③ 柱穴①抜取	SB16800
	④ 円面鏡	⑤ 鏡面径19.0 残高2.0	⑥ 正置 (海部かすかに陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 瓦部内面有段ロクロナデのち不定方向ナデ。鏡面中央部垂下。輕扶平坦な海部。脚台円面鏡Bか。奈良前半の東第六堂。			
476	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MM31 951017	③ 喰堀土	包含層
	④ 円面鏡	⑤ 長径5.2 短径3.0 厚さ0.6	⑥ 倒置 (内面薄く陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 薄手の鏡面中央部片。鏡面裏ロクロナデ。鏡面摩滅。鏡面重ね焼痕。踏脚円面鏡か。			
477	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MK30-ML31 951215-961215	③ 上層基壇土・北東抜取穴	SB16850
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径28.2 残高1.8	⑥ 倒置 (脚部内面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ PL. 22 Ph. 60	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数38。脚部下半外曲、端部下肥厚。透孔内側面取り。479・478と同一。奈良時代後半の東第六堂基壇土。			
478	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MK30 951215	③ 上層基壇土	SB16850基壇土
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.6	⑥ 倒置 (内面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数38。477・479と同一個体の脚柱。透孔内側面取り。奈良時代後半の東第六堂基壇土。			
479	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MK30 951215	③ 上層基壇土	SB16850基壇土
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.0	⑥ 倒置 (内面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数38。477・478と同一個体の脚柱。透孔内側面取り。奈良時代後半の東第六堂基壇土。			
480	① 261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MH33 951227	③ 南壁沿い断割	
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径29.6 残高2.1	⑥ 正置 (突帯上面陥灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 22~29、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 60	
	⑨ 縱長方形透孔。復原脚数44。脚台に凹線による突帯2条。脚台内・下・外側ロクロナデ。481・493と同一個体。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成(窯痕跡)	
	⑦ 資料・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
481	① 265・261次	② 東区朝堂院地区・東第六堂 6AAV MB18-MH30 960219-960111	③ 稲荷土・柱穴①抜取	SB16800
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 總足徑21.3 脚部徑29.6 残高9.2	⑥ 正置(突唇上面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ PL, 22 Ph. 60	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數44。肉厚。透孔の上下に突帶各2条。脚柱内面横ケズリ。覗部内面ロクロナデ、中央部ナデ。透孔側面切りママ。底面に墨痕。480と同一個体。267次の493と接合。SB16800は奈良時代前半の東第六堂。			
482	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAV MD31 960130	③ 茶樹土	包含層
	④ 跳脚円面鏡 B	⑤ 脚部徑約30 残高5.4	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 61	
	⑨ 復原脚數24? 脚柱内側頗広い面取り。脚台内外面ロクロナデ。脚台内端突出。494に類似。			
483	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAV MB46 960215	③ 稲荷土	包含層
	④ 跳脚円面鏡 B	⑤ 残高5.3	⑥ 正置(脚台上面降灰等状)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 61	
	⑨ 脚柱1本。脚柱内面横ケズリのちナデ。脚柱外面前り残しあり。脚台内端小さく突出。484と同一個体か。			
484	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAV MD36 960214	③ 土坑①	
	④ 跳脚円面鏡 B	⑤ 残高6.8	⑥ 正置(脚台上面降灰等状)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 61	
	⑨ 脚柱内面横ケズリ後ナデ。脚柱外面前り残し。台形脚台の下・外面ロクロケズリ後ナデ。483と同一個体か。			
485	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAV ME33 960213	③ 穴②	
	④ 跳脚円面鏡 B	⑤ 脚部徑約30 残高6.0	⑥ 正置(脚台上面降灰等状)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 61	
	⑨ 刻柱内面横・斜めケズリ。外面削り残し。脚台下・外面ロクロケズリ後ナデ。内端突出。脚部491、覗部492と同一個体。			
486	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAV MC33 960131	③ 茶樹土	包含層
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 脚部徑28.8 残高2.1	⑥ 正置(外側降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ PL, 22 Ph. 61	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數30。透孔下に突帶1条。外輪脚底部太厚壁。342・350・431などと胎土・形態類似。			
487	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAW LD35 960223	③ 菊地北南落溝	
	④ 圓足円面鏡 b	⑤ 外徑14.0 亂面徑10.0 残高2.6	⑥ 正置(突唇上面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ PL, 22 Ph. 61	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚數15。復部内面不定方向ナデ。他はロクロナデ。薄手の外堤端部凹線状。外堤下に長い突唇1条。硯面覆い焼。奈良時代後半の朝堂院を跨む墓地の屋礎土。			
488	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAW LE46 960220	③ 菊地北南落溝	SD17011
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.4	⑥ 正置(脚柱外側降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 61	
	⑨ 細長方形透孔。脚柱内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。SD17011は奈良時代後半の朝堂院北南落溝。			
489	① 265次	② 東区朝堂院地区・南門(会昌門) 6AAV MD31 960130	③ 茶樹土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.8	⑥ 銅置(内面降灰)	
	⑦ 奈文研1996「1995年度平城概報」p. 31~38、奈文研1996「1996年度年報」p. 14~16		⑧ Ph. 61	
	⑨ 細長方形透孔。脚數不明。脚柱内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。			
490	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面築地 6AAW LE23 960607	③ 菊地北南落溝	SD17011
	④ 跳脚円面鏡 B	⑤ 脚部徑約30 残高5.4	⑥ 正置(脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1997「年報1997-III」p. 4~13		⑧ Ph. 61	
	⑨ 脚柱・脚台内面横ケズリ。脚台内端突出。透孔側面切りママ。脚柱外面前り残しあり。奈良時代後半の菊地北南落溝。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 燐成（窓痕跡）	
	⑦ 標 告		⑧ PL, Ph	
491	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAV MD25 960507	③ 蒸焗バラス	包含層
	④ 跖脚円面観B	⑤ 脚部径約30 残高6.1	⑥ 正置（脚台上面降灰状）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ Ph. 61	
	⑨ 脚柱内面横ケズり。脚柱外面前り残し。脚台下外面ロクロケズリのちナデ。脚台内端突出。485・492と同一個体。			
492	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW LE25-LE27 960605-960606	③ 瓦堆積・瓦堆積	SD17011上層
	④ 跖脚円面観B	⑤ 突唇径25.3 突唇高20.4 残高5.4	⑥ 正置（外堤内側まで降灰）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ PL. 23 Ph. 61	
	⑨ 球形脚頭削離。復原脚数24。海部傾斜面。外堤下に門線による突帯2条。窓部内面無段ロクロナデ。下半横ケズリ。奈良時代後半の南面墓地北雨落溝SD17011の上層。脚台485・491と同一個体。			
493	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAV ME36 960308	③ 橙褐土	包含層
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径29.6 残高3.0	⑥ 正置（突帶上面降灰）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ Ph. 61	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数44。脚台に凹線2条による突帯2条。脚台内・下・外面ロクロナデ。480と同一個体。481と接合。			
494	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW LE28 960513	③ 雨落溝	SD17011
	④ 跖脚円面観B	⑤ 脚部径27.2 残高5.6	⑥ 正置（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ PL. 23 Ph. 62	
	⑨ 復原脚数24。脚柱内面横ケズリ。透孔内側面広く面取り。台形脚台、内外面ロクロケズリ後ロクロナデ。内端突出。			
495	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW LC27 960607	③ 黄褐土	SD16940の上
	④ 跖脚円面観B	⑤ 脚部径27.6 残高6.3	⑥ 正置（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ PL. 23 Ph. 62	
	⑨ 復原脚数22。脚柱脚台内面横ケズリ後ナデ。脚台内端突出。透孔内側面小さく面取り。496と同一個体。整地築造時？			
496	① 267・32次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW LB27 960410 6AAI ZZ 660000	③ 黄褐土	SD16940の上
	④ 跖脚円面観B	⑤ 脚部径27.6 残高6.2	⑥ 正置（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ Ph. 62	
	⑨ 異地点接合。復原脚数22。脚柱脚台内面横ケズリのちナデ。脚台内端突出。透孔内側面小さく面取り。495と同一個体。			
497	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW KR14 960530	③ 南北溝 下層	SD17351
	④ 跖脚円面観A	⑤ 脚部径32.2 残高2.5	⑥ 倒置（脚台下面降灰状）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ PL. 23 Ph. 62	
	⑨ 復原脚数45。板状脚台中央に細棒状脚柱。脚台内外面ロクロナデ、下面板状直痕。溝は上層墓地造営時、奈良時代前半。			
498	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW KT14 960529	③ 南北溝	SD17351
	④ 跖脚円面観B	⑤ 外堤径23.7 突唇径18.6 残高4.0	⑥ 正置（突帶上面降灰）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ PL. 23 Ph. 62	
	⑨ 復原脚数24。窓部内面有段ロクロナデ。窓部下横ケズリ。外堤下突唇2条。溝は上層墓地造営時、奈良時代前半。			
499	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW KR11 960703	③ 東西大溝 中層	SD17352
	④ 圓足円面観a	⑤ 外堤径26.1 残高4.8	⑥ 倒置（窓部内面降灰状）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ PL. 23 Ph. 63	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24。複合口縫様の外堤。内外面ロクロナデ。503と同一個体。溝は上層墓地造営時。			
500	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面墓地 6AAW KQ21 960523	③ 黄灰土	包含層
	④ 圓足円面観a	⑤ 外堤径27.3 残高4.0	⑥ 正置（突帶上面降灰）	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-III』p. 4~13		⑧ PL. 23 Ph. 63	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24。肉厚外堤。窓部内面有段ロクロナデ。透孔上部に三角形突帯1条。456などに形状胎土類似。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 遺構・層序	遺構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (紫痕跡)	⑧ PL, Ph
⑦ 資料・報告				
501	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面塗地 6AAW LC14 960524	③ 茶褐パラス	包含層
	④ 圈足円面鏡	⑤ 残高5.2	⑥ 正置 (突帯上面・外側降灰)	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-II』p.4~13		⑧ Ph. 63	
	⑨ 長方形透孔。脚柱肉厚。脚柱内傾面に火漆き。透孔下に突帯1条。内外面ロクロナデ。			
502	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面塗地 6AAW LE28 960415	③ 茶色粘質土	包含層
	④ 圈足円面鏡	⑤ 脚部径約33 残高4.2	⑥ 正置 (外側降灰)	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-II』p.4~13		⑧ Ph. 63	
	⑨ 長方形透孔。透孔数不明。透孔下に三角形突帯1条。429などと形態・胎土が類似。			
503	① 267次	② 東区朝堂院地区・南面塗地 6AAW KR11 960703	③ 東西大溝 下層	SD17352
	④ 圈足円面鏡	⑤ 脚部径28.2 残高3.6	⑥ 倒置 (脚部内側降灰)	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-II』p.4~13		⑧ PL. 23 Ph. 63	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数24。外曲する脚部。脚柱外側面取り。透孔下に細沈線1条。複合口縁形外堤の499と同一個体か。			
504	① 273次	② 南辺官衙・式部省東官衙地区 6AAI BR28 961030	③ 灰褐色上	包含層
	④ 踏脚円面鏡 A	⑤ 脚部径26.5 残高2.0	⑥ 倒置 (脚台下面降灰)	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-II』p.31~40		⑧ PL. 23 Ph. 63	
	⑨ 復原脚数18。扁平な板状脚台上面にV字形柱状脚柱、内側に補強粘土。脚台内外面ロクロケズリ。下面ケズリ。			
505	① 273次	② 南辺官衙・式部省東官衙地区 6AAI BR33 961112	③ 東西溝①	SD17515
	④ 円面鏡 (無脚)	⑤ 外堤径17.8 岩面径13.8 器高1.3	⑥ 倒置 (底部外側降灰・外堤以内重焼)	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-II』p.31~40		⑧ PL. 24 Ph. 63	
	⑨ 視内部内面有段ロクロナデ。海部表ロクロケズリ。視面外縁明確な様。観脚の可能性あり。奈良時代末の官衙北墓地雨落溝。			
506	① 273次	② 南辺官衙・式部省東官衙地区 6AAI BO25 961028	③ 灰褐色上	包含層
	④ 圈足円面鏡	⑤ 残高4.4	⑥ 正置? (外側にわずかな降灰)	
	⑦ 奈文研1997『年報1997-II』p.31~40		⑧ Ph. 63	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。内外面ロクロナデ。透孔外側面かすかに面取り。胎土・色調から507と同一個体か。			
507	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BQ20 970423	③ 深木桐層	SD3410
	④ 圈足円面鏡	⑤ 残高7.3	⑥ 正置? (外側にわずかな降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ Ph. 63	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。脚幅1.6cm。透孔下端に沈線1条。大きさ・胎土・色調から506と同一個体か。			
508	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BC14 970424	③ 百側溝 茶灰土	SD4951最上層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 突堤径24.8 視面径20.0 残高5.6	⑥ 正置 (突堤上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ Ph. 64	
	⑨ 復原脚数24。外頬気味の外堤刺離。突帯2条。脚頭3個刺離。視部内面ロクロナデ。510と同一個体。奈良時代後半以降。			
509	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BE14 970430	③ 百側溝 茶灰土	SD4951最上層
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 脚部径約31 残高4.3	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ Ph. 64	
	⑨ 脚柱2本。復原脚数24。脚柱内面・脚台下面横ケズリ。脚台内外面ナデ。透孔内舞面切りママ。脚柱貼付法明瞭。			
510	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BC14 970411	③ 淡白土	SD4951泥塗土
	④ 踏脚円面鏡 B	⑤ 突堤径24.8 視面径20.0 残高3.6	⑥ 正置 (突堤上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ PL. 24 Ph. 64	
	⑨ 復原脚数24。外頬気味の外堤刺離。突帯2条。脚頭3個刺離。視部内面ロクロナデ。508と同一個体。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶視の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕跡)	
	⑦ 標報・報告		⑧ PL, Ph	
511	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BD13 970507	③ 西側溝 木肩層	SD4951最下層
	④ 圓足円面観 a	⑤ 外堤径27.8 窯面径21.7 残高4.1	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15		⑧ PL 24 Ph. 64	
	⑨ 細長方形透孔。復原脚数36。器壁内厚。直立する外堤端部内傾面。外堤下突帯2条。窯部内面ナデ。481と形状類似。			
512	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BR21 970617	③ 東西溝 砂疊層	SD1751
	④ 圓足円面観 a	⑤ 外堤径23.2 窯面径17.3 残高4.4	⑥ 倒置 (突帯下面・内面降灰軸状)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15		⑧ PL 24 Ph. 64	
	⑨ 十字形透孔。復原脚孔数15。傾面より低い外堤。端部平坦。長い突帯1条。内外面ロクロナデ。窯面に細かな擦痕。			
513	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BJ19 970602	③ 南北大溝①砂疊層	SD3410最下層
	④ 圓足円面観 a	⑤ 外堤径14.4 窯面径8.4 残高2.4	⑥ 倒置 (窓部内面降灰軸状・溶着物)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15 図9-79		⑧ PL 24 Ph. 64	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数20。窯而外周に小突帯。傾斜する広い海部。内外面ロクロナデ。外堤以内に墨痕。			
514	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BO14 970610	③ 西側溝 木肩層	SD4951最下層
	④ 龍字窯	⑤ 残存長12.9 残存幅10.5 残高1.5	⑥ 倒置 (窓部裏面降灰軸状)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15 図9-78		⑧ PL 24 Ph. 65	
	⑨ 眉形突帯で海部を区分。窯面は製作り。窯頭～窓縁に外堤。窯尻は直線。窯尻側の円形剥離痕。窓縁割り。窓投落痕。			
515	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BO19 970619	③ 南北大溝①砂疊層	SD3410
	④ 円形窯(輪状高台)	⑤ 外堤径21.2 高台径18.1 器高3.6	⑥ 倒置 (窓部裏面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15 図9-80		⑧ PL 24 Ph. 65	
	⑨ 皿状の窓部に内傾面をもつ高い高台が付く。内外面ロクロナデ。窯面中央部不定方向の擦痕。奈良時代後半の堆積層。			
516	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BB13 970501	③ 西側溝 黒灰粘土	SD4951上層
	④ 形象窯	⑤ 残存幅5.7 残存幅7.8 残高2.4	⑥ 倒置 (窓部裏面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15 図9-81		⑧ PL 24 Ph. 65	
	⑨ 截頭形の窓頭。双弧形の海部。周縁底面ともケズリ。裏に6角形剥離痕2個。窓頭部に方形剥離痕。517と同一個体。			
517	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BD14 970506	③ 西側溝 灰泥砂	SD4951中層
	④ 形象窯	⑤ 残存幅6.5 残存幅2.3 残高2.4	⑥ 倒置 (窓部裏面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15 図9-81		⑧ PL 24 Ph. 65	
	⑨ 弧状の外縁に突帯状外堤。周縁ケズリ。裏面不定方向ケズリ、6角形剥離痕1個。516と同一個体。報告では宝珠觀。			
518	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BL20 970611	③ 南北大溝①砂疊層	SD3410
	④ 膝脚円面観?	⑤ 窯面径21.0 残高2.1	⑥ 正置 (窓面一部降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15		⑧ Ph. 66	
	⑨ 大型優面部のみ。窓部内面有段ロクロナデ後ナデ・当具痕? 延面ロクロナデのち不定方向ナデ。奈良時代後半の堆積層。			
519	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BN14 970611	③ 西側溝 木肩層	SD4951最下層
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径12.0 残高3.8	⑥ 倒置 (内面降灰軸状)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15		⑧ PL 24 Ph. 66	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数12。玉縁形脚部の肩に網突帯、下端は内外肥厚。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。			
520	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BC13 970506	③ 西側溝 灰褐砂	SD4951
	④ 圓足円面観	⑤ 脚部径25.0 残高6.7	⑥ 正置 (突帯上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-Ⅲ』p.4~15		⑧ PL 24 Ph. 66	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数26。脚台上半に突帯3条。脚台下面内端突出。内外面ロクロナデ。透孔側面切りママ。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶器の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成 (窯痕)	⑧ PL, Ph
⑦ 概報・報告				
⑨ 備 考				
521	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BN14 970611	③ 西脚溝木層層	SD4951最下層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高5.6	⑥ 倒置 (脚柱内外面降灰状)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ Ph. 66	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。内外面ロクロナデ、内面のロクロ日顕著。透孔側面切りママ。猿投窓底。			
522	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BK20 970611	③ 南北大溝①沙深層	SD3410
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高8.2	⑥ 正置 (突帝上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ Ph. 66	
	⑨ 長方形透孔。透孔上部に三角形突起1条。透孔下に細沈線1条。透孔側面4隅面取り。奈良時代後半の堆積層。			
523	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BQ19 970616	③ 南北大溝①沙深層	SD3410
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高6.1	⑥ 倒置 (脚柱上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ Ph. 66	
	⑨ 長方形透孔。透孔上部に三角形突起1条。透孔下に細沈線1条。透孔側面4隅面取り。奈良時代後半の堆積層。			
524	① 274次	② 式部省東・東面大垣地区 6AAI BJ19 970602	③ 南北大溝①沙深層	SD3410
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.6	⑥ 倒置 (脚柱上面降灰)	
	⑦ 奈文研1998『年報1998-II』p.4~15		⑧ Ph. 66	
	⑨ 脚柱1本。長方形透孔。脚柱上部内厚。外表面斜方向ケズりか。内面ロクロナデ。奈良時代後半の堆積層。			
525	① 292次	② 東院西辺地区 6ALR FP26 980520	③ 黄灰土	包含層
	④ 圓足円面鏡c	⑤ 外径12.5 硬面径9.0 残高1.5	⑥ 倒置 (内面降灰状)	
	⑦ 奈文研1999『年報1999-II』p.36~45		⑧ PL. 24 Ph. 66	
	⑨ 幅広長方形透孔。復原脚数6。外傾する長い外堤。突帝より下の脚部が内湾。砌面外縁に小突帯、中央に重焼痕(径6cm)。			
526	① 296次	② 第一次大極殿院地区・西南隅 6ABR ED65 981127	③ 赤褐バース	包含層
	④ 踏脚円面鏡B	⑤ 脚部径約30 残高5.2	⑥ 正置 (脚台上面降灰)	
	⑦ 奈文研1999『年報1999-II』p.17~23		⑧ Ph. 66	
	⑨ 脚柱1本。脚柱内面横ケズリ。脚柱外面に削り残しあり。透孔側面小さく面取り。脚台下外面ロクロナデ、外端突出。			
527	① 305次	② 第一次大極殿院地区・西面墓地回廊 6ABP IE68 990825	③ 灰色炭混土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径17.7 残高3.0	⑥ 倒置 (突帝下面降灰)	
	⑦ 奈文研2000『年報2000-II』p.14~23		⑧ PL. 24 Ph. 67	
	⑨ 長方形(十字形?)透孔。復原脚数8。脚柱頗広。透孔下に突帝1条。脚端下面に同様の重焼痕。内外面ロクロナデ。透孔外側面取り。灰色炭混土はⅡ期の塗地SC14280の崩壊土。伴出土器も奈良時代末。			
528	① 305次	② 第一次大極殿院地区・西面墓地回廊 6ABP ID72 990818	③ 灰色粘土	包含層
	④ 圓足円面鏡	⑤ 残高4.2	⑥ 倒置 (脚端下面降灰?)	
	⑦ 奈文研2000『年報2000-II』p.14~23		⑧ Ph. 67	
	⑨ 長方形透孔。復原透孔数8? 幅広脚柱に粗沈線6条以上。脚端外反。内外面ロクロナデ。近現代遺物を含む。			
529	① 315次	② 第一次大極殿院地区西方 6ACC LI18 20000605	③ SD3825 暗黒粘土	SD3825
	④ 圓足円面鏡 a	⑤ 外堤径8.3 硬面径5.4 残高2.2	⑥ 正置 (脚柱内外面降灰状)	
	⑦ 奈文研2001『紀要2001』p.92~97		⑧ PL. 24 Ph. 67	
	⑨ 長方形透孔。復原脚数10。海部傾斜。外堤側面彫刻波状文。内外面ロクロナデ。外堤上の重焼痕に墨痕。猿投窓底。			
530	① 315次	② 第一次大極殿院地区西方 6ACC LI18 20000605	③ SD3825 灰色砂	SD3825
	④ 圓足円面鏡	⑤ 脚部径8.7 残高3.1	⑥ 倒置 (脚柱内面降灰)	
	⑦ 奈文研2001『紀要2001』p.92~97		⑧ PL. 24 Ph. 67	
	⑨ 長方形と縱長十字形透孔。復原脚数16。外側する脚部端上下肥厚。内外面ロクロナデ。猿投窓底? 奈良時代後半の溝。			

番号	① 次 数	② 出土地点	③ 造構・層序	造構番号
	④ 陶現の種類	⑤ 法 量	⑥ 焼成（窯痕跡）	
	⑦ 簿報・報告		⑧ PL, Ph	
	⑨ 備 考			
531	① 346次	② 朝集殿院東地区 6AAH DG65 20030314	③ 瓦塗り	SD11990
	④ 踏脚円面観 A	⑤ 脚部径26.2 残高6.3	⑥ 正置（脚台上面降灰）	
	⑦ 奈文研2004『紀要2004』p. 128~135 図144-2		⑧ PL, 24 Ph. 67	
	⑨ 厚い脚台に細底状脚柱。復原脚数19。脚台上面ナデ、他はロクロケズリ。436と同一個体か。遺構は奈良時代前半。			
532	① 355次	② 朝集殿院地区内庭 6AAAX IP16 20030415	③ 茶灰土	包含層
	④ 踏脚円面観 B	⑤ 突唇径25.7 視面径19.8 残高4.4	⑥ 正置（突帯上面降灰状）	
	⑦ 奈文研2004『紀要2004』p. 128~135 図144-1		⑧ PL, 24 Ph. 67	
	⑨ 復原脚数24？ 外堤下に突唇 2条。大紋脚頭。観部内面有段ロクロナデ、海部裏に沈線 1条。外堤以内は複い焼。			
533	① 000次	② 宮内省東南方 6AAD ?? 980599	③ 表採	
	④ 踏脚円面観 B	⑤ 視面径20.8 残高4.8	⑥ 正置（突帯上面降灰）	
	⑦		⑧ PL, 24 Ph. 67	
	⑨ 復原脚数21。円柱形で高い脚頭。観部内面有段ロクロナデ、中央部に压痕。裏面ミガキ状平滑。			

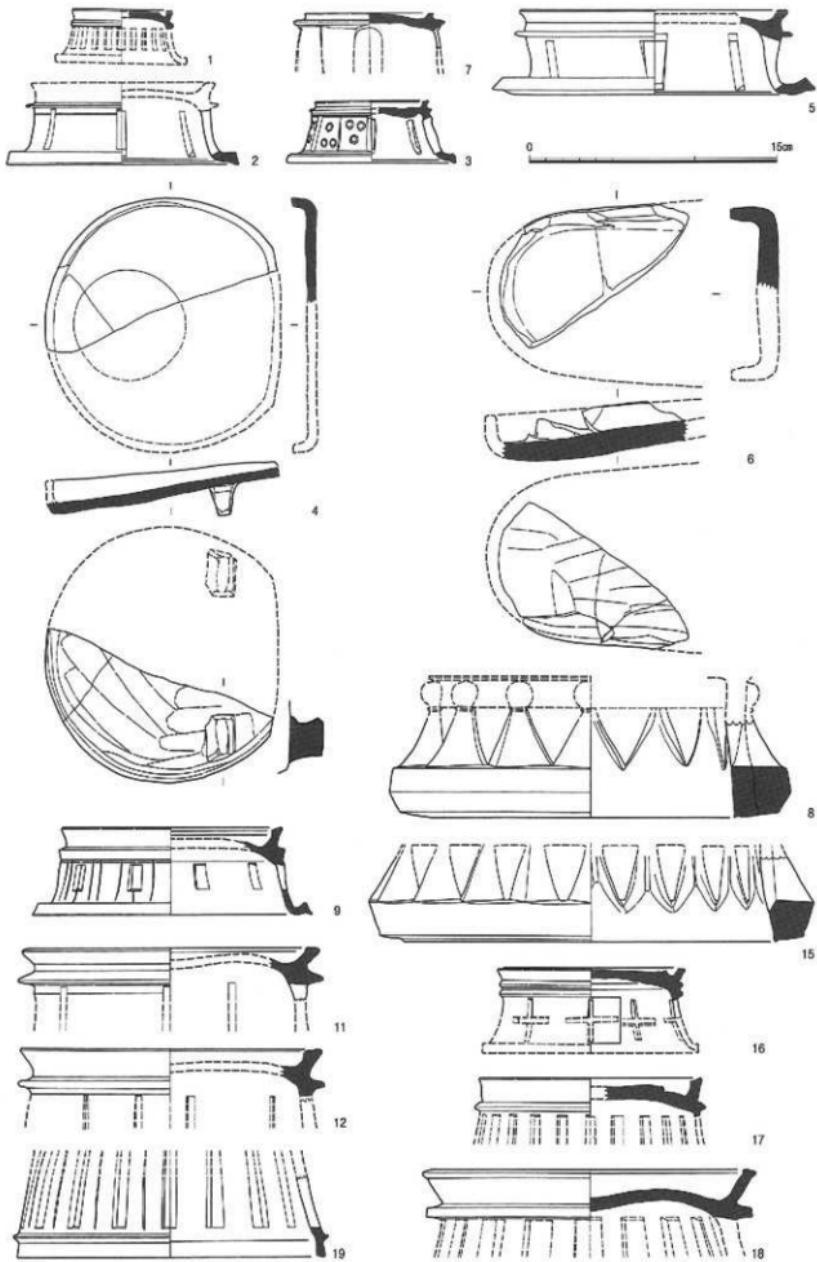
# V. 実測図版

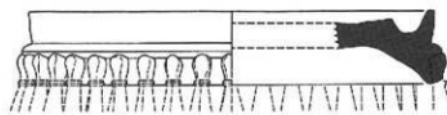
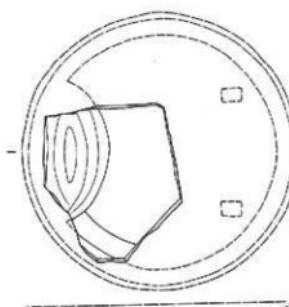
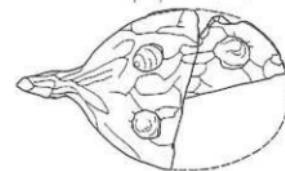
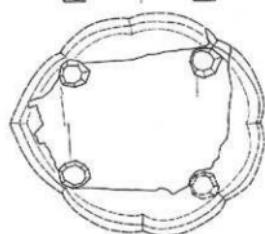
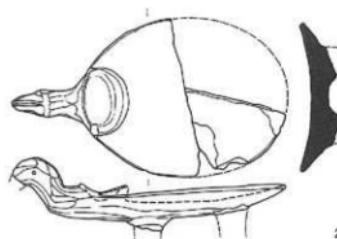
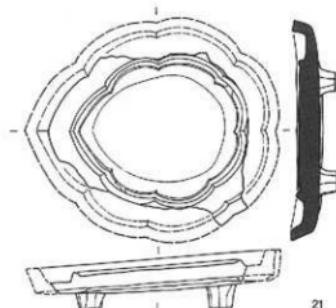
## 凡　　例

- ① 実測四面の縮尺は3分の1である。
- ② 同一個体と判断されるものについて  
は合成して作図したるものがあり、「-」  
を用いて番号を併記した。また、作図  
の参考としたものを（ ）で示した。
- ③ 本書に合わせて再実測し、既刊の報  
告、概要などに掲載の実測図と異なる  
ものがある。また、復原は最小限にと  
どめた。

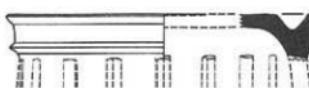
1~9 • 11~12 • 15~19

PL. 1

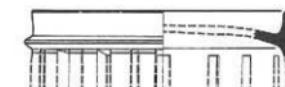




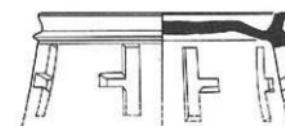
24



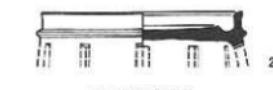
29



30



32



0 20cm



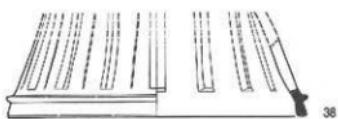
33



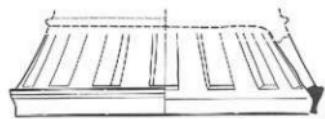
36



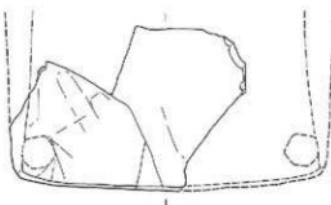
35



38



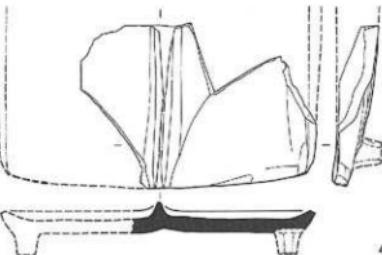
37



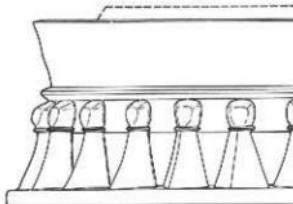
1



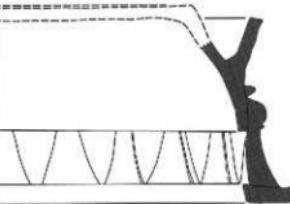
2



40



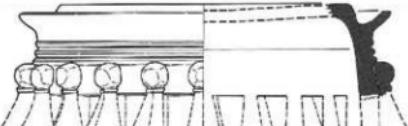
42



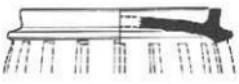
44



46



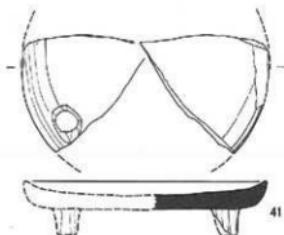
50



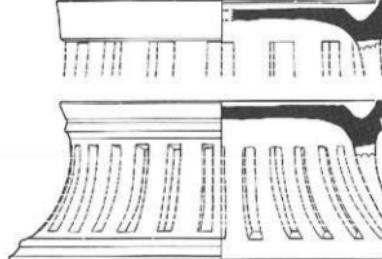
45



52



41

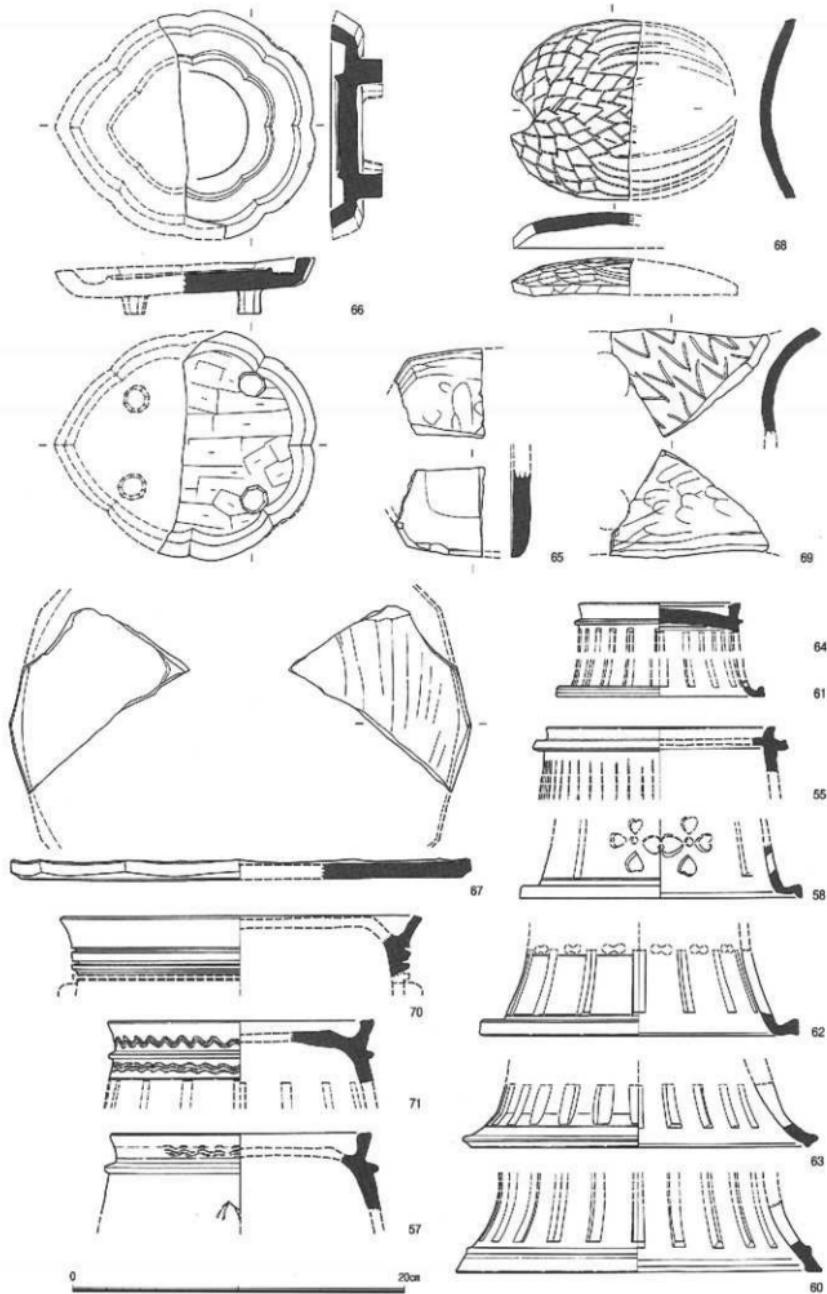


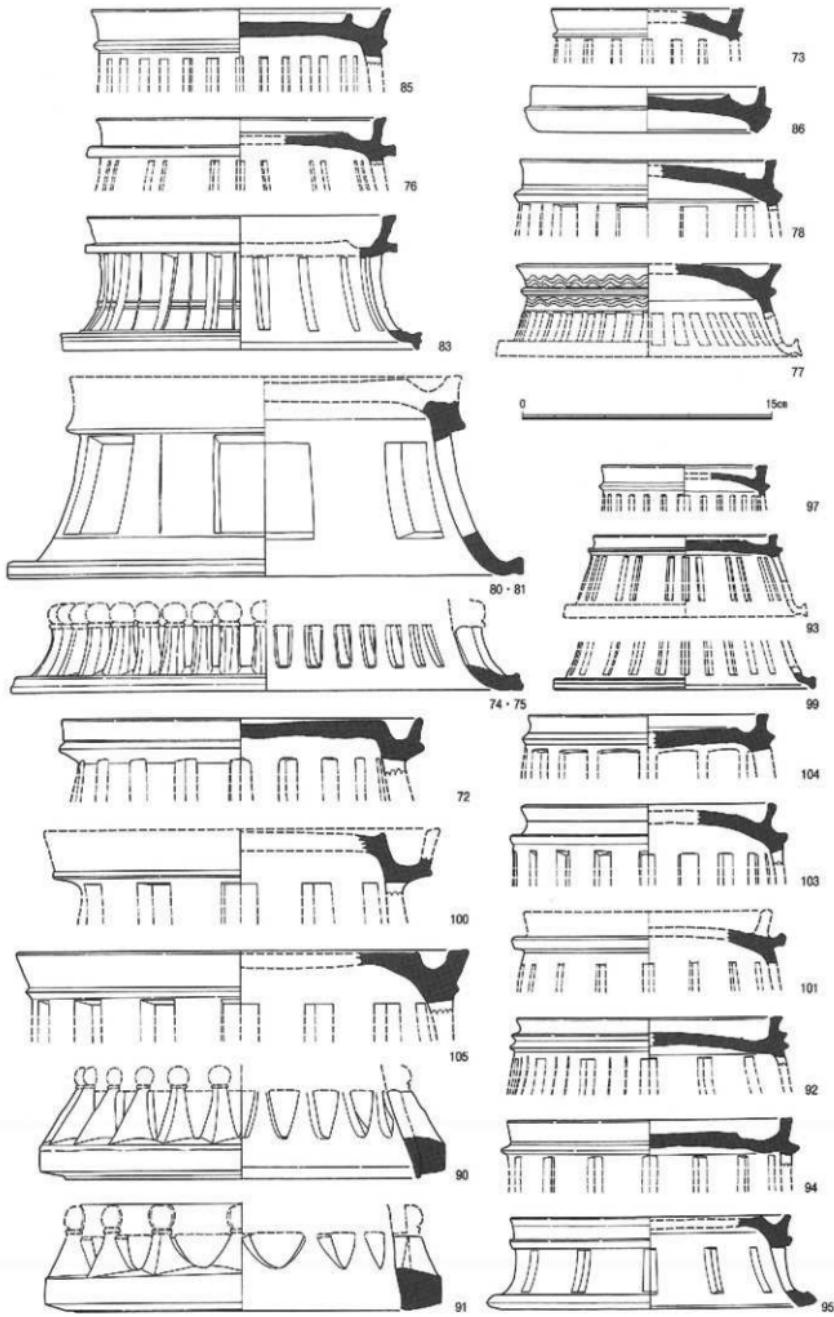
53

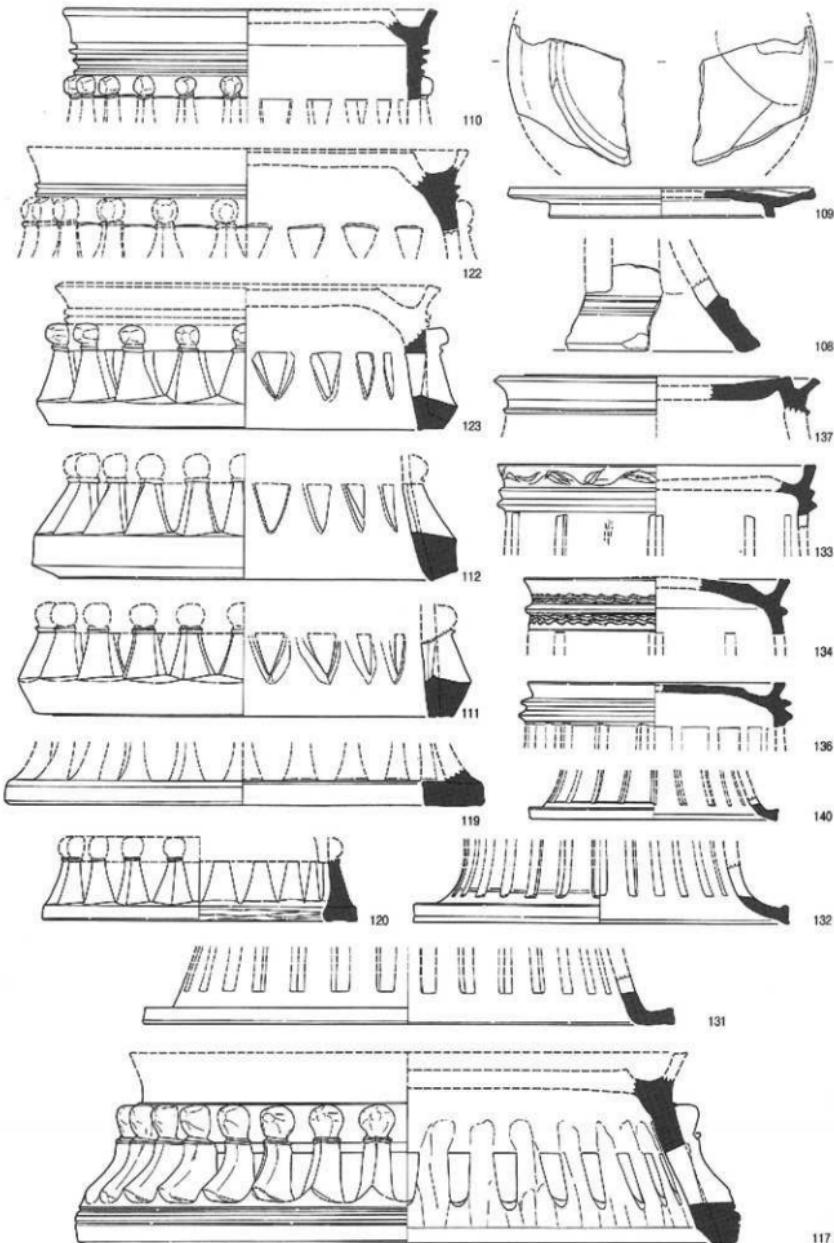
54

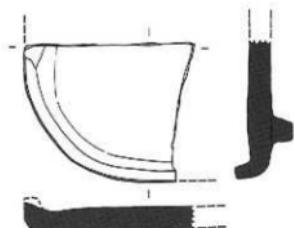
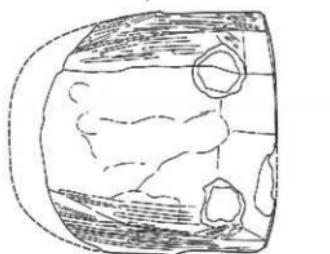
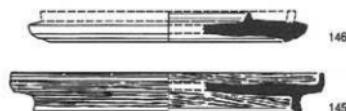
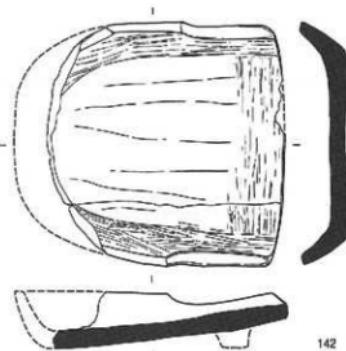
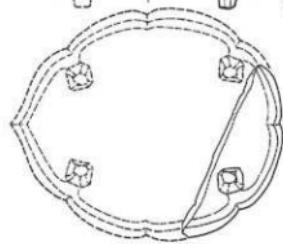
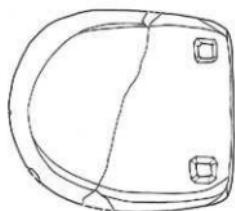
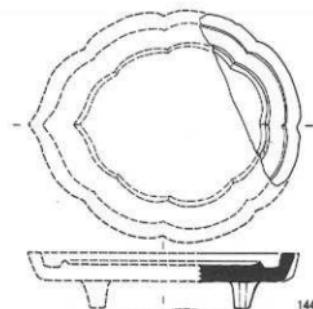
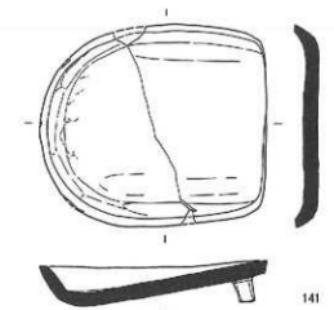
0

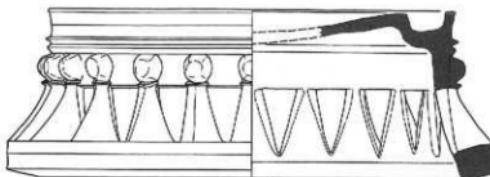
20cm



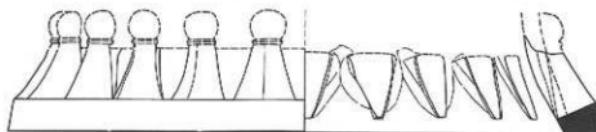




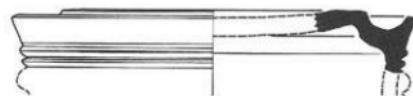




147



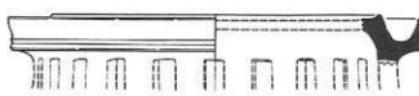
150



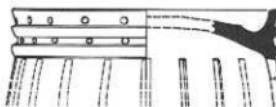
149



152



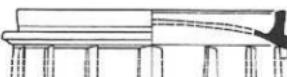
151



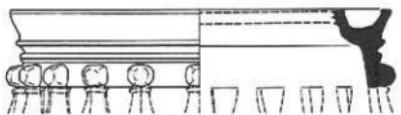
154



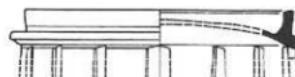
153



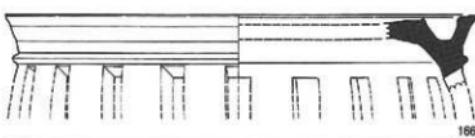
155



161



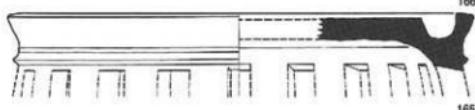
156



166



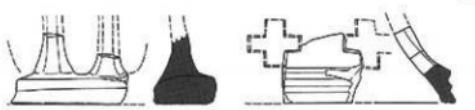
157



165



159

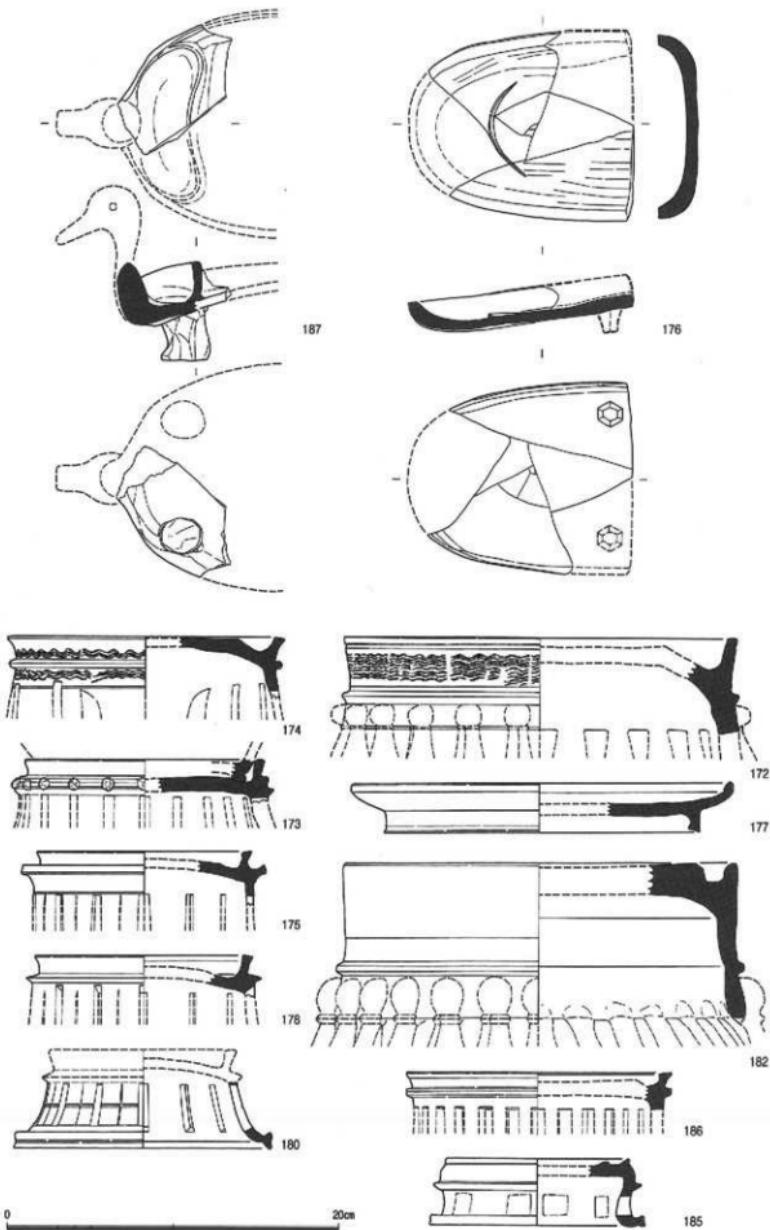


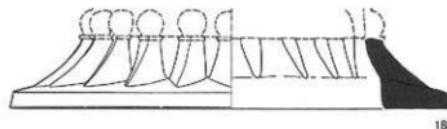
162



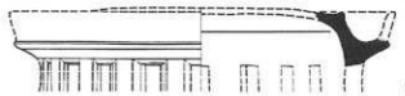
163

0 20cm

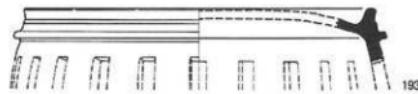




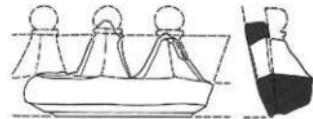
188



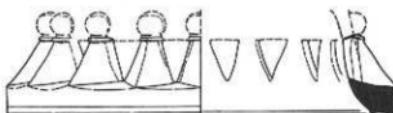
189



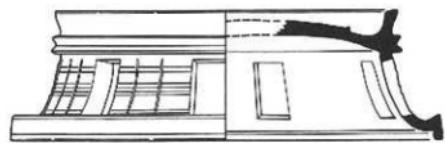
193



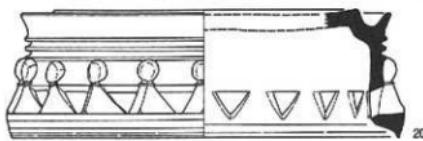
200



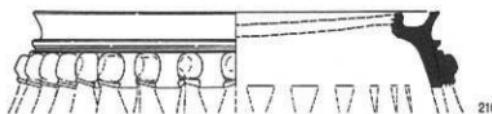
201



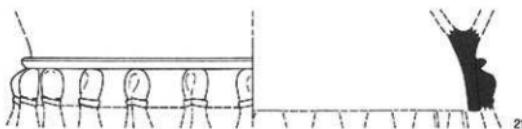
203



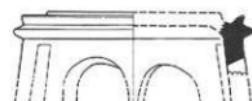
209



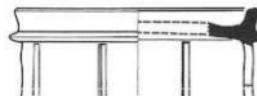
210



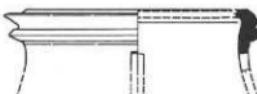
211



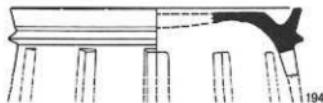
190



191



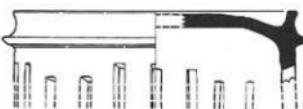
192



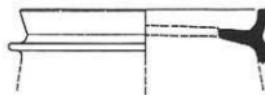
194



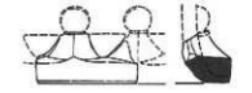
195



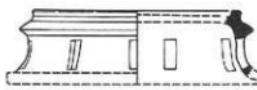
204



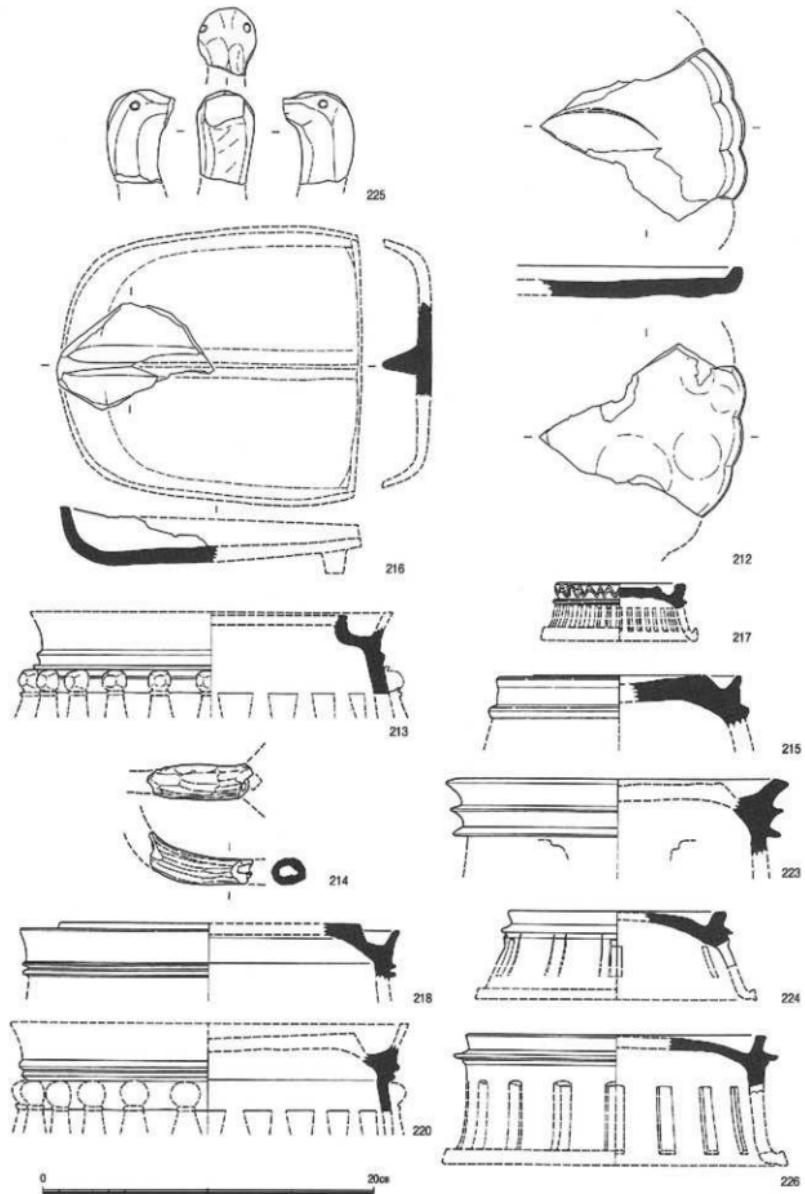
205

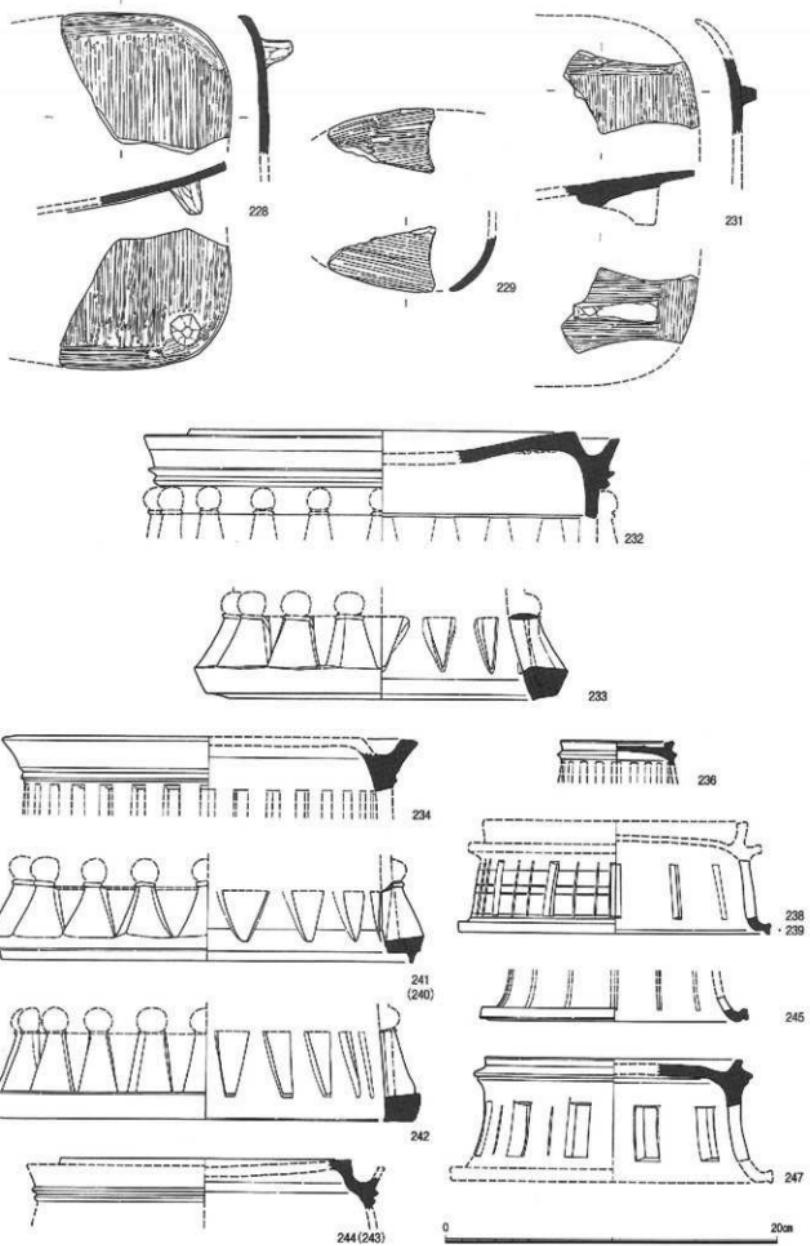


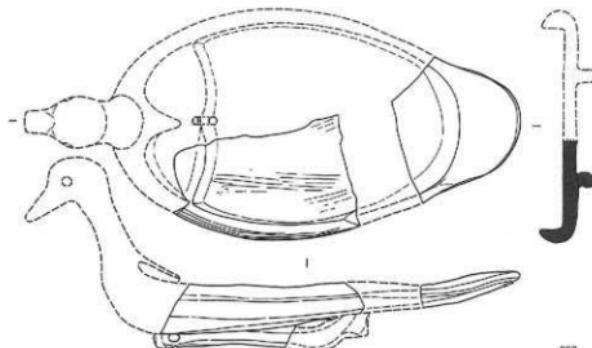
207

208  
(425)

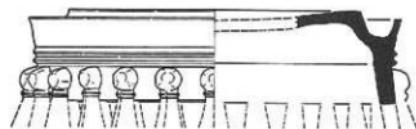
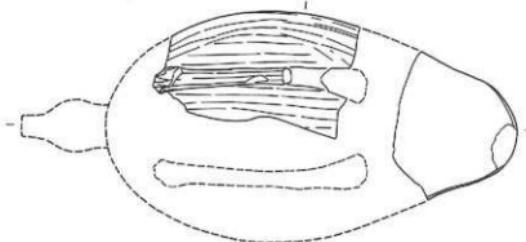
0 15cm



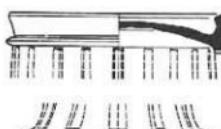




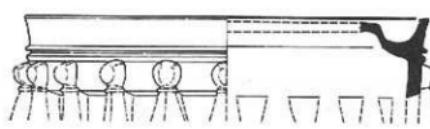
250



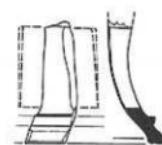
252



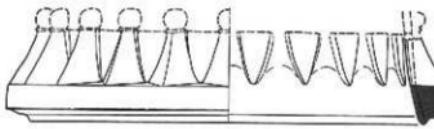
264



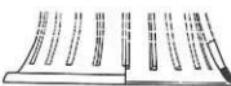
255



266



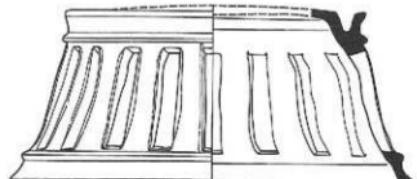
260



273

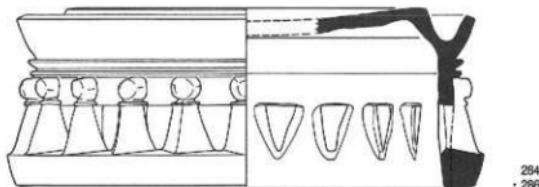
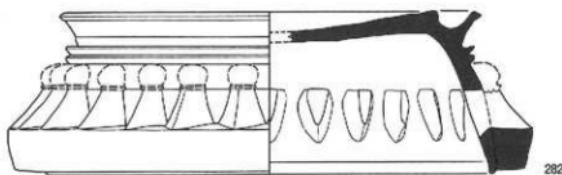


262

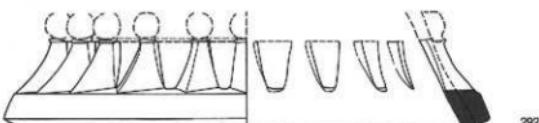


279

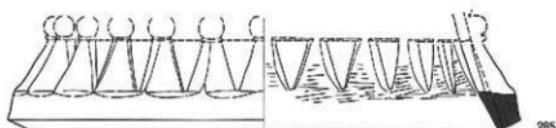
0 15<sup>mm</sup>

284  
· 286

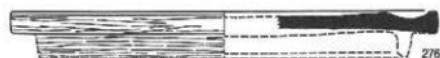
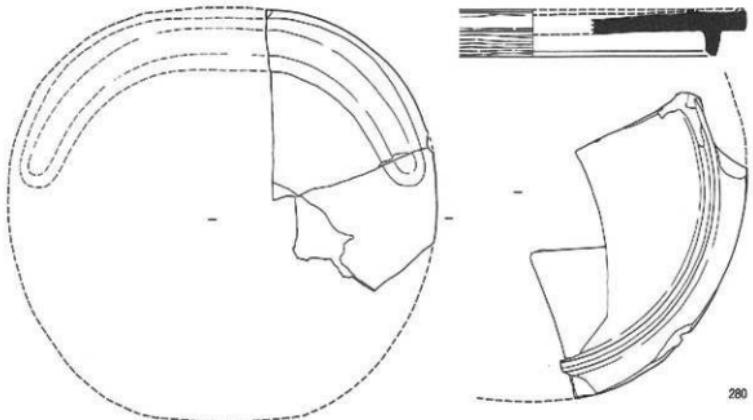
282

291  
(356-359)

292

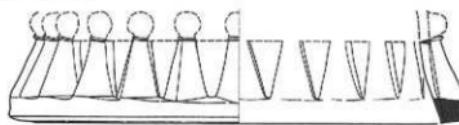


285

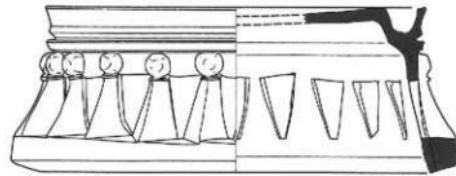


276

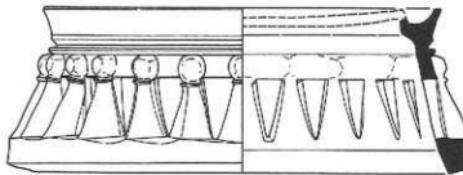




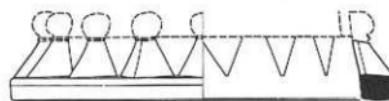
302



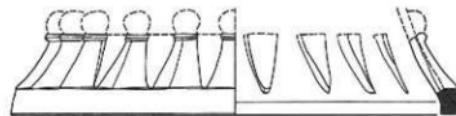
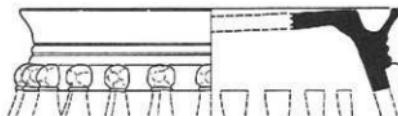
303



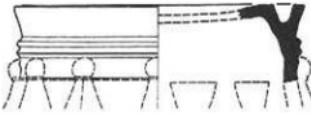
304 - 305



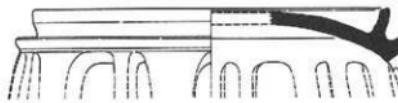
310

313  
(312 - 314)

287



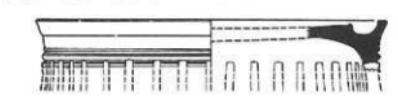
293



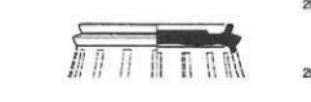
296



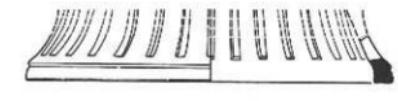
297



294



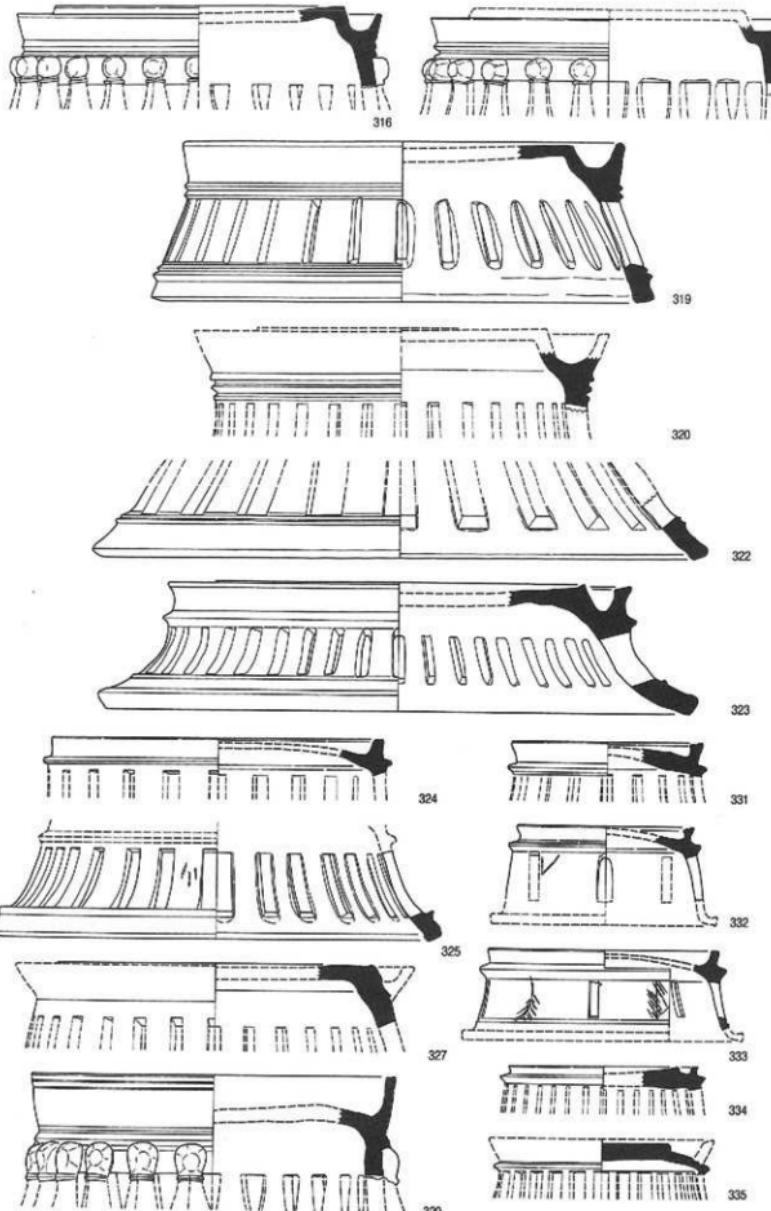
298



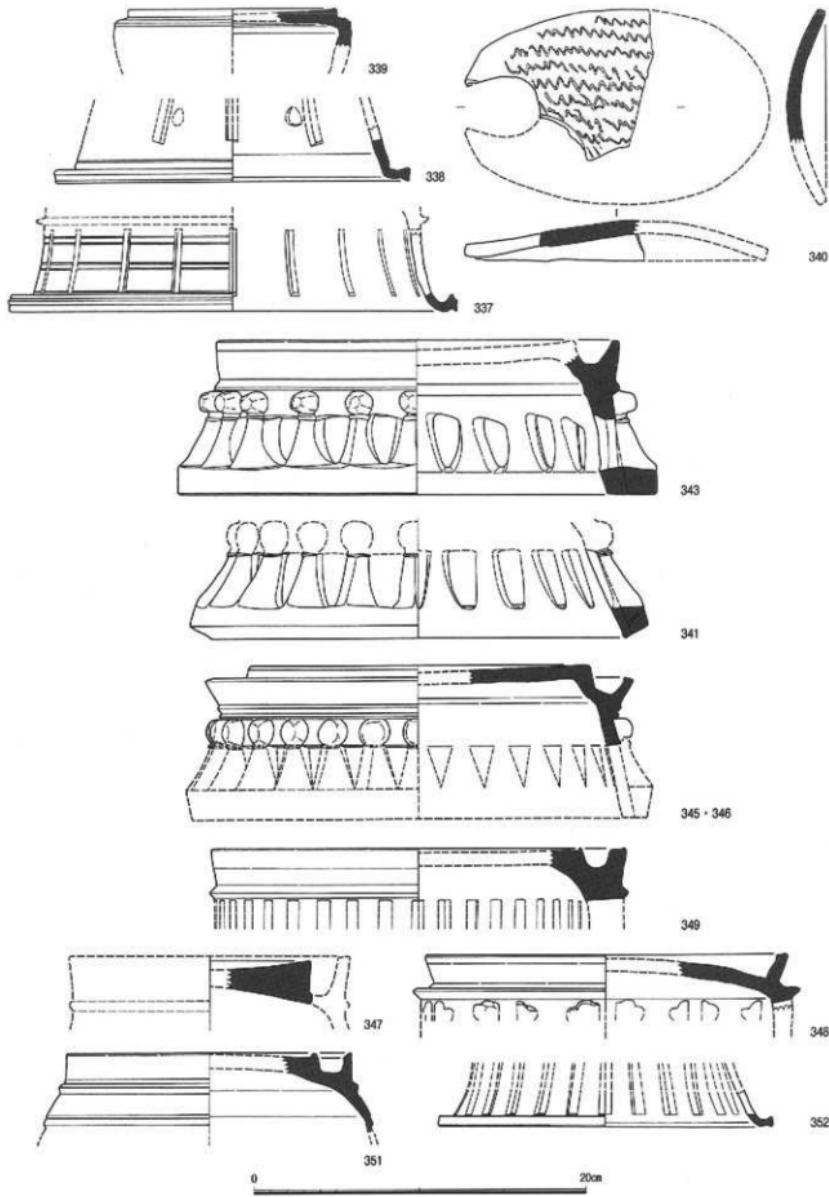
295

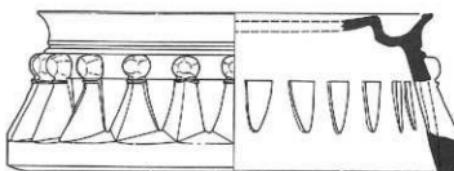


299

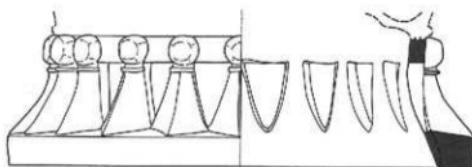


0 20cm

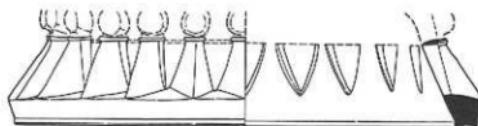




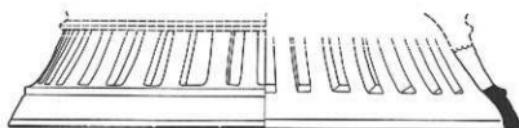
355



356



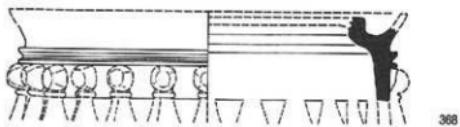
357



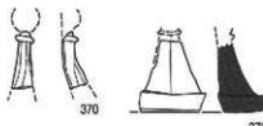
361



364

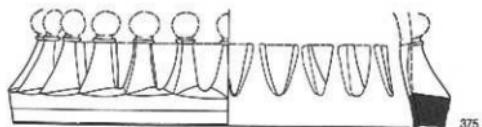


368



370

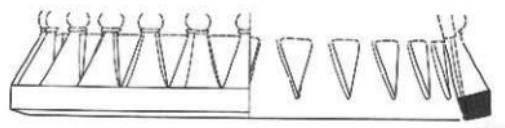
372



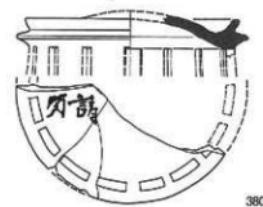
375



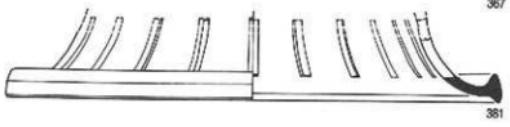
379



367

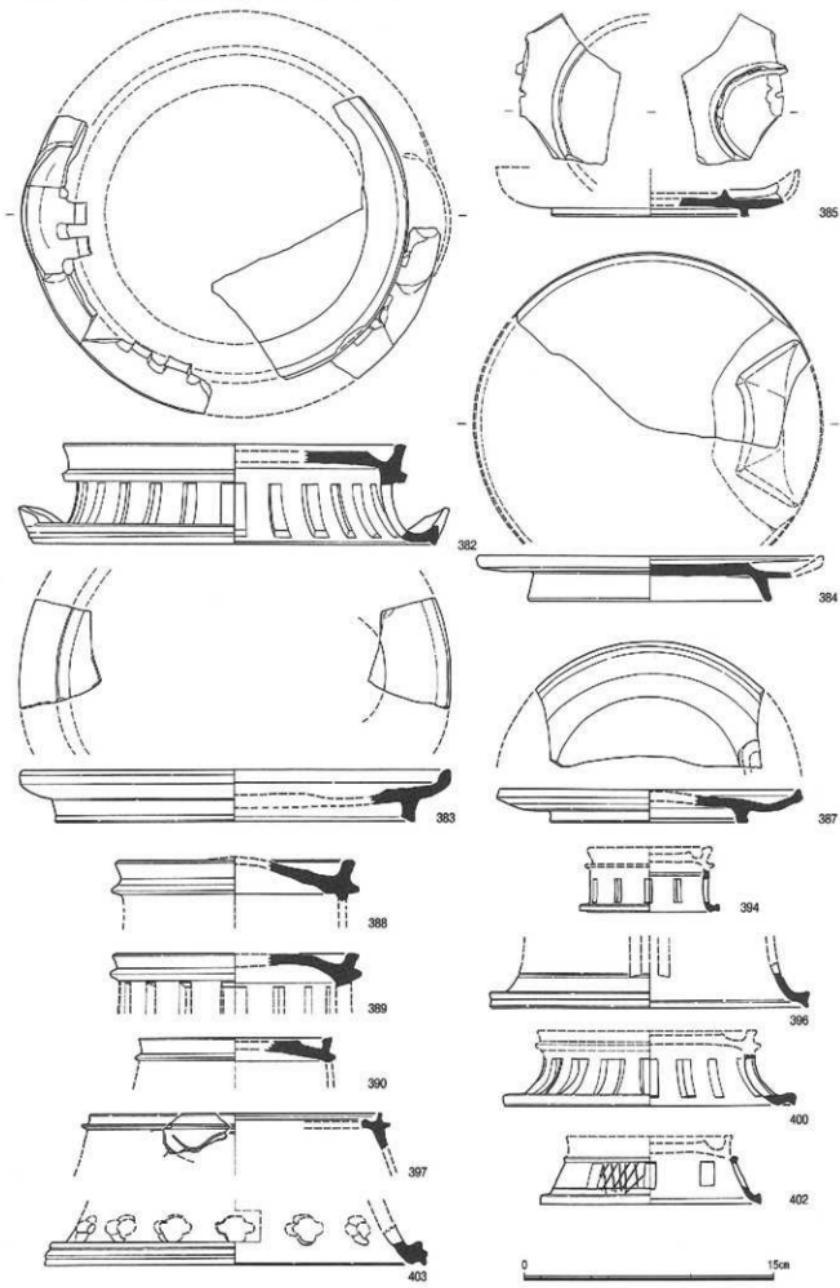


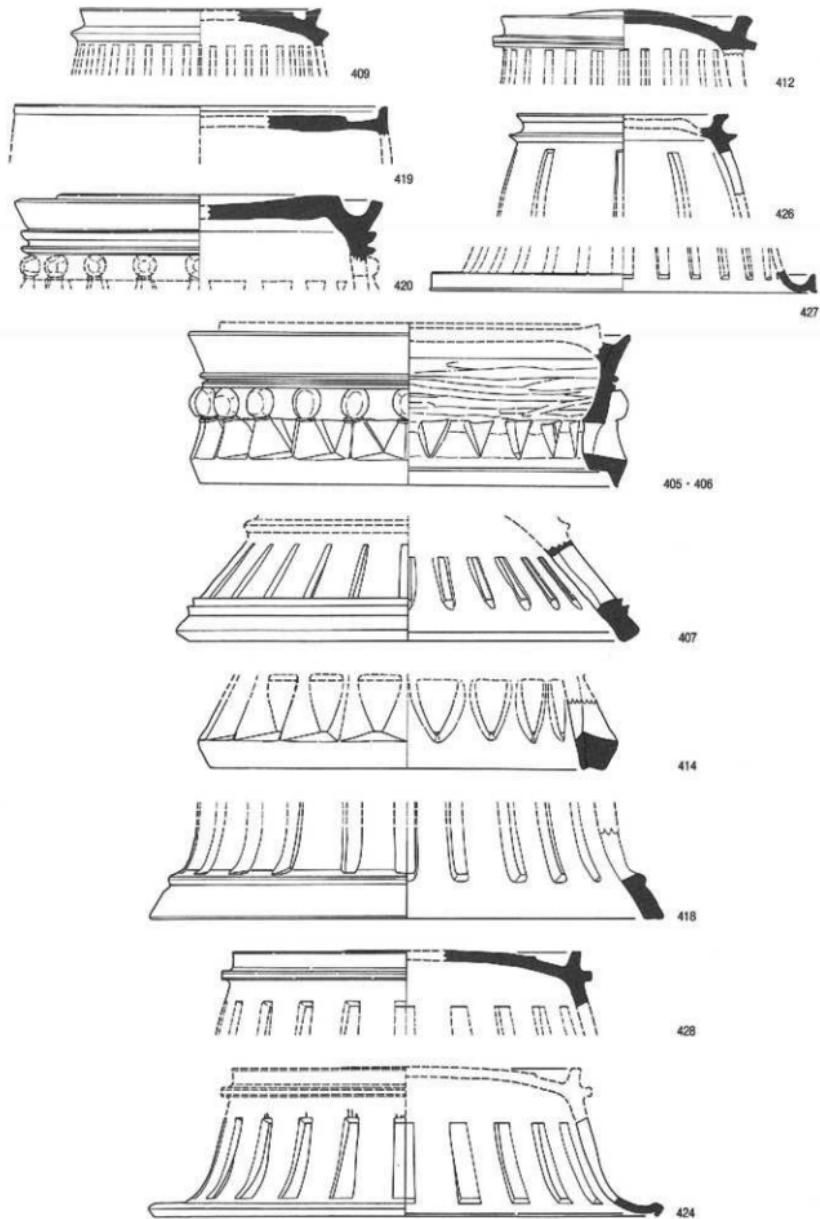
380



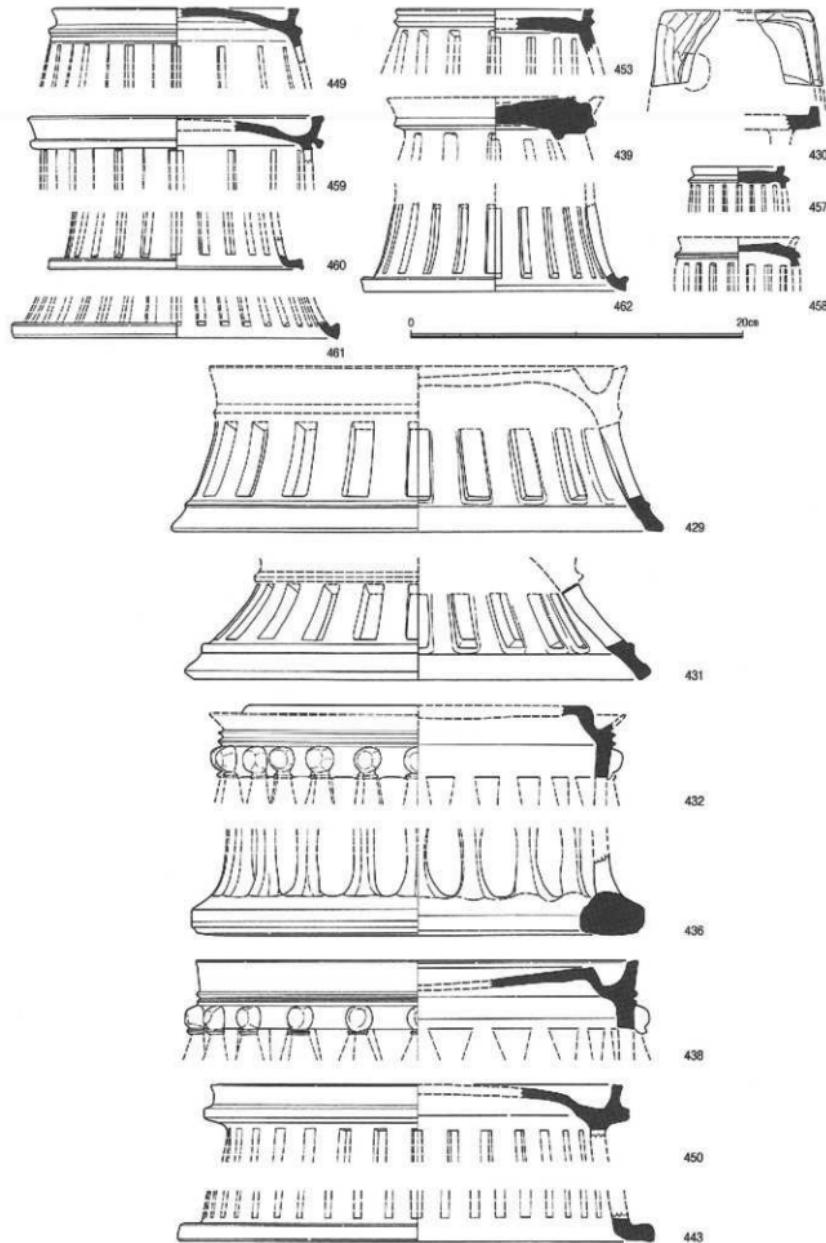
361

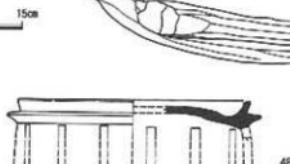
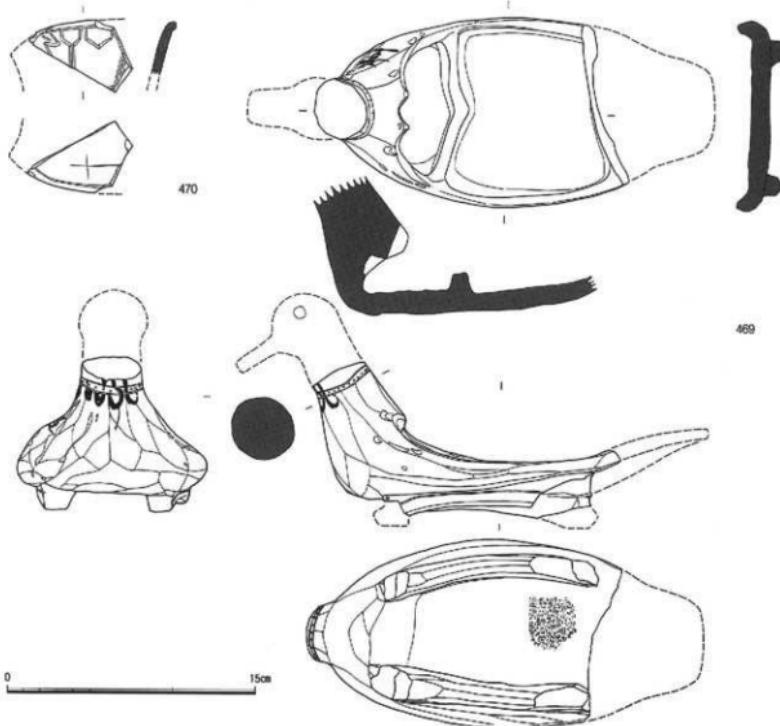






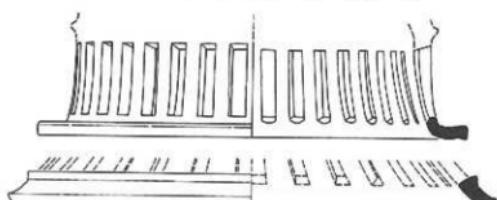
0 20cm



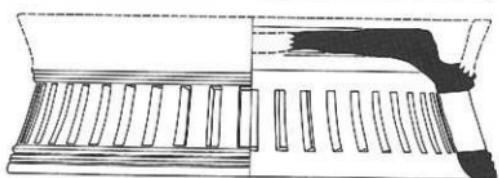


487

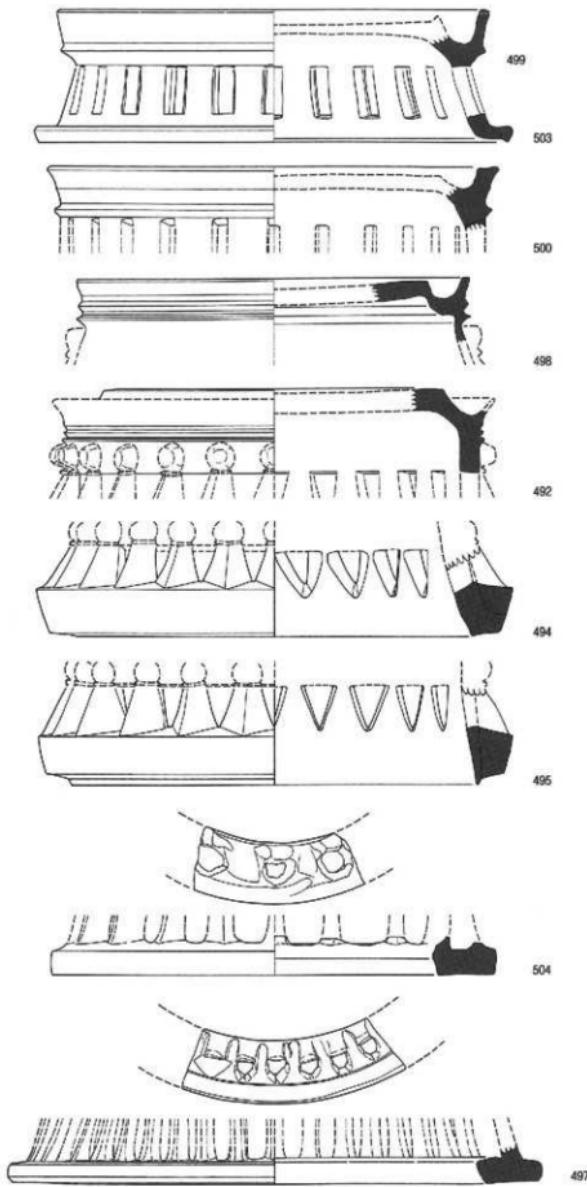
477 · 478 · 479



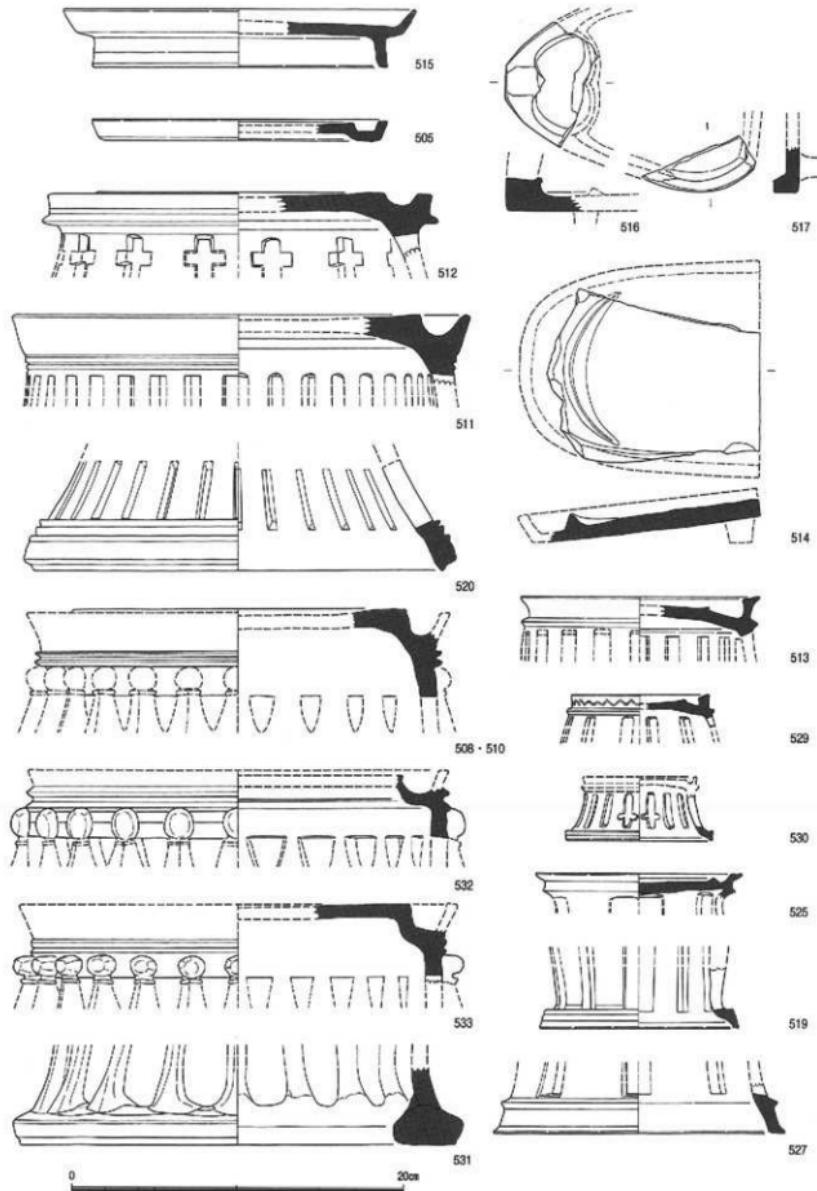
486



481 · 480



0 20cm



## VI. 写真図版

## 凡　　例

- ① 資料の単体写真は実寸の約2分の1を基本としたが、大型のものについては、約3分の1や約5分の2を採用し、写真の左下に注記した。
- ② 表裏2方向のアングルを原則としたが、例外的に1方向のみや、3・4方向のものがある。
- ③ 写真右下に記した個体番号は一覧表、実測図版での番号と対応するが、カラーPhに示した写真では、個体番号の注記を省略した。



平城宮跡出土の陶硯



平城宮跡出土の円面硯



平城宮跡出土の円形硯・宝珠硯・風字硯・鳥形硯



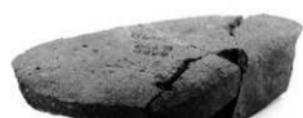
形象砚（鳥形砚）



蹄脚円面砚

1 : 2次 2~3 : 5次 4 : 6次 5~6 : 7次 7 : 8次

Ph. 1





9



13



8



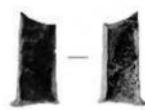
14



11



12



10

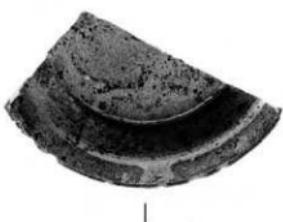
15



16

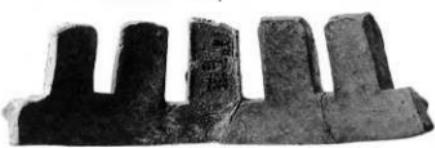


16



1 : 3

18



17

19





26



27



28



29



30



31



33



34



35

37



38



36

39



|





1:4



42



44



43



47

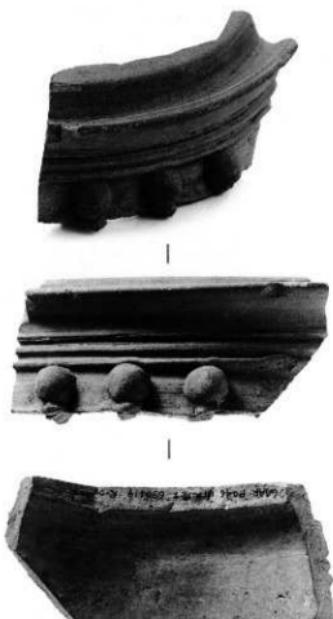


48



49

46



50



51



52



53 1 : 3



54



55



56



57



58



59



60



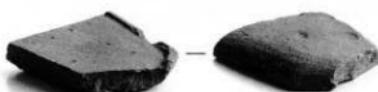
61



62



63



64

65



2:5

66



67



73

68

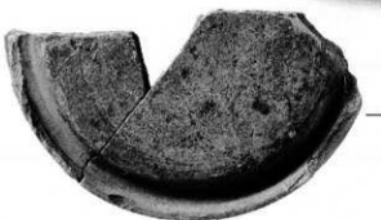


71

69



70



1:3

72



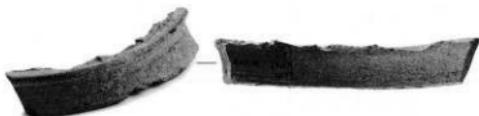
74



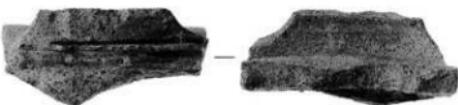
76



75



78



79

77



80



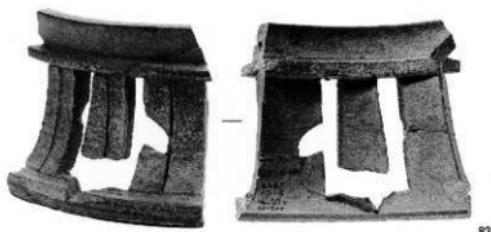
1:3



78 1:3



81



83

84



1 : 3



86



85



87



88



89



90



—



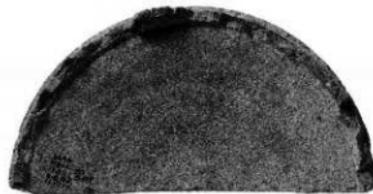
91



1:3



95



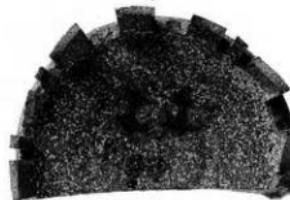
92



97



92



93



96



92



96



94



99



100



|



101



|



102



|



103



|



104



106

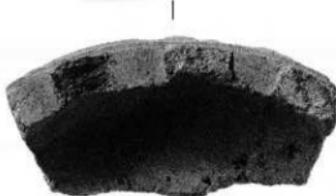
107



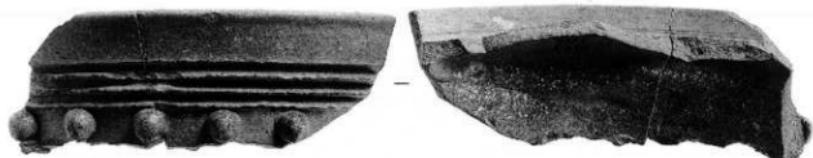
|



108



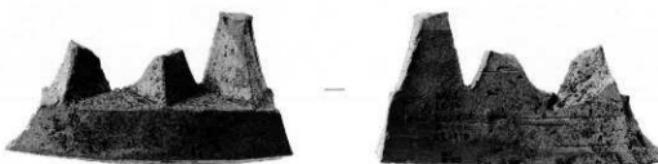
109



110



111



112



113



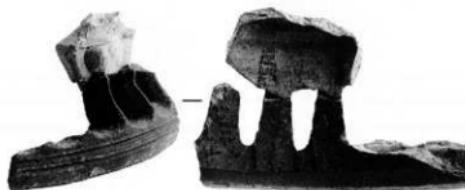
114



115



116



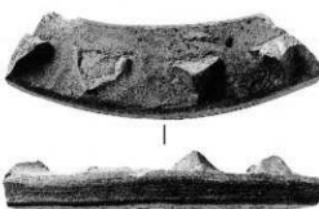
117



118



120



119



122



121



123



125



124



126



127



128



129



130



131



132



133



135



134



137



136



138



139



140



2:5



141



2:5



142



143



144



145

146



1:3



147

149



|



|



2:5

151



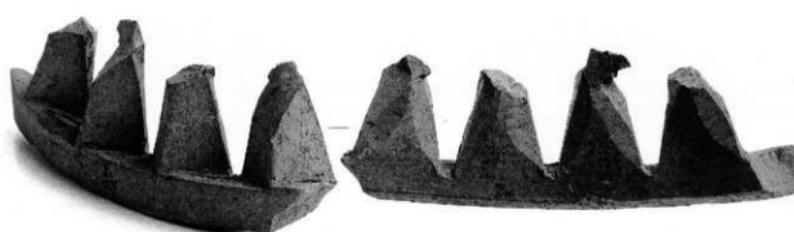
152



—



148



150



154



153



160



155 2:5



159



162



157



158



165

164



161



162



163



166



167



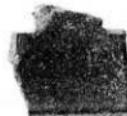
168



169



173



170



171



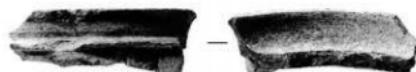
172



174



175



176



178



179



177

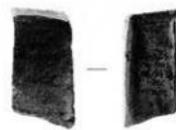


180



181

182



184



183



187



186



189



185



190



1



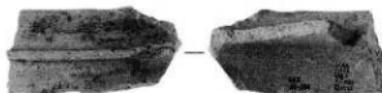
188



191



192

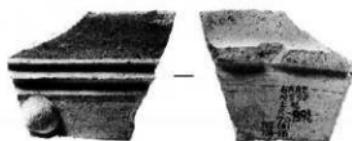


193



194

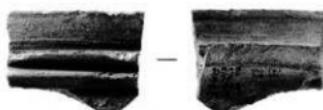
195



196



197



198



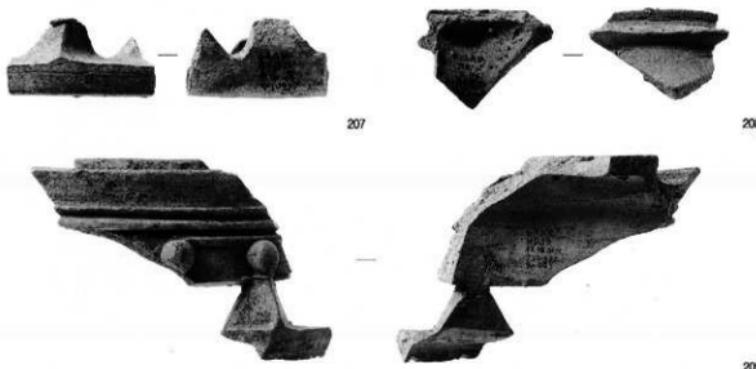
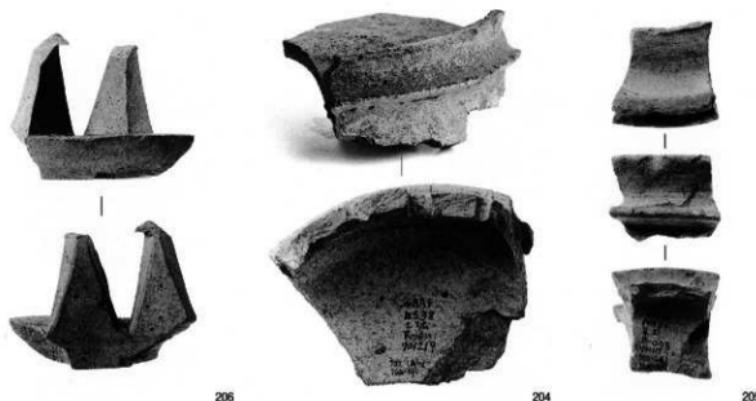
199



—



200





210



213

215



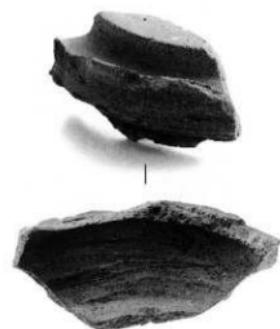
211



214



212



216

218



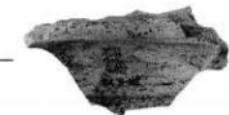
217

219

222



220



221



223



224

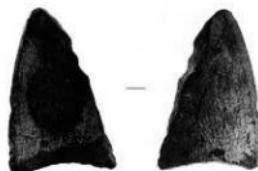


226

225



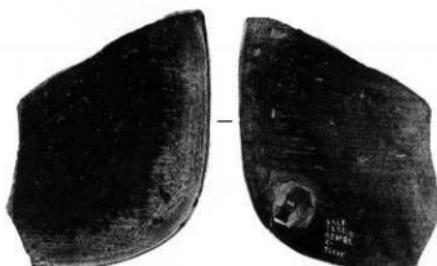
227



229

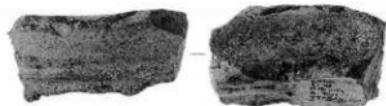


230



228

231



234



235



236

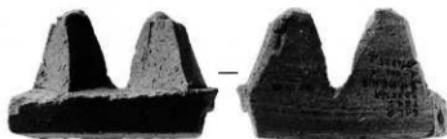


237

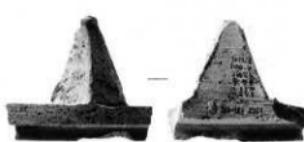
232



238



239



240



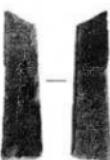
241



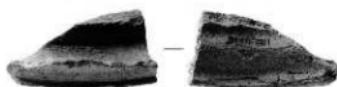
244



242



246



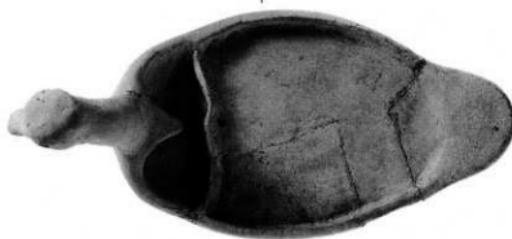
243



245

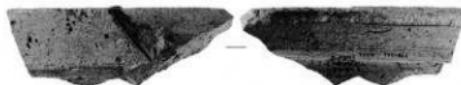


1



1





251



252



253

247



254

248



249

254



255



261



256



262



257



262



258



259



—



260



266



264



267



265



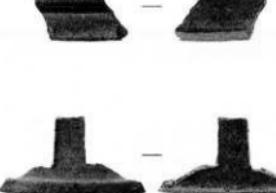
268



269



270



271



272



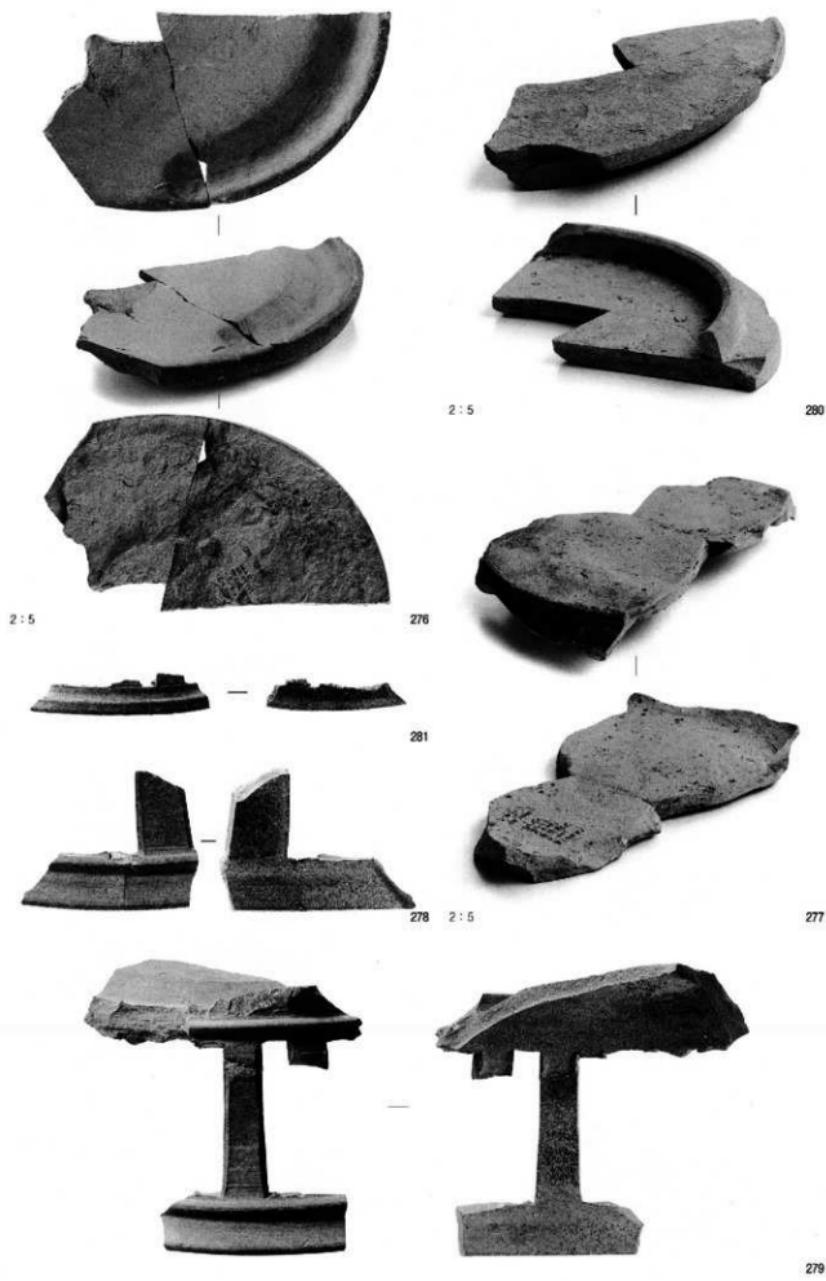
273



274



275





1:3

282



1:3



286

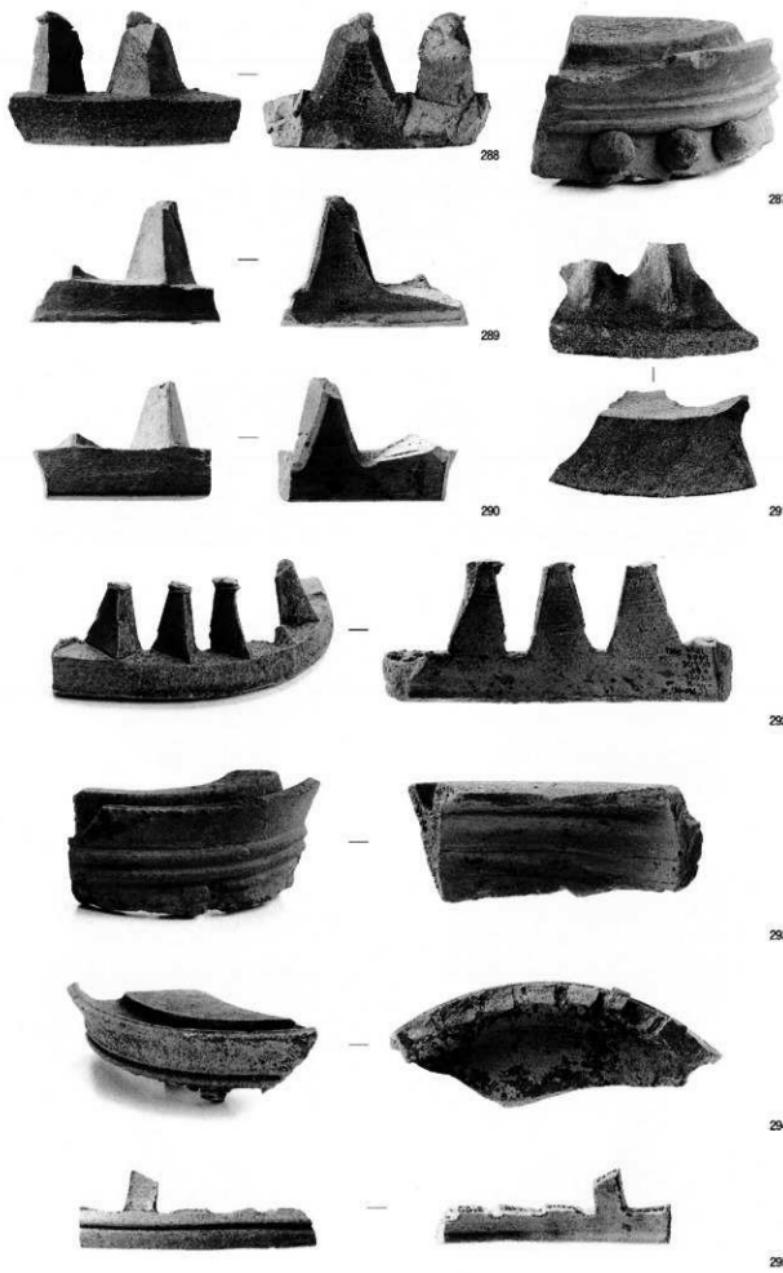


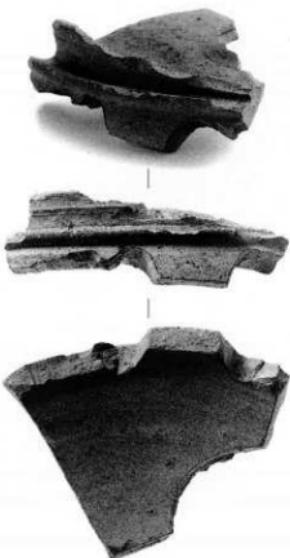
283

284



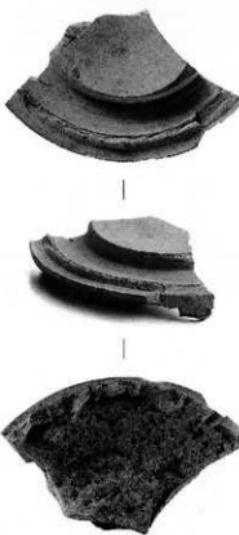
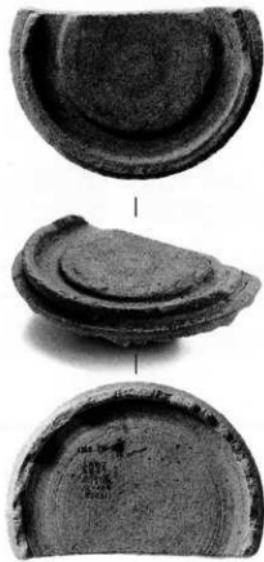
285





296

297



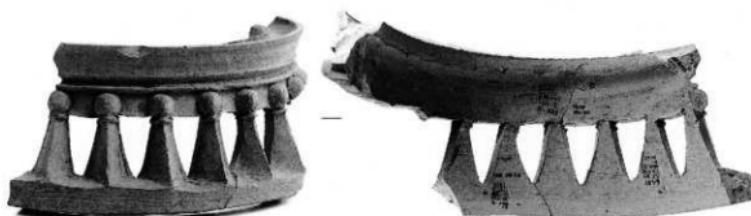
298

299



1:3

303



304



305



300

301



302



306



316



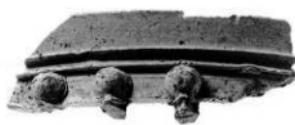
307



317



308



318



309



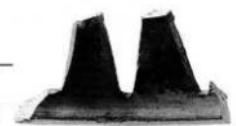
311



310



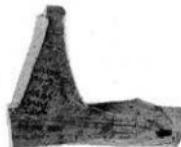
312



314



313



315



1 : 3



319

324



321



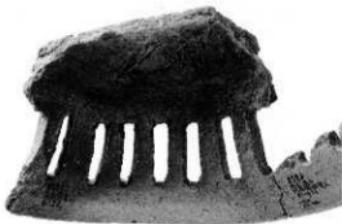
320



325



322



323



326



328



327



330



332



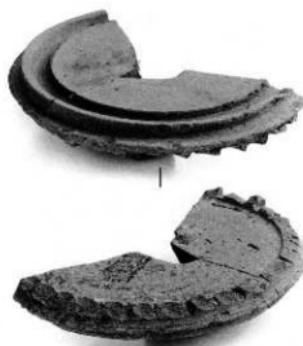
331



329



333



334



335



336



337



—



338



—



340



339



341



342



343



344



346



347



345



|



348

349



350



353



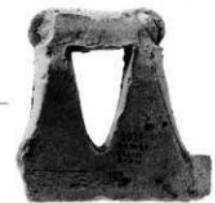
351



352



352



356



356



1:3

355



1:3

357



358



359



360



361



361



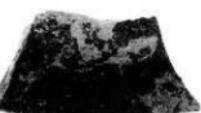
362



364



366



365



363



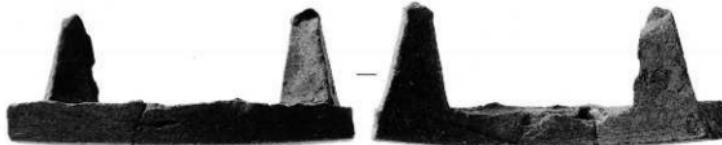
368



369



372



367



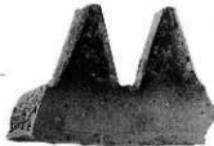
371

370



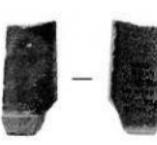
373

376



374

377



375

378



379

380



381



113

382

382



383



385



386

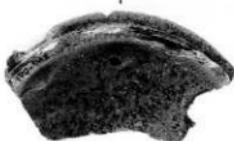


384



1:3

387



388



389



397



398



391



399



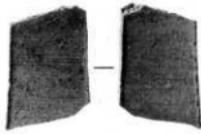
392



390



400



393



402



394



401



403



395

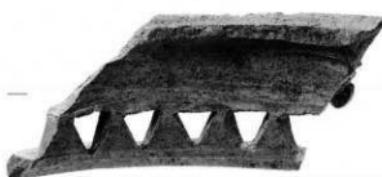


396

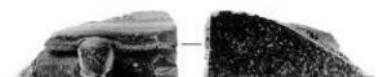




1 : 3



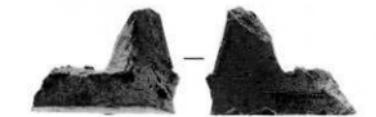
405



404



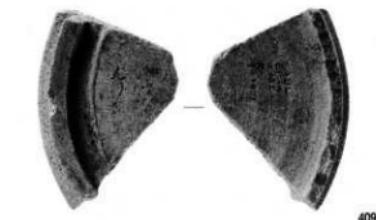
406



408



407



409



410



411



412



413



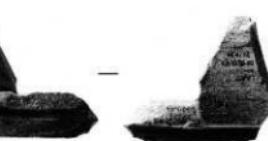
414



415



417



416



418



420

419



421



425



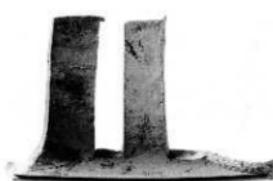
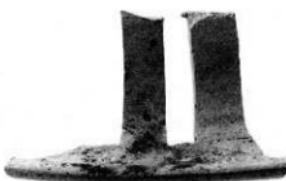
422



423



426



424



427



428



432



430



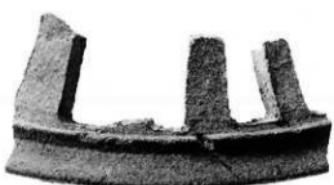
433



434



435

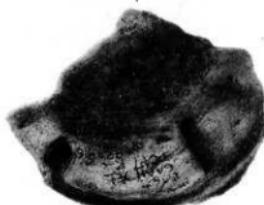


431



436

437



1:3

438

439



440



441



442



443



444

445



446

447



448



449

450



451

452



456



457



453



458



454



460



461



455



463



462

463

459





464



465



466



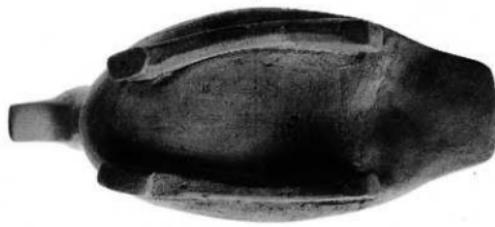
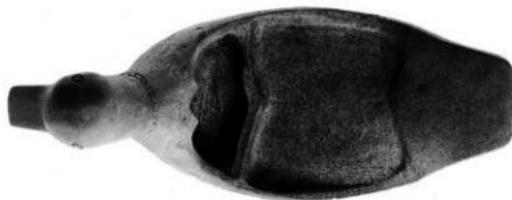
470



467



468





471



472



474



473



476



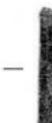
475



477



478



480



479



481



482

483



485

484

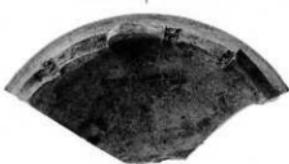


486

489



486



487



490



491

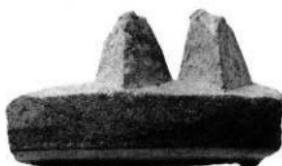


492

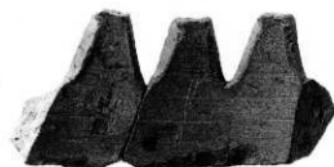
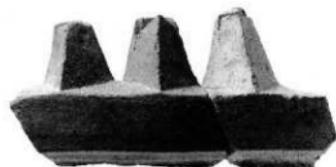
493



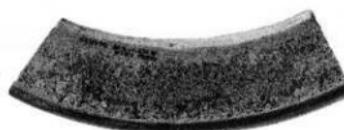
494



495



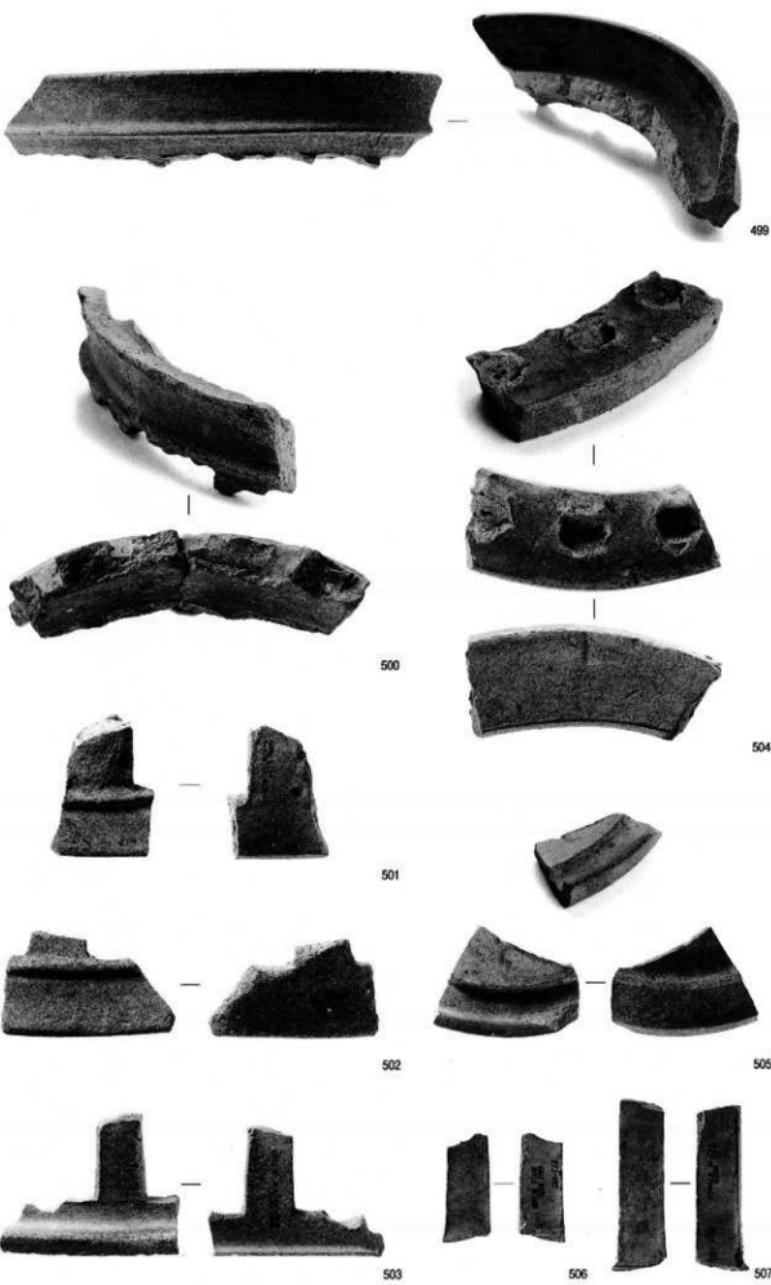
496



497



498

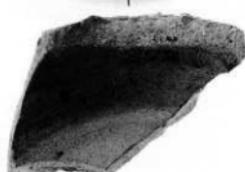
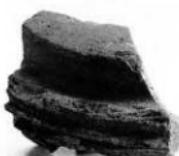




508



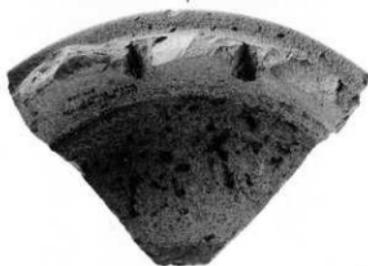
509



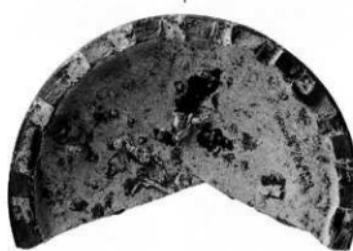
510



511



512



513



514



516 · 517



516



515

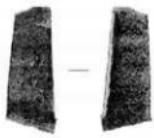
517



519



520



518

521

524



522

523



525

526



527



528



529

530



530



531



532

533

# **POTTERY INK SLABS FROM THE NARA CAPITAL SITE**

**I**

## **THE NARA PALACE SITE**

Publications on Historical Materials vol.77

NARA NATIONAL RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURAL PROPERTIES

2006

Independent Administrative Institution  
National Research Institute for Cultural Properties, Nara

---

奈良文化財研究所史料 第77冊

**平城京出土陶硯集成 I - 平城宮跡 -**

**ISBN 4-902010-56-9**

2006年3月13日 印刷

2006年3月30日 発行

著作権 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所  
所有者 奈良市二条町二丁目9-1  
発行者 URL <http://www.nabunken.jp>

印刷者 有限会社 真陽社  
京都市下京区油小路仏光寺上ル

---

